却て我を罪に陷るゝにあらずや、思ふに渠か誠術奈ぞ懼るに足んと云て門弟を返す、先年渠か父清十郎及ひ叔父傳七郎と會せし時は、我期に後れ凝滯して勝ㇾ之、這回は是に引替、我先達て行へしと、鶏鳴より獨歩し、洛を出る路に八幡の社あり、因て思ふ我幸に神前に來れり、正に勝利を祈るべしと、社壇に至て愼て鰐口の紐を把て將に打鳴さんとす、忽ち思ふ我常に佛神を信仰せす、今此難を憚て敬禱すとて神夫受めや、吁怯しと、即ち其紐を措て孜々として壇を下る、慚愧汗流して踵に至る、直ちに馳て下り松に至る、夜未明寂々として松蔭にイむ、暫く有て又七郎數十人引卒し燈を提て來り云、定て武藏又遲滯して期に後んこと必せりとて、松根に近く時、武藏待得たりと高聲に呼て大勢の中に切入る、又七郎駭き同く拔合んとする所を、又七郎を眞二つに斬殺し、徒黨の者共周章切懸る、或は鎗を以て突掛り、半弓にて射る、其内矢一筋我袖に留るのみにて、幸に疵を不ㇾ蒙、我前後左右の者ともを斬崩し追立れは、大勢崩たる息に蹈留る者もなく狼狽し、竟に我全勝を得たり、

退て彼の神前の事を思ふに、事に泄て心を不ㇾ變こと難しと云へり、

武藏自誓の書の中に、佛神は尊し佛神を不ㇾ頼とあり、猶奥に出す、此時帶せし刀三尺餘、大原眞守の作、今澤村家に傳れり（大原眞守一本作伯耆安綱）

一或年正月三日の晩、御花畠に於て御諷初の時、各座列にて武藏も在り、規式未ㇾ始、潛かに聲有、然るに志水伯耆殿于時大組頭なり、上座より武藏に云く、貴方先年岩流と勝負ありし時、岩流先に打たる由風說如奈、其通りの樣子にて有りしやと尋らる、武藏とかくの言なく立て燭臺を取、伯耆殿の膝本につかと座し、我幼少の時逢根と云腫物致し、其痕有て月代難ㇾ成、惣髪なり、岩流と勝負の時は、渠は眞劔我は木刀なり、眞劔にて先を打れしならば疵跡あるへし、能御覽可ㇾ有と、左の手にて燭臺を取、右の手にて髪を掻分け、頭を顔に突麗（オツ）る、伯耆殿後に反りて疵見え不申となり、聢と御覽有へしと云、成程得度見屆申たりと、其時に立て燭臺を直し、本の座につき髪掻撫て自若として在り、眞に一座の諸士手に汗を握り鼻息する者もなく見えたり、是伯耆一生の麁卒也と、其比批判有しとなり、

一正保二年の春、武藏疾病也、同四月書を家老衆に與ふ、其文

態と各樣迄以ニ書附一御理申候、兼て病者に御座候處、殊に當春煩申候て以來、別て手足難立罷成候此前拙者年久敗病氣故、御知行之望抔不仕罷在候、先越中樣御兵法御數寄被成候故、一流之見立申分度存、粗兵道之手筋被成御合點候時分、無是非仕合せ失本意候、兵法之利とも書附上可申旨御意候へども、書付迄に御合點如何敗存下書斗調差上、兵道新敗見立候事、儒者佛者之古語、軍法之古沙汰をも不用、只一流を心得、利方の思を以、諸藝諸能の道とも存、大形於ニ世界一之理明らかに得道候へども、世に逢不ㇾ申體無念に存候、今迄世間兵法にて身過候樣に存候、右樣之事は眞の兵法の病に成申候事に御座候、今申處末之世に拙者一人之儀は古今之名人に候へば與意御傳へ可申候處、手足少も叶不申候、當年斗之命も難斗候へば、一日成とも山居仕、死期之體、世上へ對し塞居候事被仰付候樣に、御取成可被下候、以上、

四月十三日　　宮本武藏

玄信判

式部殿
監物殿
宇右衛殿

參

其後潜に靈岩洞に至り、靜かに終命の期を丁せんとす、然るに早世上に何角奇怪の浮說ありと、寄之主聞し召し、放鷹に託して岩戸に至り、武藏を諫めて誘ひ、千葉城の宅に歸りぬ、爲介抱寄之主の家士中西孫之允を差添置る也、

一同五月十二日、寄之主友好主へ爲遺物腰の物幷鞍を譲りあり、寺尾勝信に五輪の卷、同信行に三拾五ヶ條の書を相傳也、其外夫々遺物あり、增田惣兵衛岡部九左衛門と云者、武藏譜代の者の由にてしかも手に相し者故、被召使可給由頼にて、亡後に寄之主召抱らる、物事かたつけ（一カキリヲ）極められて、自誓の心にて書せらる、

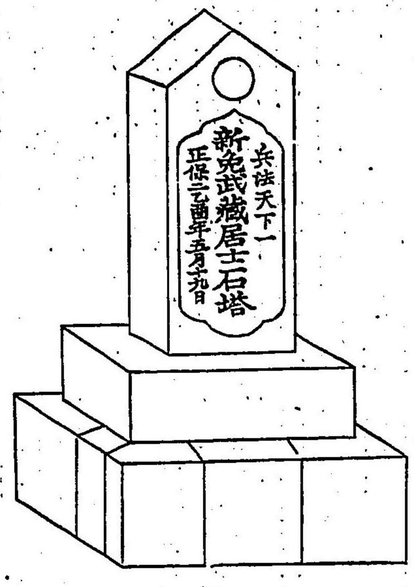
獨行道

一世々の道そむく事なし
一身に樂みをたくます
一よろずに依怙の心なし
一一生の間よくしん思はず
一我事におひて後悔をせず
一善惡に他をねたむ心なし
一何れの道にも別をかなします
一自他共にうらみかこつ心なし
一れんぼの道思ひよる心なし
一物事にすき好む事なし
一私宅におひて望む心なし
一身ひとつに美食を好ます
一末々什物となる古き道具所持せず
一我身にいたり物いみする事なし
一兵具は格別よの道具たしなまず
一道におひては死をいとはず思ふ
一老身に財寶所持もちゆる心なし
一佛神は尊し佛神をたのまず
一常に兵法の道をはなれず

正保二年五月十二日　　新免武藏
玄信判

一同五月十九日、千葉城の宅にて病卒す、歳六十二、武藏遺言にまかせ、甲冑を帶し六具を固めて入棺也、兼て約なれは泰勝寺春山和尚導師にて、飽田郡五町手永弓削村の地に葬す、規式尤夥し、春山和尚の引導終ると齊しく、一天晴たるに雷聲一つあり、諸士の下部とも驚き、葬場大に騒動すと云へり、其後寄之主願參有て、弓削村の庄屋を呼出し、墓の掃除等無レ怠可レ致旨被二申附一、米五十俵賜ふ由也、

送葬の時、一ッ雷鳴しことは、如奈にも其例なきにしもあらず、細川右京太夫勝元、或は山名右衛門佐宗全等、送葬の時、如レ右有し由、應仁記に見えたり、必豪傑の死去葬禮には如レ是事有と云へり、



飽田郡大津往還杉馬場之南
藪の中にあり高さ七尺許り

佛石高五尺餘
幅二尺許厚一尺三寸位
二重臺上一尺許下一尺五寸位
四方一坪位あり

新免玄信像之贊　　羅山文集に出づ

旋風打、連架打者、異僧之妄話也、袖裡青蛇飛而下者、方士幻術也、劒客新免玄信、每一手持二刀、稱曰二刀一流、其所擊又所指、縱橫抑揚、屈伸曲直、得于心應于手、擊則摧、攻則敗、所謂一劍不勝二刀、誠是非妄也、非幻也、庶幾進可以學萬人手敵也、若推而上之、則淮陰長劒、不失漢王左右之、以小譬大、豈不然乎、

碑銘

兵法天下無雙、播州赤松末流、新免武藏藤原玄信二天道樂居士碑正保二乙酉曆五月十九日於肥後國熊本卒、于時承應三甲午曆四月十九日、孝子某謹建焉

臨機應變者、良將之達道也、講武習兵者、軍旅之用事也、游心於文武之門、舞手於兵術之場、而遐名譽人者其誰也、播州之英產、赤松之末葉、新免之後裔、武藏玄信號二天、想夫天資聰達、不拘細行、蓋斯其人乎、爲二刀兵法之元祖也、父號新免無二、爲十手之家、武藏受家業、朝鑽暮研、思惟考索、約知十手之利倍于二刀、甚以夥矣、雖然、十手非常用之器、二刀是腰間之具、乃以二刀爲十手之理其德無邊、故改十手爲二刀之家、誠舞劒之精選也、或飛眞劒或投木戟、北者走者、不能避、其勢恰如發强弩、百發百中、養由無踰于斯也、夫惟得兵術

於手、彭勇功於身、方年十三、而始與同州新當流有聞喜兵衛者、進而決雌雄、忽得勝利、十六歲春到但馬之國、有大力量兵術人、名秋山省、又決勝負、反掌間打殺其人、芳聲滿街、後到京師、有扶桑第一兵術吉岡者、請決雌雄、彼家之嗣滑十郎、於洛外蓮臺野、爭龍虎之威、雖決勝負、觸木刀之一擊、吉岡倒臥于眼前、而息絕、預依有一擊之諾、輔弼於命根矣、彼門生等、助乘板上、藥治溫湯、漸而復、遂棄兵術薙髮畢、然後吉岡傳七郎、亦出洛外決雌雄、傳七郎袖五尺餘木刀來、武藏臨其機、奪彼木刀擊之、伏地立所死、吉岡門生含冤密語云、以兵術之妙、非所可敵對、渾簿於帷幄、而吉岡又七郎寄事於兵術、會于洛外下松邊、彼門生數百人、以兵杖弓箭、忽欲害之武藏平日有知機之才、察非義之働、竊謂吾門生曰、儞等爲傍人速退、縱怨敵成群成隊、於吾視之如浮雲、何恐之有、散衆敵也、似走狗追猛獸、霆威而飯洛陽、人皆威嘆之、勇勢智謀、以一人敵萬人者、實兵家之妙法也、先是吉岡代々爲公方之師範、有扶桑第一兵術者之號、當靈陽院昭公之時、召新免無二與吉岡、令兵術決勝負、

限以三度吉岡一度獲利、新免兩度決勝、於是令新免無二賜日下無雙兵法術者之號、故武藏到洛陽、與吉岡數度決勝負、遂吉岡兵法家泯絕矣、爰有兵法達人名巖流者、與彼求決雌雄、岩流云、請以眞劍決雌雄、武藏對曰、儞禪白刃而盡其妙、吾提木戟而顯此秘、堅結漆約、長門與豐前之際、海中有島、謂舟島、兩雄同時相會、岩流手三尺白刃來、不顧命盡術、武藏以木刀一擊殺之、電光猶遲、故俗改舟島謂岩流島、凡從十三迄壯年兵術之勝負、六十餘場、無一不勝、嘗云、不打敵之眉八字之間不得勝、每不違其的矣、自古決兵術之雌雄人、其算數不知幾千萬、雖然、於夷洛向英雄豪傑、前而殺人者、古今不知其名、武藏屬一人耳、兵術之威名遍四夷、其譽也不絕古老口、所銘今人肝、誠奇哉妙哉、力量早雄、尤異于他、武藏常曰、兵術手熟心得、一毫無私、則恐於戰場領大軍、亦治國豈難矣、豈臣大閤公斃臣、石田治部少輔謀叛之時、或於攝州大阪、秀賴公兵亂時、武藏勇功隹名、縱有海之口渓之舌、寧說盡、簡畧不記之、加旃無不通禮樂射御書數之文、況小藝巧業、殆無爲而不成者歟、蓋大丈夫之一體

也、病卒於肥之後州、時自書於天仰實相圓滿之兵法、逝去不絕字、以言爲遺像焉、故孝子莫立碑以傳于不朽、令後人見之、嗚呼偉哉、

右泰勝寺住持春山禪衲書之

此書本景英祖父卜川市所帥、而雜在故書篋中、蓋以說二天師之事者、當時已紛然無由取眞、是以得故老證話則筆之、備其忽忘、已至父八水市、以上去先師之世愈遠、夫人區說不分眞僞、不辨溢美、附會復滋多、於是採輯祖父所錄讀之、其信而明、無有若此者、因以爲、舉此流者、不知先師之事、固不可也、況於聽誤以爲眞者乎、是以抄書其所錄、加之以自所傳聞、書未成、會不幸病歿矣、景英傷其事不卒、且先師之跡、茅塞焉、故謹校之、如其文猶未脫藁、唯取明事實耳、恐致亳釐過千里、是以不敢改之、幸我同志之人垂裁焉、

安永丙申仲冬日　豐出景英子俊書印

宮本伊織方より長岡監物殿への帋面

一筆致啓上候去る廿三日私者罷歸候即刻貴札拜見仕候然は今度同苗武藏相煩候内　肥後守様より寺尾求馬之助殿被爲附置養生被仰付被下候得ども定る定業故無甲斐相果候以後取置三日目の御法事並墓所の儀迄被入御念可被爲仰付旨誠以冥加の至難有奉存候武藏病中御見廻被成御取置の砌野邊へ御名代被遣幷法事の節御香奠被懸御意其上爲御燒香御寺迄御出被成候由諸事被入御念候段忝奉存候爲御禮先以飛札如斯御座候尙自是可得貴意候恐惶謹言

五月廿三日　宮本伊織判

長岡監物樣人々御中

右返事

御札拜見申候如仰今度武州病中肥後守所より寺尾求馬と申者付置被申養生被申付候へども無詮御果候儀御殘多存候武州病中御病去の以後の儀迄色々被仰立爲御禮御愁懃の御紙面忝存候如何樣自是可被申入候恐惶

閏五月二日　長岡監物判

宮本伊織樣御報

一筆啓上候然は從
肥後守樣同名武藏病中死後迄寺尾求馬殿被爲成
御附置於泰勝寺大淵和尙樣御取置法事被下御執
行墓所迄結構に被仰付被下候段相叶冥加私式迄
難有奉存候此段乍恐　江戶岩間六兵衞方迄以書
狀申上候乍慮外彌後貴殿樣可然樣被仰上可被下
候隨て書印の印迄胡桃一箱幷鰹節一箱（貳百入）
致進上候恐惶謹言

閏五月廿九日　宮本伊織判
長岡監物樣參る人々御中

預御文札致拜見候然は武州病中肥後守所より寺
尾求馬と申者附置被申御死去以後の儀も被申付
候樣體被入御念被仰越御紙面の趣肥後守所へ可
申遣候仍胡桃一箱鰹節一箱（貳百入）被懸御意御
心入之段忝存候尙期後音之時候恐惶

六月五日　長岡監物判
宮本伊織樣御報

武藏流系圖

○新免武藏守玄信
- 寺尾藤兵衞信行（始求馬助）
  - 新免弁助信盛（十八歲誠心直通）（求馬助五男）
    - 寺尾鄕右衞門勝行（求馬助六男）
      - 吉田善左衞門正弘（楊心流柔術派帶後號如雪）
        - 山東彦右衞門清秀（右二藝及游泉帶始佐十郎）
          - 山東半兵衞（陽心流柔術派帶）
            - 山東新十郎清武
  - 寺尾藤次玄高（求馬助三男）
    - 志方半兵衞之經（寺尾藤次男）
      - 志方半七之鄕（之經嫡子）
        - 新免弁之助玄直（之經五男）
          - 志方彌左衞門之只（之經三男同姓志方彌次右衞門家ヲ繼後號誠白）
            - 志方司馬助之村
              - 寺尾十郎助
                - 小堀平右衞門
                - 山尾甚助
          - 岡島要右衞門好和（始猪左衞門）
            - 淺井新右衞門榮廣（始圓七）
- 寺尾家兄弟之系
- 志方家兄弟之系

○寺尾藤兵衞信行
- 寺尾左助信形（嫡子家相續）
  - 寺尾新助勝冬（二男　別祿二百石）
  - 寺尾藤次玄高（三男　二十五石人扶持）
  - 寺尾加賀助勝明（四男　奥州ニ行ク）
  - 新免弁助信盛（五男）
  - 寺尾鄕右衞門勝行（六男）
- 志方半兵衞之經（嫡子家相續）
  - 志方半七之鄕（二男細川家相續）
  - 細田七藏（三男）
  - 志方彌右衞門之只（四男）
  - 志方右角（五男　新免弁之助玄直）

村上流系圖

始學于新免弁助
○村上平內正雄
- 村上平內正勝
  - 村上八郎右衞門正行
    - 村上大右衞門（當理流小具足及伯耆流居合兼帶）
      - 野田一溪種信
        - 右同　野田三郎兵衞種勝
    - 長尾權五郎（後號徒山）
      - 高田十兵衞
        - 井田仁九郎
          - 曾根權三郎絕
          - 村上貞助
            - 財津久左衞門
  - 村上平內正則（始數馬）
    - 右同　大塚庄八昭博
      - 大塚又八常清
        - 野々村廣之助永昌
- 村上大右衞門
  - 膝野市十郎
    - 岩崎犁次

或曰、村上平內正雄者、學兵法於新免弁助之門、其派存于今者二家、子今作武藏流傳統系圖、而外之者何耶、曰、余嘗聞正雄學兵法於弁助師之門久矣、蘊既成、以爲天下唯師勝己也、心竊害之、乃携四尺餘木刀、擊其不意、師徒手奪其刀、叱而逐其門、後數年、正雄授劍法於人、師之姪志方之經聞之、以嘗責其偸、正雄答謝曰、浪士無由糊口、用此自給耳、然所授于人、非所受師也、之經恕不問、是以遂與一家、名曰村上流、其謝嘗存于志方氏、木刀存于寺尾氏、皆歷々于今、然而世人以村上大塚二家出于正雄者、混志方山東二家出于武藏守者、而共稱武藏流、余恐眞僞之辨久而益廢也、故作武藏流系圖、別附以村上流、揭之於二天記之末、以示後人矣、

天保十五甲辰歲孟冬　友成正信識

桃元問答の序

世になき人の筆の跡を見るはかり幾年經てもさらにかなしきもいはなかりけりこゝにおはち桃水翁のいにし弘化三年の春のころより同き夏のはしめまでわか肥後の國内にてあかりたる世のさたかならさるふし〳〵を田中元勝とかたみにとひもしこたへもし給へるものゝちりはひのこれるかあるなるを冬こもりせるつれ〳〵にとうてゝよみおかへつるにいといむかしのしのはれてせめてはとかくとち文とはなしつさて何とか卷の名をつけてむとかうかへにかうかへてもさるへきふしも思ひよられねはたゝに桃元問答とかいつけてをさめおくことゝはなりぬころは明治の五年といふとしの霜ふり月十日あまり五日たちはなのまさのりしるす

一將軍宮延元四年三月九州之地之御下着と心得居候成は深く考候事にても無之太平記に延元元年十月尊氏天皇を花山院に押籠奉りし時懷良親王は遁て吉野山中にかくると有之元弘日記の裏書の牧宮櫻雲記には懷良親王註に號牧宮爲征西將軍と御座候着御四國從是御下向鎭西此文により阿蘇文書の讃州御下着可有與州御渡海鎭西御綸付御下之事急に可被召進故實之仁於與州なとの文櫻雲記なとの三年十月の文とよく符合仕候間九州御下向は四年春と存居候事に御座候尤八月十七日解綬九月十一日遇暴風九月十八日之綸旨と前後仕候得共將軍の　宣下蒙せられ候事は九月と見え申候扨四年春菊池に御入り有之阿蘇以下之諸將御目見なとにも罷出公卿抔にも心安くなり宮も御折合の上中二年にして興國三年より薩摩御征伐一五辻宮小拙心得居候處に而は將軍宮とは御別人にて九國の宮軍を催進んかため延元元年か其前にもはやく被差下二年に大隅日向の凶徒從ひ來らさる故御退治有之其頃既に姓を賜り三位の中將にはなされしなるへし阿蘇文書に十一月十六日參議の奉文に大將宮三位中將定被加催促歟中略與州參已近々云々又四月廿七日の綸旨に與州官軍上洛之間近日合戰最中なり云々不依三位中將參洛遲速此文急に可致上洛との文言なり是は二年十一月三年四月の綸旨なりしかれは其年其官軍を率て御上洛ありしと見究申候事御座候ゆえ五辻宮と三位中將とは御同人と心得得貴意候事に御座候又宮三位愚案にては延元初にもはやく鎭西へ御下向肥後へも追々御往來廣福寺なとへも御參詣有之たると覺申候寺の文書之趣を以考候得は大智か寺領の轉替を届達いたし候を被聞食了と申沙汰文に而御座候將軍宮の別將軍にて未た九州の地へは御寄り付もなく與州より直に大隅日向の凶徒退治として御渡海其陣中より出されし沙汰文にて候へは未た寺方へは存もいたす間數折々の事に而其上將軍宮被成御座候事故令旨をこそ出さるへきに左兵衛佐の奉に而宮三位の沙汰文を出されしは御賢考を難し候樣御座候得共猶奉伺候

一菊池城院の院は穀倉院の院と同義にて城に屬たる兵器粮糧なと入たる倉庫を建置れたる所に而今いふ藏屋敷之由扨此鞠智城の舊跡何方共定めかたく候處深川の城跡手陸キラキラ之地に而防戰守城には堅要にも有之間數候へとも水陸之便利よく唯異賊防禦の爲に設置れ兵器粮糧なと備置れたるには宜き地と相

見申候しかれは藏屋敷も遠く隔り候而は有之間敷水島は深川よりは壹里餘之所大城小城といふは城に而無之山腹の岩を穿て崛としたる所にて御座候米原に藏床と申焦米なと出る所有之を不動倉の跡とも申候得共是は米原長者か米藏の跡にては有之間敷哉扨又今の隈府の城今の正觀寺村の内守山村の地に築かれし故守山城といひたる由又隈部城共いふ隈部舊は城下の名にてありしよし洞然長狀阿蘇文書抔にも隈部城と所々に御座候今川了俊か書簡に隈目城と有之も傳聞え誤に而隈部城の事なるべし阿蘇文書志賀文書に菊池山城詫摩文書小代光信申狀に菊池渡山合戰云々此渡山は正觀寺村の隣村輪足村昔は其あたりの村名にて輪足村の東北の山即ち城山なれば是も今の隈府城の事と被存候又阿蘇文書の惟澄注進狀かの中に菊池本城合志人替云々とあり是は深川の城なるか深川は小勢にては保守なりかたくいつれの代にか菊池山に築かれ無城とし平常には便利よきゆへ深川に居住し根城とし置れたるにては有之間敷哉誠に至愚之僻說に而御座候得共得貴意試申候御再考所仰候

一縣主稻置無二職の名義職掌御書記被下度奉願候

一保は中昔より餘國にも鄕莊と可唱所に某保と稱すること東鑑其餘の物にも多く見え肥後にては玉名郡の伊倉庄を伊倉保益城郡の津守鄕を津守保と云小代詫摩か文書に多く載て其外の鄕庄には一ッもいはす此二所迄保と稱す其保と名つくる意は今に五家相保、五家爲保、比隣相保祐の義、即今云五人組の事とて夫より起たる名なりと今天草にて鄕庄を大矢野組久玉組なといふかことし

一菊池武時受領の事私所藏の廣福寺文書人類に而寫候處惡筆其上誤字落字分兼申候寄進狀は菊池肥後守あと御座候得共年月無御座候嘉曆二年詫摩文六え宛りたる書簡には武時有菊池次郎と御座候得は其後受領有之たると相見申候武重も寄進狀に大智和尙か書入に菊池次郎武重自筆之狀元弘四年甲戌正月廿五日到來とあるときは是も其後肥後守には任せられしと相見申候

一詫摩文書中に年頭職下司職圖師職なと出居申候いか樣なる職掌にて御座候哉乍御面到御書記御敎示被成下候樣奉依賴候

一被仰下候內久井原村は東鄕彌庄之屬村石貫村は玉名郡玉名庄之屬村に而御座候大野庄の屬村は高瀨中村邊も九ヶ(毛合カ廿九ヶ不分明)領し申候

一和名抄の鄕名いつ頃廢申候哉其後鄕庄之唱御座候飽田郡に而立田鄕鹿子木庄池辺庄飽田郡河尻庄の二鄕三庄詫摩郡に而は本庄の庄安富庄神倉庄の三庄の如き安富庄は鎌倉の時分より出居申候神倉なとも詫摩文書に多く出居候其外御國中之庄名鎌倉時分より出申候も御座候いつの頃立られ候哉左候而今以鄕村帳公義え被差上候節は右之鄕庄に而手永に而は無御座候尤右之鄕庄は御先代舊稱により新に立られ候共に而は無之候哉中山か井田衍義に御先代は組と申候と御座候へとも八代の高田手永の植柳大福寺西馬下の三村は御先代より之代々庄屋に而少々見圖帳樣の物殘り居候に慶長十二四年之帳にいつれも八代郡高田鄕之內何村見圖帳と御座候しかれは鄕庄の唱にて御座候儀違は無之樣聞え申候組と申に何そ確據御承知共は無御座候哉御知せ被成下候樣奉希候

一詫摩の代繼神社祭神不分明候社記に紀貫之は靈共御座候へとも是は蒙昧無稽の說に而可有之山城名所圖會かに久我代繼神社貞觀　と御座候得共祭神は何共無御座候何そ御見當り被成候儀は無御座候哉又上南部の乙姬宮に三位大宮司の筆にて奈我神社と鳥井の額に標し被申候何そ據有ての事に御座候哉若御吟味被成置候はゝ御知せ可被成下候

一圖師日置私の手に入候事は文政四年に而一昨二年江田村の鶯原三寶寺の境內より堀出候由紫銅の板に彫付ありたるよし銘中央に玉名郡人櫨擬小領少初位下日置郡公右に開白七道西海道太宰府左に治地高野山一向に解し不申候あなかち墓誌とも見え不申御手に入候も此通之銘に而御座候哉日置は山鹿郡に有之玉名の分田村と界居申候江田よりは餘程隔り居申候江田請の間に日置と申小村に而も有之候か又被仰下候河原の畠中より掘出候鰐口いつかたの河原にて御座候哉御知せ可被成下候

弘化三年丙午四月

田中元勝樣

八木桃水（オノヅヽ　田中ナリ）

征西將軍宮筑紫に御下向の年紀

征西將軍宮の始て筑紫に御下向ありしは延元四年の春のことなりしと定められしよしは太平記後醍醐天皇遷幸の段に阿曾宮は山伏の姿となして吉野の奥に忍はせ給ふと見え櫻雲記延元三年九月の條に懷良親王（號牧宮後ち征西將軍）着御四國從レ之下二向鎭西一と見えたるなと

に據られて阿蘇文書なる大宮司に下されし九月十八日の綸旨も十二月卅日の令旨も皆延元三年に出されたる物ぞと思ひなられし故さては九國に御下着は延元四年の着なりしとはおぼしめし定られ候よしこはさるたしかなる證左ともをえたまひたらんにはしかおぼしめし定められたらんもげに御ことわりのやうにも思ひ給へられ候へども愚拙が日頃考へ持たる處より申候はゝさしより其御證左たのみ給へる太平記櫻雲記などの事どもいづれもいとおぼつかなくのみ覺え候故まづ其よしよりことわり啓申べく候懐良親王は後村上天皇の御弟宮に當らせ給ひて此御門は延元四年の八月御歳十二にて御受禪ありしとなれば延元元年にはいまだ九歳の若宮にておはしまし候なりしかれば親王は其頃おはくとも七つか八つかの御としにてぞおはしけむさる幼稚なる若宮のにはかに山伏の姿となりて山深くたちしのばせ給ひしといはんはあまりにゆくりなく似つかはしからぬことなる上に此宮を阿曾宮とまうし候は九國に御下向ありて後のことなるを當時はやく阿曾宮とまうし候やうに出たるなどをおもへば太平記の作者は此宮の御名を懐良と申しゝことも當時五辻宮とまうし候こともしらざりしうへに御としの程をもわきまへずして其頃此宮の御行へさだかならざりし故さきに大塔宮の山伏の姿になりて熊野のおくにかくれ給ひし事などおもひあはせて大かた此宮もさるさまにて吉野になどかくれたまひつらんと思ひやりたることをやがてまことしやかに書出したる杜撰の妄説かと覺え申候また櫻雲記の懐良親王の御事をいひたる一段は元弘日記裏書に桃園宮着二御四國一牧宮着二御四國一可レ有下御二下向一鎮西上とあるに據て附會したる設にて元弘日記裏書の趣にては桃園宮も牧宮も前後に共に四國に着御ありしが二重ながらそれより直に鎮西へ御下向あるべきとのさまに聞えてあながち牧宮御一所ばかり鎮西へ御下向ありしとも聞えざるに櫻雲記の作者此二宮の御事は本よりいかなる御かたぐ〳〵なりしとは知らざれども牧宮着御四國とある下に引つゞきて可有御下向鎮西とあるに依て其頃諸皇子たちの中にてまさしく鎮西へ御下向ありしは懐良親王ならではおはせざりし程に桃園宮の御ことをば人しれず取すてゝ牧宮ばかりを取出して懐良親王の御うへに附會したる妄説にて彼日記裏書より外にはまだしか引證すべきたしかなる物とてはなかりしなりすべて櫻雲記にはまたく元弘日記裏書と新葉李花などに據て書たるものにて八月十七日解纜九月十一日遇二暴風一とあるなどは正しく彼日記裏書に八月十七日解纜九月十一日於二伊豆ノ崎一遇二大風一とあるを取て於伊豆崎の四字を略して大風を暴風と書かへたるばかりなるうへにまことは其據所としたる裏書の時日も正統記などの實錄とは相違したることもしらざりしと見えて正統記には其をりの事を九月の初綱を解きしに十日頃の事にや上總のちかくより雲のけしきおどろおどろしく海上あらくなりしかば又伊豆の崎といふ方にたゝよはれ侍りしにいとゞ波風おびたゝしくなりてあまたの船行がたしらず侍りけるに云云と見えて伊勢の津より御船を出されしは九月の始にて八月中頃のことにはあらず此をりの事は正統記の作者親房卿も陸奥宮（後村上天皇）の供奉してしたしく此大風に逢たまひたるとなればかの裏書の說は後に傳聞の誤たるまゝを書出したることとしるかるべし其上海上の事は日數をさし定めてはいひがたけれども八月十一日に伊勢より出されたる船どもの三十日あまりを經てやうやう上總の地ちかくまでおひたるといふもわまり久しく日數をへたる事なるを櫻雲記の作者さるうたがはしきふしにも心つかでかの裏書にのみに據て物したるは世に正統記といふ實錄のある事をばつやつやしらずしてありしなるべししかるにまた櫻雲記に義良親王の御船は伊勢の篠島につき宗良親王の御船は遠江國白羽の湊に着たるといひたるばかりはかの裏書の說をば用ひずして新葉李花などの說（新葉集に延元三年の秋後村上院かされて陸奥國へ下らせましくけるに幾ほどなく御舟伊勢國篠島といふ所に着たるよし聞へしかば云々李花集に伊勢より舟にのりて遠江へ心ざし侍りしに天龍なだとかやにて浪風なへてならず水ぐゝいふうしてしろ?ばの湊といふ所に涙にうちあげられからにもあらず舟さしよせ侍りしに夜もすがら浪にしほれていとたへがたかりしと云々）を引出して物せしことは裏書には親王（義良親王）顯信卿等歸二着勢州一（中略）尊澄法親王（尊良親王）二一宮一着二御遠江國井伊城一と見えて御船ともの着たりし地名などもさだかならぬ（井伊が城は引佐細江のおくにて大船などのつくべき所にあらず）書ざまなる故新葉李花などの地名などもたしかにしかも實錄なるを引出して裏書のたしかならぬを補ひたるといふばかりにはあらず作者の本意は己れが竊かにかの裏書の說に據て牧宮を懐良

親王に附會したる其杜選の痕を掩はんとてかく他書の說をも取まぜて吾いふ所は外にたしかなる傳說ありてかの裏書の說のみに據て杜撰したるにはあらぬやうに書まぎらさんとしたる也さてかくかしこくはかまへたれ共親房卿の船の着たる地名をしらずしてたゝ着二常陸國一とばかりかきたるは同時の事に詳略同じからざる故なほかの裏書に入道一品船着二常陸國一訖ヌとあるに據たることとしるくして其竊據襲所の痕つひにかく露見しやすきにはいたれるなり（正統記におなじ風のまぎれに東をさして常陸國なる内海につきたる舟待りきとあるは親房卿みづから其舟のつきたる所をしるし置たまひたる也記にても櫻雲記の作者正統記なは讀ざりしことしるし）また櫻雲記の說のうけがたきはた丶裏書の牧宮を懷良親王に附會したるばかりにはあらで他の宮の御うへまでも猶かの裏書の說に據てさま〴〵に附會して一段の事跡を僞造したる事あり裏書に尊證法親王尊良親王と一ノ宮着御遠江國井伊城とあるを用ひずして一旦は李花集に據て家良親王の御船は遠江國白羽の湊に着たりとは書あらためつれども初より據たのみたる裏書の事なればさすがにまた捨がたくなりたるまゝに關城書に竹園御座大將顯時ノ朝臣經廻之間加二斟酌一許ヲ歟とある竹園は阿曾文書に見えたる大塔若宮李花集に見えたる興良親王の御事なれども本書にはたゞ竹園と斗ありて何がしの宮とも御名をしるされたることなければ櫻雲記の作者は李花集は見たれども阿曾文書を見たることなければ件の竹園の興良親王なるにはおもひよるべきよしもなくたゞいかなる宮にておはすにかといぶかしくのみおもひゐたる處にかの裏書に尊良親王の一宮家良親王と共に井伊が城に入御ありし事まで見えて其後はいかゞならせ給ひしとも見えざる故さては件の竹園は一宮尊良親王の一宮にてこそおはしつらめとおもひなりたるより結城文書などに奥州宮とまうすが見えたるも是また外の宮にはおはさで件の一宮にておはせしにはたがふまじくおもひ定めてつひに件の御三所の御事をたゞ一ノ宮御一所の御うへに附會してあらぬ一段の事跡を造出して此宮の始遠州より奥州に御下向の處には尊良親王の二宮といひ奥國二年奥州より常州小田城に入御の處には奥州ノ宮といひ其後同四年關の城より令旨を出されて結城朝親を修理太夫に任せられし處には一品の宮といひてそれより後關の城より奥州にたち歸らせ給ひ宇津峰の

城落居せしまではたゞ皆一品宮といひて事を結びたりかく御一所の御うへを御在所に隨てかつ〴〵御稱號をかきかへたるは當時の物どもに奥州宮一品家など見えたるは皆時所によりての御假名にて其實はたゞ尊良親王の一ノ宮御一所のみの御事なるよしをしらせたる也されども此一段の事跡どもはすべて作者の附會杜選に出たる事共なれば一つとして其實を得たることなしそはまづ尊良親王の一ノ宮家良親王と供に井伊か城に入御ありしといふ事只かの裏書にのみ見えて當時の物どもにも外にてはをさ〳〵見及ばざるうへに新葉李花などにも絶て其けしきたに見えざれば裏書の說は是も傳聞を誤るなるべしまた奥國二年に小田城に入御ありし宮は大塔若宮興良親王にて尊良親王の一ノ宮にはあらず其ことは阿蘇文書親房卿の消息の中にたしかに見へたるうへに奥州より入御としたるも妄說にて結城文書親房卿の狀の中に吉野ヨ御座候宮御一所今月一日御下向候了ヲ又無爲之條返々目出悅入候と見えてまことは吉野より御下向ありしなりまた當時の物共に奥州宮（結城文書五條文書）陸奥親王（正統記）陸奥の御子（正統記）など見えたるはすべて皆後村上

天皇のいまだ御子にておはしましける間の御稱號にて尊良の一宮にも大塔の若宮にもわらず此御門御幼稱の御時より北畠顯家卿に具せられ給ひて二度まで奥州に御下向ありしか後には陸奥太守にさへ任せられ給ひし故かく其國の名を御稱號にも負せまゐらせたるなりまた當時後醍醐帝の皇子達の中にて當時はやく一品に叙せられ給ひしは尊良親王（筑後國住吉上宗良親王（天台座主記）（歸家官班記）たゞ此御二方ばかりにて自餘の皇子達の一品に叙せられ給ひしことは聞えず（懷良親王も後には一品に叙せられ給しかどもそは天授中のことにて其頃はいまだ無品親王にておはせしなり）まして尊良の一宮は當時諸王の御身にていまだ親王の宣下を蒙らせ給ひしことだに聞えざるをやしかるに櫻雲記にかく物せしことは結城文書などを見はつりてをかしく心えたがひたるにて結城親朝が大藏權太夫より修理權太夫に轉任せられしは興國元年の十一月の事にて其時の口宣の案結城文書に見へて宮の令旨にはあらざるうへに大塔ノ若宮の小田城に入御ありしは明る二年の夏の事にてありしなり其後同四年の七月に親房卿の推擧にて親朝を上總國の守護職に補せられしことあり此事は宮の小田城より大寶ノ城にうつらせ給ひし

後のことなる故櫻雲記の作者此守護職補任と前の轉任の事とを一つに混じてしかあやまりたるとは見ゆれども此守護補任のことも宮の令旨をもて補せられたるにはあらずしかるに親朝か官途の事を轉任にもあれ新補にもあれ一定宮の令旨をもて御沙汰ありしやうに心え誤たるよしは結城文書の中に當時親房卿の出されたる沙汰文あるに所ノ被擧ニ申ス止總國守護職ニ也早可ノ被ニ管領一者ニ依ニ一品家ノ仰ニ執達如ノ件奥國四年七月十二日刑部大輔秀仲奉結城修理太夫殿と見えて裏に親房卿の判形ありされば此一品家とあるは其頃此卿は散位の從一位にておはせし故の事にて世には中院入道一品あるは中院を略して入道一品とばかりあるはまた打とけてはたゞかく一品家と斗も稱せしなり其事は櫻雲記の作者も大かたにはわきまへゐたりしにや正平十四年此卿のかくれ給ひしことをしるして北畠准后薨年六十七號ニ中ノ院ノ一品ト斗と見えたりしかるに件の沙汰文には中院とも入道ともなくしてたゞ一品家とばかり見えたる故にや例の作者此一品家を心えあやまりて一ノ宮の御事としたるゆゑあり是より後には一宮の御事をすべて一品ノ宮と斗書

たる也最初にかく心え誤たる故遂にはまたみづからその誤をうけて件の沙汰文を奉行したる刑部大輔秀仲をば宮の御家令なりしと心得て此前宮の奥州より小田城に入御の時御供に候じたりし人々の交名を擧て春日ノ中將顯時一條ノ少將具信廣橋ノ肥後守經泰刑部大輔秀仲と見えたりこれは結城文書の中に所々に見えたる名字ども拾ひあつめて書出せるにて實はいづれも宮の供奉して下りたる人々にはあらず顯時朝臣の常陸に下られしはいつ頃なりしやたしかにはいひがたけれども延元三年の秋親房卿の下り給ひしをり入道は年わかくもおはさず軍などしたまふべくもあらざりし故一族の中にて中將の年わかく軍にもなれたる人なりしを大將にたのみて具足して下りたまひつらんとおもふなりまた具信朝臣は是もいつ頃下られしとはさたかならざれども常州に下着の初結城親朝に遣られし狀に去十月廿五日令下ニ着上當所ニ一ヲ云々歳内は依ニ深雪ニ不ノ及ノ始ニ合戰ヲ候明春早々退ニ治ノ當國ヲ急ヲ可ニ龍上一候と見えたるを思へば親房卿にはおくれ親房卿は延元三年の九月の末下向宮には興國二年の夏御下向興國元年の冬など吉野より下向せられしと

見えたり次に廣橋肥後守は是も具信朝臣の興國三年の四月親朝への狀の中に廣橋肥後權守海邊沙汰事候其後何樣に候哉と見えたれば此人斗は宮の御ともして下りたる人ならんともいはるべきやうなれども日本史後醍醐紀延元元年三月二十二日の條に相馬家傳を引て修理亮廣橋經泰攻ニ相馬光胤小高城ヲ不ノ克云々二十四日源顯家攻ニ小高城ヲ斬ニ相馬光胤ヲといふことと見えたれば經泰は延元元年顯家卿に從ひて奥州に下りたりしが同三年の春又顯家卿と共に上洛し顯家卿討死し給ひし後は吉野に歸りて肥後守に轉任してゐたりしを其年の秋親房卿か顯信卿かに具足せられてふたゝび東國に下向せし人なるべし殊に秀仲が事は延元四年の九月吉野殿御讓位の御事を親房卿より結城親朝がいまだ大藏大輔にてありしに仰しらされたる狀をばはやく此秀仲が奉書にして出したるより（其時秀仲は越後守にて有し也後までも結城文書阿曾文書などにあまた見えたる一品家の狀どもは大かたいつも秀仲が奉行したりしてと見えたれは此人は初より中院家の家ノ司にてうつなく宮の供奉して下りたる人にはあらざりしことしるかるをや櫻雲記の載する所かくかた

御事跡どもわりし事をばつゆいさゝかもしらざりしほどに常陸にての御事はあらぬ宮の御うへに附會して一段の事跡を杜選し大塔若宮の御事はた〻太平記にのみ據て御謀叛の一件ばかりを書出したる故たま〳〵まことしやかにくはしく物しおきたる御生年も御名も其杜選の痕あらはれやすくしてすべての結構までもみないたづら事となりたるなり（豊後防部文書の中に大塔ノ若宮より正平六年の二月和田和泉守正武が奉にて豊後防部彌三郎入道に下されし令旨あるに常陸ノ宮令旨知此云〻と見えたりこれに依ておもふに件の此宮の御名を常陸陸良などこやうに作り出したるは作者此宮の御名のさだかならぬに雜紜してありし其處にふと件の令旨のたぐひを見出して常陸宮とまうしゝよしはしられどもいかさま此宮によしあることならんとおもひて常陸の二字をわかちとりて一字づゝ御名の上におきてかくこの御名を杜撰したるにやともおもひしかどもこの宮の年頃常陸に御座ありしことなど初より露斗もしらざりし程なればいかでたゞ常陸宮とはかりありを見て大塔ノ若宮ならんとは思ひよるべきしわれば（こはわが如きおもひすごしたるにてまことは杜撰のもじのおのづから御稱號のもじに暗合したるにぞあるべきまた太平記の此宮の御謀叛のことを載せたる段に宮の御行への事を赤松氏範と共に官軍を打破て南朝の方へ落させ給ふよし見えたるに櫻雲記にはやがて其場にて討れさせ給ひしとかきたるは大かたに心えてふとかきあやまりたるにはあらず前に御生年を杜撰したる其まゝをあはせんとてわざとかく本書にたがへて御卒年までたしかなるやうに物しおきたるさかしら心なればさればかの懷良親王に牧宮の事を附會したるも是らの事どもと同じたぐひのさかしらごとにてとりどころもなき杜撰妄作の說なることいよ〳〵さだかなるべきをや南方五部ノ書の筑紫の巻にも懷良親王を牧ノ宮とさうしゝと見えたるよし題目だに初て聞たる物なればよしあしのさたはせられざれどもはやうは聞えぬ題目なれば一定南方紀傳櫻雲記などより後に出たる物なるべく殊ゆるなりもしはたしてしからんには其牧宮とされどもある櫻雲記の作者は近頃やう〳〵世に出たる阿蘇文書をいかではやくは其片はしをもうかゞひ知るべきなれば懷良親王の御事は只元弘日記裏書にのみ據て心えたがひたるにて其杜撰の罪もさしてまたふかく咎むべき事にもあらざるうへに其いふ所の次第は事實にこそたがひたれ其趣はよく聞えて知らぬ人の打見にはげにさる事にてぞありつらんとおもはるべく見えたるをやされば其趣に就て其次第をいはば懷良親王も宮達（宗良親王尊良親王の一ノ宮）と同じく奥州ノ宮に從ひたまひて東國に下向したまはんとて同時に伊勢の津より御船を出されしが伊豆の崎にて大風にあはせ給ひ御船どもみなちり〳〵なりたる中に懷良親王の御船はおもひがけなき方に吹はなたれからうして四國の地に漂ひ着かせ給ひたりし程にそれより引返して又東國ノ方へおもむかせたまはんはいかにもたやすからぬ事なれば近きにつき便宜にまかせて鎭西には御下向ありしなり其事程なく吉野へも聞えたりしほとに是も便宜にまかせられて追つぎて征西將軍にはなされたりしといふ趣に見えたれば作者の心は此宮東國御下

向の始より征西將軍に任せられておはせしとにはあらで當時始は牧ノ宮と申しが鎭西に御下向の後に始て征西將軍には任せられ給ひしとなりしかるを貴說のごとく此宮もし七月の頃にはやく征西將軍に任せられておはしまさんには吉野をこそ東國御下向の宮達と同時には御門出もあらんずらめ御身は鎭西へ御下向の御事なれば便宜にまかせて和泉の境か常のごとく難波の津などより御船出ありてたゞちに鎭西へは御下向あるべき事なるにいかなれば鎭西へ下り給ふべき御身にて東國御下向の宮達に具せられ給ひはるゝ〳〵と上總の地ちかくまでは下らせ給ひけむそれが思ひかけず大風に逢たまひたる故にこそ四國の地にもたゞよひつかせ給ひたれもし此逆風なくして追手のみならんには早く常陸か陸奥の間にぞ落着てこそおはすべければさてはまたいつを期としてか鎭西へは下らせ給はんずらんさりとも逆によしある事にやいと〳〵心得がたしまた征西將軍に任せられしは七月頃の事にて阿蘇などに御沙汰ありしは九月のことにて有しなるべしとあるも心えがたきことにてかく新たに一方の鎭將などを任せられんには其管内の

地方には拜任の日やがても其よし御沙汰あるべくさらずともがならず其赴任以前にはあらかしめ御沙汰あるべき事にてこそあれもし其御沙汰なくして其人のみゆくりなく任所に下向したらんには其管内の者共いかですみやかに其まうけをもなし路次までの迎などにも出合すべきさらばたゞあはてたるまでにておのづからなめ〳〵しくおろそかなる事のみおはかるべければつひには大將の威勢もさめて管内のおきてもたちかたきことになりゆくべきをやまた宮は延元四年の春九國に御下着ありて直に肥後國に入らせ給ひ菊池に三四年御逗留ありて興國三年に薩摩へ御發向ありしとあるは何に據られたる御考にや此宮の初て肥後に入御ありしことは武朝か申狀に興國以來武光奉レ成ニ下人一御上故大王ヲ云々と見えて興國以來とは此前に寂阿以來武重武士三代の間先帝の御ために忠義をつくせしことをいひて武光は興國三年に兄武士が讓りをうけて其家を相續したりし故是より以下武光が一代の勳勞をいはんとて興國以來といひて端をあらためたるなりさて懷良親王の始て肥後に入御ありしは阿曾文書に見えたるごとく正平三年の正月

薩摩より御船にて宇土につかせ給ひそれより直に筑後へ御發向あるべきとてまづ菊池に越させ給ひしはらくそこを御在所と定めさせたまひしなりされば宮の初て肥後に入御ありしは武光が代となりても四五年後の事なりし故此事を武光に係て武光奉成入御故大王とはいひたるなりもし延元四年の春の事ならんには其としの夏までは武重いまだ世にありて肥後筑後の間所々にて合戰したりし事託摩小代などの文書に見えたれば宮の入御ありし事をば武重にかけてこそいふべきことなるに武重武士が間にはつゆさるけしきだに見えずして興國以來とことさらにはしを改めてもはら武光が代の事にかけていひたるにて宮は興國以前にはあからさまにも肥後の地には立よらせ給ひしこともなかりしことしるかり其うへ惟澄が正平二年九月の申狀は延元元年より正平二年までの間おのれが手にかけたる大小の合戰をば前後年だてにしておちなく書戰せたる物なるに一言一句も宮の御事に及びたることなければまして當國入御の御事は其けしきだに見えたることなしされば當國に初て入御ありしは明る三年の春なりしことといよ〳〵うたがひなかべきをやさてまた五辻宮と宮中將との御同人ならぬことは前書にもあら〳〵辨し置たることに候へどもくはしからで筆もまはりかね候故今のごとき御疑をものこされたると覺え申候聞くだ〳〵しきやうにも候へども猶たしかなる證左ども引出して重て申試べく候東鑑壽永元年九月廿日の條に中納言法眼圓曉就宮法眼是後三條院御後輔仁親王御孫陸奥守源朝臣義家御外孫也武衛尊二餘好一所二請シ申一サル也云々と見えたる圓曉法眼を宮法眼としもまうしゝことは圓曉の花園左大臣有仁公は輔仁親王の御子なりしが鳥羽院の元永元年に御年十七にて源の姓を賜はり直に從三位に叙せられ程なく權中納言に任せられ保安元年權大納言に進みたまひ明る年左近衛大將に轉任せられ給ひたりしを當時世に宮大將と稱しまうしゝ故圓曉其御子なりしかばまた同しく宮といふことを冠らせて宮法眼とは稱せしなりこれよりして後此例になりひて孫王の姓を賜はりて官途をかけたまひたるを大かた宮のそれがしと稱することにはなりしなりされどもそれは皆孫王の御上斗にて皇子にて姓を賜はりたるを宮の某と稱せしこと其例をさ〳〵見おとはすさるは此宮といふは父宮をさしたるにて其人をさして宮といひたるにはあらず前書に引たる殿法印良忠が殿といひたるも同例にて良忠すなはち攝關の身ならざりしにてさとるべししかれば件の宮中將もいづれの宮かの御子にて孫王にておはせしにはうつなければまつ是にても五辻宮とは御同人ならざりしとさだかなるべきをやもさだかならざれども例のしひて試にいはゞ延武二年常兵卿御謀叛の時大智院宮と共に東山道の大將軍として鎌倉まで打入給ひし彈正ノ尹忠房親王の御弟か御子かなどにてはなかりしにやとおもふことあり忠房親王は順德院の第四の皇子忠成王の御孫にて御父は忠成王の御二男彦仁と申しが源の姓を賜はり正三位の右中將になり給ひしこと紹運錄に見えたりされども一旦かく姓を賜はりて人臣に降りたる人の子孫故もなくめしかへされて親王宣下あらんことはさる例としても見およばずおぼつかなき事におもはるれば忠房親王を彦仁卿の御子としたるも彦仁卿を忠成王の御二男と加したるも共に紹運錄の誤にてまことには忠房親王は忠成王の御二男にて忠房親王の賀ノ宮豐彦王の御子にて彦仁卿はまた豐彦王の御二男にて忠房親王の御弟にておはせしを源姓を賜はりて三位の中將になされたるかすなはち件の宮ノ二位中將にてはなかりしにやされども宮三位の鎭四下向の頃までは何とやらんいまだ年わかき人なりしやとのこゝちせらるればもしは彦仁卿にはあらで忠房親王の御子に彦良といふがおはせしよし源氏系圖に見えたれば宮三位は此人なりつらんもしるべからずそはもとよりいづれならんとも定めがたけれども何さま大かた此兩彦の中なりしにはたがふまじくおもふなりされども本より臆揣の說なれば是よしとするにはあらざれどもたま〳〵おもひよせたることなれば放試にこゝにおどろかし置て後のよき考をまつことになむまた宮中將の事の阿蘇文書の外に當時の物に見えたるは書寫山行幸ノ記に供奉の人々の交名を載せて關白殿近衛前關白殿南殿別當殿洞院五辻宰相殿從三位行助宮ノ中將甲斐

少將一條中將行房勘解由次官光守と見えて此行幸は元弘三年の五月伯耆國舟上より還幸の御ついでに同月廿七日播摩國書寫山に行幸なりたるにて宮ノ中將の名はやく此供奉の人々の中に見えて然も三位中將と記さゞれば其時迄は未だ三位には叙せられざりしと見えたり然るに阿曾文書に見えたる五辻宮の令旨は延元二年十一月に出されて右の書寫山行幸の元弘三年よりは五年の後の物なるにて貴說の如く五辻宮の九國に御下向の後に始て三位中將に叙せられ給ひしにはあらざりしこともしるく又五辻宮の御同人にはあらでうつなく懷良親王の御ことなりしこともいよ〳〵是にてたしかなるにあらずやしかるにまた貴說に五辻宮は延元以前よりはやう九國に御下向ありて諸方を鎭撫して九國の官軍を引具して御上洛ありしと御見さはめ被成候とあるは此中將もし後までも猶九國に逗留しておはさんには其年また懷良親王を征西將軍になされて九國にさし向らるべくもあらざれば中將は召に應じて參洛ありし故其跡に宮をば征西將軍になされてさし下されしものぞとの御趣意なるべく推察せられ候然るに貴說のごとく心得候ては

すべて當時の事實にも事情にもいたくたがひたるやうに覺へ申候いかにとなれば當時阿蘇にも中將と同しやうに上洛の事度々御催促を加へられし中にも不レ依二三位中將一參洛の遲速一可レ被二參洛一とまて仰下されし程なれば菊池以下の御身かたにも一定同じやうに御催促をくはへられつと見えたるに其頃は菊池も阿蘇も一色少貳大友等を敵にうけて自國の合戰に隙なかりし故九國の官軍は一人もめしに應じて參洛したるとのなければ中將とても同事にて折ふし大隅日向の凶徒等と取むすびて合戰ありし最中なれば是またそれを打すてゝ參洛せらるへきいはれなし阿蘇文書の中に興國二年三月廿四日親房卿常陸の小田城より阿蘇惟時に贈給ひし例の秀仲が奉書ある其追啓に追テ申ス宮三位中將殿當時何所に御渡候哉此御書可下令二傳進一給上之由可申旨に候也右の秀仲が奉書には只月日のみをしるして年紀なき間たればいつの物とも定がたきやうなれども件の奉書の中に恩賞勘裁之次第先以目出度候哉とあるは前年延元五年三月に肥後國甲佐能軍那須等任二元弘勅裁一付二本社管領一不レ可レ有二相違一云々と右中將の奉書にて惟時に下されし綸旨の趣を惟時より親房卿の方に披露申たりし其返事と見えたるに前にもいひたる如く秀仲は前年の四月までは懐後守にてありしに此奉書には刑部大輔とある故かたく此奉書を興國二年の物と定めつるなりと見えたるにて宮中將は延元三年にはつひに上洛せられずして後までも猶宮につきそひまゐらせて九國に逗留しておはせしこと此秀仲が奉書たしかなる證左にて可有之かと覺申候さて此ちなみにつきて猶いふべき事あり件の中將を大將と稱せしよりは前書にもはゞ辨じたれどもくはしからず此大將といふは陽城書に竹園御座大將顯時ノ朝臣經廻之間加二樹酌一許ト歟また結城文書興國三年十一月大宰城合戰の事をいひたる處に大將春日中將一條少將率二城中勢一出張ノ悉ク追散ス了ヌなど見えたる大將と同趣にて顯時朝臣は大塔若宮をもりまゐらせて大宰城に籠られし故宮の御手の大將といふ意にて大將顯時朝臣とはいひたるにて宮中將も懐良親王をもりまゐらせて軍の事をおさて給ひし故此卿をも大將宮三位とはいひたるなりされば心づれの大將といひしも皆宮のおはしますにむかへていひたる大將にて征夷征東征西などのごとき朝廷より一方を專任せられたる重き大將軍にてはあらざりしなりまた宮中將より廣福寺領の沙汰文を出されし事を中將もし宮の副將軍にていまだ九州の地には御寄附もなく與州より直に大隅日向の凶徒退治として御渡海ありし其陣中

より出されし沙汰文ならんにはいまた寺院のたぐひまでは御渡海のことも承知すまじきことなるうへに將軍宮おはしますこと故令旨をこそ出さるべきに右兵衛佐が奉書にて中將より沙汰文を出されしといはんは何ともいぶかしき事に思召され候よし此疑難一わたりはいかにも御ことわりのやうにも覺え申候へども前書にも申ことく征西將軍宮の鎭西に御下向あるべきとのことははやく延元元年の九月に阿蘇大宮司惟直惟直は此前たび〳〵の合戰に打まけて戰場にとゝくしての討つれつとも深手おふて合期自由ならざりしにや肥前のをきの山中にてつひに自害したりし也されども京までは遂道の境なれば其事いまだ聞えずして災の惟時すらつゆ聞しらでありし程なりし故行在にては惟直もとより義なくしてあるべしとして綸旨をば惟直に當て下されし也其頃惟時は在京してゐたりしかども兵庫の軍官軍利を失ひしことを聞て山への供奉をもまうさで河内に越て東條に潛居したりし程に初のほどは年頃の家人に坂梨惟定さへ主の行へをしらずしてだづれわびたりしほどの事さまなりしかば件の綸旨は惟直が本國もしれぬ惟時に下さるべくもあらざれば綸旨の大宰司は惟直が本國に在るに下されたるにはうつなかるべしに綸旨をもて御沙汰ありしはどの事なれば菊池はさらにて九國にある宮方の者には阿曾と同やうにこそ大かたのこりなく御沙汰ありけめと覺ゆるうへに其としの十二月のつごもりに讃岐より令旨を出されて伊豫へ御渡海あるべきよしまた大宮司に仰下されしかば其をりも前のごとく菊池以下にも仰觸られしなるべくさせて其明る二年の十一月日向大隅の凶徒御追討として伊豫より直に御發向あるべきよし阿曾に令旨を下されしかば此をりも阿曾ばかりの事にてはあるべからず右の兩度の令旨は今たま〳〵討殘文書の中に殘りたる斗にてこそあれ元年の九月に山門より綸旨を下されしまでは其間十四五ヶ月の久しさを經たることなればたゞ右の兩度の令旨のみにはあらで事にふれ便宜につきてなはさま〴〵の事共いく度も御沙汰ありつらんとおもふなりされば宮の御下向の事は大かた九國の間にては宮方ならぬ所までもはやくより聞傳へて誰しらぬものもなかりし程なるべし其中にも年頃宮方に心をかよはしたる者共は讃岐よりの令旨の始に鎭西恩賞の事云々と書出されたるを見てはやく御沙汰を仰きて所知所領を安堵せんと宮の御下着あらんことをいつしかと待まゐらせてこそありつらめさらば宮がたの分地にある廣福寺のごとき寺社のたぐひまでも宮の御下着ありしことを承知せぬものとてはあるべからずそのうへ宮の御下着ありしはいつ頃なりしとはいはれざれども伊豫よりの令旨の趣にてはやがても日向大隅に御打

入あるべきやうに聞えたれば其年の内にはいかゞありけむおそくとも明る延元三年春の初などには一定右の兩國の間に御渡海ありつらんとおもふ也さては宮中將の廣福寺領の沙汰文を出されしは其としの霜月のことなりしかば宮の初て御下着の頃よりはほと〳〵一年に近き間なれば其頃廣福寺より所領の事を御在所まで注し申したればとてさしてそれをばにはかなることゝもいはれまじく又あやしむべき事にもあらざるにやまた廣福寺領の事につきて宮の令旨を用ひられずして中將家の奉書もて沙汰せられしことは此事もし宮より新御寄附などの事ならんには一定令旨を出されてこそ御さたあるべけれ是はさる樣の事にはあらで廣福寺の新舊の所領是まですべて若干なりしといふことを御在所の御奉行まで注し申たるを中將家より其返抄を出されたるといふばかりの事にて北頃軍功ありし者よりその次第を大將の奉行所にあてゝ注し申を大將の執事より承候了と出て判形を加へて批答すると大かた同趣の事なる故件の中將の沙汰文にもたゞ被二聞召一候と畢竟とばかりありて奥に實祚延長天下泰平の御祈禱の事を書くはへて沙汰文にして出されたる物なれば是また當然の作法にてありし也興國四年の秋結城親朝を上總の守護職に補せられし時常陸宮の令旨をば用ひられずして親房卿より例の秀仲が奉書をもて沙汰せられし事ありきかゝる撰叙補任の公事にすら綸旨をさし置てかく私家の奉書迄にて事をすまされし例もあれば旁々宮の令旨をさし置て中將家の奉書にて沙汰せられし事をばさまで深く御疑惑には及はれまじき御事かと覺え申候抑征西將軍宮の始て九國に御下向ありし頃の年月を延元元年の九月のことなりしと定めいひたるよしは前書にもはゞ證を取て一とほりは辨じおきたりしかどもいひもらしたることゝもあまたありてくはしからざりし程にかゝる御難議どもをもうけ給はりたることなればくだ〳〵しくうるさくもおぼしめさるべかめれども例の腹のふくるゝが苦しさにもだもえあられずして憚らず尚數々の證左どもを立て重てこゝにもいひあかさんとする也阿曾文書に見えたる五辻宮懐良親王に無品親王の宣下ありて征西將軍に任せられ直に鎭西へ下しまゐらせらるべきよし阿蘇大宮司に御沙汰ありし九月十八日の綸旨に當時の形勢を載せ

られたる事共を案ずるにいづれもみな延元元年ふたたび山門に遷幸ありし間のこと共にて朝敵追討の事四方ノ官軍不二一揆一と書されたる下に或先驅ノ而失ノ利ヲとあるは兒島範長が播磨にて赤松勢と軍して討死せしを始め兵庫の合戰にも官軍すべて利を失ひしことをいへる也或は城守ノ而似二怠慢一とあるは太平記などにはさるさまの事は見えざれども當時の有樣をおもふに近國の官軍にも將軍西上の兵勢に畏れて山門にも參らず京軍の後措をもせずして我城にのみ引こもりて世の成敗を觀望して居たるものもおはかりしなるべし就中九州ノ士卒等雖ノ非レト無ノ功ヲ雄ヲ而及二參洛之遲引一とあるは阿蘇菊池の者共が筑前に攻入て少貳妙惠を討取しかども猶一色以下を敵にうけて將軍のあとを追て參洛せざりしこと共泰顯家卿の東國勢を引ねて將軍東上の後をおふて參洛せられしには似ざることをとがめ仰られたるなり又依之凶徒猶不レ退二帝都一涉二旬日一之條云々とあるは四方官軍等かく一揆せざりしに依て山上の官軍無勢にして京都の合戰今期せずはかゞ〳〵しからざりし故將軍は御入京いまゝ五月の末より此頃迄猶東寺に御在陣あ

りしことをいはれたる也さればこれらの條々を併見て件の綸旨のたしかに延元元年に山門より出されしものなるにはうつなきことを悟るべししかるに後醍院系圖には將軍宮の九國に御下向の事を延元二年のことゝしたるを此事外にはまた考ふべき物なかりし故にや日本史にもまた此說に據て後醍醐紀同年の條是歲以二懷良親王一爲二征西將軍一經略（此下鎭西などの字と落たるなるべし）見へたりされども阿曾文書に同年九月十七日に吉野より大宮司惟時に下されたる綸旨あるに諸國已相競之間京都凶徒追ノ日ヲ無勢に候仍ヲ防戰失二術計一歟之餘リ忽搆二謀計一ヲ或ハ當山已二沒落一了ヌ或ハ有二御和談一なんど種々以テ二虛說一方々に披二露一之ヲ候更に不レ可レ成レ疑ヲ京都ノ御弱以レ之ヲ可レ被レ察時已二至ル者歟不レ失二此ノ時分一ヲ急速ニ可レ責二京都一之處諸國遲々之間延引スル者也但ノ與州去月十一日進發之由去ヌル夜飛脚參申又北國近日可二入洛一ス候而ルニ九州今度不レ參者日來ノ忠功如レ空ヲ且ハ背ノ本意一哉云々（本文に當山云々とあるは吉野のことにて奥州とあるは顯家卿北國とあるは義貞朝臣をさすなり）と見えたるにもし系圖の說に據て宮の御下向を延元二年のこととするときは件の九月十八日の綸旨もまた同年のものとせざることをえずしか

るに右の綸旨共は十七日と十八日に出されたればわづかに一日のたがひこそあれ正しく同年同月に出されてしかも同所に當ヲ下されたる物なるに其綸旨共に載せられたる當時の形勢一事も兩書符合したることなくすべての趣殊の外に相違したるにてかの九月十八日の綸旨はうつなく延元元年の物にて系圖の説はいふにもたらぬ杜撰の妄説なることさだかなるべきをや（非澤亨齋が菊池軍記に宮の御下向を興國元年の事とし其時の供奉の人々の交名御路次の次第までくはしくしるして直に八代の鳥田に入御ありしといひたるはかの武朝が申狀に興國以來武光幸成入御於八代城一自レ令下退治上一色入道々猷父子ノ之後云々とあるに據て撰出したることにて亨齋が例の口漫謟撰の説なれば是また信據とするにたらざるなやまた櫻雲記の宮の御下向を延元三年のこととしたるは前にもくはしく辨じおきたることなれども猶いひもらしたることもあればちなみに其のこれるを出して前のたらざるを補ふべし件の九月十八日の綸旨の追實に追申ス東國並ニ諸方官軍已ニ上洛ス候也といふこと見えたりしかるを此綸旨を延元三年の物とする時は其としの春顯家卿奥州宮を先だてまゐらせ東國の官軍廿万騎を引率して上洛したまひしかども畿内所々の合戰に官軍すべて利を得ずして顯家卿も高師直と軍して五月二十二日和泉の境にて討れ給ひ其後顯信朝臣など八幡まで攻入て男山にたてこもり給ひしかども八月の中頃にこゝをもまた師直に打おとされて顯信朝臣は河内へ引入たまひし以後は官軍みな吉野に歸り參りてしばらくは畿内にての合戰とてはなかりしなりかくては始終はかばかしからじとて結城入道かすゝめに從はせ給ひ奥州宮を陸奥太守に任せられ顯信朝臣を鎭守府將軍になされ猶また御任國に御下向ありて重て東國の勢を催さるべきに御議定ありて此春顯家卿とともに上洛したりし結城入道新田義興以下の東國の官軍等も宮の御下向に從ひまゐらせて九月の初に伊勢の津より御船にめされ海路はるかに東國のかたへおもむかせ給ひたりきされば其頃宮奥州宮の御下向に引ちがへて東國勢の上洛すべきいはれもなくまた東國にある凶徒らが外には上洛すべき官軍とてはあるまじきをや其うへただに此事のみならずすべて件の綸旨の趣一事も當年延元三年の形勢に似たることだに見えたらぬもていよ〳〵櫻雲記の杜撰なることもしるくまた件の綸旨の延元元年のものなりしこともさだかなるべしさりながら延元元年の九月頃に東國勢の上洛したること當時の物共にはをさ〳〵

見およばずされば此東國勢とあるは顯家卿の東國勢を引率して上洛ありしことをいはれたるとは聞えたれども顯家卿は此春義良親王を具したてまつり將軍のあとを追て上洛したまひたりしが將軍鎭西へ落下り給ひし後東國のこと心もとなしとて親王と顯家卿とを重て東國に下されしかどもいつしか東國の者共將軍に心をかよはすものおほくなりて結句宮の靈山におはしましゝを攻圍まゐらせなどして御みかたに參る者すくなかりしかば其頃顯家卿の東國勢をひきゐて御上洛などあらんことはおもひがけなき程の事にてありしぞかししかるを件の綸旨に東國勢のみならず諸國の勢どもゝ一同に上洛したるよし載られたるは當時まことにさる事の有しにはあらず九國の者共が上洛をうながされんとてかくそらごとを造て仰ふれられたるにて是また軍略の一手段なれば當時さるやうの例がいづくにもまゝおほかる事にて今茲に一つ二つ其證を擧ていはんには興國三年の二月親房卿關城（いはゆる關城者なり）より結城親朝に後措の事を御催促ありし狀に「關城宗祐一身奔走守備粗全而城圍已ニ久シク漕驛路絶不レ得ニ白晝出行一兵罷レ糧乏シク資ン馬ヲ

（以上日本史親房傳）

（阿曾文書）

（北朝觀應三年）

（當國凶徒ヲ十八日攻ニ入リ鎌倉ニ候之處符氏已下ノ凶徒已ニ沒落シ栖ニ籠リ狩野河一候之間今月十九日發ニ向彼ノ方一仕候決シ雌雄一候者重テ可ニ注進一候云々と見えたるに三富文書に三富彌三郎元胤申軍忠ノ事一去年將軍家御下向之時海道供奉ノ事一今年閏二月十七日武州御下向之間御供仕同廿日金井原同廿八日小手指原兩度合戰に致忠ヲ事（中略）粗應參年三月十六日とあるに據るときは此をりの事は太平記に見えたるがごとく上州信州等の官軍蜂起して鎌倉によすべきよし聞えしほどに將軍はそれを追拂ひ

んとて三宮文書にいふごとく閏二月十七日鎌倉を打出給ひ武州狩野河（今金川のまで御發向ありしを十八日に義宗朝臣其事を聞付給ひ十九日に狩野川に寄せんとし給ひしかば將軍もまた其事を聞付給ひて二十日に狩野河より金井原に出向て御合戰ありしなり然るを右の注進狀に義宗朝臣十八日に鎌倉に攻入たまひしかども將軍は聞捨し給ひて前日はやく鎌倉を没落し給ひしやうに載せられたるは義宗朝臣（空隣立）そらうでたてを申されたるにてまことは始より一度も鎌倉に攻入られしことはなかりしなり是らはみな遠國のみかたの心をやすめ力をそへんためわざとかく虚聲を張て事もなげに注進せられたる事なれば件の綸旨の追宣もかゝるたぐひの御用意にてありしことを悟るべしさて又五辻宮と宮中將と御同人ならぬことは前にもくはしくいひたれども五辻のはたして懐良親王にておはせしことはいまだたしかにはいひわかさざりし故に今又こゝに其證左をちかく取てあかすべし宮中將を大將と稱せしよしは征西將軍宮の屬將といふ意なることは前に辯せしごとくにてさだかなるうへは件の中將の沙汰文を奉行したりし右兵衛佐も五辻宮の令旨を奉行したりし右兵衛佐も同人にて五辻宮の供奉して宮中將と共に九國に下向したりし人にはたがふべからずされば其頃宮達の中にて九國に下向したまひしは懐良親王のほかにはおはしまさゞりつれば五辻宮のはたして懐良親王にておはせしことは宮中將の此宮の大將なりしと右兵衛佐が此宮の令旨を奉行したりしとにてその證左いよ〳〵たしかなるにあらずやまた件の右兵衛佐が奉行したりし延元二年十一月の令旨にはたゞ日向大隅の凶徒等を退治せられんため彼國へ御發向あるべきよしを載せられたるばかりにていづれの御在所より出されしものともさだかならぬやうなれどもおのれはやく伊豫よりの事と定ていひたりしよしはかく五辻宮のはたして懐良親王にておはせしことたしかなるうへは件の令旨に延元二年とさだかに年紀をしるされたればかの勘解由次官の奉行せられし十二月卅日の令旨には宮の鎮西に御下向の最初まづ讃岐に着御のよし見えたれは其十二月卅日は延元元年の十二月なりしことうつなかるべしゝかれば又宮の征西將軍に御拜任の事を載せられたる九月十八日の綸旨も同しく延元元年の

物なりしこと辯をまたずしてしるかるべし然るにかの十二月卅日の令旨に讃岐より伊豫に御渡海あるべきよしのせられたれはおそくとも明る二年の春の中には一定伊豫に御渡海ありしなるべしさて伊豫と日向とはわすかの海をへだてゝむかひあはせの國なれば日向大すみの凶徒等を對治せられんには伊豫よりたゞちに御發向あらんこそ便宜にてはあれいかでさる便宜をすてゝ何の望に道をまげて肥後よりは向はせ給ふべきそのうへ豊後路にかゝりて肥後に入御あらんには御敵の大友一定御道を塞ぎてさゝへまもるべければいかでさはたやすく速にはおし通らせ給ふべきさるはまた宮のおうへばかりにもあらず御迎にまゐれ御供に候せよと御催促ありし阿蘇菊池の者どもがつひに一人も御催促に應じて四國の地まで參りたる者なかりつるもたゞ自國の合戰に隙をえざりしのみにはあらで道を大友にふさげられて往來自由ならざりし故なるべければかたゞ〴〵日向大隅への御發向はうつなく伊豫よりの御事なりしとはおもひ定めつるなりまた宮の日向大隅の間に御打入ありしことはいつ頃なりしとも定めがたきやうなれどもその事の御沙汰ありしは十一月廿八日のことなりしかは其としのをはりかおそくとも明るとしの始かにてありしなるべしさて延元三年の春より興國三年の五月まで五年か間日向大隅の間に御陣をめされてまた大隅より御船にて薩摩の山北の地に打入らせ給ひ谿山を御在所と定められ正平二年の冬まで六年が間三國の凶徒らとあまたゝび御合戰ありてやう〳〵に三國をうちしなへ給ひ其としの暮に薩摩を出させたまひ明る三年の正月の始にまた御船にて宇土の津に御着ありしかば宮の初山門を出させたまひし延元元年の九月よりは十二年のひさしきを經て始て肥後國にては御打入ありしなり今當時の綸旨令旨共に據て宮の御履歴の次第をかくのごとく考定むるときは御道すぢの次第もさるべくおもはれまた當時の事實事情にも何一つさはることもなくたしかにおだしくも聞ゆべきことならずやされども九國まで御下向の御路次にて讃岐に四五月伊豫に十月あまり御逗留ありてやう〳〵十四五箇月をへて後やう〳〵に九國の地には御下着ありしといはんはあまりに遲々せられたる御事のやうにて其よしもさだかならざれはあやしみいひ

ふかしみておぼつかなく思ふ人もあるべけれども今つら〳〵當時の事ざまを考ふるに最初宮の山門を出たゝせ給ひし頃は山上に籠りあつまりたる官軍もさして大勢なりしとも聞えざりしうへに洛中を初口々の合戰に隙なかりし折からなりしかば其中よりまた多勢を引分て宮にとてつけまゐらせられんこともかなふまじかりければ宮にはさぞ疲弱(ワウニヤク)の御勢かさにてぞ下らせ給ひけむさてはまたたゝちに九國に御下向あらんにも其まゝにては御合戰など始めらるべき御事ならねばまづ四國の官軍を御かたらひありて御勢かさをまされてこそ九國へは打入らせ給ふべけれとてかく御路次すがら所々に御逗留ありて四國の軍勢をかたらひ付たまひしかどもそれもはか〴〵しくは事ゆかざりしうへに九國の者共が御迎にや參らんすらんなどかれこれと御見あはせありてひかへ〳〵下らせ給ひし故つひに九國までの御下着もかくあやしきさまで御延引にはおよばれしなるべしこゝにまた後れながらもいはまほしきことあり宮中將は延元三年に召に應じて上洛せられしにはあらで後までも猶九國に逗留しておはせしといふことは前にはやく親房卿の典國三年阿曾惟時への狀を引證してくはしく辯じおきたれどもそれよりもいと手近き證左のあるに心つきたる故いはでやまんも口をしきわざなればうるさけれどもしひていふべし宮中將の參洛をしきりに御催促ありし事は延元二年の冬より三年の夏までの間にてそは顯家卿の東國より打上り給ふと東西よりおし合せて云に都を攻られんとての御催促なりしかばまこと中將の召に應じて參洛し給はんにはおそくとも夏の末にはかならず上りまゐられしなるべしかるにかの廣福寺領の御沙汰文は延元三年の十二月八日に出されし物なれば中將の其としの夏上洛せられざりしことは件の沙汰文たしかなる證驗にはあらずやまた宮中將の延元の始よりはやく九國の地に下着しておはせしことは當時の文は共に見えてたしかなれども宮の御下向ありしことはかの年紀をしるされざる九月十八日の綸旨と十二月卅日の令旨と斗に見えて餘の文書どもにはたしかにそれとは見えざる故三年の秋四年の春などいふことも出來たれる也然るに近頃五條文書の中に宮の延元の初よりはやく九國へひけて御下向ありしと見えたることのあるを

見出したる故さまではいかゞともおもひしかどもよき證左をえたるがうれしくてしものびあへぬまゝに今またこゝに引出して其よしをいはむとするなり五條文書に積鬱之處潛通殊悅思給候近國官軍既始合戰候毎度乘勝時節到來候歟其境事于今無爲承悅候此時節殊可被廻籌策候哉賴元賴氏等忠貞之至感思給候□□可被口仰候哉謹策定不可有二等閑一候□御稽古之事良氏定申沙汰候□理世安民之謀只此一事候文□此堺形勢以專使可申候也と見えたれども紙尾切斷して年紀月日はさらにて狀主も宛所もさだかならざればいつ頃の物とは確かには定め難さやうなれ共うつなし延元三年の二月頃に吉野の公卿達の中より賴元父子の間に返事せられし狀なるべくおぼゆることあり近國官軍既始合戰云々とあるは正統記に戊寅(延元三年)の春二月鎭守府將軍顯家卿また親王を先だて申かさねて打上り海道の國々ことゞくたいらぎぬ伊勢伊賀を經て奈良の京になん着にけりと見へたる時の事にて時節到來候歟とは官軍のしきりに勝に乘したるを深く悅給ひたる趣なりしかれば此狀は顯家卿の奈良天王寺などの合戰に打負給ひて一旦よし野に引入らせ給ひし以前に出されたる物と見えたれば延元三年の二月の中に出されたる狀なることさだかなるべし其境之事于今無爲承悅候とあるは其境とは當時宮の御在所のわたりをさしていひたるにて其頃宮は讃岐より伊豫に御渡海ありていまだ御合戰を始められざりし間なる故當時其御無爲なることを賀し申されたる也御稽古之事云々とあるは賴元父子は清原氏にて講筵儒林の人達なれば其頃宮の御としもはや十ばかりにならせ給ひて御讀書御手ならひなどの御稽古をも始めさせらるべき御年頃にならせ給ひたる故其事をは良氏定めて由斷なく申沙汰せらるにてあるべしとなりされば此事共を併見ても宮の九國御下向は延元三年の秋の事にはあらで此前延元の初にはやう御下向ありてかの十二月卅日以後の令旨どもに見えたるごとく其頃はいまだ伊豫わたりに御逗留なりておはせしことといよ〳〵うたがひなかるべきをや

鞠智城の舊跡

鞠智城の舊跡はいづかたなりしとも定められがたく候へども地理に就て御考へ被成候へば今の深川の古

城跡にて可有之と思しめされ候よし小拙は彼方の地理不案内にて候へども深川の城跡は彼方の土俗も菊池の始祖則隆が當地に下向せし始に此城をきづきて菊の城と名づけたりしといひまた菊の池の跡も此地に殘りて郡の名も此池あるによりて負はせたるなど申傳候故郡人澁江公正が風土記にもなは其說を取用して則隆以來菊池家の惣領は武光迄代々此城に居住したるよし載申候但〻菊の池菊の城などいふことは例の土俗の妄說にていふにもたらぬことどもにて候へども菊池は和名抄に久々知と見え續紀には鞠智とかいれたれば菊池も鞠智も久々知といふことの假字にて昔は鞠智とかきたるを後に菊池にかきかへたるなり久々知とはいかなることにやさたかならされども昔より草の菊のことを久々といひたることなし草の菊は和名抄菊の注に俗云本音之重と見えて菊鞠などの口字本音は支由久なるをつゐめて久々と呼が正音なる故昔は久々といふことには菊麻久々知などの字を借用して久々利姫を菊理姫久々万といふ地名を菊麻久々知を鞠智菊池なとあたり草の菊は昔より本音のごとく支由久久々などは呼すしてやゝ音を轉じて支久と呼ことゆゑ俗云本音之重とはことわりたるなり本音之重とは輕重の重と聞えたれども本より音韻のことにくらければいかなるよしともわきまへれども當時の音久々といふはかろく支久といふは重く聞えたるにてもあるにやなほ考ふべしさてそれはともあれ何さま和名抄かきし頃までは昔のまゝなる菊池を久々智と呼たれば其始菊池のあるより郡の名におひたるにはあらざりしことさだかなるべししかるに久々知を支久知といふことになりたるはいつ頃よりのことにや則匡が頃にはすべての世のさまも延喜天暦の頃とは打かわりたる事もおほかれば大かた則隆が頃にはさ菊池なども今のごとく支久知と呼ことになりてありしにもあるべしさすがにはやくより其土俗の申傳へたることなれば初則隆が當地に來し頃までは昔の鞠智城の跡なほ形ばかりは殘り居たるを取しつらひて居城としたるも知るべからず候へば貴說のごとく深川の城跡すなはち昔の鞠智城の舊跡にても可有之候へども前書にもまうしゝごとく城家の名字の地まさしく鞠智城の舊跡にて有之たるかと覺え申候へば今の深川の地むかしは城といひて城家の始祖其處を知行して名字にも名のりたる事にても候はゞ貴說のごとく心え候てもよく聞え申べく候へども深川の城跡は菊池家の惣領代々居城とせし所といふに定まり申候はゞそこをまた城家よりも知行して名家にも名のりたりしとはいはれまじきかと覺申候されば例の强て試に申候はゞこれも土俗の說にてたしかには信用しがたき事なれども城家は始祖より今の木庭村の地を知行して其居城の跡を城林といふよし此城ばやしといふは山鹿郡の城村のごとく城家の居所の跡なる故城林といひたるにてもあるべけれども城家の久しき知行地に其居所の跡として城ばやしといふ名の殘りたるをおもへば件の城林すなはち昔の鞠智城の跡にて中昔より其城跡ある處故やがて其處を城村といひたりしが後に城家の始祖其地を知行せしより名字も城と稱したりしなるべしさて其家後にまた山鹿郡に移住してありし故後にはまた其處をも城村といひたるは其名字より來たれる名にて始の城村の城跡あるより名におひてそれがまた領主の名字となりたるとは同からざりしなりされども後にかく新に城むらといふ名の地出來たれる故にやいつの頃よりか本の城むらをば其境内に木庭といふ字の地のありしを取て今のごとく呼かへたるにてもあるべし此事もしはたしてしからんには深川の城跡を菊池家代々の居城の跡とせんにもさはりなくまた木庭村を鞠智城の舊跡として城家の名字の地なりしといはんにもよしありて聞え可申かと覺申候また城院は藏屋敷なれば城より遠く隔りてはあるべからずとあるはいかにもさることにて城院と稱する程の事なれば城内に倉庫など置べき處を柵築地などにて一搆にしきりたるかさらずば城の際に引付て別に藏やしきを搆たる故城院とはいひたるには可有之候すべて院といふは扉築地などにてかこひて一搆にしたる屋敷地のことなれば水島の大城小城のごとき窓をとらへていかで城院などゝはいはるべきされども水しまに大城小城などいふ名の殘りたるは前書にもいひたるごとく了俊の狀にも水しまの古城と見えてはやくより菊池家の外城を搆へし處なる故さる字どもの今までも殘りたるにて可有之と覺え申候さて託摩文書に見えたる菊池山、城並に渡山合戰阿蘇文書惟澄か申狀の隈部城了俊の狀のくま目の城武朝か申狀にいはゆる守山、要害などかく樣々に名はかはりたれどもまことはみな同處なるべきとの御考へともさることにて可有之小拙も早くより大かたは御同意に心え居申たることに候つる然るに惟澄が申狀に菊池本城合志入替武士云々とある菊池、本城は深川の城なるべく深川は小勢にては守なりがたき處なるゆゑ合志にもかくたやすく乘取られたるにてさる要害うすき所なる故いづれの代にか菊池山渡山守山ともいに城を築て惡〻城としてありしなるべしとある深川に居城しそこを根城としてありしなるべしとあるはすべての御考には似ずしてくはしからぬやうに覺申候それをいかにと申すに件の惟澄が申狀には菊池、本城當時合志入替武士令二楯籠一去〻十五日武光發向追落外城焼拂打取囚徒廿餘人了同十六日追落隈部城一と見えて當時外城といふは本城にかりは殘り居たるを取しつらひて居城としたるも知るべからず候へば貴說のごとく深川の城跡すなはち昔の鞠智城の舊跡にても可有之候へども前書にもまうしゝごとく城家の名字の地まさしく鞠智城の舊跡にて有之たるかと覺え申候へば今の深川の地むかしは城といひて城家の始祖其處を知行して名字にも名のりたる事にても候はゞ貴說のごとく心え候てもよく聞え申べく候へども深川の城跡は菊池家の惣領代々居城とせし所といふに定まり申候はゞそこをまた城家よりも知行して名家にも名のりたりしとはいはれまじきかと覺申候されば例の强て試に申候はゞこれも土俗の說にてたしかには信用しがたき事なれども城家は始祖より今の木庭村の地を知行して其居城の跡を城林といふよし此城ばやしといふは山鹿郡の城村のごとく城家の居所の跡なる故城林といひたるにてもあるべけれども城家の久しき知行地に其居所の跡として城ばやしといふ名の殘りたるをおもへば件の城林すなはち昔の鞠智城の跡にて中昔より其城跡ある處故やがて其處を城村といひたりしが後に城家の始祖其地を知行せしより名字も城と稱したりしなるべしさて其家後にまた山鹿郡に移住してありし故後にはまた其處をも城村といひたるは其名字より來たれる名にて始の城村の城跡あるより名におひてそれがまた領主の名字となりたるとは同からざりしなりされども後にかく新に城むらといふ名の地出來たれる故にやいつの頃よりか本の城むらをば其境内に木庭といふ字の地のありしを取て今のごとく呼かへたるにてもあるべし此事もしはたしてしからんには深川の城跡を菊池家代々の居城の跡とせんにもさはりなくまた木庭村を鞠智城の舊跡として城家の名字の地なりしといはんにもよしありて聞え可申かと覺申候また城院は藏屋敷なれば城より遠く隔りてはあるべからずとあるはいかにもさることにて城院と稱する程の事なれば城内に倉庫など置べき處を柵築地などにて一搆にしきりたるかさらずば城の際に引付て別に藏やしきを搆たる故城院とはいひたるには可有之候すべて院といふは扉築地などにてかこひて一搆にしたる屋敷地のことなれば水島の大城小城のごとき窓をとらへていかで城院などゝはいはるべきされども水しまに大城小城などいふ名の殘りたるは前

むかへていひたることにて本城の外に別に所々に小城ともを搆へ置たるを外城といひて今いふ外廓のことにては無之いはゆる菊池の十八外城阿蘇の二十五外城などみな本城のほかに所々に搆置たる小城どもにて一條輝家が甲斐宗運に寄たる詩に雄圖二十五都城星斗燾然ト秋氣清と作たる二十五都城すなはち阿曾の二十五外城のことなれども詩には外城は俗稱なるうへに湯桶よみになれば文字のまゝにては用ひがたき故西土にて昔周の代に國城（諸侯の居城なり）の外に都城といふがありてこゝの外城といふによく似たるさまの物なるうへに音訓のたがひこそあれ其となへはたゞ同ことなれば外城の文字を修めて都城とは作りたるなりさて菊池の十八外城といふは是も土俗のいひ傳へたることなれはいつ頃の事なりしともさだかならざれども當時の文書共に見えたる所にていはんには小代文書に見えたる寺尾野盤圀久虎口穴河等の城々了俊の狀に見えたる陳の城木野の城水しまの古城などみないはゆる當時の外城どもにて可有之候されば合志が武士に入替たる本城といふは隈部城のことにて外城には合志が手勢ばかりを籠置其身は武士を追出して隈部城に入替てありしを武光馳付てまづ外城を追おとして焼拂ひ其兢にのりて明る日たゞちに隈部の本城を攻て難なく合志を追おとしたるにて深川の城は本城に近き所なれば此外城といへるぞ一定深川城にて可有之歟と覺申候しかれば菊池家にては武士が前よりはやく隈部城を築て本城としたることと惟澄が狀にて明白なるべく候されども隈部を本城としたることはいつ頃よりの事なりしやさだかならず託摩文書に渡山合戰とあるは建武五年（延元三年）八月の事にて武重がいまだ世にありし頃なれば其時も合志託摩など隈部城に押寄て武重を攻めんとしたりしを武重城外に打ていて渡山にて合戰し合志等を追拂ひしと見えたれは菊池が隈部を本城としたるは猶武重が以前よりのことにてぞありつらんと覺え申候また件の渡山を菊池山ノ城と同所とせられしはいかゝあるへきや菊池山城のことは託摩文書に建武二年十二月三十日新田左衞門尉義貞與同ノ仁菊池掃部助武敏寄コ來寄府（カ）ニ之間於ニ中途ニ馳付致ニ合戰ヲ若黨等討死ノ畢ヌ同三年正月八日菊池山城合戰之時致ニ軍忠ヲ追（ヒン）落ノ畢ヌと見えて此菊池山城の合戰は武敏が重て宰府

に發向して少貳妙惠を攻殺せしかども多々良濱にて尊氏卿に出あひ負軍して本國に引入たりし前月の事なるにもし其時隈部の本城までも攻落されたる程の負軍したらんには武敏いかに猛くともいく程も經さるに押返して足長に寄府（カ）まで打出たるといはんもちと心えがたき事におもはれ候へば件の菊池山ノ城といふはかの所謂外城共の中にて小代文書に見えたる寺尾野盤圀久虎口穴川などの外城どもの中にて可有之其時少貳託摩など前年のしはす武敏に寄られたるむくひせんとて津江口より菊池に攻入虎口盤圀久などの端城一ヶ所攻落したるを小城にて名もさだかならぬ故たゞ菊池山ノ城とばかりいひたるにて隈部の本城のことにては有之まじく覺申候また了俊の狀にくま目の城とあるは隈部のことなるを傳聞を誤れるなるべしとあるはさることにてはあるべからず地名などのとなへの古今一やうならぬことは常のことにて候へば當時隈部をくまめといひたるにて可有之候ちかく地名のうへにて其例を申候はゞ土佐の長曾我部香曾我部を昔はちやうすがめかうすがめと稱せしこと長元物語に見えたるが彼國にては今までもしかとなへ來たれるにや土佐の谷重遠が俗説贅牘にも長曾我部をちやうすがめと訓ませたりかく部のじをめともいふことは上達部を昔よりかんだちめといふなと同例にて此外にも地名には昔よりよくなまりて文字のまゝにはとなへざるがおほかることにて益城の守富庄のことを阿蘇文書には假名にてもりづみとかき若狹の今富庄のことを太平記には文字にて今積とかきたることもあればかたく丁俊のくま目の城とかゝれしは傳聞の誤にてはあらざりしなるべしまた武朝が申狀なる守山之要害を隈部城渡山なと同所なるべしとあるは何に據られたることにや菊池の土俗の説にさるいひ傳へありしと見えて亨齋が菊池軍記の附錄に武朝が申狀を載せて守山要害とある傍に菊池郡にありと注し澁江公正が風土記にも隈部の城地昔は守山といひたるよし見えたる外は當時の諸家の文書共にはをさ〳〵見およばざることなればもし土俗の傳説のみならんにはいかにもうけがたくおぼつかなしいかにとなれば當時の文書に守山の名の見えたるはみな今の益城郡廻江手永の守山村のことにて阿曾文書惟澄が申狀に次頼尚重ヲ令ニ下向ニ正平元年

（オノヽ）王九月二日攻ニ破守山關所ヲ之時自ニ小河城ニ下リ合セ令レ致ニ散々ニ合戰ヲ云々と見えまた建久六年甲佐の社頭の事につきたる在廳等が立券帖に北小河鄉の四至のことを北ハ限ニ守山ノ庄ノ南ニなど見えて當時は守山は庄號の地にて八代郡に屬したりしなり依ておもふに武朝が申狀に所ノ謂守山ノ要害も是らの守山と同所にて其頃武朝が一族扶持人等武朝が年少なるを侮りて武家方に心をかよはし惟澄が申狀にいはゆる守山の關所に要害を搆へて楯籠り武朝を討んと計りしなるべしもしまこと守山の要害が隈部城と同所ならんには可ならず當時の通稱に就て菊池の本城とか隈部城とか書出すべきことなるを耳遠き昔の地名を書出して遙なる吉野殿まで注し申さんこと何の所詮もなき人まどはしのいたずらことならずや其上隈部は菊池の本城にて武朝が常の居所なるべきを末々の一族扶持人等が分際にていかでしかたやすくは入替りて楯籠るべき本書の趣を案ずるに當時武朝は外にありて其留守をうかゞひたることゝも見えずしかるに不レ廻ヲ時日ヲ自ヲ馳向ヒ令ニ追落一畢ヌとあれば武朝其時は本より菊池の本城にありしが其事を聞とひとしくたゞちに馳向て追おとしたる趣にていはゆる守山の要害は無下に間近く足もとなりし所とも聞えずしかれは所謂守山の要害は外のところにはあらで前にいひたる守山の關所と同所なりしにはうつなかるべし依てまたおもふに後の土俗等が守山を隈部の城地の本の名なるよしいひ傳へたるは眞は昔よりさるたしかなる傳へのありしを聞すぎていひ來れるにはあるべからず是は後のなまかしきもの件の武朝が申狀に一族以下扶持人等受ニ彼ノ朋黨之語一ヲ楯ニ籠守山之要害一ニとあるを見て武朝が一族扶持人等なれば其領分の菊池をはなれて遠き南郡の守山に楯籠るべきいはれなければ此狀に所ノ謂守山はかならず菊池の郡内の地なるべくさらば今の隈部の城地には別にいひ傳へたる山の名としてもなければ此守山こそ一定隈部の城地の本の名ならんとおもひつきたる臆推の妄說なるを所の者なればやがて傳來の舊說に取なして人にも語り物にもしるしなどしたりしが後にはつひにいつとなく舊來の傳說のやうになりたるなるべしされども始に武朝が一族扶持人などが菊池より程へたりたゝ南郡の守山にしも楯籠たるをゆくりなくいぶかしきことにおもひたるよりかくは心えわやまりたるにて初より其頃の世のさまをよくわきまへさる人の心にてはさるひが心えしたらんもまたことわりならずとはいふべからずすべて當時の守護地頭などの所知所領をかゝへ持たるさまは今の世の大小名のごとく其城つきの國の內とても所々にとびちりたるのみならず他國の遠き境にも懸持にしたるが打まじりたるは常の事なりしかば當時菊池家の分地とても菊池に隣りたる山鹿玉名の地はさらにて菊池以南の地のたしかに物に見えたるは飽田の府中託麻の近見庄號の地にては益城の豊田小山の兩庄などありしをおもへば是等のほかにも猶南郡にかけていくらも所領の地はありしなるべし（自國の外肥前の神代豊後の大坪一松名なと物に見えたるほかにも猶豊筑の間には懸持の所領おほかりけめども今よりはさだかならず）かゝる散在の所領共にはかならず一族家人の中より代官を遣はして其處の雜事をさだせしむることなりしかば當時南部にありし代官の一族扶持人等がにはかに武朝に叛て守山の要害にたてこもりたるにて守山庄も又當時武朝が所領なりしも知るべからざるをやしかるを井澤澁江などか深くも考へずして土俗の謬說を其まゝに物にまで書あらはしおきたるは物しりには似ず疎漏なること共に覺申候

菊池寂阿が受領

寂阿入道父子が受領の事文書ども數々御引證ありてくはしく御敎示を蒙候事感荷にたへ申さず候しかる處老兄にはいかゞ思しめされ候や小拙は寂阿が寄進狀の署名の書やう例にたがひたるやうに見えたる故受領の事までも覺つかなく覺申候菊池肥後守とかく名字官途をさだかにそなへ書たる下にはかならず藤原武時と姓名を開具するが定式にて若入道の後ならんには菊池肥後入道寂阿と受領したる人はかく守の字畧さて入道の下にはたゞちに法名をかきまた打とけたる事には名字法名をも畧さてたゞ肥後入道とばかりに書たる例共おほかりされどもそれは大かたは宛ヲ所なきをりの書式にて件の寄進狀のごとき宛所あるをりには名字官途入道等の文字をはみなはぶきてたゞ沙彌寂阿とやうにばかりかくこと是また當時の定式なるをまたそれを略してはたゞ沙彌とばかり書て判形を加へおくこと是また通例の書式にてありしなりまた上の人より入道したる人の事を他へ沙

汰せられたる物にはたとへは前摸守高時法師結城上野ノ助宗廣法師など書て法名をはかゝざる例もあれども是は上の人よりかゝれたるにてみづから其名をしるしたるにはあらざれは他の署名のうへには例とすべきことにはあらずしかるに件の寄進狀にはさる書式の定例共にたがひて名字官途を開具したる下にただちに法名を書つゝけたるはいかにもいぶかしき書ざまなるうへにかゝる寄進狀などのたぐひにはかならず其年紀月日をばたしかにしるしおくべきことなるを年紀はさらにて月日だにしるさゞるといふもまたあやしむべきことには候はずやこれに依て猶つら〳〵考ふるに件の寄進狀の文體はさらに後の人の僞作したるものゝも見えざれば此狀とし月をふるまゝにいつしか狀尾の處きれそこねて年月も署名もさだかならぬやうになりたりしを後に當寺の物に心えぬ法師等が署名の書式をはしらずして大楪那の名字なればかくことゝ〳〵しく書きたて、狀尾の損所ばかりを補おきたるさかしらごとの今までものこりかたるにて可有之覺申候其上寂阿入道は始の二郎のまゝにて入道してつひ受領などせしことはなかりしには

あらぬにや太平記にも菊池入道寂阿入道など見えたる斗にて一つも肥後入道と書たることは見えず又武朝が申狀にも曾祖武時入道寂阿と見えたるばかりにて是にも肥後人道とは書出さゞれば菊池家にて受領したるは武重が始にてそれより以前は受領はさらにて官途をかけたる人も稀なりしやうに覺ゆるなり系圖には隆直武房を肥後守と見えたれども此外にはまたさる事をさ〳〵見およばざるうへに隆直は治承に軍をおこして源氏のみかたをしたりしかば平家の家人筑後守貞能にいたく責られて力およばずしばらく平家に從ひたるよし鎌倉に申ことわりて一谷段の浦などの合戰には東國勢に向ひて軍をもしたりしが平家ほろびて後鎌倉にまゐりたりしを罪ゆるされ所領をも返し付られなどしてやう〳〵御家人にはめしくはへられし也されは隆直は鎌倉殿にはさしも功なかりし人なりしかば受領などゞべきよしもなくまた鎌倉三代の間は受領は只御一族の人のみに許されて御家人の受領はかなはざりしことなれば隆直が肥後守になりしといふは後に其家にての矯飾のしはざなるべしまた武房が事は文永弘安の蒙古合戰に高名したる

人にて其時の勳賞には少貳覺惠が子息三郎景資が豐前守になされたる例もあれば武房も同時に肥後守に任せられたらんもしられねども景資は鎭西奉行の嫡子にて弘安の頃ははやく左衞門尉になりて有しかばそれより直に受領したるはことわりなれども武房が家は九國にては宗々しき大名にてはありしかども當時の勢にては少貳は代々鎭西の奉行にて菊池は一郷一郡の地頭なれば比擬すべき家にはあらざりしうへに蒙古合戰の頃までは猶菊池の二郎と名のりて衞府の尉にだにならずしてありしかば（其時當國にては竹崎五郎季長蒙古合戰の功に依て海東郷を賜はり右衞尉になされしこと海頭文書に見たり）武房が肥後守もいかゞあり けむまたおぼつかなしされば其子の寂阿入道が肥後守もかた〳〵いかゞとおぼゆればかの寄進狀の署名はいかにも信用なりがたかるにあらずやさはいへ此事もし外にたしかなる御考證も御座候はゞ惜まれず重て御敎示を加へられ候やう仰ぐ所にて候也

年預下司圖師田所等の職掌

年預以下の諸職事は中昔より始まりたることにて大かたは郷庄の吏務に預る職事なれは是等の諸職事をすべて郷司庄司などゝもいひたるにやさればいづれも領家々々より其家人に仰せて勤じさせたる職事にて朝廷より設置れて官司にてはあらざる故令式などの如き官務職掌をつばらにしるしたる物もなければいかなる職掌共なりしにや後よりはさらに考索するによしなしされども或は其名目の文字につきあるは其事の物に見えたるをたどりて引わはせ考へたらんにはくはしくこそわきまへがたからめ其大かたばかりはまた推知せられまじき事にもあらずかしされば まづ年預といふは件の色々（クサ〴〵）の中にて是ばかりは鄕庄の職事に限りたる物にはあらで院の廳の職事の中にも年預といふこと見えまたそれにならひて攝關以下公卿の家の政所公文所などいふ處にも年預といふ物ありまた建久年中の內藏寮年預が申狀といふこと何かにけてたしかに見たることありさらば後には諸寮諸司にも大かた各年預職を置れしと見えたり其外にもまた官寺などの政所所レ謂延曆寺ノ衞弘福寺ノ衞などいふ所々にも年預の僧ありて是を西土にては直歲といへり直は字書に當也と見えて直歲とは其處の年中の事務を專當する意にて年預といふはそれをやはらげたるにて年預の預は御書所預御厨子所預などの

預と同ごゝろにて一年の事務を預るといふことなれば今の年番年行事などいふに同じく其處の年中の雜事をすべあづかりたる職事なり（和訓栞に主帥四員一監寺二維那三典坐四直歲と見へたれば年預はこゝにても其本は寺院の政所の職事なりしが後にかく他の官府などにもうつり來たれるなるべし）さるをまた郡家にもならひて鄉庄の公文所にも年預職を置たるにて託摩文書などに見へたるはすなはち鄉庄の公文所の年預職をいひたるなり次に下司といふは鄉司庄司などの中にて上司中司（中司の名阿曾文書に見えたり）下司と差等を立ていひたる下司にて一職を限りていひたる職掌にはあらず鄉司庄司の中には政所年預田所稅所圖師公文御藏などいふ色々の諸職共ありて其中にては政所といふは一所の管領にて上司ともいふべき物なれども其餘の諸職はいづれを中司いづれを下司と定たるにや其差等をつばらにしるしたる物なければくわしきことはわきまへがたし次に圖師といふは田畠の廣狹長短はさらにてすべて其管内の村里山林屋敷地など迄もくはしく畫圖にてしたゝむるを掌る職事なり其の畫圖にしたるを差圖といへる由は右の村里山林田畠などの方所廣狹を其圖を開て人にさししめすための物なる故差圖とはいひたるなりされば差の字をかくは當らぬことなれども昔より指圖とはかゝずして大かたは差のじのみをかき來たれりしかるにまた此差圖といふことを活らかせて事の指揮するやうの事を差圖するといふ常のことなるをまた其職稱のうへに轉（ウツ）して圖師申すといひたると庭訓往來に見えたるはめづらし次に田所といふは管内の田代の町段丈歩の員數經堺を檢按する事をつかさどるものにて東鑑などに大田文（オホヤケブミ）といふ物の見えたるは此田所共が其庄の田代の員數經堺をくはしく注したる文書を田文といひ其圖中の田文どもを國衙に取あつめて一つに合せて大帳冊としたるを大田文とはいへるなるべし豐後國の惣田代の員數をしるしたる物を圖田帳といへるがあるは件の大田文のたぐひとは見へたれども圖田帳は鄉村名田等の員數と其所々の領家地頭などの交名しるしたるばかりにてさしてくはしからぬ物なればいはゆる大田文とは同物にてはあるべからず大田文はいかなるさまの物なりしやさだかならされどもおもふに圖田帳のごとくたゞ田地町段の數ばかりをしるせるにはあらで田地の方所四至はさらにて土地の肥瘠稅則の多少までもくはしく載せたる物

なるべく覺ゆるなり其うへ圖田帳といへる題目は後の人の名づけたる物と見えて其中に出せる沙彌道忍が狀には注進狀一卷と見え又但此狀者無二四度計一候追而進上之節可レ被二取替一候などあるにて當時此帳を圖田帳とはいはざりしことしるかりされども圖田帳といふも古き名目ぬきて聞えたれば當時今の圖田帳といふ物の外にかの圖帥の差圖と田所の田文とを引合せて一卷としたるを圖田帳と名づけたるがありしにはあらぬにやさらばまた今の見圖帳といふも此圖田帳ようつり來たれる名目と見えたるを見圖帳は御圖帳と書べし昔民部省に圖帳といふ物ありしを下よりはかしづきて御圖帳といひたるが後までものこりたるなりといふ説ありてそれもよし有て聞ゆれども餘りに古代に上り過たる考なれば見圖帳と名付たるよしは猶さることにはあるべからずさて右の年預以下の色々の外に稅所公文御藏などいふものあり稅所は朝官の主稅寮と同じく租稅收納の事を沙汰し御藏は庄内に在る領家の御藏の出納の事を預たる職事共なりしかるに御藏といふは庄内の藏預のみをいふにはあらず院宮をはじめ公卿達の京にある倉庫どもの預もみな御藏とばかりいひたるなり公文は公文所の書吏にて國司の目史生郡司の主帳などいへる類なり公文とはすべて公事にかゝりたる文書のみにて其本は詔勅冊令官符省牒のたぐひをすべて公文といふより轉じてすべて官府にある簿帳のたぐひをも皆公文といへり民部式に凡諸國大帳朝集稅帳公文從レ官下ル之後云々また正稅帳大帳出擧帳田租帳調庸帳などをすべて雜公文といひたるも見えたり諸家の公文所は其家の領地の所務をさたする所にて其事にかゝりたる文書帳簿を取扱ふ故公文所とはいふなり昔は御藏公文などにはおほく僧徒を補せしことありて後白河院の御時西光西景などいへる法師を御藏の預となされしこと源平盛衰記に見えまた廣福寺文書の承元二年の公文所の下文に見へたる直人等が連署の中に惣公文權公文など見えたる公文共も皆僧なり東鑑曆仁二年九月十一日の條に諸國地頭等以二山僧商人借上一雖レ補二代官一事一切被レ停云々と見えたれども久しき習風なりしかば後までも猶其風のこりて室町殿の時までも御藏の預は正實坊定泉坊などいひて大かた僧形ばかりにて有し故御藏法師ともいひ

しなり庄官にも御廐といふ職事ありしことは塔福寺文書に御廐公文と並べいひたること見えたり

郷荘の沿革

和名抄に載たる郷名どもいつの頃より廃れたりと申こと一向に覺悟つかまつらず候へともし例の強て申候はゝ諸國に新立の荘園おほくなりたるを停止せられんがため名田の制をおこされし頃後三條院の御代なり此事別にくはしき考あれどもはやく拙著の郡解の中書出で置たる上に事長くなればこゝにはぶきつ　などより郷村のすがたも昔とは一變し郷名どもふやう〳〵にうつり變りたる〳〵覺申候へは白河鳥羽兩帝の御代の間になど大かたは變革したるにても可有之哉小拙が淺聞寡見にてはいかにともたしかには考定出來かね申候さて肥後國に今まで郷庄の名の殘り居候は鎌倉頃の物に見えたるかぎりはみな當時のまゝにてかはりたる名も聞えざれば其名の物に見えざる郷庄どもゝ大かた鎌倉頃の名のまゝにて可有之覺申候されども郡郷の名は朝制に出たるもの故一定の後容易には變革無之事に候へども庄の名は領主の有無に從て時々は變革あることに候郡にて申候はゝ鎌倉以後の物に見えたる入代庄　東鑑阿蘇文書　山本庄　東鑑託摩庄　託摩文書　など今は皆

本の郡となりて庄の名はのこらず郷にて申候はゝ前書にもいひたるごとく津守郷を保とゝ庄ともいひ伊倉の保を庄ともいひ大野郷を別府とも庄ともいひ豊田郷を庄ともいひたるなど鎌倉以後にも庄の名はかく時々にかはりたれば今までのこりたる郷庄どもの名もいつ頃のまゝにて殘りたるにか其かはりたる際はとてもさだかならぬにて可有之覺申候また肥後の諸郡の中にて他領天草に屬したるはいまだ考へ不申候へども合志山本菊池山鹿の四郡はいかなるよしにか郷庄の名傳はらず庄は人の所領の地なればたまたま庄のたゝざる郡もあるべけれども郷は本國のわかれて郡となり郡のわかれて郷となりたる物なれば郷のなき郡とてはあるべくもあらずしかるに件の四郡に郷庄の名の見えざるは始よりなかりしにはあらで後に傳へ失ひたることとしるかりさてかく傳へうしなひたるも近頃の事にはあらではやく先封加藤家の前より傳へうしなひて有しと見えて菊池郡川原手永の天正十七年慶長二年元和四年などの見圖帳　件の見圖帳いづれも卷尾に郡奉行の名字をしるして天正なるには平井十兵衛久治慶長なるには蟹江五郎兵衛田寺平太夫庄屋芝藩元和なるには佐々備前と見えて奉行人の名字或は實名を略き或は二人或は一人にてかく公文の書式詳略定まらず官員の多少增減時に變じたるは郡府更革の際に當り

て諸風いまだ一定の制度立ざりし故なり　を見たることありしに今の川原手永のことをたゞ川原村とばかり見えて郷庄の名はさらにて組とも手永とも見へざれば中山が井田衛義に手永のことを前代は組といひたるよし見えたるは貴説のごとくおぼつかなきことにて前代は組手永などいふべき所をば郷庄の名の殘たる郡共は猶其郷庄の名を用ひ郷庄の名を傳へ失ひたる郡共ば菊池郡の川原深川などのごとく大庄屋の居たる村の名をそれが所管の大名にして一郡をわかち治られしと見えたりされども天草郡は今も手永のことを組といひて大矢野組柄本組などいへるは天草は前代の頃は小西家の領分なりしかば其頃より組といひしが今に其名の殘るにはあらぬにや此外にも四國九國の間は手永といふは稀にて大かたは皆組とばかりいふよしを聞けり組といふよしは多少の村數をむすび合せてその一組としたるにて是は軍陣の隊伍を組といふよりうつりたることゝ聞えたれば大かた室町の季世などより起こりたる名目なるべく思はるゝなりしかれば郡の組の名も肥後國こそ天草一郡に限りたれ餘國には組といふが多かるを思ふに前代以前よりはやく組の名は

ありつと見えたれば井田衛義の先代と加藤家をさしていひたるはたかひたれども廣く餘國にかけて前代の頃は手永のことを組といひたるといはんには中山が説も無下に據所もなき妄説ともいひがたかるべきにやさて肥後の郡々に手永といふ物も立られたるよしは御先封豊前國ははやくより肥後の郷庄のたぐひを手永といひたる故肥後に御移封の後もなほ御先封の舊制に依らせ給ひて御分國の諸郡にも手永の名をわかちたてられしと聞およべりしかるに此手永といふよしは是も室町家の頃殿中などにて倍膳の事ある時其役送のことを手永といひて御手永某また某御手永に參るなどいひたること其頃の物に見えたりこれは物を次第に取續たるが手の遠ながくとどきたる意にて手永とはいひたるにて今俗に手つだひといふも同意なるべし後に郷庄のたぐひを手永と云ふも此倍膳の役送よりうつりたることにて郡奉行の下に大庄屋小庄屋などあるを郡奉行の手ながとしたる意にていひ出したることなるを後にはまたうつりて大庄屋の手のおよぶかぎりを定めて一手永といふことになりたるなりしかれば是も件の組とおなじく室町の季

世よりおこりたることゝ見えたれば手永といふも豐前斗にはあらで餘國にも猶いくらも可有之と思はれ申候されども諸國おしなべて組手永といふにはあらで國によりては昔のまゝなは郷庄の名にてあるもおほかるにや若狹の昔今富庄いつきの庄などいひし所今は其名も傳へうしなひていづこなりしやさだかならぬほどになりたれども件の兩庄の跡ならんとおぼしき所をば今は國富庄（カタヘく）にとめ阿賀、庄などいふより彼國人のかきたる物に見えたればこゝの組手永など云所を若狹わたりにては今何も庄くれの庄といひ來れると見え申候

託摩郡本庄に坐（ヰ）す代繼神社

託摩の代繼神社こと紀貫之が靈を祭たるよし社說に見えたれどもこれは蒙昧無稽の說にて可有之とあるはいかにもさることにて代繼の社說のみならで寺社の緣記などいふ物大かたは附會杜撰（イヅレニモダウズ）の妄說どもにて考證のたよりともなるべきはいと〳〵稀なることにて可有之覺申候さてこゝの代繼神社は山城の久我の代繼神社をうつし祭たるにはあらぬにやとの御考は小子も御敎示にて初めて心づきげにもさることにてぞあらんとは思ひなりて候久我の代繼神社は式の神名帳には乙訓郡に坐す神社ともの中にたゞ久我神社とばかり見えたるを類聚國史に貞觀八年七月十四日丙戌授二山城國興我萬代繼ノ神一從五位下一（コカヨロヅ）と見えて祭神は例のさだかならぬやうなれ共萬代繼神といふはすなはち其祭られ給ふ神の御名のごと聞えたれば書記古事記などにはさる御名の神は見えざれども二書にもれたる神々もおほかればさる御名の神もおはせしなるべしおのれこれに依てつら〳〵おもふにすべて物の名などに代繼といふことのあらは其代繼の遠久（トホヒサ）なるをたゞへいひたる詞にて代つぎ物語代繼の翁などいへるみなその心もて名つけたるなり殊によろづ代繼といふはいよ〳〵遠ひさなることをたゞへたる詞なれば此神は武内の大臣（オホオミ）を祭れるにはあらぬにや此大臣はみづからも世の長（ナカ）の人とさへ歌にまで詠たまへるいみじき長いきにておはせしかば此大臣の御名をしかたゞへまうして祭れるなるべしもしはたしてしからんにはこゝの代繼神社も件の久我の代繼神社をうつしまつれる物なるべくおもふことあり阿曾文書建久六年の國宣在廳等か連署の中に權介紀朝

臣といふ名見えたり在廳は在國司ともいひて始國の介以下になりて下りたる人解任の後もなほ其國にとゞまりゐて其子孫も代々前官に補せられて常に國廳に出て吏務を執行してあることなりされば件の紀の在廳も當時新たに當國の介に任せられて京より下りたる人にはあらでは（ハ）やく當國の介なりし人の子孫にて當時相傳の在國ノ司に補せられてありし人なるべし此紀氏の家かく代々當國の在廳してありし故武内の大臣は紀氏の始祖にておはせしかば久我に祭られたまへる萬代繼神を當國にうつして紀の在廳が家の氏神として祭たるを後になりて件の在廳が家も子孫なくして家絕たるかまた他國に移りすみなどしたる故たゞ此神社ばかり其跡にのこりて紀氏の祖神を祭たるといふことのみわづかにいひ傳へたりしが紀貫之は高名の歌人にて誰しらぬものもなきほどなれば世の人紀氏とだにいへば貫之のことと心えたる故事の本をばたづねずして紀貫之を祭れるならんといひたるが世にひろごり傳はりたるを此社につきたる田舍（ヰナカ）宣命（センミヤウ）共が物に心えずして其傳說を打聞たるまゝに社記にもしか書載たるなるべしさはいへ此考はもとより例のしひごとなればよしとおもひて書出せるにはあらずたゞ〳〵御敎示によりて思ひつきたることなればかくてはいかゞあらんと聞えまゐらするにこそさて南郷なる乙姫神社を近き頃惟馨の社務そこの扁額に奈我神社とかゝれたるよし此事は今御敎示によりて始て承知したる程の事に候へはもとよりいかにもと覺悟可有之やうも無御座候すべて古き神社どもの名は大かたはそこの地名を負せまひらせたるがおほけれは昔は此社のあたりを奈我といひたることにてもありしにや社務はかならず家の舊記などにたしかにさるべき事の見えたるによりてこそ物せられたるべけれさりなから此社務のかゝれし物とて家のことなど考へたるを一二冊見たりしにいづれにも杜撰の說ども所々見えしらがひたれば件の奈我神社もいかゞあらんおぼつかなくなん

玉名郡少領日置氏の誌版

文政二年の二月玉名郡うけ村の鷲原より塡出したる郡の少領日置氏の誌版は先年玉名の山べたに小森田伊内といふ老人のありしが件の誌版の考を出置たるとて見せし中に誌版の圖などもくはしく出したるに

て其かたばかりは見申候どもいまだ異物を見たることは無之候此老人が考にはくちに故高本敎授の考をいだして此老人も椙亭と號してすこしは讀書もしたる者なりし故與にはおのれが考の敎授の說と同じからぬよしどもを附錄したる物なり此二老の考にて一わたりは聞えたるやうなれ共椙亭が考は强て引わはせたる事共おほくして都ては聞えがたきやうに說なしたる處も見えたればかくわしと知つゝはめてのみやまんは其人にむかひてはいとまめならぬわざなれば其わしとおもふふしぐ〳〵をそこら引直しておどろかし聞えんと思ひたちしかども事にまぎれてとかくせし間に椙亭にはかに病つきて程なく身まかりぬと聞しかばいとほねならずくちをしきことに思ひしかどもいかゞはせん其後はかたきなければ心ゆりたるまゝにそれとなく打すてゝわすれたるやうにてさし置つるに近き頃横田の川別が前に聞たることや有けむそれ見せよとて借におこせたりし程にゆるしやりて見せたりしかば川別もまたおのれが新たに考得たる事どもを書つゞりて椙亭が考のしりにくさり付てかへしたりきされば此考どもを御一覽あらんには始

件の誌版を堀出せし次第もさだかにまた誌版の文字も大かたは御了解もあるべきかと心づきし故件の三考を其まゝ一つに併さて賢覽に供することに候然るに川別が考は人のあとより物したることなればまさりてくはしきには論なけれども打かへしてよく〳〵見れば猶まだしくおぼつかなきこともまじりたるがいかにも口をしくおぼえしまゝに其よしをいひやりて今一たび考へなほさせんと心がまへはしたりしかどもおもひかけず川別もまたとみに世をさりしかばつひに其あらましもいたずらになりしほとにせんすべなくて今まではもだし罷在候處に御垂問に預り候て今さら往事をおもひ出し候故今は要なき事ながら始よりの次第をかくかいつまみて聞えまゐらする事に候此うへにはいかにうるさくも思しめさるへく候へどもさきに川別にいひやらんと稱へたりしことゞもを思ひ出すまゝに書つゞりて御垂問の責を塞がんとするなり川別が權擬の考に續紀に見えたる諸國の郡司等か稻錢鐵材などの物を獻じたる功を賞せられていづれも比としく從下の五位を授られ少領なるをは大領に進められたる事を納レ錢ヲ買レ爵ノ令のしわざ

ぞと心えたるより權擬といふもさるたぐひの事にて是はたゞの人より稻錢などの物を獻じて官爵を望みまうしたる故位も外位の少初位下を授られ官も少領の正官には任せられすして權擬とは字のごとくかりに少領になぞらへて員外の官に任せられたるを權擬とはいふぞと解したるは今こゝにて富商等が錢物を官に納れて其成功を募まうすを士席格知行取などいふものになさるゝ事なるを續紀をあしく讀て昔よりさる事もありしやうにおもひなりと權擬といふことを今の格列などいふ物と同しことのやうに心えたがひたるにて權擬とはさるむつかしくあらぬ事まで引出していふべきことにはあらずこれは後にいふ權官のことなれば擬の字を略してたゞ權少領といはんも權擬といふに其心はかはりたることなしされども古き物にはおほく擬少領擬大領とばかり見えて權擬といひたるはをさ〳〵見おとばずしかるに出雲風土記秋鹿郡の郡司等か連署の中に外從八位下權任少領蝮部臣と見えたる權任少領はすなはち件の權擬少領とまたく同書さまにてたゞ擬の字を任のじに書かへたるばかりなれば當時は權任とも權擬ともたがひに

字書に權は暫也擬は啙也と見えて其義おなじからざるやうなれども物を前におきて後には其物にかばらんと待心ある故いひもて行ば同こゝろにおつるなりそれ故權少領を擬少領ともいふべく擬少領を權少領ともいふべしされば權擬少領といふはまた只權少領擬少領とばかりいはんも同こゝろとなるなり權任といふはそれとはおなじからで任の字には暫淂の義なければ權少領のことを任少領とはいはれざるなり是にて權任と權擬とはよく似かよひたるやうにて其心は同しからざるを悟るべし

かよはして書たるなるべし また內外官と外官とは內外官と同ことにて京官を內官とし自餘を外官とすること故內外位もまたそれに準じて京官に授らるゝを內位といひ外官に授らるゝを外位といひたるにて姓氏の尊卑に依て內外の差等を定められたるにはあらずされども外位は五位以下に限りたることにて四位以上には外位を設けられることなしさるは四位以上には太宰帥より外には外官といふものなく府官は大武以下國司は大國ノ守以下外官はすべて五位以下をもて叙せらるればなりされども外位叙授の法は內外官の內外一定して混ずべ

からざるがごときにはあらずたとへば大國守は相當従五位上なれども最初まづ外位の従五位に叙せられて後に年勞に依ては外官ながらも内位の従五位に轉叙せらるゝなりさて其後功勞などに依て正五位に進めらるゝをりは其まゝにて内位には叙せられずまた本の外位に引もどして外正五位を授らるゝことなり續紀光仁紀に天應元年九月前年（寶龜十一年）征夷の勞を賞せられて正六位上阿部ノ臣墨繩に外従五位下勳五等を授けられしこと見えたり件の墨繩は勳績の勞を賞せられたるすら京官の人にてあらざりし故かく内位の正六位よりまた本の外位に立かへりて従下の五位に進叙せられたるなり是にて當時外位叙授の法は常例の叙位とは其格おなじからざりしことを見るべし選叙令の凡張内資人等云々若任二聽事一者改レ入二内位一とある義解に其内位ノ任スル二外職事一者也亦即改レ叙二外位一也と見えたるもすなはち上件の類例をいへるなりまた外位は其本は外官のために設られたる位階なれども位階は無官の人にも授らるゝ事にて是所謂散位なりもし官なき時はまた内外のいふべきものなければ散位には内外の差別とては有まじきやうなれども散位の中にても官を解たる人は无官になりても猶前の位をもちたる故其位階は前官の内外に依て内位とも外位とも定めらるゝこと也さて本より无官なる人に位階ばかりを授らるゝことあるはいはゆる蔭位にてこは本よりの无官なればいよ〳〵内外の差別とては有まじきやうなれども有官の人すら外官は内位に叙せらるゝことなければまして无官の人を内位に叙せらるべきいはれなき故蔭位はすべて京官の子とてもみな外位をもて叙せらるゝ定めなりされども京官の五位以上の數代京官に任せられたる人の子孫は蔭位を内位もて叙せらるゝ事あり川別が引たる三代格神龜五年式部省の奏に五位以上ノ子孫累世之冠蓋云々即叙二内位一自餘叙二外位一と見えたるはすなはち其事を定めらるゝ始なりしかるに江次第朝野群載などに姓氏の高下に依て内外位の差等あるやうにいへるは今京になりても中昔以後のさだめにて奈良に近き頃まではさる例ありしことをさ〳〵見おほばず中昔よりは藤氏ます〳〵類ひろくさかえ給ひし故朝官は大かた藤氏の人ばかりになりて其氏人は外官に補せられたるも位階はかならず内位に叙せらるゝ

ことになりたるより昔の内外位の制は廢れたれども中昔まではさすがに其かたばかりはのこりて源氏藤氏などを貴姓（清原菅原大江平氏などいふ氏々も卑姓といふにはあらされども今はたゞ其おほきに就て源氏藤氏はかりをいふなり）とし自餘の庶諸をばすべて卑姓としてそれに内外位の差等を引あはせたる故つひに内外の名義までも取失ひたるなりさて内給の官には大かたは國司の二分以上を給ふことなれば外位に叙するは定例のことなるを江次第に諸宮給ハ先ッ叙二外位一後日依レ秩ニ叙二内位一自餘ハ依レ姓ニ叙二内外位一云々と見えたれば當時内給の外は外官とてもすべて内位を授られしことしるかりされば内給の叙位は藤氏源氏などの貴姓とても始はかならず外階に叙せらるゝよしは内給の官儲は正しき朝除の官儲とは同じからで私家の詮擬に出たることなれば公官はかけながら私家の家（ケ）礼（ライ）ニ准（ナゾラヘ）家人なる故卑姓のごとくしなをおとしてまづ一旦は外位に叙せらるゝ事にてありし也それもやゝ後になりては事のさまうらうへになりて卑姓の外官までも内位の人はかならず内位に叙せらるゝことになりしと見えて朝野群載嘉承二年の大内記藤原敦光が勘文に下姓之雜除ニ官給一之外叙二外階一者ノ例云云と見えたれども此事さへ後には行はれずしてつひに位階のうへにて内外といふことは跡かたもなく絶はてにたるなりまた少領の相當の位階の事は選叙令に外従八位下（ゲノ）叙之ト見えたれども日置氏はいまだ權任なりし故まづ少初位下を授られたるなりしかるに前に引たる出雲風土記の秋鹿郡の少領蝮部臣は是も當時權任の少領なりしか位階はすでに相當の従八位下になりてありたるは年勞にて進みたるにて日置が少初位は初任のをりの叙位なるべし此外にも出雲風土記に見えたる郡司共の中には大少領の六位なるはさらにて主政主帳までも六位になりたるも見えまた主帳にはいまだ无位なるも見えたるをおもふに大少領の相當は外従八位の上下なれども年勞などによりては内外の六位までも進みしなるべし主政主帳の相當の事は官位令選叙令などにも見えざれども大少領の相當より推考するに外大初位の上下なるべししかるにそれが无位なるもあるは人によりて新任の間は无位にてもありしと見ゆれば少領の新任のしかも權擬なるは外少初位に叙せらるゝも相當の事と見えたりまた主政主帳などの六位になるは外階の六位までの

にて大少領にはまた一等を降して叙せられしなるべしまた日置郡公とあるを姓氏錄の日置部を引て郡の字を部の字の誤寫とし公の字をそのかばねとしたるも心えがたきことにて日置部は姓氏錄に尸をしるさゞれば本より尸なき氏にてありしなるべく日置の公尸なるは大山守命の後なる日置朝臣初は公かばねなりしと見えて古事記の大山守命の後のことをいひたる所に弊岐君と見えたれども弊岐部公とは見えざるうへにもじのやうも諸版なるは正しく郡の字と見えて部の字とは見えざるをやしかのみならず公文に官人の連署するには官位氏姓ばかりをしるして名をはぶきてかゝざるは古來よりの通例なれども誌版はさる事例には同からで後の世までもたしかに何がしが墓所なることをしらせんがために物することなればいかにもたしかに其姓名まで開具して殘し置べき事ならずやされば猶おもふに件の郡公の二字はかならず日置氏の名なるにはたがふべからず郡公の二字は唐の制に九等の官爵ある中に郡公あれども從二品封戸二千戸などいふ尊爵なればそれを取て名とすべきにもあらず書紀の垂仁紀に一書を引て壬那の都怒我阿羅新等が事をいひたる處に郡公等曰云々と見えて郡公をむ良都加左と訓ませたりげにも一書に見えたる事ざま村長などいふ程の者と見え唐制の郡公のごとき貴人とは聞えずしかれば日置氏も大かた垂仁紀の郡公を取て名としたるなるべしされども垂仁紀の訓のまゝにむらづかさと呼ばんは古代とてもいかがに覺ゆれば神代紀に天邑君をあめのむらぎみと訓ませたるがごとく文字のまゝむらぎみと名のりしなるべしまた件の郡公が氏の日置の字を當時はいかゞとなへけん古事紀には日置君のことをはやく弊岐公とかきたるが後までも人の名字なるも地名なるも大かた弊支とばかりいふことなれば郡公が氏のもかならず弊支と稱へたるなるべしされども和名抄に載たる諸國の郷名おほかる日置共には大かた比於木とばかり見えて唯一所國郡はおぼえざれども比木とかきたるも見えたれども弊支とばかりかきたるは見えずしかし其中にも訓の闕たるもまじりたれば弊支とかきたるが有しもしるべからずこれに依て猶おもふに出雲風土記に神門ノ郡置郷の事を志紀島ノ宮ニ御宇ス天皇之御世ニ置ノ伴部等ヲ所レ遣來宿停ヲ而爲レ政ヲ之

所故ニ云ニ置部ニと見えまた當時當國の郡司の中に大領置部ノ臣布禰また佐官鹿などいふ人見えたるも件の置郷にありし置伴部等が後にてぞ有けんしかるに件の置郷を和名抄には日置と見えたりこは和名抄の誤ならんかともおもひしかども民部式にも凡出雲國ノ日置ノ田ハ定二二町一といふことも見えまた出雲風土記舍人郷の下に志貴島ノ宮ノ天皇之御世ニ倉ノ舍人等之祖日置ノ臣志毘大舍人供奉之即是志毘之所ノ居故云ニ舍人一と見たれば置といふも日置といふも其もとは同ことにて置部臣と日置臣とは同族なりつらんとおもふなりさて置といひ日置といふはいかなるよしともさだかならざれども垂仁紀皇子五十瓊敷命に石上の神宮の神寶を主しめたまへる段に一書を引て此命に十箇品部を賜はりしことをいへる其十箇品の伴部の中にも日置部の名見えたれば昔はさる名の作法を行ふことありてそれを行ふものを置部とも日置部ともいひ其伴部の居たる處を置の郷日置の郷などいひたりしが延喜の頃までは猶出雲國には其作法のこりて行はれたりしと見えて前に引たるごとく出雲國には其料の田代二町まで定置れしなりされば日置といふわさは敏達紀に日祀部を置れしこと見え氏にも日奉部ありて此日置といふによく似よりたる名なれば置日置などいふ作法も祭祀に屬したる事にてはなかりしにやもしはたしてしかゝらんには日置のもじは日祀日奉などをもじのまゝひまつりと訓ムことく日置も和名抄の訓のごとく初の程は比於木とぞいひたりけんそれをまた弊支ともいふは例の後になりて口とくいはんとて比於木をつゞめて弊支とも比木ともいひたるなるべししかるを本居宣長が說には日置は古事記にはやく弊支とあれば是ぞ正しきさとなへなるべく和名に比於木とあるは後の人の文字につきてのひが訓なるべしといへれども是は宣長が日頃古事記を信仰するあまりに其すきたるかたより引れてかゝはりなつみたる强ごとなるをやされば日置といふ地名はかく諸國にもいくらもありて氏にも姓氏錄に日置ノ朝臣日置部日置ノ造出雲風土記に置部ノ臣日置ノ臣などくさ〴〵あるをおもへば玉名の日置氏日置郷はまた是らの外の日置なるべくおもふなりしかるに今は玉名郡の中には日置といふ所なくして山鹿郡の中に日置村ありて玉名の分田村にはさかひた

れども江田うけなどゝは遠く隔りたれば件の日置氏の誌版の在所もとおぼつかなきやうに思しめされ候御氣色に候へども今臺村の玉名になくして山鹿にあるは前には玉名にありしが後にちかきよりまぎれて隣郡に入たるにて郷村などの上にはさる例は餘國にもおはかる中に近くはこゝの小河海東などの地は今は益城の下郡に屬したれども昔は八代郡に屬せしと見えて阿蘇文書甲佐の社領の事につきたる建久六年の在廳等が□巻帖に八代ノ北ノ郷南小川北小川また南小川の下に加二海頭幷二國領ノ薗四箇所一定一と見えたり其うへ昔の日置といふは郷名なれば昔は今のごとく狹小の地にてはなかりしかば廣く江田うけわたりまでかけて日置の郷なりしもしるべからずしかれは日置氏の誌版の在所もまたさしておぼつかなきことにもあるまじきにや（因にいふ津守庄の文字ある金口を堀出したるは託麻の東郷河原村の支村の中の岸がけなくやすとて堀出したるよし件の金口は鳥銅にて造て形なども古めかしく裏に臨水の年號と津守庄といふ文字を彫つけたるなりどそこのあたり近き小谷村に高水それがしといふ醫生が物語にてくはしく聞しかども久しきあとの事にて其堀出せし村の名はわすれぬ件の醫生にたづね聞てまうすべしさて誌版の兩傍にある文字は書ざまあまりつたなくして讀がたく解がたきやうなれども其いをえてたとる〳〵讀まんにはまた絶て聞えがたきことも覺へざるをや開白は啓白といふも同こゝろにて事の次第をさだかにまうし述ることなる故事をいふの初にかく開白と題したるにて川別が淨水寺の南大門の古碑の初に開白と題したるを引たるはよき證左にてありしなり件の古碑は延暦中の物なれば日置氏の誌版と大かたは同時はどのことにて此頃はかゝるたぐひの物にはしか題するが通例のことにてもありしにや啓白といふことは物にもおはく見えたる文字なれども開白といふは物にはをさ〳〵見およばぬ文字にていとめづらしこゝにてははやくより寺院の大法會の儀式に開白といふこと有て時の導師決會の初に佛前にむかひて其日法會を執行する事のよしをつぶさに佛にまうすことなり物に法會の次第など書たる所に開白（某僧名）など見えたり是より外にはまた稀にも見およばぬ文字なれば昔よりたゞ佛家にのみ用ひ來れるもじにて通俗には好みては用ひざりしにもあるべし畿内七道を定られし事は高敎授の考難なくよろしく覺ゆるなり楊亭が淳和天皇の天長五年に定められしといひたるは世にある正史實錄にはかつて見えざることなるを楊亭は何に據りていひたるに

やおもふに通俗の年代記などやうの物にしか見えたるをふかくも考へず筆にまかせたるひが事なるべしまた川別が崇峻紀を引ていひたるは正史を引證したることなれば楊亭が無稽の説とは同からざれども天武紀より以前に東海東山北陸など七道の名どもの見えたるはみな後の名を前に廻してかゝれたるにて書紀の文にはさる例いくらも見えたりまた太宰府の事を皇極紀を引て此御代より以前に定られしと見ゆるも前の七道の考と同心えたがひにて太宰府の名と文武帝の大寶の令を出されし頃に定められたる名にてそれより前には筑紫惣領所といひ其長官後に帥といひたるを筑紫惣領といひし也（此事別にくはしき考あれども事長ければはぶきつ）しかれば文武紀以前に太宰府の名の見えたるは是も後の名をまはして文なされたるなり又治地の考は高敎授又の字を之の字として太宰府之治地なり太宰府の管内なるをいふといはれしはげにさる事にて令に西海道九國の事をいふには大かた太宰府ノ部内とばかりありて國別に其名を出されたることなし此誌版も其例にて肥後國はもとより太宰府の部内なる故治地とはいひたるなり治地は治所といはんも同意なれども西土の文に治所とあるは非官府の所在をさしていふことなれども此治地は官府の所在をいひたるにはあらず其部内をすべて治地といひたるにて又の字と見ゆるはうつなく之の字の上の一點消うせて見えざる也しからざれば太宰府にて句絶になりて下の文に續かざるゆゑ前文開白以下太宰府といふまで何のためにいひたることゝも聞えざるをやもし又の字を之の字として讀ときは其文極めて拙澁なれども其意はよく聞えて開白す此葬地は七道の中西海道の太宰府の治地なる高野山なりといふ意なるべししかるを楊亭川別などが考のごとく又の字を字のまゝにして讀まんには全文連結せずして太宰府以上の文字は無用の物となる故つひには何のわけとゝ聞えぬかたに落着するなり其うへ二人ながら治地を葬地のことゝしたるはあまりにをさなきことにて物にをさむると物とをさむるとのけぢめをわきまへずして同ことの樣に心えたがひたる也葬るとをさむるといふは土中にをさむる事にて文字にては埋藏の義也治の字は物ををさむることなれば治棺といふとも治棺槨を略していひたるにて大歛に先だちて棺槨を造作する事なれ

ば治は脩造の義なりしかるを近俗あやまりて空棺の事を治棺といひならはし川別もそれを閑馴てさる事とのみ心えてありし故文字の用格をたづぬるに及ばずしてかゝるわきまへなきことをも書出したる也さりながら件の又の字もし川別等がいふごとくまことに之のヒのそこねたるにはあらざらんにはまたしひてさながらにして讀まれざるにもあらざるべしこはいと後のことなれども地頭の目代々官などいふ者おのれが家人を名代としたるを小目代とも又代官ともいひまた略してはたゞ又代とばかりもいひたることありされば誌版の文も太宰府の又の治地にて肥後國は太宰府の所管の國なればしかいはれまじきことにもあらず又代官といふはいと後の世の俗稱なればそれを引證として奈良比の文字をさだせんはいかにも物遠く似つかはしからずも閒ゆめれども書紀などの古き物に人の異稱別名あるを亦名ヲ曰ヽ某或は又名或は更名などかきたるをすべてまたの名と訓ませたることあり是等の文字ども西土の文にはをさ〳〵見およばぬことなればまたの名といふは本より古きとなへにて當時世の常言なりしを書紀には其まゝに文字にうつしてかくさま〳〵には書いだされし也しかれば又の治地といふことも奈良比の人とて絶ていふまじきことにもあらじかしされどもはかにはさる例もなくあまり殊やうなる書ざまなればなほ之の字として讀たらんぞ聞えやすくおだしかるべきをや

國造の職掌始末

國造の職掌始末などの事御垂問を蒙り候へども是までさしてことさらに考置たることゝいても無之候うへあまり大むかしのことにて候へば職員令などのごときくはしく各官の職掌を載せたる物も無之候故くはしきことは考ふべきよすがも無之候へども其大かたばかりをば例の試にしひて申候はゞ孝徳天皇の御時國造を罷られてみな郡司になされて其代に國司をば置れたることなれば國造の職掌も大かたは國司の事にさまで打かはりたる事もあるまじきにや聖徳太子の十七憲法に國司國造勿ヽ斂ヽ民とかゝせ給へるにていづれも撫民の事をむねとして同やうの職掌なりしことさたかなるべく覚ゆる也されども國造は西土封建の諸侯の如く始封以來世襲の職にてありしかども國司は西土郡縣の制をならひて設置れたることなれば其官司遷轉更替して世襲ならざりしはたがへり其うへ國造は國司とはちがひて始よりかの封建の制をならはれたるにはあらでおのづから事ざまの彼と是とよく似かよひたるといふばかりのことなればくはしく引あはせていはんにはまたおなじからぬ事ともまじりて見えたりそはまづ大昔の國といひしものは封建の制のごとく百里七十里五十里と封域の大小も大かた後の一郡ばかりの地にて小なるは其頃大縣といひしより猶狹小なるもありしうへに國は縣をすべ縣は國に屬したりといふにもあらず國とあがたと並べたて、各其首長を置れたる也神武天皇の御時珍彦(ウヅヒコ)を倭ノ國ノ造劍根(ツルキネ)を葛城ノ國ノ造となされまた弟猾(オトウカシ)を猛田(タケダ)縣主弟磯城(シキ)黒速を磯城ノ縣主と定められしこと神武紀に見えたる是國造縣主などを置れし起源なりしかるに其頃の國といひし葛城國の後に郡となりて葛上葛下といひたるはさらにて倭國といふも後に十五郡を管して一國となされたる大倭國にはあらで仁徳紀の皇后磐之姫命の御歌に青によし奈良をすぎをたで倭をすぎ吾見かはし國はかづらき高宮わぎへのあたりとよませ給へる倭の郷のことにて是は式の神名帳に大和國山邊郡大和ニ坐ス大國魂神(オホクニタマ)社また和名抄に大和國城上郡の郷名を載たる中に大和など見えて後にはかく山邊と城下と二郡の境に跨たる一郷也是にて大昔の國といひし物のさまもしるくまた縣といふも國に屬せるものにてはなかりしともさだかなるべし其後國あがたの事の古史に見えたるは古事記高穴穂ノ宮ノ巻に定ニ大國小國之國造大縣小縣之縣主ヲと書紀の成務紀には國郡ニ置ニ造長一縣邑ニ置ニ稻置ヲと見えて二書の書ざま大かたはおなじ趣のごと聞えたれども書紀なるは例の漢文にて繰飾せられたる故當時の事實とはいたくたがひたることおほしそはまづ國郡といふは孝徳帝以後の制にて當時いまだ郡といふものなかりしのみならずもし郡の字を縣のことにあてゝかゝれたらんにはまた下に縣邑とあれはあがたのことかさなりて聞えがたしまた大昔は國縣の宮司には稻置の外に君別直首縣主などの色々ありしことなるをたゞ稻置のみを擧て書れしもいかなるよしにか心えがたくもしまた漢文のみに依てかゝれんには漢文には州郡ありて國郡なく首長ありて造

長なしじかるにかく倭漢の稱謂を取ませてあやなされし放書さまのいとまぎらばしきのみならず倭漢ともに其實をうしなひてあらぬ事になりゆくをや（成務紀に此朝年の文にも國郡ニ無二君長一縣邑ニ無二首帥一者一焉又國郡ニ立二長ヲ縣邑ニ置二首ヲ一また任二其國郡之首ヲ長一など見え此外にも國郡の字を用ひられしこと舊紀中には猶所々に見えたりこれにつきては總論すべきことおほかれども邪長くくだ〳〵しければさのみはとてここにはぶきつ）しかるに古事記の書さまには一つもなくしてたゞ當時の事さまを有のまゝにかきたる趣に見えたれば今はひたすら古事記の說を正しき據所として大むかしの國縣の事をばとともかくともさたすべきことなりかしさて成務天皇の御代になりてかく大小の國造縣主を定められしことは是まで御代々々に追つぎておかれたる國造縣主もおほかるべきうへに前朝にかの東征西伐の功にて土地を開かれしこと昔に倍して廣大になりしかば其新たに開かれし所々にも國あがたを立て國造縣主を置れたりしを（前朝には皇子あまたおはしましゝを後には大かた新墾の國縣ともに封ぜられしと見えて古事記傳代宮ノ卷に七十七王者悉賜二國造一和氣及稻置縣主一也と見えまた景行紀にも七十餘子皆封二國郡一各如二其國一など見えたり此御代に前々の國縣どもを併せて其區域の廣狹大小をほとゞ〳〵につきて正し定められたるなるべしされば其頃までは猶むかしのまゝ國あがた並びたちていまだ統屬の制は立ざりしと見えたれども其大小を定められしといふにて何とやらん後つひに統屬の制にうつりたることはやく此御代にさざしたるやうにおぼゆるをやまた國造縣主の事の西土の封建の制に似たるといふことははやく本居宣長が說にいにしへに國造といひしは今の世のこと大きにこそあらざりけめども大かた何事も大名のごとくなる物にて國々に多く有し也それが中に國造また君また別又直又稻置また縣主などいふ色々の有て尊き卑き氣ぢめも有つるをその氣ぢめはさだかにしるせる物なければいづれ尊く何れ卑かりけん今ことごとくはわきまへがたけれとも大かたは皆國造と同じさまなる物にて此色々を一つにすべても國造といへりき書紀などに伴造國造などあるはかの色々をすべて一つに國造といへるなりさてもろこしの國にもいにしへ封建の制とかいひし代の諸侯といふ物これによく似たり其諸侯に五等の爵として公侯伯子男と五さざみのしな有しそれはた國造君別などの色々あるに似たり其五しなの中に一つの名をとりてすべて諸侯といひしも又すべてをも國造といひしに似たりといへるはげにさることにてよく聞えたれ

ども今すこしくはしからざりしにや大昔は國あがた並びたちて其間には大小の差等とてもなかりしかば縣主といふにも國造と同やうに君別直稻置などの色々ありしと見えたれば縣主も其色々をすべたる名なりし故に古事記にもかく大小の國造縣主を並べ舉てはかきたるなりしかるをやゝ後になりていかなるよしにか國といふ物いつとなく廣く大きくなりて縣は其内に屬して後の郡といふものゝやうになりたる故國造といふ名も縣主までもすべていふことになりて後に內官外官とむかへいひたるごとく伴造國造とむかへいふことにはなりたる也さてかく國といふ物の廣大になりたる後には縣主はさらにて國造といはれしものまでも後の國といふ物の中に縣主と共にいくらもありて各その國縣を領じてありしなり（古事記幡原ノ宮ノ卷神八井耳命の御後の事をしるしたる中に道ノ奥ノ石城ノ國造常道仲ノ國ノ造と見えて道奥は陸奥國石城國は磐城郡常道は常陸國仲國は那珂ノ郡なるにて當時後の國といふ物の中にしかるに孝德天皇猶大昔の國々存在したることをさとるべし）

をば其郡を治むる郡司と云物になされてめしつかはるゝ事にはなりし也孝德紀に大化二年春正月宣二新制之詔一ヲ云々又置二畿內國司郡司一ヲ凡郡以二四十里一ヲ爲二大郡一ト三十里以下四里以上一ヲ爲二中郡一ト二里一ヲ爲二小郡一ト其郡司ハ並取下國造ノ性識清廉堪二時務一者上ヲ爲二大領小領一ト強幹聰敏工二書算一者ヲ爲二主政主帳一ト見えまた大寶の選敘令にも凡郡司云々其大領少領才用同者、先ッ取二國造一ヲ見えてこゝにいふ國造は縣主をすべていひたる國造にて郡司には其國人の才幹ある者を選補する定にてかならず國造ばかりを任せらるにはあらざれども是までの國縣を廢して新に郡に改られ各郡司を置て其政務を執行せしめらるゝ事なれば是までの國造縣主は俄に舊職を失ひて身の措所もなき風情なる故大方は昔のまゝそこに置たいちに其郡の郡司になされしなりそれ故もし餘人を郡司に選補するにも其才用そこの國造と同等なれは其人はさしはらざりしと見えて出雲風土記の卷尾に此書を撰著したる年月撰者の姓名をしるして天平五年二月卅日

勘造云々國造帶意宇郡ノ大領外正六位ノ上勳業出雲ノ臣廣島ト見エテ帶云々トハ國造ニテ郡司ヲ兼帶シタルナリ國造ノ郡司ニナリタルハカク世襲ノ國縣ノ領ハナハ取ハナケテモヲチタル故供奉ノ間ニハ自餘ノ郡司トハヤヽ同カラザル事アリ神祇令ニ凡諸國須ニ大祓ニ者毎郡出ニ刀一口皮一張鍬一口及雜物等ニ戸別ニ麻一條ト其國造ハ出ニ馬一疋ニ又民部式ニ凡諸國ノ大祓ノ馬ハ若無ニ國造ニ國者以ニ正税ニ買用ス價ハ不レ得レ過ニ五十束ニなど見エテカク國々ノ大祓ある時ニハ其國中ノ國造等ハ郡司なるもカならず馬一疋ノ贖物(アガモノ)を出すをもて定課としたるとハ後までも其傳領の地をかたばかりハ失はずして有し故なりしかるに世を經るまヽニハ諸國の國造等或ハ子孫なくして家たえ或ハ罪ありて俸領を收公せられなどしてやうヽニ國造の員數も減じたりしにや延喜の頃になりてはつひにかく國造のなき國なども出來たりしと見えたりしかのみならず其たまヽ世に殘りたる國造の家どもも延喜の頃になりてはかならず郡司に補せらるヽにもあらず大かた或ハ其家の祖神の社或ハ其家の遠祖よりいつき祭り來れる神社などの宮司社務と

なりて國造といふ名さへ失ひたるがおほかりし故當時國造といひしはたゞ出雲國造のみ式に見エて非外には國造の名ハ一つも見えず今の世までも出雲ハ外に國造の名の殘りたるハ紀伊隱岐また攝津の菟餓(トガ)ノ國造是等たゞ三家のみなれども此家どもはハやく衰微していとかすかになりてありしと見えて是等の國造の式に何とも見えざるはさらにてハかの物どもにも其名だにつやヽ見およばざるはいかなるよしにか心えがたしまた國造の中にも初ハ例のこゝく郡司に補せられたるが後に尸(カバネ)ノ子を改賜はりしをりなどより國造のとなへをやめて後には國司にもへのぼりて在國司になりてありしもおほかりしにや阿蘇文書建久六年の國宣の在廳等か連署の中に權ノ介肥ノ宿禰といふ名二三人見えて是等はみな火ノ國造ヲ遲(ソテ)男江命の後にてかばねを初は火ノ君後には肥ノ君などいひて益城の小熊野なる淨水寺に延暦廿年に立たる石燈樓の殘りたるに肥ノ君馬長といふ名見えたる人の遠孫どもにて後にかばねを宿禰と改られたる家々なるべし依ておもふに件の延暦の馬長ハ一定當時益城郡の大少領にてぞ有けむ件の石燈樓の連署に馬長が上に眞(カミ)

上(カミ)□乙といふ名見えたるも馬長と同じく當時の郡司なりしが其子孫も後までも肥後國に土着して後には是も作廳になりてありしと見えて件の建久六年の國宣の連署の中に權ノ介眞上ノ眞人といふ名見えたりされば國造の始末ハ大かたかくのごとくなりしと見えたれども其事くハしくしるしたる物なければ此上ハ考るによしなしかるにまた大化に始て國司郡司を置れて國造をすべて郡司となされし後また新たに朝官の人を國造に任せられたることありき後紀延暦十八年の條和氣朝臣清麿卿の小傳に寶龜中清麿卿を大隅の配所よりめしかへされし後美作備前二箇國の國造になされし事見えたり是ハ昔の國造とハ事さま同じからで後に國といひたる大國のしかも二箇國の造となされたるにて是より前後にハさる例も聞えざれば何さま是ハ一時の特恩に出たる事なるべし前に不比等公の淡海公に封せられ給ひしによく似たる事なれ共それハ薨後の贈封なりしを此卿ハ配所より歸京の始に二國の國造に封せられてしかも實封なりしハたがへりまた此卿の國造ハ其身一代を限りて昔の國造の世襲なりしにも同からざりしなり

國司ハ守以下史生以上の統名なる事

職原抄乃成務天皇四年始テ定ニ國造ヲ一とある大全に上古以ニ國守ヲ一皆曰ニ國造ト一至ニ于皇極天皇時ニ始テ改ニ國司ヲ一ト歷代皆云ニ國司ト一至ニ文武天皇ニ改ニ國司ヲ一曰ニ國守ト一と見えたるハ本文も大全もたゞ其事の大かた斗をいひてくハしからぬといふ迄にてすべて據所もなく事實にもたかひたるとハいハれまじきにやあらん本文ハ年紀ハ書紀に據り事實ハ古事記に據て縣主の事ハ略かれたるにて大全に孝德天皇を皇極天皇としたるハ御世繼のちかきよりふと心えたがひたるか後の傳寫の誤にてもあるべし始改國司云々又改國司曰國守とある二つの改の字ハともに事實にハすこしたがひたるやうなれども國司を置きし後ハ國造ハすべて郡司となされしかハ國造の名ハあれどもなきがごとくになりにたることなれば是も大かたにいハゞ國司に改むともいハるべしまた書紀にハ天武紀にハやく國司守とばかり國守などいふこと見えたれども定まりて國守とばかりいふことになりたるハ大寶以後の事なれば其定まりてかハることとなきかたよりいハんにハ文武天皇以後の事とせんも大なるたがひハなかるべし又前に歷

代皆云國司といへるはけにさることなれば其下に改國司曰國守といひたるは自語相違したるやうに見えたれども是は謂二國司一又爲二國守一などかくべきを大かたに心えておもふやうに筆もまはらざりしなるべし（それもくはしくいはゞ國守とは國司の中の守ばかりをさしていふことにて國司のことをさしてたゞちに國守といひたるにはあらず）齊明紀四年の條に越ノ國ノ守阿部ノ比羅夫云々天武紀壬申の亂の段に伊勢國司守三宅ノ石床介三輪ノ子首云々二年の春對馬より始て白金を献せし段に授二其國司守忍ノ海ノ大國一小錦下一などの明文見えて續紀以前にはかく國司守國守などかゝれしかども大寶以後には總て國司の二字を略きて大和守和泉守とやうに國名の下に直に官稱をつらねて書れしより後まで國司の官稱をいふにはすべて其定にしたがはれし也しかるに書紀にはまた孝徳紀の前にも國司といふことの所々に見えしらがひたるは例の後の名を前にまはしてかゝれたるにて書紀の文にはさる例どもいくらも見えたれどもくたゞしければ引出すに及はずされども推古紀に見えたる聖徳太子の十七憲法の中に國司國造莫レ斂レ民と見えたる計は當時に出されたる法令の文なれば大化以前よりはやく國司の名はありしやうに見えたれどもまさしく國司を置れしことは大化の新令に始まりたること孝徳紀の載する所明白なれば憲法の文もそのもとは國造縣主などかゝれたるを大化以後は國司國造とつらねいひたるより傳寫のをりまがひて書ひがめたるかまたは例の選者の潤飾にて後の名を前にまはされしにもあるべし（もし大化の前はやく縣主のたぐひすなはちすべて國司なれば國司國造とつらねてはいふべからざるをや）さて滯生秀實か職官志に守以下史生以上を總て國司といふよし見えたるは書紀には都ヲ之曰二國司一などの明文とてはなけれどもまた滯生が證據もなく杜撰したることにはあらず國司郡司といふは國の官司郡の官司などいはんも同ことにて國にては守介掾目史生郡にては大領少領主政主帳などの色々の官司をすべて國司郡司とはいひたること故書紀の大化の新令にも國司の事をいふには介以上判官以下また長官次官主典などいふこと見え郡司の事をいふには大領少領主政主帳などいふこと見えたり其後には選叙令に凡在レ官身死及解免スル者皆言上ス其國司ハ大上國ノ介以上中國ノ掾以上並闕レル及下國ノ守闕ル者ハ皆馳ヲ申ス太政官一考課令に強二濟ス諸事一清二肅スルヲ所部一爲二國司之最一とある注に國司ハ謂二介以上一ヲまた凡國郡司撫育有レ方戸口增益スル者各准二見月一爲ス二十分一ト論ス加二一分一ヲ各進二考一分一ヲとある注に國郡司ハ謂二掾以上及少領以上一ヲ又凡大貳以下及國司每年分番朝集とある注に國司ハ謂二目以上一ヲまた儀制令に凡郡司遇二本國司一者ハ下馬スとある義解に謂境內境外皆同ジ稱二國司一ト者ハ史生モ亦是ナリ也其博士醫師於二部內一取充ル者ハ不レ同カラ此例一也と見えて郡司路次にて本國の國司に行遇たる時は无位の史生といへども下馬する格なれども博士と醫師とは皆部內の人を取充ることにて郡司と同等のものなれば有位の博士醫師とても下馬するには及ばずと也また民部式に凡官物運レ京ニ應レ差スル綱領ニ者米三百石以上ハ差二國司一ノ史生以上勝ル任ニ者二人一ヲと見えて主稅式には（上文略）即准ニ未進一數ニ國司一ノ史生以上一ノ公廨ハ令ニ以混二正稅一ニまた凡國ノ處二分スル公廨一ヲ差法ハ大小一ノ國長官ハ六分次官ハ四分判官ハ三分主典ハ二分史生ハ一分など見えて國司といふは史生以上の統名なる故或は守計をも國司といひあるは介以上あるは掾以上或は目史生以上をもかく時により事に從ひて其差等を限りていづれにも皆國司とはいひたる也さればこれらの事共を併見て滯生が說の杜撰ならざりしことを悟るべし其上國司といふことは滯生のみひとりしか心えたるにはあらず中昔の末までは世の人みなしかのみ心えてありしと見えて東鑑元仁元年十月二十日の條に阿波ノ國殖ノ保ノ預所右衞尉基清ト與二地頭小笠原太郎長經一ト日來有二相論一ノ事一今日兩國司於二御前一ニ遂二ノ對決一ヲといふ事見へてかゝる莊保の卑職の者をとらへて兩國司といひたるはいかにも作者のひが心えなれども當時世の人も大かた國司といふは其司の尊卑をすべていふとぞと心えてありしより此作者も莊保の卑職までも在廳などのたぐひぞと心えてかく國司とは書誤つと見えたれば其頃迄は國司の名はたゞ長官のみに限りてはいはざりしとさだかなるべし然るに後醍醐天皇の御世になりて國司の名俄に尊くなりて世の受領といふ物とは其しな同からぬやうになりたるとありき元弘に鎌倉をほろぼされて後朝紳武辨の功ありし人々をばみな諸國に封せられて武辨は是迄のまゝ守護人守護職などいひたれども朝紳は昔のまゝたゞ何某（國名）守ととなへんには當時は武家の主達（シュダチ）陪臣のこと也（東鑑に見ゆ）などにも受領したる者おほくありて其となへ名實共にい

やしきやうなれば朝紳なるをば守護職にむかへてことさらに國司と稱し世の受領といふ物に名實ともに殊なるやうにせられたるにていはゆる奥州・國司北畠・顯家卿伊勢・國司中院・顯能卿伊豫・國司四條・隆資卿信濃・國司堀河・光機朝臣能登・國司中院 定清朝臣など是なりされども是は公家の勢を張られんための一旦の新制なりし故南北御一統の後には公家にはまた朝紳を國司に任せらる事なかりし程に世には國司といふ名さへ廢れて人もいはぬことになりしなりさていと後になりては武家の守護職といふ名もいつとなくやう〳〵すたれ行て近き頃よりまた守護にかはりて國主といふこと出來たりし故世の物に心えぬものは其となへの似かよひたるより國司も國主もおなじことのやうに心えたがひたるもおほかりさて在廳の事をまた在國司ともいひたることは東鑑に筑後國の住人草野次郎大夫永平が其家相傳の在國司を先例にまかせ補任せらるべきよし鎌倉殿よりしきりに乘し申されし事見えまた阿曾文書將軍宮に供奉の人の薩摩より阿蘇惟時におこせられたる狀に東郷・在國司以下緣・者共可レ參二御方一之由內通申候など見えたる在國司はみな其國の在廳のことにて東郷の在國司とは谿山郡の東郷にある在廳等にて緣物はへりのものにて其國にては家徒の物にはあらざるゆゑへりの物といひたるとおぼしければ件の在國司は國はしの在廳等なりしこととしるかりまた在廳のことたることにはあらねども豐後國國田帳に當國の在廳道忍が狀あるに德政之御使依二下向一去正月以來直人相共二昇向一博多一候間云々直人等 粗令二注進一狀一卷內々爲二御存知一令二進上一候とある直人はみな在廳のことにて府廳に番直して吏務をさたする故直人ともいふなりされども其頃はすべて番直の者をば直人といひ番直の所を直屋といひたるうへにかの廣福寺文書の公文所の下文にも政所圖師公文田所などをすべて直人といひたること見えたればたゞ直人と計いひては何この直人ともわきまへがたかるべしされば當時とてもよその人よりいふをりには一定國府の在廳をば府の直人とか廳の直人とかいひまた公文所の寄人をは公文所の直人などいひたらんとおもひし故前書にはしか申たるにて本より杜撰のことなれどもしか名をまうけてことわりおかざれば外にはまた其はいだめをさだかにいひあかすべきしかたとてもおもひつかざりつればなり

紀國隆大野莊の地頭たりし事

前書に大野國隆は大野庄の地頭なりし由申候は清源寺文書熊甲伊豆入道紀ノ宗善が弘治三年三月の置文に其昔關東より直に被レ成二御下知一候然は八幡ノ別當紀ノ國隆法名清源御恩地を被下建久四年卯月二日御教書を頂戴候而八日關東を被レ罷立肥後國玉名郡之內大野二百五十町被給中尾高岡ノ居屋敷にて子を男子三人女子五人被持候云々と見えて國隆は建久四年の四月大野庄を賜はりて鎌倉ゟ下向せしとあれば國隆は鎌倉殿（頼朝卿なり）の御家人にて其時始て所領に附られたるにて是すなはち武家の新令所謂庄園に地頭を置かれたる一ツなりかゝる事證とものある故に國隆を大野庄の地頭なりしといひたるなり國隆が初の假名は何とかいひけむ件の置文には八幡ノ別當とばかりありて假名をしるさゞればさだかならず國隆肥後に下りて後に男女の子共八人まで設けしとあれば始て所領に付られし頃はいまだ年わかなりしにはうつなければ八幡別當とは鶴岡の八幡の別當なりしとは聞えず大かた國隆が晩年に入道したりし後當庄波禰岐八幡の別當になど補せられしなるべし其頃かく諸國の在廳地頭などより當國他國の社務を兼たりし例は佐々木秀義が祖父兵庫助經房近江國の惣追捕使にて佐々木社の社務職に補せられ草野次郎大夫永平筑後國の在廳にて肥前鏡ノ宮の大宮司に補せられ三好宮內大輔成宗が阿波國の守護人にて當國一宮の大宮司に補せられ託磨別當次郎時秀が小武豐前々司景資に代て筑前國志度社の地頭職に補せられたるなど此外にもなほいくらもありしなるべし又大野庄は權門領にてありしを國隆其處の地頭に補せられてまた其處の領家より公文所の政所職になされたりと申しことは是も廣福寺文書承元二年三月公文所の下文に本家預所御庄太平之田停二止雜事一可レ被二早ク寄進一セ と見えて本家とあるは何がし殿なりしやさだかならざれども預所ノ御莊とあれは此莊當時院宮か又は攝關家などの御領なりしを件の本家といふ家より其處の預所職になりて爲給ひしことしるかれば此庄の當時權門領なりしこともまたさだかなるにあらずや預所といふは權門領の所務雜事をちなみの人に預おかるゝを預

所といひて其實は地頭代官などいふも同物なり玉海元暦二年九月二十五日の條に又頼朝令ㇾ申云〻伊豆國馬宮ノ庄亂ㇾ初ニ不ㇾ知ニ御領ㇾ寄ニ進ㇾ當國走湯山ニ了〻此ノ條進退有ㇾ恐被ㇾ進ニ其替ㇳ而八條ノ院ノ御領肥後ノ國豊田ノ庄ノ税所ノ預ㇾ也此條子細有ㇾ疑件ノ所自ニ女院ㇾ放ニ賜ㇳ頼朝ニ口令馬宮ノ庄代ㇳシテ令ㇾ進之條理ハヤ可ㇾ然若シ頼朝給ニ預所ノ職ㇳ口以ニ下官ㇾ爲ニ女院ノ御莊ノ預所ㇳ之條太以ㇾ可ニ見苦シㇰ凡家之習無ニ如ㇾ此ノ事中略仍以ニ此等ノ子細ㇾ可ニ計ㇲニ答ニ之由仰ニ光長朝臣ニ了〻と見えて玉海の作者月輪ノ禪閤兼實公は當時はいまだ右大臣にておはしまし〳〵が頼朝卿より月輪殿の御領伊豆國馬宮庄を其よしをも申されずして押して當國の走湯山に御寄附ありし故其替地として八條院の御領肥後國豊田莊の預所職をまゐらせんと申されし故大臣の御身にて院宮の御庄の預所になりたまはんとてよなき御恥辱なりと御不快ありて其よしをまた錬倉に仰遣はされしなり是は兼實公は譜第攝關の御家といひ御身もはやく右大臣になりておはせし故に女院の御庄の預所となり給はんとをかくは恥きらひ給ひたるにて大かたは其頃の風習攝關大臣の家ならぬ朝紳は院宮はさらにて攝關などの御庄までもその預所をばきらはずうけもち給ひしは常の事にてありしと見えたりしからざれば類朝頗いかに威權に募り給ふとも月輪殿あまりなる事に覺ゆるをや しかれば件の御莊とあるは當時豊田庄の八條院の御領なりしこと何れの院宮かの御庄なりしと見えまた本家といふも當時朝紳の中より其御莊の預所にておはせし家をいひたることしるかりまた件の御庄とあるを大野庄の事とし國隆を其處の政所なりしと申しことは件の下文に見えたる石貫の地は後の鄉村帳には玉名庄の管内としたれども前にもいふごとく鄉庄の廣狹は世に隨て沿革一定ならざれば當時石貫わたりは大野の莊内なりしもしるべからず其上此庄の公文所の政所を當時たま〳〵紀氏の人の□じてありしをおもふに國隆が大野庄の地頭に補せられたるは建久四年の事にて件の公文所の下文は承元二年の物なれば其間わづか十五六年ばかりに過ぎずしかれば國隆は此庄の地頭になりて下りし後程なくまた預所の家より公文所の政所職に補せられたるに件の下文に政所紀と見えたるは一定餘人にはあらで地頭の國隆なるべく覺ゆればかた〴〵件の御

莊も大野庄なるにはたがふまじくおもひなりたる也されども上件の考どもはまことに愚が臆量の僻案にて右等の外にはたしかなる證左としてもなきことなるを前書には其ことわりをば申さで本よりさる事なりしやうにげに〳〵しく書立置たる故畢竟かさねてのの御推問にも預し事とまことに進退恐おほくおほえまうし候

菊池則隆が官途

菊池則隆が官途の事日本史武重傳には菊池家譜を引て太宰將監とかゝれしかども心えがたくおぼつかなき事にて從來府官には少監ありて將監なし其うへ府の大少監は太宰府の判官なれば文吏にて武官にはあらざればおもふに選史の人則隆が祖父隆家卿初當府の帥にておはせし故其ちなみにて則隆も府官に補せられたりしが其後猶筑紫に留り居りつひに菊池を領せしならんとおもひつきたるより家譜に則隆が官途を將監とあるを字音のちかきより府官の少監と取まがへてつひにあらぬ事迄も杜選したるにてまことは菊池家譜のみに據て書出せしにはあるべからず系圖にも左近將監と見え武朝が申狀にも大夫將監と見えたれば則隆始は近衛府の將監に任せられしが後に五位に敍爵せしより大夫將監とは名のりたるにてまことは初より府官に任せられしことはなかりし也さて則隆が後に筑紫に下りて菊池を知行してありしことはいかなるよしありしにや武朝が申狀にも其事は何とも載せざれば今よりはさだかにしらるべき事にはあらざれども例の試に強ていはゞ隆家卿の帥にておはせし時刀伊といふ國の夷賊ども來寇せしことありしを此鄉府内の軍を出して追拂はれし事ありき其勳功の賞などにて菊池郡を給はりてありしを後に孫の則隆に讓傳へて所領の地に下し付られしにもあるべしさて則隆が菊池に安堵せし後は當國の警固使に補せられたりしと見えて其子の經隆が假名を系圖に兵藤、警固太郎と見えたり昔は父の官途を取て其子の假名に加へて名のるは常の事なりしかば經隆も其例にならひて父の則隆が警固使なりし故やがて其職稱を假名に加へて警固太郎とは名のりしなりまた兵藤を名字としたりしことは父が世にありし程は津江の兵藤村を領してありし故初は領地の名を名字としてありしにて後の武光が兄の武士が讓をうけざりし程

は益城の豐田を知行して豐田十郎と名のりしも此たぐひの事にてありし也中昔より諸國に國中の有勢の者を撰て押領使惣追捕使警固使などいふ物に補せられて國中の警固追捕の事を專任せられし事あり俵藤太秀鄕が下野の押領使與の秀衡が奥羽兩國の押領伊東祐親が伊豆の押領使佐々木經房が近江の惣追捕使伊豫椽橘ノ遠保が當國の警固使など是なりされば菊池が家も大かた世々警固使を相傳してありしなるべし

縣主稻置等の名義職掌

縣主と稻置との名義はおのれいまだうまく考へたることはなけれども縣をあがたといふよしははやく本居宣長が神代紀に高田窪田と並べいへる高田をあげた窪田をくぼたと刻ませたるに據て縣をあがたといふはあげたの轉りたるにて高田は今の畠窪田は水田のことなり往古は窪田よりも高田のかたおほかりし故田舍の事をすべてあがたといふことになりしとやうにいひたることあり（宣長が説は古事記傳に見えたりつばらには覺えざれども大むねはたがふべからず）此説一わたりはげにさることのやうにも覺ゆれども何とやらん强ひごとのやうにおもはれてひたふるには信用なりがたしさりとてまた外に考へえたることもなければ姑く此説にしたがひて後のよき考を待べきにやさて縣主といふはたゞ文字のまゝに心えてよく聞えることなればくだ〳〵しくいふに及ばず職掌の事は前にいひたるごとく國造と同しく撫民の職といふより外にくはしきことはしられざれば大かたに心えてあるべきにや稻置は前にいふことく縣主は統名には稻置は其色々ある中の一色の名なり此名義も文字のまゝ租稻を置く品のことにて後の庄官に稅所といふによく似たることなりそれをやがて職稱にしたるも稅所ノ預などいひたるに同じかるべし書紀にまた稻城とかきていなぎと訓せたること垂仁紀推古紀などに見えて垂仁紀には其さまを解して積ノ稻ヲ作ノ城ヲ其堅キコト不ノ可ノ破也と見えたりされどもいなわらを積かされて城壁としたるが破りくづされぬやうに堅固なるべきとも思はれねば本居宣長は書紀の說をば取らずして往古はすべて物を聚置く處を支といひて城の字をきといふも兵士を聚めおく處なる故にて牧の字を馬を聚めおく處なる故うまきともまきともいふは馬城の意なりしかれば稻城も同意にて租稻を

聚ノ蓄ヘおく處なる故稻城とはいふなりしかるを書紀に稻城とかゝれし處はいづれも兵士のたて籠りたる處にて常の城とばかりいふ物にさしてかはりたるさまとも聞えざるは稻城は租稻をたくはへ置く處にて盜賊などの畏もあればめぐりに堭（ホリ）など深く堀まはしてかねて要害よく構へたる所なる故事あるをりには便宜につきてそれに引籠て敵を防ぎたるなりといへり此說は前のあがたの考よりはまさりて難なきやうなれどももしはたしてしからんには稻置も稻城もおなじ物なれば事に依て其心をえて文字をおかしく書かへたるといふばかりなりさればおもふに稻置の置の字をおきのおを畧きてきとのみいふは日置をへきといひたる傍例もあれば牧をまきといふ馬城の意とせんより馬置（ウキ）の意といはんそおだしかるべきにあらずやさらばまた城をきといふもおきのおを略きたることといはんにそはしからずすべて物の名などにもじの二つも三つもかさなりたるを上下たがひに略きいふは常のことなれども火をひ木をきなどやうにたゞ一もじにいひたるは本二もじになるを一もじにつゞめていひたるにはあらでもとよりさるべきよしありて

一もじにのみいひたる物とおぼしければ城をきといふもまた其たぐひにておきを略きてきといひたるにはあらでおのづから別に其よしありしなるべしさて稻置といふ職稱は縣主の色々の中にては最下の卑職なりしにや天武天皇の御時天下の姓を混じてたゞ八色の姓に定められしに稻置をば第八等に置れたりまた允恭天皇の皇后忍坂（オサカノ）大中ツ姫のいまだ御里（ミサト）におはせし時闘鷄（ツヅノ）國ノ造が其貴人（ムマヒト）なるをしらすして皇后に花一もと請まうすとてなめけなる詞もて戲れいひたりしを皇后御心のうちにふかく憤ておはしましゝかば皇后にたゝせ給ひて後件の國造を罪せられて姓（カバネ）を貶して稻置となされし事允恭紀に見えたり是は國造が位階を貶されたるとなれば貶ノ爵とこそかくべきとなるを書紀には貶ノ姓ヲとかゝれたるは當時はやくとなるを書紀には貶ノ姓ヲとかゝれたるは當時はやく稻置といふ職稱は廢れてかの八色の姓の中に稻置あればそれにまがひて誤て貶ノ姓ヲとはかゝれつらんともおもひしかども猶つら〳〵おもふに往古の加波禰ともおもひしかども猶つら〳〵おもふに往古の加波禰といひし物は其もとは姓氏のたぐひのみをいふことにはあらで品等位階あるものをすべて加波禰といひたるにて姓の字を加波禰と訓せたるも姓氏の品等をさ

して加波禰とはいひたる也されば其始は姓氏のうへにも官爵のうへにもかよはして加波禰といひたる故書紀にも其心をえて貶ゝ姓とはかゝれしなるべしされども加波禰といふ言の意はいまだ考へず物には氏骨、尸、などかゝれしかどもそは皆假字(カナ)がきにて本義にはあらず賀茂ゝ眞淵が說にわがまへ名のつゞまれる也といひたるはおかしくときえたるやうなれどもなほいかゞあらんおぼつかなく那牟

八木田府庫

武藤殿男校

古城貞吉重校

孝經孔氏序

孝者人之高行　管子形勢解、慧者、主之高行也、慈者、父母之高行也、忠者、臣之高行也、孝者、子婦之高行也

曾參　史記仲尼弟子列傳、曾參、南武城人、字子輿、少孔子四十六歲、孔子以爲能通孝道、故授之業、作孝經、

河間王得而獻之　漢書景十三王傳、河間獻王德、以孝景前二年立、脩學好古、實事求是、從民得善書必爲寫與之、留其(校本脫此三字上有脫字下有脫字)、加金帛賜以招之、繇是四方道術之人、不遠千里、或有先祖舊書、多奉以奏獻王者、故得書多、與漢朝等、所得書、皆古文先秦舊書、周官尚書禮記孟子老子之屬、皆經傳說記、七十子之徒所論、又魯恭王、以孝景前二年立爲淮陽王、吳楚反破後、以孝景前三年徙王魯、好治宮室苑囿狗馬、季年好音、不喜辭、爲人口吃難言、恭王名餘、

魯三老　孫本孝經釋疑云、昭帝時、魯三老獻古文、吳澄今文孝經考、許冲云、古文孝經、孝昭時魯國三老所獻、建武時、議郎衛宏所校、皆口傳、官無其說、

其說移風易俗　廣要道章、

又師曠云　襄公十八年左傳晉人聞有楚師、師曠曰、不害、吾驟歌北風、又歌南風、南風不競、多死聲、楚必無功、

子游爲武城宰　論語雍也篇、

夫樂以關山川之風　晉語、師曠曰、夫樂以開山川之風、以耀德於廣遠也、風德以廣之、風山川以遠之、風物以聽之、(校本脫二字別作德字)修詩以詠之、(上遠字別作以字)修禮以節之、韋昭云、開、通也、故八音通八風、耀明也、

風德風物　前漢律歷志、風之以德、感之以樂、師古曰、以德化之、以樂動之、韋昭曰、風、風宣其德、(校本脫二字)廣之於四方、(校本脫四字下有也字)作樂各象其聽、韶夏護武是也、又曰、(校本脫二字)風物、(校本脫四字)風化之動、物莫不傾耳而聽、○漢武詔、蓋聞導民以禮、風之以樂、師古曰、風、敎也、○宣紀詔郡國二千石、謹牧養民、而風德化、師古曰、以德化被於下、故云風也、詩序曰、上以風化下、鼎案陸德明顏古讀風皆如字、(顏字下脫有師字)

胡笳吟動　毛詩疏動聲曰吟、
經又云敬其父　廣要道章、
霍光、字子孟、官至大將軍、

開宗明誼章

仲尼　韻會小補、尼、女夷切、鼎案、爾雅釋丘、水源所止泥丘、郭注、頂上汙下者、尼丘之山、取義於此、則或改作尼、讀爲夷音非是、

閒居　禮記疏鄭目錄曰、退朝而處曰燕居、退燕避人曰閒居、東方未明疏、居、安坐也、

侍坐　邢疏云、侍坐者、言侍孔子而坐也、凡侍有坐有立、此曾子侍、即侍坐也、曲禮、有侍坐於先生、侍坐於所尊、侍坐於君子、據此而言、明侍坐於夫子也、鼎案據此則坐當活字讀、以下傳有還復本坐、不可爲死字看也、字彙坐、徂果功、坐與行對、又古人謂跪爲坐、釋名、坐、挫也、骨節挫屈也、又去聲、徂臥切、坐罪坐獄告反、从土从留省、土所止、與留同意、

至德要道　鄭注、至德、孝悌、要道、禮樂也案下文德教加于百姓、又曰道之以禮樂、而民和睦、樂記曰、教者、民之寒暑也、鄭注、教、謂樂也、又古謂詩書禮樂爲四術、洞酌疏、在身爲德、施行爲道、案論語、以文王泰伯爲至德、故仲尼之誥云、志自滿九族乃離、樂記曰、樂至則無怨、禮至則不爭、揖讓而治天下者、禮樂之謂也、暴民不作、諸侯賓服、兵革不試、五刑不用、百姓無患、天子不怒、如此、則樂達矣、合父子之親、明長幼之序、以敬四海之內、天子如此、則禮行矣、案郊特牲、委貌周道也、章甫殷道也、毋追夏后氏之道也、鄭注、常所服以行道之冠也、孔疏云、行道、謂養老燕居之服、物先生云、要道猶要術、殷仲文曰、以一管衆爲要、鼎云、要者、爲於此而驗於彼之謂也、

要道以訓天下　案凡稱天下者、總而言之、先王有至德以訓天下、則天之明、因地之利、以訓天下之類、是也、稱民者、別而言之、先之以博愛、而民莫遺其親、陳之以德誼、而民興行之類、是也、

道者扶持萬物　管子形勢解、道者扶持衆物、使得生育、而各終其性命者也、又曰、道者、所以變化身而之正理者也、故道在身則言自順、行自正、事君自忠、事父自孝、遇人自理、故曰道之所設、身之化也、又白心篇、道者、一人用之、不聞有餘、天下行之、不聞不足、此謂道矣、小取焉則少得福、大取焉則大得福、盡行之而天下服、殊無取焉、則民反、其身不免於賊、

民用和睦上下無怨　案和睦、謂夫婦和兄弟睦也、禮運云、兄弟睦、夫婦和、鄭玄周禮注、睦、親於九族、首章傳云、是故自生至于三十、則以事父母接兄弟、和親戚睦宗族、敬長老信朋友爲始也、定九年鮑文子諫齊侯曰、臣嘗爲隸於施氏矣、魯未可取也、上下猶和、衆庶猶睦、鼎云、和睦、互文、上下無怨、高祖下至玄孫之親無怨狀也、所謂親九族也、故孔氏云、遠者和附、近者睦親也、所謂率己以化人也、廢此二誼、則萬姓不協、父子相怨、又曰其德以和天下、而長幼之節肅焉、尊卑之序辨焉、是故不遺老忘親、則九族無怨、又云、凡上之所施於下者厚、則下之報上亦厚、厚薄之報、各從其所施、薄施而厚儉、雖君不能得之於臣、雖父不能得之於子、應感章、長幼順、故上下治、傳云、謂克明厥德以親九族也、長者、於王父兄之列也、幼者、於王子弟之屬也、能順其長幼之節、則親疏有序、而以之化天下、上下之爲九族也、明矣、又案、事君章、子曰、君子之事上也、傳云、上謂君父也、又下文、故上下能相親也、傳惟言君臣者、承上焉爾、又紀孝行章、居上不驕、與上諸侯章同、故傳云、上、上位也、案上下所指不一、尚書堯典云、格于上下、皐陶謨云、天聰明、自我聰明、天明威、自我明威、達于上下、湯誥云、並告無辜于上下神祇、又云、朕未知獲戾於上下、皆謂天地、此其正義也、春秋傳、晏子曰、若有德之君、外內不廢、上下無怨、謂神人也、尚書微子、我祖底遂陳于上、我用沈酗于酒、用亂敗厥德于下、此以世言也、燕義云、上必明正道以道民云云是以上下和親、而不相怨也、此謂君臣也、魯語、公父文伯之母、朝哭穆伯、而莫哭文伯、仲尼聞之曰、季氏之婦、可謂知禮矣、愛而無私、上下有章、謂尊卑也、九族○白虎通云、謂父之姓一族也、父母昆弟適人有子、爲二族也、身女昆弟適人有子、爲三族也、身女子適人有子、爲四族也、母族三者、母之父母一族也、母之昆弟二族也、母昆弟子三族也、母昆弟者男女皆在外親、故合言之、妻族二者、

妻之父爲一族、妻之母爲二族、妻之親略、故父母各一族、杜預云、九族、外祖父母、從母子、妻父母、姑之子、姊妹之子、女子之子、非己之同族、皆外親有服而異族者也、

夫孝德之本也敎之所繇生也　史記、文帝曰、朕德薄而敎不明、又武帝詔云、維德非薄、不明于禮樂、○傳、孝道者、乃立德之本基也、敎化所從生也、德者得也、案立德者、謂立德世也、春秋襄二十四年傳、太上有立德、鼎曰、孝者成德之始、敎民之源也、又曰、忠以事君、信以接人、皆後於孝、民俗孝悌、而後可施諸博愛敬讓禮樂之等矣、周語、言孝必及神、又宣王欲得囚子之能導訓諸侯者、樊穆仲曰、魯侯孝、王曰、何以知之、對曰、肅恭明神、而敬事耆老、賦事行刑、必問於遺訓、而咨於故實、不干所問、不犯所咨、王曰、然則能治其民矣、乃命魯孝公於夷宮、家語、孔子曰、不孝者、生於不仁、不仁者、生於喪祭之無禮也、喪祭之禮、所以敎仁愛也、能敎仁愛、則服喪思慕、祭祀不懈、人子儐食之道也、喪祭之禮明、則民孝矣、漢書霍光傳田延年曰、漢之傳謚常爲孝者、以長有天下、令宗廟血食也、鼎案傳當是晉附、物先生解有子之言曰、爲仁於天下、以敎孝弟爲先、宗廟之禮、所以敎孝也、養老之禮、所以敎弟也、孝弟化行、民俗和順、天下自然治、而後世不知其意、以爲汪濶、故有子語其意也、言觀於孝弟之人、不好犯上作亂之事、可以見其敎弗差焉、君子務本、本立而道生、蓋古語、有子引之、有本有末、莫非道也、本立而道之行於彼者、自然而然、有非我之所使者、辟諸草木之生、勃焉乎莫之能禦、故曰道生、於孝弟、未嘗敎忠、未嘗敎敬、未嘗敎和、未嘗敎順、而忠敬和順、自然生於彼、先王之知其要也、鼎案、本猶首也、敎者禮樂敎化之謂也、民俗孝弟、而後可以施諸禮樂之敎矣、亦忠信之人可以學禮之意、○物先生解有子之言曰、本始也、林放問禮之本、天下之本國也、國之本家也、家之本身也、德者本也、財者末也、皆謂所始、古言爲爾、古之言、皆主行之故也、○鼎按、祭義曰、立愛自親始、敎民睦也、立敬自長始、敎民順也、敎以慈睦、而民貴有親、敎以敬長、而民貴用命、孝以事親、順以聽命、錯諸天下無不行、呂氏春秋□□篇、凡爲天下國家、必務本而後末、所

謂本者、非耕耘種植之謂、務其人也、務其人、非貧而富之、寡而衆之、務其本也、務本莫貴於孝、人主孝、則名章榮、下服聽、天下譽、人臣孝、則事君忠、處官廉、臨難死、士民孝、則耕耘疾、守戰固、不罷北夫孝、三皇五帝之本務、而萬事之紀也、夫執一術、而百善至、百邪去、天下從者、其惟孝也、又如禘嘗之義大矣、治國之本也、愛與敬、其政之本與、禮其政之本與、祭者敎之本也、昏禮、禮之本也、温良者、仁之本也、忠信者、禮之本也、亦皆謂所始也、邢疏、論語云、孝弟也者、其爲仁之本歟、今言孝者德之本歟、二嘆美之辭、舉其大者而言、故但云孝、德則行之總名、故疑仁言德也、南史、庾子輿字孝卿、南陽涅野人、幼而岐嶷、五歲讀孝經、手不釋卷、或曰、此書文句不多、何用自告、答曰、孝者德之本、何謂不多、

德者得也　管子心術、德者得也得者、其謂所得以然也

天地之道得　管子形勢解、天不失其常、則寒暑得其時、日月星辰得其序、主不失其常、則羣臣得非義、百官守其事、父母不失其常、則子孫和順、親戚相驩、臣下不失其常、則事無過失、而官職政治、子婦不失其常、則長幼理、而親疎和、

身體髮膚受之父母不敢毀傷孝之始也　案、曾子臨終、令啓手足、亦怕入刑辟之意、免者、謂免於刑戮也、故曾子曰、吾知免夫小子、邢疏、毀、謂虧辱、傷、謂損傷、故夫子曰、不虧其體、不辱其身、可謂全矣、及鄭注周禮禁殺戮云、見血爲傷、是也、

推敵能讓　周語、慈和能慧推敵能讓、揚子方言自關而西、秦晉之間、物力同者、謂之蠆敵、

立身行道　家語六本篇、孔子曰立身有義矣、而孝爲本、

傳立身者立身於孝也　案立身於者以孝立身也、中庸所謂在下位不獲乎上、民不可得而治矣、獲乎上有道、不信乎朋友、不獲乎上矣、信乎朋友有道、不順乎親、不信乎朋友矣、順乎親有道、反諸身不誠、不順乎親矣、誠身有道、不明乎善、不誠乎身矣也、孟子亦曰脩其天爵、而人爵從之、荀子大略篇、曾子曰、孝子、言爲可聞、行爲可見、言爲可聞、所以說遠也、行爲可見、所以說近也、近者說則親、遠者說則附、親近而附遠、孝子之道也、亦順

乎親、信乎朋友、獲乎上之說也、
以顯父母孝之終也　釋名、父甫也、始生己也、說文云、母、牧也、（牧字或作敎字）釋名、母、冒也、含生己也、祭統云、顯揚先祖、所以崇孝也、又云、夫鼎有銘、銘者、自名也、自名、以稱揚其先祖之美、而明著之後世者也、爲先祖者、莫不有美焉、莫不有惡焉、銘之義、稱美而不稱惡、此孝子孝孫之心也、（唯賢者能刑字或作形字）之、銘者、論撰其先祖之有德善功烈勳勞慶賞聲名、刑於天下、而酌之祭器、自成其名焉、以祀其先祖者也、顯揚先祖、所以崇孝也、身比焉順也、明示後世敎也、夫銘者壹稱而上下皆得焉耳矣、是故君子之觀於酯也、既美其所稱、又美其所爲、爲之者、明足以見之、仁足以與之、知足以利之、可謂賢矣、賢而勿伐、可謂恭矣、孔疏、上、謂光揚先祖、下、謂成己順行、哀公問、公曰、敢問、何謂成親、孔子對曰、君子也者、人之成名也、百姓歸之名、謂之君子之子、是使其親爲君子也、是爲成其親之名也、內則云、曾子曰、孝子之養老也、樂其心、不違其志、樂其耳目、安其寢處、以其飲食忠養之、孝子之身終、終身也者、非終父母之身、終其身也、是故父母之所愛、亦愛之、父母之所敬、亦敬之、至於犬馬盡然、而況於人乎、

束修　後漢胡廣傳、尙書史敞等云廣才畧深茂、堪能撥煩、顧以參選、紀綱頹俗、使束修守善、有所勸仰、

志邁清風　淮南子、志屬清雲、（按宋刻本作志屬清雲非本行也一本作屬非字或作非字）非夸矜也、案邁與勱同、字彙、邁、莫解切音賣、與勵同、尙書、皐陶邁種德、六書正譌、別作勵非、勱勉力也、勵注、力霽反音例、勉力也、有修飾振起意、鼎案、據此注、則勱勵二字、音異而義同也、

無過之地　禮運云、君者立於無過之地也、

始於事君　孟子曰、孰不爲事、事親事之本也、

禮男初生至有事　射義文、

致仕　致納也、

懸車　漢書薛廣德傳、廣德代貢禹爲長信少府御史大夫以歲惡民流、與丞相定國、大司馬車騎將軍史高、俱乞骸骨、皆賜安車駟馬黃金六十斤罷、廣德爲御史大夫凡十月免、東歸、沛太守迎之界上、沛以爲榮、懸其安車傳子孫、師古云、懸其所賜安車、以示榮幸也、致仕懸車、蓋亦古法、韋孟詩、（師古注詩字下有云字）懸車

之義、以洎小臣也　（洎字刻之仍一本作及）

毋　一本作亡念爾祖聿（漢碑作述）脩厥德　世本古義、文王、周公陳文王受命作周、以吉成王也、爾祖、指文王也、殷滅而周興、非文王之德不至此、聿通作吹、說文云、詮辭也、徐鍇云、詮理也、理其事之辭也、脩、說文云、飾也、德字从彳、謂惠之見於行者、內得于心曰惠、外見于行曰德、承上章言成王得無念爾祖文王之能脩飾其德乎、曰左右、曰陳錫、文王脩德之實也、所以得民心而受天命者、其原正在于此、漢元帝時、頗改宣帝之政、言事者多進見、人々身以爲得上意、匡衡上疏曰、陛下聖德天覆、子愛海內、然陰陽未和、姦邪未禁者、殆論議者、未不揚先帝之盛功、爭言制度不可用也、務變更之、所更或不可用、而復々之、是以羣下更相是非、吏民無所信、臣竊恨國家釋樂成之業、而虛爲此紛々也、願陛下詳覽統業之事、留神於遊制揚功、以定群下之心、大雅云、無念爾祖、聿修厥德、孔子著之孝經首章、蓋至德之本也、按漢宣之德、無足言者、而匡之說詩、則可謂得其意矣、左昭二十三年楚囊瓦爲令尹城郢、沈尹戌曰、古者天子守在四夷、天子卑、守在諸侯、諸侯守在四鄰、諸侯卑、守在四竟、詩曰、云云、無亦監乎、若敖蚡冒、至于武文、土不過同、慎其四竟、猶不城郢、今土數圻、而郢是城、不亦難乎、引詩之意、亦以脩德屬爾祖、時說皆指爲勸王之辭非是、又孝經、子曰、愛親者、不敢惡于人、敬之辭也、徐鍇云、詮理也、理其事之辭也、脩、說文云、親者、不敢慢于人、愛敬盡于事親、而德敎加于百姓、刑于四海、蓋天子之孝也、章首引此詩、其意以愛親（愛字下脫親字）敬解念祖、以不敢惡人不敢慢人解脩德、則脩德乃自脩其德、亦斷章取義、邪疏、此經有十一章引詩及書、劉炫曰、夫子敘經、申述先王之道、詩書之語、事有當其義者、則引而證之、亦示言不虛發也、七章不引者、或事義相違、或文勢自足、則不引也、

天子章

愛親者不敢惡於人　此章孟子所謂老、吾老以及人之老也、孔穎達云、孝經天子之章、盛論愛敬之事、立愛唯親、立敬唯長、即孝經所云、愛親者不敢惡於人、敬親者不敢慢於人、始于家邦、終于四海、是也、即孝經所云、德敎加于百姓、刑于四海、是也、

爵授有德　管子問篇、（爵授有德則大臣與義、祿予有功、則士（士字或作上字）以人之所戴、則上下和、

授事以能、則人上功、審刑當罪、則人不易訟、無亂社稷宗廟、則人有所宗、毋遺老忘親、則大臣不怨、舉知人急、則衆不亂行此道也、國有常經、人知終始、

紀綱　字彙、大曰綱小曰紀、總之曰綱、周之曰紀

愛敬盡於事親　樂記云、禮者殊事合敬者也、樂者、異文合愛者也、禮樂之情同、故明王以相沿也、注、法、猶因述也、古者天子父事三老、兄事五更、是內能事己父兄、而後行此禮、是以民莫不興於孝弟矣、故云、愛敬盡於事親、然後德教加于百姓、刑于四海故身者　身猶己也、

詔　謂敎命也、

辜較　劉炫曰辜較、猶梗槩也、孝道既廣、此總舉其大略也、鼎案、辜與姑通、詛楚大沈久湫文、疏虛不姑、巫咸亞駝並作辜、又楑姑或作鏷辜、孟康律歷志註、辜必也、唐韻、較、略也、鼎案、必猶姑也、論語、必也射乎、廣雅、嬠、摧也、家語入官篇、君子南面臨官、大域之中而公治之、王肅注、大域、猶辜較也、

故身者　管子君臣上、主身者正德之本也、官治者、耳目之制也、身立而民化、德正而官治、治官者化民、其要在上、是故君子不求於民、

有其人　又曰、道也者、萬物之要也、爲人君者、執要而待之、則下無有姦僞之心、不敢殺也、夫道者虛設、其人在則通、其人亡則塞者也、

法象天地　版法解、凡人君者覆載萬物、而兼有之、蝡臨萬族、而事使之、是故以天地日月四時爲主爲質、以治天下、天覆而無外也、其德無所不在、地載而無棄也、安固而不動、故莫不生殖、聖人法之、以覆載萬民、故莫不得其職姓、則莫不爲用、故曰、法天合德、象地無親、覇言、覇王之形、象天則地、形勢解、天生四時、地生萬物、以養萬物而無取焉、明主配天地者也、敎民以時、勤之以耕織、以厚民資、而不伐其功、不私其利、故曰、能予而無取者天地之配也

是以天子　君臣上、是故天子有善讓德於天、諸侯有善、慶之於天子、大夫有善、納之於君、民有善本於父、慶之於長老、此道法之所從來、是治本也、

天子章引呂刑傳主讓而說　春秋襄公十三年左氏傳荀罃士魴卒、晉侯蒐于綿上以治兵、使士匄將中軍、辭曰、伯游長、昔臣習於智伯、是以佐之、非能賢也、請從伯游、荀偃將中軍、士匄佐之、使韓起將上軍、辭以趙武、又使趙武將上軍、韓起佐之、欒黶將下軍、魏絳佐之、新軍無帥、晉侯難其人、使其什吏率其卒乘官屬、以從於下軍、禮也、晉國之民、是以大和、諸侯遂睦、君子曰、讓、禮之主也、范宣子讓、其下皆讓、欒黶爲汰、弗敢違也、晉國以平、數也賴之、刑善也夫、一人刑善、百姓休和、可不務乎、書曰、一人有慶兆民賴之、其寧惟永、其是之謂乎、周之興也、其詩曰、儀刑文王、萬邦作孚、言刑善也、及其衰也、其詩曰、大夫不均、我從事獨賢、言不讓也、世之治也、君子尚能而讓其下、小人農力以事其上、是以上下有禮、而謗讟遠、由不爭也、謂之懿德、及其亂也、君子稱其功、以加小人、小人伐其技、以憑君子、是以上下無禮、亂虐並生、由爭善也、謂之昏德、國家之敝恒必由之、

諸侯章　鄭注孝經云、列土封疆、謂之諸侯、居上不驕高而不危　管子形勢解、天之道、滿而不溢、盛而不衰、明主法象天道、故貴而不驕、富而不奢、行理而不惰、故能長守貴富、久有天下而不失也、故曰持滿者與天、家語、入官、爲上者、譬如緣木焉、務高而畏下莫甚六馬之乘難、必達於四達之交衢、萬民之叛道、必於君上之失政、上者尊嚴而危、民者卑賤而神、愛之則存、惡之則亡、長民者必明此之要、故南面臨官、貴而不驕、富而能供、有本而圖末、修事而能建業、久居而不滯、情近而知遠、故察一物而貫乎多、治一物而萬物不能亂者、以身本者也、新語云、夫居高者、自處不可以不安、履危者、任杖不可以不固、自處不安則墜、任杖不固則仆、是以聖人居高處、上則以仁義爲巢、乘危履傾、則以聖賢爲杖、故高而不仆者、堯以仁義爲巢、舜以禹稷契爲杖、故高而益安、動而益固、然處高之安、乘克讓之敬、德配天地、光被四表、功垂於無窮、名傳於不朽、蓋自處得其巢、任杖得其材也

又曰、高上尊賢、無以驕人、聰明聖智、無以窮人、資給疾速、無以先人、剛毅勇猛、無以勝人、不知則問、不能則學、雖智必質、然後辯之、雖能

必讓、然後爲人、（人字當作之字）故士雖聰明聖智、自守以愚、功被天下、自守以讓、勇力距世、自守以怯、富有天下、自守以廉、此所謂高而不危、滿而不溢者也、敬恤篇 琅邪代醉編、崔英年九歲、符堅問卿讀何書、曰孝經、堅曰、有何義、曰、在上不驕、更問有何義、曰上愛下、下敬上、堅曰、卿好去、年十七、用爲大夫、

高而不危、桑扈詩、不戢不難、受福不那、說文云戢、藏兵也、收斂之義、難通作儺、說文云、行有節也、孝經言諸侯之孝云、高而不危云云、此可以通戢難受福之義、何楷云、

高者必以下爲基　老子三十九章貴以賤爲本、高以下爲基、

制節謹度　鼎曰、制節謹度、制以節謹以度之謂也、猶如易曰制度數議德行也、制節者、以奉身而言之、謹度者、以行禮而言之、楊愼云、符謂之節、尺謂之度、節取有其限、度取其不差、易曰、天地節而四時成、節以制度、不傷財不害民、或云、制節猶言節性也、周禮大司徒職十二敎、九曰、以度敎節、則民知足、援神契云諸侯行孝曰度、皇以謹度、謂宮室車旗之類、皆不奢僭也、

滿而　孔安國尚書傳、滿、謂盈實也、疏、滿以器喻、故爲盈實也、天道虧盈　易豕傳、天道虧盈而益謙、自多　家語六本篇、孔子曰夫自損者必有益之、自益者必有決之、

保其社稷　韋昭注國語云、保、守也、禹貢、徐州、厥貢惟土五色、孔傳曰、王者封五色土爲社、建諸侯、則各割其方色土與之、使立社、懸以黃土、苴以白茅、々取其潔、黃取王者覆四方、又案、韓詩外傳曰、天子大社、東方青、南方赤、西方白、北方黑、中央黃土、若封四方諸侯各割其方色土、苴以白茅而與之、諸侯以此土封之爲社、明受於天子也、郊特牲曰、社祭土而主陰氣、又曰、所以神地之道、祭法云、王爲群姓立社曰大社、王自爲立社曰國社、（按祭法王爲群姓立社曰大社王自爲立社曰王社諸侯爲百姓立社曰侯社諸侯自爲立社曰國社）諸侯自爲立社曰侯社、大夫以下成群立社曰置社、又曰、共工氏之霸九州也、（按左傳禹能平水土故祀以爲社祀九字疑社法云鯀不治水土故不能平九州）故祀以爲社、春秋昭二十九年、左傳句龍能平水土、故祀以爲社、鄭玄云、社、五土總神、（山林、川澤、丘陵、墳衍、原隰也）句龍有平水土之功、故配社祀之、異義今孝經說曰、社者、土地之主、土地廣博、不可徧

敬、故封五土以爲社、王肅曰、句龍、人鬼也、非地神、許君謹案、春秋稱公社、今人謂社神爲社公、故知社是上公、非地祇、孔穎達曰、祭社、用牛角尺、而用大牢、天子服絺冕、爲鄭學者云、社稷是地之別體、有功於人、報具載養之功、故用大牢、貶降於天、故角尺也、祭用稀冕、取其類陰、（以上郊特牲疏）又曰、社之祭一、歲有三、仲春命民社、一也、詩云、以社以方、謂秋祭二也、孟冬云、大割祠于公社、三也、其主、宗伯注云、社之主蓋用石、傳咸曰、祭法王社大社、各有其義、穀梁傳云、天子親耕、故自立社爲報也、國以人爲本、人以穀爲命、爲百姓立社、而報焉、事異體殊、此社所以有二、社、與民族居、百家以上則共立一社、今里社是也、張載曰、古者、丘乘共委廩、恐十里之中立一社也、王肅難鄭曰、后稷配天、（按孔疏特牲疏下有孝經有配天明文后稷不稱孝經有配天明文后稷不稱）今之里社、又鄭志云、月令民社、謂秦社也、自秦以下、民始得立社也、

自危者　下繫辭、子曰危者安其位者也、亡者、保其存者也、亂者、有其治者也、是故君子、安而不忘危、存而不忘亡、治而不忘亂、是以身安而國

細別、別名曰稷、々乃原隰所生、故以稷爲原隰之神（郊特牲疏）王肅曰、稷祭后稷、人鬼也、非地神、異義、今孝經說、稷者五穀之長、穀衆多不可編敬、故立稷而祭之、古左氏說、烈山氏之子曰柱、死祀以爲稷、々是田正、周棄亦爲稷、自商以來祀之、許君謹案、禮緣生及死、故社稷人事之、既祭稷穀、不得但以稷米祭稷、反自食、同左氏義、社稷所置之處、郊特牲疏、小宗伯云、右社稷左宗廟、（同祭義鄭玄曰、庫門內雉門之左右、（雉門下始有外字庫門內之西上始有在字）爲群姓立社者、庫門內之西、自爲立社者、在藉田之中、其亡國之社、穀梁傳云、亡國之社、以爲屋屏戒、或在廟、或在庫門內之東、則亳社在東也、案祭法注、大夫不得特立社、與民族居、百家以上則共立一社、今里社是也、如鄭此言、則周之政法、百家以上得立社、其秦漢以來、雖非大夫民二十五家以上、則得立社、故云今之里社、又鄭志云、月令民社、謂秦社也、自秦以下、民始得立社也、

自危者　下繫辭、子曰危者安其位者也、亡者、保其存者也、亂者、有其治者也、是故君子、安而不忘危、存而不忘亡、治而不忘亂、是以身安而國

家可保也、

卿大夫章

正義曰、說文云、卿章也、白虎通曰卿之爲言章也、章善明理也、大夫之爲言大扶、扶進人者也、故傳曰、進賢達能、謂之卿大夫、

非先王之法言不敢道　此言卿大夫臨朝聽政、必誦古言以折衷之也、

法服法言德行　案表記云、居子服其服、則文以君子之容、有容則文以君子之辭、遂其辭、言以君子之德、冠義曰、冠而后服備、服備而后容體正、顏色齊、辭令順、已冠而字之、成人之道也、成人之者、將責成人之禮焉也、責成人禮焉者、將責爲人子爲人弟爲人臣爲人少者之禮行焉、孟子亦曰、服堯之服、誦堯之言、行堯之行、是堯而已矣、三者之次、宜若此、

法　禮運曰、大臣法、又曰、大夫以法相序

僻下倡下　雜記曰君子上不僻上、下不倡下、席韻、僻僪也、射義曰、卿大夫以采蘋爲節、采蘋樂循法也、

修德於身　表記云君子恥有其德而無其行

擬議　繫辭擬之而後言、議之而後動、擬議以成其變化、

行其典誼　案典謂禮也、

中能應外　國語云內能應外曰忠、

無定　管子形勢解無儀法程式、蓽搖而無所定、謂之蓽遂之問、蓽遂之問、明主不聽也、無度之言、明主不許也、

口無擇言身無擇行　案、擇、謂擇取之也、呂刑曰、敬忌而罔有擇言在躬、論語曰、子曰、我三人行、必得我師焉、我擇其善者而從之、其不善者、而改之、又曰、多聞擇其善者而從之、左傳、季札云、吾聞君子務在擇人、中庸云、擇乎中庸得一善、何氏注論語云、論篤者、謂口無擇言、皇侃疏、擇者、除蠹取好之謂也、左傳云、寘有札、主則擇之、又哀元年、闔廬永服財用、擇不取費、注、選取堅厚、不尚細費、晉語、范文子曰、擇福莫若重、擇禍莫若輕、韋昭云、有二福、擇取其輕、又鄭無正曰、及景子嗣立矣、亦纂修其身、以受先業、無謗於國、順德以學子、擇言以教子、擇師保以相子、呂氏春秋大樂、先聖擇兩法一、

行滿天下亡怨惡　鼎曰、行、謂施於政者也、案樂記

曰、角亂則憂、其民怨、正義曰、民無自怨、皆君上失政、故下民生怨也、吳澄曰、卿大夫立朝、則接對賓客、出聘、則將命他邦、故言行滿天下、三者服言行也、人之相與、先觀容飾、次交言辭、後考德行、孟子曰、服堯之服、誦堯之言、行堯之行、意與此同、

復言復行　管子形勢解言而不可復者、君不言也、行而不可再者、君不行也、行之不可再者、其行賊暴也、故言而不信、則民不附、行而爲賊暴、則天下怨、民不附、天下怨、此滅亡之所從生也

祿位　援神契云祿者錄也、取上所以敬錄接下、下所以謹錄事上、裘々者華序、古之仕者世祿、疏、古者有世祿、復有世位、世祿者、直食其先人之祿、而不居其位、不賢尚當然、子若復賢、則居爻位矣、三章箋曰、守我先人之祿位、並位言之、見此意也、晉語云、范宣子與鄢大夫爭田、久而無成、宣子欲攻之、徧問於大夫、無決、問於訾祁、對曰、昔隰叔子、遠周難於晉圄、生子輿爲理、以正於朝、朝無姦官、司空以正於圄、圄無敗績、世及武子、佐文襄爲諸侯、諸侯無二心、及爲卿以輔成景、軍無敗政、及爲成師居太傅、端刑法緝訓典、國無姦民、後之人可則、是以受隨范、及文子成晉荊之盟、豐兄弟之國、使無有間隙、是以受鄔樊、令吾子嗣位、於朝無姦行、於國無邪民、於是無四方之患、而無外內之憂、賴三子之功、而纘其祿位、今既無事矣、而非鄢於是加寵、將何治爲、

詩曰　春秋襄二十五年左傳、大叔文子曰、君子之行、思其終也、思其復也、書云、愼始而敬終（左傳學下又有終字）以不困、詩曰、夙夜匪解以事一人、

士章

孟子、王子墊問云、士何事、孟子曰、尚志、註云、上則公卿大夫、下則農工商賈、皆有所事、而士居其間、獨無所事、既未得行公卿大夫之道、又不當爲農工商賈之業、則高尚其志而已、記曰、凡學、官學事、士先志、淡志、學以居位曰士、正義曰、說文云數始於一、終於十、孔子曰、推一合十爲士、毛詩傳曰、士者事也、白虎通曰、士者事也、仕事之稱也、傳曰、通古今辨然不然謂之士、

至親至尊　表記母親而不尊、父尊而不親、

爲人父者　管子形勢解爲人君而不明君臣之義以

正其臣、則臣不知於爲臣之理以事其主矣、爲人父、而不明父子之義以敎其子而整齊之、則子不知爲人子之道以事其父矣、

以孝事君則忠　祭統云、內盡於己、而外順於道也、忠臣以事其君、孝子以事其親、其本一也、冠義云、責成人之禮焉者、將責爲人子爲人弟爲人臣爲人少者之禮行焉、將責四者之行於人、其禮可不重與、故孝弟忠順之行立、而后可以爲人、左傳昭十二年外內倡和爲忠（不相違也）　案、孝弟者、自天子以至於庶人、所當同也、然孝經獨於士章言之者、蓋天子諸侯、五更之外、少以弟事之者、卿大夫、則位在衆官之上、亦少以弟事之者、唯士位卑、弟道最廣、故於此章乃言之、

孝者子婦之高行　管子形勢解忠者臣之高行也、孝者、子婦之高行也、

父母敎　父母以下本管子形勢解文、而字多變易

守其祭祀　尙書大傳、祭之言察也、察者至也、言人事至於神也、那疏、祭者際也、人神相接、故曰際也、祀者似也、似將見先人也、音似、

日月流邁　秦誓日月逾邁、若弗云來、論語陽貨篇、日月逝矣、歲不我與、

進德脩業　易文言君子進德脩業、

詩曰　曾子立孝、夙興夜寐、無忝爾所生、言不自舍也、魏略、文帝爲五官將、而臨淄侯才名方盛、各有黨與、有奪宗之議、帝使人問賈詡自固之術、詡曰、願將軍恢崇德度、躬素士之業、朝夕孜々不遑、子道如此而已、

小宛之章　魯詩作鳴鳩、

庶人章

大戴禮少閒篇、庶人仰視天文、俯視地理、力時使以聽乎父母、曾子立事、庶人日旦思其事、戰々唯恐刑罰之至也、荀子儒效篇、以容俗爲善、以貨財爲寶、以養生爲己至道、是民德也

因天之時就地之利　案、書傳曰、春張昏中、可以種穀、夏火昏中、可以種黍、秋虛昏中、可以種麥、冬昴昏中、可以收斂、洪範曰、庶民惟星、所謂因天之時也、舜本紀、就時於負夏、索隱云、就時猶逐時、若言來時射利也、尙書大傳曰、販於頓丘、就時負夏、職方氏曰、青州、其穀宜稻粱、雍州、其穀宜黍稷之類、所謂就地之利、地官遂人、以土宜敎甿稼穡、釋云、高田種黍稷、下田種稻麥、是敎之稼穡、地官草人、掌土化之法以物地、相其宜而爲之種、注、土化之法、化之使美、若汜勝之術也、以物地占其形色爲之種、黃白宜以種禾之屬、又土訓、掌道地圖以詔地事、注、道、說也、說地圖、九州形勢山川所宜、告王以施其事也、若云荊揚地宜稻、幽幷地宜麻、釋曰、職方幽幷之州、並不言宜麻、鄭以目驗知之、（按四職方記字上有青字知之二字作見其實三字）說文、泰伯益之後所封、地宜禾、考工記、輪人爲輪、斬三材必以其時、弓人爲弓、取六材必以其時、注、取幹以冬、取角以秋、絲漆以夏、又云、凡爲弓、冬析幹、（析字當作折）而春液角、夏治筋、秋合三材、寒奠體、冰折（折字當作析）澌、又曰、知者創物、巧者述之守之、世謂之工、百工之事、皆聖人之作也、（先字當作此）又天有時、地有氣、材有美、工有巧、合此四者、然後可以爲良、材美工巧、然而不良、則不時、不得地氣也、橘踰淮而北爲枳、鸜鵒不踰濟、貉踰汶則死、此地氣然也、鄭之刀、宋之斤、魯之削、吳粵之劍、遷乎其地、而弗能爲良、地氣然也、燕之角、荊之幹、妨胡之笴、吳粵之金錫、此材之美者也、天有時以生、有時以殺、艸木有時以生、有時以死、石有時以泐、水有時以凝、有時以澤、此天時也、庶人之業　齊語令夫農羣萃而州處、察其四時、權節其用、耒耜耨芟、及寒（寒字當作菓）菓除田、以待時耕（按四時時字下有及字二字）深耕而疾耰之、以待時雨、時雨既至、挾其槍刈鎛以旦暮從事於田野、脫衣就功、首戴茅蒲、身衣襫楬、霑肢塗足、暴其髮膚、盡其四支之敏、以從事於田野、少而習焉、其心安焉、不見異物而遷焉、是故其父兄之敎、不肅而成、其子弟之學、不勞而能、是故農之子恒爲農、

不敢犯非　昭三年傳晏子曰、君子不犯非禮、小人不犯不祥、古之制也、

孝卒章　御註通上爲一章、無子曰二字、

終始　荀子禮論篇、事生飾始也、送死飾終也、終始具、而孝子之事畢、聖人之道備矣、

一揆　孟子離婁下、

爲君而虐　管子形勢解爲主而賊、爲父母而暴、爲臣下而不忠、爲子婦而不孝、四者人之大失也、大失在身、雖有小善、不得爲賢、爲主而惠、爲父母而慈、爲臣下而忠、爲子婦而孝、四者人之高行也、高行在身、雖有小過、不爲不肖、

三才章

荀子王制篇、天地者、生之始也、禮義者、治之始也、君子者、義家之始也、爲之貫之、積重之致好之者、君子之始也、故天地生君子、君子理天地、君子者天地之參也、萬物之總也、民之父母也、

夫孝天之經也地之義也　案此謂聖人則天地而建孝也、春秋昭二十五年左傳、子大叔曰、夫禮、天之經也、地之義也、天地之經、而民實則之、則天之明、因地之性、生其六氣、用其五行、又曰、爲居臣上下、以則地義、爲夫婦外內、以經二物、爲父子兄弟姑姊（據禮記明堂位補）甥舅昏媾姻婭、以象天明、爲政事庸力行務、以從四時、爲刑罰威獄、使民畏忌、以類其震曜殺戮、爲溫慈惠和、以效天之生殖長育、民有好惡喜怒哀樂、生于六氣、又禮器、天道至教、聖人至德、廟堂之上、（據禮器補在西字）罇尊在西、廟堂之下、縣鼓在西、應鼓在東、君在阼、夫人在房、大明生於東、月生於西、此陰陽之分、夫婦之位也、君西酌犧象、夫人東酌罍尊、禮交動乎上、樂交應乎下、和之至也、說命、明王奉若天道、建邦設都、樹后王君公、承以大夫師長傳、天有日月北斗五星二十八宿、皆有尊卑相正之法、言明王奉順此道、以立國設都、莊子天道篇、君先而臣從、父先而子從、兄先而弟從、長先而少從、男先而女從、夫先而婦從、尊卑先後、天地之行也、故聖人取象焉、天尊地卑、神明之位也、春夏先、秋冬后、四時之序也、萬物化作、萌區有狀、盛衰之殺、變化之流也、夫天地至神、而有尊卑先後之序、而況人道乎、河間獻王問董仲舒曰、夫孝、天之經地之義、何謂也、董子對曰、天有五行、春木主生、夏火主長、季夏土主養、秋金主收、冬水主成、是故父之所生、其子長之、父之所長、其子養之、父之所養、其子成之、諸父所爲、其子皆奉承而續行之、乃天之道也、故曰夫孝天之經也、此之謂也、王曰、善哉、願聞地之義、對曰、風雨者地之爲、地不敢有其功名、必上之于天、可謂大忠矣、土者火之子也、五行莫貴于土、士之于四時、無所命者、不與火分功名、此爲孝者地之義也、王曰、善哉、物先生曰、有曰天之經地義也、贊禮之言也、經者、謂禮之大者、能持衆義、如經韓之經焉、義者、謂禮之細者、各制其宜焉、所以謂之天地者、贊辭已、

天地之經而民是則之　孔氏曰、是、是此謂也、鼎銘是則之、猶曰以是爲則焉之語助耳、

之則　管子形勢解地生養萬物、地之則也、治安百姓、主之則也、敎護家事、父母之則也、正諫死節、臣下之則也、（據禮記補有義字）盡力共養予婦之則也、地不易其則、萬物生焉、主不易其則、故百姓安焉、父母不易其則故家事辦焉、臣下不易其則、故主無過失、子婦不易其則、故親養備具、故用則者安、不用則者危、則天之明因地之利　禮運夫禮必本於天、徵於地、（據禮之初上當有因字）列於鬼神、注、聖人則天之明、地之利、取法度於鬼神以制禮、下敎令也、既又祀之、盡其敬也、敎民嚴上也、文二年左傳、孝禮之始也、楚語地有高下、天有晦明、民有君臣、國有都鄙、古之制也、覆而無外　管子版法解、天覆而無外也、其德無所不在、地載而無棄也、安固而不動、故莫不生殖、聖人法之、以覆載萬民、故莫不得其職姓、

天地不爲　管子白心篇故苞物衆者、莫大於天地、化物多者、莫多於日月、民之所急、莫急於水火、然而天不爲一物枉其時、明君聖人、亦不爲一人枉其法、天行（宋天行下當有其所行三字）而萬物被其利、聖人亦行其所行、而百姓被其利、是故萬物均、既訪衆矣、

法天合德　管子版法解桓公謂管子曰、今子敎寡人、法天合德、合德長久、合德而兼攬之、則萬物受命、象地無親、無親安固、無親而兼載之、則諸生皆殖參於日月無私、葆光無私而兼照之、則美不惡隱、（據明趙本今作作）齊語今夫士羣萃而州處閒燕、則父其敎不肅而成　齊語今夫士羣萃而州處閒燕、則父與父言義、子與子言孝、其事君者言敬、其幼者言悌、少而習焉、其心安焉、不見異物而遷焉、是故其父兄之敎、不肅而成、其子弟之學、不勞而能、夫是故士之子恆爲士、吳澄曰、肅言其聲容、嚴言其法令、信從其敎之謂成、服從其敎之謂治、

登山而呼　荀子勸學篇登高而招、臂非加長也、而見者遠、順風而呼、聲非加疾也、聞者彰、假輿馬者、非利足也、而致千里、假舟楫者、非能水也、而絕江河、

見敎之可以化民也　按中庸、動則變、々則化、鄭注動々人心也、變改惡爲善也、變之久、則化而性善也、孔穎達曰、既感動人心、漸變惡爲善、變而既久、遂至於化、言惡人全化爲善人、無復爲惡也、又曰、初漸謂之變、變時新舊兩體俱有、變盡舊體

而有新證、謂之爲化、如月令鳩化爲鷹、是爲鷹之時、非復鳩也、猶如善人無復有惡也、周禮大宗伯、以禮樂合天地之化、鄭注、能生非類曰化、賈公彥曰、變化相將、先變後化、故中庸曰、勸則變々則化、荀子註、改其舊質謂之變、馴致於善謂之化、

陳之以德註　齊語、相示以巧、相陳以功、注、陳亦示也、案、德、至德、註、謂行之於民也、論語曰、務民之義、晉語、悼公與司馬侯升臺而望曰樂夫、對曰臨下之樂、則樂矣、德義之樂則未也、公曰、何謂德義對曰、諸侯之爲、日在君側、以其善行、以其惡戒、可謂德義矣、

道之以禮樂而民和睦　鼎案此禮樂、乃指養老鄉射鄉飲酒等之禮言、鄭玄註、開宗明誼章曰、至德、孝悌也、要道、禮樂也、鄉飲酒義、民知尊長養老、而后成教、而后乃能入孝悌、民入孝弟、出尊長養老、而后成教、成教而后國可安也、君子之所謂孝者、非家至而日見之也、合諸鄉射、教之鄉飲酒之禮、而孝弟之行立矣、燕義、上必叫正道以道民、々道之而有功、然後取其什一、故上用足、而下不匱也、是以上下和親、而不相怨也、和寧、禮之用也、此君臣上下之大義也、

禮以強教之　表記、凱以強教之、弟以說安之、道之斯行　論語子張篇、道之斯行、綏之斯來、動之斯和、

示之以好惡而知禁　管子禁藏、禁藏於胸脅之內、而禍避於萬里之外、雖以此制彼者、唯能以已知人者也、樂記、是故先王之制禮樂也、非以極口腹耳目之欲也、將以教民平好惡、而反人道之正也、注、教之使知好惡也、又曰、爲人君者、謹其所好惡而已矣、君好之、則臣爲之、上行之、則民從之、詩曰、愾民孔易、此之謂也、緇衣、故君民者、章好以示民俗、愼惡以御民之淫、則民不惑矣、周語、明利害之鄉、注、示之以好惡、鄉、方也、韓子、齊桓公好服紫、一國盡服紫、當時十素不得一紫、公患之、告管仲、管仲曰、君欲止之、何不自試勿衣也、謂左右曰甚惡紫臭、公曰諾、於是郎中莫衣紫、其明日國中莫有衣紫、三日境內莫衣紫也、昭十五年左傳、荀吳曰、吾聞諸叔向曰、好惡不愆、民知所適、事無不濟、愆、過也、適、蹈也、

令行而禁止　周書文傳解令行禁止、王始也、管子形勢解、人主之所以令則行禁則止者、必令於民之所好耐禁於民之所惡也、

詩曰　皇佖謂無先王在上之、故斷章引太師之什、

孝治章　通雅、舊紀、紹興中作君臣事迹扉、

高宗命鄭誥書盤庚無逸詩之車攻篇、孝經

孝治章、列于左右、宜以諭輔臣、（按宜字疑作王字）禮器、大饗其主事與、故得萬國之歡心以事其先王　（按事字當作王字）禮器、東帛加璧、尊德也、籩爲三牲魚腊、四海九州之美味也、籩豆之薦、四時之和氣也、內金、示和也、東帛加璧、尊德也、龜爲前列、先知也、金次之、見情也、丹漆絲纊竹箭、與衆共財也、其餘無常貨、各以其國之所有、則致遠物也、其出也、奏肆夏而送之、蓋重禮也、鄭玄曰、大饗盛其饌與貢、謂祫祭先王、孔疏、案宗伯、以肆獻祼饗先王、以下宗廟之祭、凡有六饗、此云大饗、々中最大故爲祫也、賓之初筵亦云、百禮既至、有壬有林、傅、林、君也、箋壬、任也、謂卿大夫、又有國也、諸侯所獻之禮、既陳於庭、有卿大夫、又有國君、言天下偏至、得万國之歡心、孔疏云、其禮物之外、又有卿大夫、又有國君、史樂書、夫南風之詩者、生長之音也、舜樂好之、樂好之樂、與天地同意、得萬國之歡心、故天下治也、呂后紀曰、凡有天下者、（史作爲）治萬民者、蓋之如天、容之如地、上有歡心、以使百姓、百姓欣然、以事其上、驩然交通而天下治、（史記民下有命驩然作欣然）

照臨群下　昭十八年左傳昭臨四方曰明

下得道上　管子明法解明主者、兼聽獨斷、多其門戶、群臣之道、下得明上、賤得言貴、故姦人不敢欺、卑者不待尊寵　又曰明主之道、卑賤不待尊貴而見、大臣不因左右而進、百官條通、群臣顯見、有罰者、主見其罪、有賞者、主知其功、見知不悖、賞罰不差、有不蔽之術、故無壅遏之患

盈數　閔元年左傳萬盈數

損上益下　易象傳曰、益損上益下、民悅无疆、自上下下、其道大光、

駿奔　詩周頌清廟篇、對越在天駿奔走在廟、不敢侮於鰥寡　鄘邪代醉、引諸史偶讀、曰蘇世長十歲、上書周武帝、帝問讀何書、對曰、治孝經論語、帝曰何言可道、曰爲國不侮鰥寡、爲政以德、臣　禮運、仕於公曰臣、仕於家曰僕、

卿大夫稱家　湯誥傳、國諸侯家大夫、

災害不生禍生亂不作　傳、妖孽不生、禍亂不起也、

案、宣十五年左傳、晉伯宗曰、天反時爲災、地反物爲妖、民反德爲亂、々則妖災生、故文、反正爲乏、杜註、天反時、寒暑易節、地反物、群物失性、疏、據其害物謂之災、言其怪異謂之妖、時由天、物在地、故屬災於天、屬妖於地、其實民有亂德、感動天地、（按宋本作感天地下又有天地二字）爲之見變、妖災因民而生、天地共爲之耳、非獨天爲災、而地爲妖、民、謂人也、感動天地、皆是人君感之、非庶民也、昭七年傳曰、國無政不用善、則自取謫於日月之災、言以政取謫、是其由君、不由民、以民表人、故釋例引此、即改民爲人、是其民謂人也、傳言天災地妖民亂、歷序以尊卑爲次、更言亂則妖災生、明妖災由民起、妖災亦通言耳、凡天反其時、地反其物（按宋本作反其物下有其物二字）、々以害性、皆爲妖災、是言妖災、皆通天地共爲之也、此傳地反物者、唯言妖耳、洪範五行傳、則有妖孽禍痾青祥六者之名、（按宋本作痾下有之字）以積漸爲義、漢書五行志、說此六名曰、凡草木之類謂之妖、（按宋本作物字下有之字）々猶天昭、言尚徵也、蟲多之類謂孽、々則牙孽矣、及六畜謂之禍、言其著也、及人謂之痾、人之病類、言浸深也、甚則異物生謂之眚、自外來謂之祥、是六名、以漸爲稱、唯眚祥有內外之異耳、六者皆是妖也、皇侃曰、天反時爲災、謂風雨不節、地反物爲妖、妖即害物、謂水旱傷禾稼也、善則逢殃爲禍、臣下反逆爲亂也、司救云、凡歲時有天患民病、注、天患、謂戕害也、疏、謂天與人物爲戕害、謂水旱之戕及疫病之害也、

福應　邢昺曰、福謂天下和平、應謂災害不生、

禍亂不作、

聖治章　御注通下孝優劣章合爲一章、

天地之性人爲貴　泰誓武王曰惟天地萬物父母、惟人萬物之靈、荀子王制篇、水火有氣而無生、草木有生無知、禽獸有知而無義、人有氣有生有知、亦且有義、故最爲天下貴也、孔叢子曰、天地之性、人爲貴、貴有知也

凡生天地之間　祭義、子曰天之所生、地之所養、無人爲大、父母全而生之、子全而歸之、可謂孝矣、（按宋本作無人爲大父母全而生之子全而歸之可謂孝矣樂子春云漢書刑法志夫人宵天地之貌懷五常之性聰明精粹有生之最靈也）

人之行莫大於孝　案、周禮師氏、以三德教國子、一曰至德、二曰敏德、三曰孝德、敎三行、一曰孝行、二曰友行、三曰順行、鄭玄注云、孝在三德之下、三行之上、德有廣於孝、而行莫尊焉、又孔序云、孝者人之高行、

正吾臣上下之誼　管子版法解愛施之德、雖行而無私、內行不脩、則不能朝遠方之君、是故正君臣上下之義、飾父子兄弟夫妻之義、飾男女之別、別疏數之差、使君德臣忠、父慈子孝、兄愛弟敬、禮義章明、如此則近者親之、遠者歸之、

昔者周公郊祀后稷以配天　明堂位祀帝于郊、配以后稷、天子之禮也、御注、郊、謂圜丘祀天也、邢昺云、孔傳文、今孔傳無其語也、

禘郊祖宗　祭法曰、祭法有虞氏禘黃帝而郊嚳、祖顓頊而宗堯、夏后氏亦禘黃帝而郊鯀、祖顓頊而宗禹、殷人禘嚳而郊冥、祖契而宗湯、周人禘嚳而郊稷、祖文王而宗武王

天子祭天　曲禮及王制文、

周公攝政　文王世子文、

案祭法曰、周公禘嚳而郊稷、祖文王而宗武王、注、禘郊祖宗、謂祭祀以配食也、祖宗通言爾、祭義曰、祀乎明堂、所以敎諸侯之孝也、註祀乎明堂、宗祀文王、大雅生民篇云、后稷肇祀、庶無罪悔、鄭注、兆、四郊之祭處也、應劭中紀注、上帝、謂古時帝大昊之屬、（古時一作五時）九月大饗五帝、亦稱上帝、即宗祀文王所配、何楷曰、序及蔡邕獨斷皆云、我將祀文王于明堂之所歆也、按孝經、子曰、孝莫大於嚴父、各以其職來祭、上帝者、兼昊天上帝與五帝之稱也、孔安國尚書傳、遂以攝告天及五帝、孔穎達曰、周禮司服云、王祀昊天上帝、則服大裘而冕、祀五帝亦如之、是昊天外更有五帝、上帝可以兼之、雖兼祀五帝、而以天爲主、故篇中但言天、孝經言宗祀配帝、而首曰嚴父配天、亦其義也、孔穎達云、此言祀文王于明堂、謂大享也、案月令季秋大享帝、蓋以兼昊天上帝與五帝而祭之、故曰大饗、郊祈穀之祭、以后稷配雩之祭、以五人帝配、皆與文王無預、此以知其爲大享也、其曰宗祀者何也、程子謂、以宗廟之禮享之、朱子亦謂、祭于屋下、而以神祇祭之、此其義也、魯語、天子祀上帝、諸侯會之受命焉、注、上帝、天也、助祭受政命也、匠人、周人明堂度九尺之筵、東西九筵、南北七筵

堂崇一筵、五室、凡室二筵、注明堂者、明政教之堂、疏云、如鄭意、以夏周皆有五室（按下王制十二次之一作仲冬字）十二室、周舉明堂、則宗廟王寢亦與明堂制同也、若然、周人殯于阼（按下上有西字）階之上、王寢與明堂同、則南北七筵、惟有六十三尺、三室居六筵、南北共有一筵、一面惟有四尺半、何得容殯者、案喪傳云、周人路寢、南北七雉、東西九雉、室居二雉、則三室之外、南北各有半雉（按下又有雉字）、長三丈、則各有一丈五尺、足容殯矣、若然、云周制者、商制法同、無妨大矣、據周而言、則夏殷王寢亦制同、而大可知也、何楷曰、申培詩說曰、清廟周公成雒邑、奉成王見諸侯、作明堂宗祀文王、以配昊天上帝、率諸侯祀之、鄭玄曰周公攝攻、制禮作樂、乃立明堂于王城、又趙商問云、說者謂、天子廟制如明堂、是謂明堂即文廟耶、鄭答曰、明堂主祭上帝、以文王配耳、愚謂明堂之作、不始于周公、自武王之時、業已有之、樂記曰、武王克殷、祀于明堂、而民知孝、是也、然亦不獨武王有之、淮南子言、神農之世、祀以明堂、新論亦曰、黃帝拜祀上帝于明堂、爲祀之所自上古而已然矣、諸儒皆言、周公營雒邑始立明堂、當自是雒邑之明堂、惟宗祀文王以配上帝之禮、本昉于周公、孝經以此贊周公之孝、而曰孝莫大于嚴父、嚴父莫大于配天、所云嚴父、蓋主周公尊文王而言也、又云、清廟即明堂之大廟、月令所謂中央土、天子居太廟太室者是也、何以知之、以茅屋之制知之、左傳言、清廟茅屋、而大戴禮亦言明堂以茅蓋屋、上員下方、所以明諸侯尊卑、淡濟南公玉帶上黃帝時明堂圖、其制中有一殿、四面無壁、覆之以茅、環之以水、斯知清廟即明堂矣、（按先儒皆以蔡邕月令論謂、明堂者天子太廟、所以宗祀、夏世室、商重屋、周謂明堂、東曰青陽、南曰明堂、西曰總章、北曰玄堂、中曰太室、人君南面、故主以明堂爲名、在其五室之中央、皆曰太廟、饗射養老、教學選士、皆於其中、故取其宗祀之清貌、則曰清廟、取其正室之貌、則曰太廟、取其尊崇則曰太室、取其堂則曰明堂、取其四門之學、則曰大學、取其周水員如璧、則曰辟雍、雖各異名、而事實一也、晉袁準事非之謂、明堂宗廟大學、事義不同、各有所爲而世之儒者、合爲一躰、取詩薛放逸之文、經典相似之語、推而致之、考之人情、失之遠矣、宗廟之中、人所致敬、幽隱清靜、鬼神所居、而使衆學處焉、饗射于中、人鬼慢黷、死生交錯、囚俘截耳、瘡痍流血、以子犯鬼神、非其理也、茅茨采椽、至質之物、建日月乘玉輅、以處其中、非其類也、夫宗廟鬼神之居、而祭天于鬼神之室、非其處也、王者五門、宗廟在一門之內、若射在於廟、而張三侯、又辟雍在內、人物衆多、殆非宗廟之中所能容也、明堂太廟者、明堂之內太室、非廟之太廟也、明堂法天之宮、故可以祭天、而以祖配之、按邕所言、明堂爲五室之一、自不可易、其以明堂之太廟爲宗廟、則非也、如準所論、故爲得之、而漢儒相傳、或以明堂爲文王廟謬矣、又或謂文王廟如明堂制、亦屬附會、孝經緯、得陽氣明朗、謂之明堂、鄭匠人注、明堂者、此物也、今文無助字、周語云、甸服者祭侯服者祀、明政之堂、九月大饗五帝、亦稱上帝、即宗祀文王所配、

明堂（蔡邕說明堂去王城七里說及淳于登等所記、其外有水名曰辟雍、戴禮說、）文王之廟（古周禮孝經說）上圓下方（禮戴說戴德說、蔡邕明堂月令章句、）

其法令、信從其教之謂成、服從其政之謂治、案治字從水者、言號令之行、猶水之得道理流行、

父母生續章

案生謂生育也、小雅正月篇、父母生我、又周禮大宰六典、六曰、事典、以富邦國、以任百官、以生萬民、鄭注生猶養也、

父慈而教　昭二十六年左氏傳、晏子曰君令而不違臣共而不貳、父慈而教、子孝而箴、兄愛而友、弟敬而順、夫和而義、妻柔而正、姑慈而從、婦聽而婉、禮之善物也

爲兼之事　士章曰兼之者父也、

父母生之　周禮大宰六典、六曰事典、以富邦國、以任百官、以生萬民、注、生猶養也、正月篇、父母生我、傳、父母謂文武也

厚莫重焉　重直龍反、

撫育顧復　詩蓼莪篇拊我畜我長我育我顧我復我

攻苦之功　漢書叔孫通傳、攻苦食啖、顏師古曰啖嘗作淡、無味之食也、言共攻擊勤苦之事、而食無味之食也、

凡上之所施　管子形勢解民之所以守戰至死而不衰者、上之所以施（按當下脫字上有加字）溥、故溥施而厚責、君不能得之於臣、父不能得之於子、又曰民之從有道也、如飢之先食也、如寒之先衣也、如暑之先陰也、故有則民歸之、無道則民去之、

孝優劣章第十二

子曰不愛其親而愛他人者謂之悖德、大學曰、其所厚者薄、而其所薄者厚、未之有也、與此經皆以養老而言

以訓則昏　鼎曰、昏以行禮言之、所謂德禮之悖、即昏也、僖十一年左傳、禮國之幹也、敬禮之興也、不敬則禮不行、禮不行則上下昏、何以長世、又哀十五年傳、子貢曰、君其不沒於魯乎、夫子之言曰、禮失則昏、名失則愆、失志爲昏、失所爲愆、生不能用、死而誄之、非禮也、稱一人非名、君兩失之、宜三年傳、桀有昏德、鼎遷于商、毀祀六百、商紂暴虐、鼎遷于周、德之休明、雖小重也、其姦回昏亂、雖大輕也、天祚明德、有底止也、

不宅於善　不宅今文作不在、左傳作不度、鼎按、宅度古文通用、大雅文王有聲、宅是鎬京、禮記書宅爲度、鄭緇人註引書分命和仲度西曰柳穀、度陸氏音宅、韻會小補引漢書注云、古文度宅同、按字典、度宅古文俱作宅庀、則亦知其古文同也、

得志　今文作雖得之君子不貴也

富貴浮雲　論語述而篇不義而富且貴於我如浮雲、

味食　鼎按味食也、文二十六年左傳、楚王故味於一來、

言思可道行思可樂　邢昺曰、道、謂陳說也、樂、謂使人悅服也、論語學而篇、君子不重則不威、正與此章相發

言則思忠　論語季氏篇、言思忠、事思敬、

言必信　論語子路篇言必信、行必果、意與此不同、德誼可象　誼一作儀、在氏傳作行、

容止可觀　孔傳、容止、威儀也、雜記、威容稱其服、鄭注、容威儀也、士相見、容彌恭、鄭注容謂趨翔、正其衣冠　論語堯曰篇、君子正其衣冠、尊其瞻視、儼然人望而畏之、

以臨其民、左傳作其下、

君有君之威儀以下、　見于襄三十一年左氏傳、

能有其國家　能有國家以下、北宮文子語、見襄三十一年左氏傳、公鉏敬其朝夕、恪居官次、

祖菲　檀弓云、祖於庭、葬於墓、祭道神曰祖既葬後反奠　雜記、士三月而葬、是月也卒哭、大夫三月而葬、五月而卒哭、諸侯五月而葬、七月而卒哭、士三虞、大夫五、諸侯七、

在醜不爭　襄公十三年左傳、世之治也、君子尚能而讓其下、小人農力以事其上、是以上下有禮、而讒匿黜遠、由不爭也、謂之懿德、及其亂也、君子補其功以加小人、小人伐其技以憑君子、是以上下無禮、亂虐並生、由爭善也、謂之昏德、國家之敝、恒必由之、案爭爭善也

繇　案固疑由訛、繇猶由三字通用

五刑章

祭義曰、衆之本教曰孝、其行曰養、養可能也、敬爲難、敬可能也、安爲難、安可能也、卒爲難、父母既沒、愼行其身、不遺父母惡名、可謂能終矣、仁者仁此者也、禮者履此者也、義者宜此者也、信者信此者也、強者強此者也、樂自順此生、刑自反此作、案以首章有身體髮膚不敢毀傷之言、乃言不孝之罪必及刑辟以戒之、

子曰五刑之屬三千　呂刑曰、墨罰之屬千、劓罰之屬千、剕罰之屬五百、宮罰之屬三百、大辟之屬二百、五刑之屬三千、王制曰、刑者侀也、侀者成也、一成不可變、張逸曰、夏三千、周二千五百、長孫無忌律疏序、夏刑三千條、案穆王訓夏贖刑、其書曰、五刑之屬三千、是夏刑三千也、周禮司刑、掌五刑之法、墨罪五百、劓罪五百、宮罪五百、刖罪五百、殺罪五百、是周二千五百也

罪莫大於不孝　孔氏云、言不孝之罪大於三千之刑也、案、此言不孝之罪、於三千刑中爲最大焉、非謂三千條外別有不孝之刑也、周禮大司徒、以鄉八刑糾萬民、一曰不孝之刑、賈公彥疏不孝之刑者、有不孝於父母者則刑之、孝經不孝不在三千者、深塞遊源、此亦一說、

要君者亡　孔安國曰、要約勒也、按小雅斯干、約之閣々、傳、約束也、釋名、勒絡也、絡其頭而引之也、字彙、有銜曰勒、論語、孔子曰、臧武仲以防、求爲後於魯、雖曰不要君、吾不信也、孔安國曰、防臧武仲故邑也、爲後立後也、魯襄公二十三年、武仲爲孟氏所譖、出奔邾自邾如防、使爲以大蔡納、請云、紇非能害也、知不足也、非敢私請、苟守先祀、無廢二勤、敢不辟邑、乃立臧爲、紇致防而奔齊、此所謂要君也、朱熹曰、要有挾而求也、著不得請、則將據邑以叛、是要君也、表記曰、子曰、事君三違、而不出竟則利祿也、人雖曰不要、吾弗信也、

非孝者亡親　按孔傳以親爲親愛、

不恥不畏　糞辭、子曰小人不恥不仁、不畏不義、

利莫害莫　管子正世篇、夫利莫大於治、害莫大於亂、

其親　鼎按親當作身、聲之誤也、今案據任法篇之言作親爲是、

廣要道章

按存於已則先修德而後行道、施於人則先行道而後示德、是至德要道之所以互爲先後也

敎民親愛　曹伊訓、立愛惟親、立敬惟長、始于家邦、終于四海

風俗　周禮合方氏疏、風謂政敎所施、故曰、上以風化下、又云、風以動之、俗謂民所承襲、故曰、君子行禮、不求變俗也、樂記曰、樂也者、聖人之所樂也、而可以善民心、其感人深、其移風易俗、故先王著其敎焉、又云、樂行而倫清、耳目聰明、血氣和平、移風易俗、天下皆寧、說苑云、觀其俗而知其風、

屏息　論語鄉黨篇、屏氣似不息者、

深思遠慮

上下亂　孟子曰、無禮義則上下亂

安上治民莫善於禮　經解、禮之於正國也、猶衡之於輕重也、繩墨之於曲直也、規矩之於方圓也、故衡誠縣、不可欺以輕重、繩墨誠陳、不可欺以曲直、規矩誠設、不可欺以方圓、君子審禮、不可誣以姦詐、是故隆禮由禮、謂之有方之士、不隆禮不由禮、謂之無方之民、敬讓之道也、故以奉宗廟則敬、以入朝廷、則貴賤有位、以處室家、則父子兄弟和、以處鄉里、則長幼有序、孔子曰安上治民、莫善於禮、此之謂也、又云、禮之敎也（按敎字下疑有化字）、其正邪也（按邪字作事字）於未形（按形字作萌字）使人日徙善遠罪、而不自知也、是以先王隆之也、郊特牲、男女有別、然後父子親、父子親然後義生、然後禮作、禮作然後萬物安、樂記志曰、人函天地陰陽之氣、有喜怒哀樂之情、天稟其性、而不能節也、聖人能爲之節、而不能絕也、故象天地而制禮樂、所以通神明立人倫、正情性節萬物者也、人

性有男女之情、妬忌之別、爲制婚姻之禮、有交接長幼之序、爲制鄉飲之禮、有哀死思遠之情、爲制喪祭之禮、有尊尊敬上之心、爲制朝覲之禮、哀有哭踊之節、樂有歌舞之容、正人足以副其誠、邪人足以防其失、故婚姻之禮廢、則夫婦之道苦、而淫辟之罪多、鄉飲之禮廢、則長幼之序亂、而爭鬪之獄蕃、喪祭之禮廢、則骨肉之恩薄、而背死忘先者衆、朝聘之禮廢、則君臣之位失、而侵陵之漸起、故孔子曰、安上治民、莫善於禮、移風易俗、莫善於樂、

禮者敬而已矣　愷十一年左傳、禮國之幹也、敬禮之輿也、行不敬則禮不行、禮不行則上下昏、詩曰、愷悌君子、按君子禮樂以成德、故樂易于人也、禮表記、愷以弼教之、悌以說安之、梓材、王惟德用、和懌先後迷民、

禮經三百　禮器曰、經禮三百曲禮三千、其致一也、中庸曰、禮儀三百、威儀三千、春秋說、禮經三百、威儀三千、禮說正經三百動儀三千、

殊事　樂記曰、禮者殊事合敬者也、樂者、異文合愛者也

說　案說謂感動欣喜、與於孝弟也、縞衣曰、長民者、章志貞教尊仁、以子愛百姓、民致行已以說其上矣、

子弟臣　祭義曰、祀乎明堂、所以教諸侯之孝也、食三老五更於大學、所以教諸侯之弟也、朝覲、所以教諸侯之臣也、樂記曰、祀乎明堂而民知孝、朝覲然後諸侯知所以敬、食三老五更於大學、天子袒而割牲、執醬而饋、執爵而酳、冕而總干、所以教諸侯之弟也、注、三老五更皆老人、更知三德五事者也、

廣至德章

案、禮記仲尼燕居曰、古之君子、不必親相與言也、以禮樂相示而已、鄉飲酒義云、民知尊長養老、而后乃能入孝弟、民入孝弟、出尊長養老、而后成教、成教而后刑可安也、君子之所謂孝者、非家至日見之也、合諸鄉射、教之鄉飲酒之禮、而孝弟之行立矣、

蛟龍得水　管子形勢篇、蛟龍得水、而神可立也、虎豹得齒、而威而可載也、解曰、蛟龍水蟲之神者也、乘於水則神立、失於水則神廢、人主天下之有

威者也、得民則威立、失民則威廢、蛟龍待得水、而後立其神、人主待得民、而後成其威、

三老五更　文王世子曰、設三老五更群老之席位焉、鄭注、三老五更各一人也、皆年老更事致仕者也、天子以父兄養之、示天下以孝悌也、名以三五者取象三辰五星、天所因以照明天下者、群老無數、其禮亡、以鄉飲酒禮言之、席位之處、則三老如賓、五更如介、群老如衆賓必也、孔疏、三老五更各一人、蔡邕以爲更字爲叟、叟老稱、又三老爲三人、五更爲五人非鄉義也、三辰謂日月星、五星謂東方歲星、南方熒惑、西方太白、北方辰星、中央鎮星、其三辰之星者、二十八宿及諸星也、三老如賓、五更如介、按鄉飲酒注、敞席、賓席牖前南面、介席西階上東面是也、舉老如衆賓、按鄉飲酒注、席衆賓於賓之西南面、各特焉是也、樂記、食三老五更於大學、鄭注、三老五更、互言之耳、皆老人更知三德五事者也、孔疏、三老五更互言之耳者三老亦五更、五更亦三老、故云皆老人、更知三德五事者也、三德正直剛柔、五事謂貌言視聽思也、文王世子注云、象三辰五星者、義相包、漢書禮樂志、養三老五更於辟雍、李奇曰、王者父事三老、兄事五更、蔡邕曰、五更之更當爲叟、案列子禾生伯子出行經堌、外宿於田更、又嫂字晉帖作姬、則知其說之非、白虎通鄉射篇、王者父事三老、兄事五更者何、欲陳孝悌之德、以示天下也、又曰、不正言父兄、言五更者何、老者、壽考也、欲言所合者多也、更者、更也、所更歷者衆也、即如是不但言老也、五更者欲言三何、欲言其明於天地人之道而老也、五更幾人乎、言其明於五行之道、而更事也、三老五更各一人、何以知之、既已父事、父一而已、不宜有三、又王者不臣篇、不臣三老五更者、欲率天下爲人子弟、禮曰父事三老、兄事五更、鼎按言五之間、疑脫三老二字、邢昺疏、按舊注用應劭漢官儀云天子無父、父事三老、兄事五更、

皇尸　既醉傳、公尸天子以卿言諸侯也、箋曰、諸侯有功德者、入爲天子卿大夫、故云公尸、公君也、又曰君致齊於外、夫人致齊於內、然後會於大廟、君純冕立於阼、夫人副褘立於東房、君執圭瓚祼尸、大宗執璋瓚亞祼、又曰、及入舞君執干戚就舞位、君爲東上、冕而總干、率其群臣、以樂皇尸、夫祭

之道、孫爲王父尸、所使爲尸者、於祭者子行也、父北面而事之、所以明子事父之道、郊特牲云、尸神象也、祭統云、尸在廟門外、則疑於臣、在廟中則全於君、君在廟門外、則疑於君、入廟門、則全於臣全於子、是故不出者、明君臣之義也、

天子祖而　樂記及祭義文、

詩云　案君子禮樂以成德、故樂易于人也、梓材、王惟德用、和懌先後迷民、禮表記、愷以弼教之、悌以說安之、

樂易　毛詩傳云樂以弼教之、易以說安之、民皆有父之尊、有母之親、正義云皆孔子閒居之文也、樂者人之所愛、當自弼以教之、易謂性之和悅、當以安民、故云悅安之、鼎曰、孔子閒居當爲表記、

應感章

廣韻感動也、从心咸聲、增韻格也觸也、易雜卦咸速也

明察　吳澄云、明察、謂于其禮其義能精審也、案禮器曰、五獻察、鄭五獻祭四望山川也、方慤曰、四望山川地道、故言察、

克明厥德　尚書謂任用俊德之士、故傳改俊爲厥

天地明察　漢郊祀志、禮記曰、燔柴於太壇、祭天也瘞薶於太折、祭地也、兆於南郊、所以定天位也、祭地於太折在北郊、就陰位也、郊處各在聖王所都之南北、書曰、越三日丁巳、用牲于郊、牛二、周公加牲告徙新邑、定郊禮於雒、明王聖主、事天明事地察天地明察神明章矣、

鬼神章矣　御注云、事天地能明察、則神感至誠而降福佑、故曰彰矣、疏、明王之事天地、既明察、必致齍應、則神明之功彰見、謂陰陽和風雨時、人無疾厲、天下安寧也、

王肅家語注、章別也、禮運曰、祭帝於郊、所以定天位也、祀社於國、所以列地利也、祖廟、所以本仁也、山川、所以儐鬼神也、五社、所以本事也云云、故禮行於郊、而百神受職焉、禮行於社、而百貨可極焉、禮行於祖廟、而孝慈服焉、禮行於五祀、而正法則焉、故自郊社祖廟山川五祀、義之脩而禮之藏也、是故夫禮必本於太一、分而爲天地、轉而爲陰陽、變而爲四時、列而爲鬼神、其降曰命、其官於天也、樂記曰樂者敦和、率神而從天、禮者別宜、居鬼而從地、故聖人作樂以應天、制禮以配地、禮

樂明備、天地官矣、

人神不擾　楚語古者民神不雜、

故雖天子必有尊也言有父也　孔穎達祭義疏、雖天子必有父也、注、謂養老也、祭義云、至孝近乎王、雖天子必有父、至弟近乎覇、雖諸侯必有兄、先王之敎、因而弗改、所以領天下國家也、注天子有所父事、諸侯有所兄事、謂若三老五更也、曾子問、孔子曰、天子巡守、以遷廟主行、（藏字亦作埋字）藏於齊車、言必有尊也、注、齊車金輅也、

宗廟致敬不忘親也　祭義曰、築爲宮室、設爲宗祧、以別親疏遠邇、敎民反古復始、不忘其所由生也、脩身愼行恐辱先也　祭義曰、樂正子春云、惡言不出於口、忿言不反於身、不辱其身、不羞其親、可謂孝矣、追孝繼思　坊記曰祭祀之有尸也、宗廟之有主也、示民有事也、修宗廟、敬祀事、敎民追孝也、祭統曰、祭者所以追養繼孝也、

鬼神著矣　鼎案、著者、謂洋々乎如在其上、如在其左右也、祭義曰、骨肉斃于下、陰爲野土、其氣發揚于上、爲昭明、焄蒿悽愴、此百物之精也、神之著也、吳澄曰、著、猶祭義致慤則著之著、如見所

祭也、彰謂微之顯、洋々乎如在其上、如在其左右也、

依歸　金縢我先王亦永有依歸、又昭七年左傳、子產曰、鬼有所歸、乃不爲厲、

光於四海　祭義、曾子曰、夫孝、徧之而塞乎天地、溝之而橫乎四海、施諸後世、而無朝夕、推而放諸東海而準、推而放諸西海而準、推而放諸南海而準、推而放諸北海而準、詩云自西自東、自南自北、無思不服、注、放猶至也、

厲鬼　癘鬼禰同、無後鬼也、春秋傳曰、鬼有所歸、乃不爲厲、祭法云、王爲群姓立七祀、曰泰厲、疏云、謂古帝王無後者也、此鬼無所依歸、好爲民作禍、故祀之、

詩　案陳暘解泮水第七章云、隆禮樂之敎于西雝、而自西自東、自南自北、無思不服者、近者悅之、遠者懷之、大學之道也、

廣揚名章

求忠臣　後漢書韋彪傳彪上議曰、夫國以簡賢爲務、賢以孝行爲首、孔子曰事親孝、故忠可移於君、是以求忠臣、必於孝子之門、注、求忠臣於孝子之門、

孝經緯之語也代酢編云、

君子事親孝故忠可移於君　祭統云、內盡於已、而外順於道也、忠臣以事其君、孝子以事其親、其本一也、曾子立孝曰、是故未有君、孝子以事其親、其本一也、曾子立孝曰、是故未有君、而忠信可知者、孝子之謂也、未有長、而順下可知者、悌弟之謂也、未有治而任可知者、先脩之謂也、故孝子能事君、悌弟能事長、君子一孝一悌、可謂知終矣、

居家而理　曾子立事云、是故君子、爲小由爲大也、居由仕也、備則未爲備也、而勿慮存焉、事父可以事兄、事兄可以事師長、使子由使臣也、使弟由使承嗣也、能取朋友者、亦能取所予從政者矣、賜與其宮室、亦由慶賞於國也、忿怒其臣妾、亦由用刑罪於萬民也、是故爲善必自內始也、荀子大略篇、賜予其宮室、猶用慶賞於國家也、忿怒其臣妾、猶用形罰於萬民也、大學、君子不出家、而成教於國、言治以下　管子明法解、

父頑母嚚　堯典父頑母嚚象傲、克諧以孝、烝々乂不格姦、

閨門章

閨、說文曰、特立之戶、上圜下方、有似圭、玉篇、宮中門小者曰閨、左傳、篳門閨竇、又通作圭、禮儒行、篳門圭竇、注、小戶如圭形、

子曰閨門之內具禮矣乎　鼎按此章言聖人之所以治天下、父子君臣之禮、咸備具於閨門之內、所謂居家而理、故治可移於官也、

夫禮　隱十一年左氏傳文、

嚴親嚴兄　坊記云、子曰、父子不同位、以厚敬也、書云、厥辟不辟、忝厥祖、注、爲君不君、與臣子相斁、則辱先祖矣、君父之道、宜尊嚴、家人有嚴君　易家傳云、家人有嚴君焉、父母之謂也、父謂　按謂疑當爲爲、聲之誤也、

諫爭章

白虎通、諫間也、更也、是非相間、革更其行也、說文曰、諫止也、謂能止其失也、

若夫　疏、若夫慈愛、並却明前理、而下有其趣、故言夫以起之、劉瓛云、夫猶凡也、鼎按、夫有所指之辭、

疑思問也　論語季氏篇文、

可否相濟　昭二十年左傳、晏子曰、君所謂可、而有否焉、臣獻其否、以成其可、君所謂否、而有可焉、臣獻其可、以去其否、是以政平、而不干、民無爭心、又云、以水濟水、誰能食之、鄭語、和實生物、同則不繼、

疑丞輔弼　尚書大傳古者天子必有四鄰、前曰疑、後曰丞、左曰輔右曰弼、天子有問無以對責之疑、可志而不志責之丞、可正而不正責之輔、可揚而不揚責之弼、其爵視卿、其祿視次國之君也、文王世子、虞夏商周、有師保、有疑丞、

一日萬機　皐陶謨、一日二日萬機、

過而能改　宣二年左傳、士季曰人誰無過、過而能改、善莫大焉、

訾食　管子形勢篇小謹者不大立、訾食者不肥體、註、訾惡也、惡食之人、憂嫌致瘠、劉績曰、訾疾移切、嫌食而多惡、形勢解、訾者、多所惡也、諫者、所以安主也、食者、所以肥體也、主惡諫則不安、人訾食則不肥、故曰訾食者不肥體、注、訾疾移切、嫌食貌、按韻會小補、訾、蔣氏反、引說文毒也、徐以爲呵訾之義、又疾之反、毒也、瑕也、字彙又見呲字、疾移切音慈、嫌食貌、並而觀之、訾訾呲呲四字、音義通用也、

降殺以兩　管子言作兩等、哀二十六年左氏傳鄭伯賞入陳之功享子展賜之先路三命之服、先八邑、賜子產次路再命之服、先六邑、子產辭邑曰、自上以下、降殺以南、禮也、

誰非堲人　晉王逸曰人非堯舜、誰無過、宣二年士會諫靈公曰、人誰無過、過而能改、善莫大焉、

宗老　邢疏引此傳作室老、按宗老即宗人之老、魯語、公父文伯之母、欲室文伯、娶其宗老、師亥云宗室之謀、不過宗人、

以家爲號　按周禮天官家宰九賦、四曰家削之賦、疏、二百里之外地名削、其中有大夫采地、謂之家、故名家削、又宇彙大夫之邑曰家、

忠告、論語顏淵篇忠告而以善道之、包咸曰、忠告以是非告之、以善道道之、

父有過　內則云父母有過、下氣怡色、柔聲以諫、諫若不入、起敬起孝、論語里仁篇、事父母幾諫、見志不從、又敬不違、勞而不怨、

而不從　鼎曰而猶之、

號泣而後之　曲禮子之事親也、三諫而不聽、則號泣而隨之、

必犯嚴顏　檀弓事君有犯而無隱、
三諫　曲禮云爲人臣之禮不顯諫、三諫而不聽、則逃之、
奉身退　二十六年左傳云臣之祿君實有之、義則進、否則奉身而退、專祿以周旋、戮也、
尸位　五子之歌大康尸位、漢許后傳曠職尸官、師古注尸主也、妄主其官、

事君章

案史記管晏列傳、論列二子行事、而管子則曰善因禍而爲福、轉敗而爲功、晏子則曰國有道即順命、無道即衡命、而贊乃引語曰、將順其美、匡救其惡、故上下能相親也、以繫於管子、引進思盡忠、退思補過、以繫諸晏子、太史公蓋亦有取於此章之旨爾、晉語史黯對趙簡子曰、夫事君者、諫過賞善、薦可而替否、獻能而進賢、擇才而薦之、朝夕誦善敗而納之、道之以文、行之以順、勒之以力、致之以死、聽則進、否側退、
思補過　御注以爲君過是矣、烝民詩曰、袞職有闕、維仲山甫補之、傳云、仲山甫補之、善補過也、宣二十年左氏傳、士會諫靈公曰、人誰無過、過而能改、善莫大焉、詩曰、袞職有闕、惟仲山甫補之、能補過也、君能補過袞不廢矣、宣十二年左氏傳、士貞子曰、林父之事君也、進思盡忠、退思補過、社稷之衛也、
有犯無隱　檀弓曰事君有犯而無隱、
獻可替否　昭二十年左氏傳、晏子云君所謂否、而有可焉、臣獻其可、以去其否、
將順匡救　鼎曰將讀爲奬、春秋僖公二十八年左傳、要言曰、皆奬王室、無相害也、杜注、奬助也、陸德明奬將丈反、孔穎達曰、勠奬者、佐助之意、故爲助也、字彙、子兩切音奬、詩大雅、天不我將、哀紀、奬屬大子、師古曰、奬勠使也、字彙資良切、助也、相如傳、補過將美、洛誥、迪將其後、傳、敘道將助我今已後之政、按少儀、爲人臣下者、有諫而無訕、有亡而無疾、頌而無謟、諫而無驕、怠則張而相之、廢則壞而更之、謂之社稷之役、鄭注頌謂將順其美也、驕謂言行謀從、恃知而慢之、
清法　荀子解蔽篇、中心不定、則外物不清、注清明審也、呂刑、皇帝清問下民、孔傳、帝堯詳問民患、

無過之地　禮運之文、
詳才量能　管子君臣篇、論材量能、謀德而與之、
上之道也、專意一心、守職而不勞、下事之也、
謨明弼諧　皐陶謨、
有道之君　管子君臣篇、有道之君、正其德以莅民、而不言智能聰明、智能聰明者、下之職也、所以用智能聰明者、上之道也、
詩云　表記云、子曰事君遠而諫則謗也、近而不諫則尸利也、又曰事君欲諫、不欲陳、詩云心乎愛矣、瑕不謂（謂字下郭有矣字）、中心藏之、何日忘之、

喪親章

哭不依　雜記曰、曾申問於曾子曰、哭父母有常聲乎、曰、中路嬰兒失其母焉、何常聲之有、注、嬰猶鬣彌也、言其若小兒亡母啼號、安得常聲乎、所謂哭不依、陸德明云、依、於豈反、說文慼、云痛聲、又廣韻、於豈反、集韻韻會、隱豈切並音扆、哭餘聲、禮雜記、童子哭不依、又開傳大功之哭三曲而依、鄭注、三曲一舉聲而三折也、依聲餘從容也、按大功哀殺、故哭聲宛依、童子未能聲（聲字上郭有依字）、直遂其哀而已、按漢書天文志、哀烏、甘氏星經作依烏、依亦音哀也、曹植詩、君懷良不開、賤妾當何依、可證、
禮無容　禮器云至敬無文、父黨無容、士相見注、容謂趨翔也、案禮謂威儀也、
斬衰之哭　開傳云斬衰之哭、若往而不反、齊衰之哭、若往而反、大功之哭、三曲而偯、
言不文　喪服四制曰、三年之喪、君子不言、書云、高宗諒闇、三年不言、此之謂也、然而言不文者、謂臣下也、又曰、禮、斬衰之喪、唯而不對、齊衰之喪、對而不言、大功之喪、言而不議、緦小功之喪、議而不及樂、雜記亦云、三年之喪、言而不語、對而不問、
眼美不安聞樂不樂食旨不甘此哀戚之情也　問喪云夫悲哀在中、故形變在外也、痛疾在心、故口不甘味、身不安美、
稱情立文　三年問云三年之喪何也、曰稱情而立文表飾中情　曾子問君子禮以飾情、
衰麻在身　表記云君子衰絰、則有哀色、端冕則有敬色、甲胄則有不可辱之色、
明有內發　白虎通喪服篇、服者思從內發、故爲之

制也、

三日而食　開傳云、斬衰三日不食、孔疏云、不食者、謂三日之內、孝經云云、謂三日之外乃食也、

水漿不入　檀弓、子思曰君子之執親之喪也、水漿不入於口者三日、又問喪云、水漿不入口、三日不舉火、

聖人立制　三年問云先王焉爲之立中制節、

足文理　襄二十五年左傳言以足志、文以足言、杜注、足猶成也、

不滅性　檀弓云、喪不慮居、爲無廢也、毀不危身、爲無後也、雜記云、毀瘠爲痛、君子弗爲、毀而死、君子謂之無子

杖然後起　檀弓文、

不勝喪　曲禮云、不勝喪、乃比不慈不孝、

二十五月而畢　三年問云三年之喪、二十五月而畢、若駟之過隙、然而遂之、則是無窮也、故先王焉爲之立中制節、壹使足以成文理、則釋之矣、

俯就企及　檀弓子思曰先王之制禮也、過之者、俯而就之、不至焉者、跂而及之、喪服四制、賢者不得過、不肖者不得不及、此喪之中庸也

爲之棺槨　孔顥達以槨字爲句、衣衾連下讀、得傳意矣

衣衾以舉之　檀弓曰、扶君、卜人師扶右、射人師扶左、君薨以是舉、

簠簋　鄭注周禮云、方曰簠、圓曰簋、疏云、簠、內圓外方、簋、內方外圓、皆受斗二升、旅人云、爲簋、實一觳、豆實三而成觳、豆四升、三豆則一斗二升可知、周官舍人、凡祭祀、共簠簋、注、方曰簠、盛黍稷稻粱器、賈公彥疏云、案公食大夫、簠成稻粱簋盛黍稷、少牢疏引孝經注云、外方曰簋、孝經緯鉤命決云、敦規首、上下圓相連、簠簋、上圓下方、法陰陽、小牢注、敦有首者、簋者器飾也、飾蓋象龜、周之禮、飾器各以其類、龜有上中下甲、疏、敦蓋既象龜、明簠亦象龜爲之、考工記、瓬人爲簋、實一觳崇尺、厚半寸、釋云、祭宗廟皆用木簋、今此用瓦簋、據祭天地及外神尚質、器用陶匏之類也、按簋法圓、舍人云、方曰簠、圓曰簋、注與此合注指掇卦注孝經注曰、內圓外方者彼發簠而言之、

哭泣擗踊哀以送之　問喪云、三日而斂、在牀曰尸、在棺曰柩、動尸舉柩、哭踊無數、惻怛之心、痛疾之意、悲哀志懣氣盛、故祖而踊之、所以動體安心下氣也、婦人不宜祖、故發胸擊心爵踊殷々田々、如壞牆然、悲哀痛疾之至也、故曰辟踊泣哀以送之、辟字上當有哭字下衍有踊字　案士喪禮、筮宅卜此經則據大夫以上而言也、小宗伯疏、孝經云卜其宅兆、注、兆以爲龜兆解之、此兆爲墓塋兆者、彼義得兩合、相兼乃具、經云、卜葬兆、甫竈亦如之、注、兆墓塋域、唐子西曰、古人建都邑立宅冢、未有不擇地者、如晉達觀新邑營、卜瀍澗之西、詩升虛望楚、降觀于桑、度其隰原、觀其流泉、蓋自三代時已然矣、今凡通都大府、山水固皆叢聚、至於百家之邑、十室之市、亦必倚山帶溪、氣象四合、若風氣虧疏、山水飛走、則必無人烟起聚、此誠不可不擇也、乃若葬者藏也、藏者欲人之不得見也、古人之所謂卜其宅兆者、乃孝子慈孫之心、謹重親之遺體、使他日不爲城邑道路溝渠耳、借曰精擇、亦不過欲其山水回合、草木茂盛、使親之遺體得安耳、豈籍此以求福利乎、琅琊代醉編

飯於牖下　檀弓云子游曰飯於牖下、小斂於戶內、大斂於阼、殯於客位、祖於庭、葬於墓、所以即遠也、語亦出坊記、而首多浴於中霤一句、

漏水　御注疏引此傳、作有伏石涌水、

以鬼享之　祭義云、君子生則敬養、死則敬享、注、享猶祭也鄉也、陸云鄉也許亮反、鼓人以路鼓々鬼享、注鬼享、々宗廟也、鼎云、謂之鬼享者、以別天神地示也、

春秋祭祀　閟宮箋、春秋猶言四時、

春雨既濡　祭義云霜露既降、君子履之、必有悽愴之心、非寒之謂也、春雨露既濡、君子履之、必有怵惕之心、如將見之、

桓譚新論云、古孝經千八百七十二字、今異者四百餘字、炫本止千八百七字、異今文僅二十餘字、孫本云異二十餘字者、即古文也、其異四百餘字者、或云張霸僞書、

愛日齋隨筆孝經說終

武藤　嚴男　仝校
井田　幸男　仝
古城　貞吉　重校

太平策卷之一

水斯立著

天下

天下者天下之天下、非一人之天下、故能以天下治天下者、天下太平、若以一人智力之所及治天下、則小康或有之、大同則未也、以天下治天下之道有二、曰用人、曰求言、人與言則下之所有、用人求言、則上之任也、昔者堯能用舜、舜能用禹、湯用伊尹、武王用太公、桓公用管仲、高祖用三傑、先主用諸葛亮、聖帝明王、英雄之主、賢諸侯、皆能用人、故能成其治、古者諫無官、上自公卿輔弼、下至官屬小吏、百工之徒、莫不得諫、而尚以爲未足、於是敢諫之鼓、誹謗之木設矣、逈芻蕘之言聖人擇焉、唐虞三代、莫不皆然、高祖雖不學、從諫如流、提三尺劍、以取天下者、非其威武能過秦項、以其不自用而能用人、不自信而能從諫也、故能用人取言者、視不以一人之目、而以天下之目、聽不以一人之耳、而以天下之耳、憂樂好惡、不以一人之情、而以天下之情、捨已從人、同人于野、是以天下治天下之道而已、然則堯舜其君、堯舜其民者、四海之內、孰不任其責、在廟堂之上、則措之事業、親致稷契之功、在山林之下、則託之絃歌、遠慕顏閔之志、用捨有命、行藏有時、至以天下爲心、則未嘗有異也、經綸之業、臺鼎之任、每苦不足、居遂衣白之士、坐而學之有餘、衣冠之人不必賢、草萊之人不必不肖、惟在其人如何已、夫人主之心、欲天下之太平、是常情也、非聖賢之君如此、雖中才庸主亦然、故帝王未有不欲太平之治者、雖然治日常少、亂日常多、太平之化、堯舜擅美、指不再屈、是果何故乎哉、蓋人主錦衣玉食、居于深宮、金碧之色炫於目、絲竹之聲喧於耳、侍從之臣、歌詠蹴鞠、後宮婦人、傅粉施朱、拾珠翠以相摘、又有阿諛粧飾之臣、加以祥瑞之說、景星、慶雲、醴泉、甘露、嘉禾、瑞芝、天書、地寶、麟鳳、龜龍、虎豹、犀象、莫不悉備、表賀慶頌、積如丘山、自堂上至堂下、吁嵩歲者、紛紛相屬、文人好奇、仍附會其事、下筆著篇、仰贊聖德、以爲五帝不足六、三王不足四、於是人主高枕、謂天下已太平、元元已安樂、是以不求人於漁樵、不徵言於蓬蒿、泰然以爲安矣、然榮色之民、涕泣乎道路、指蒼蒼以自冤者幾千人、都鄙困窮、遠近騷動、

疾痛疴癢、莫所不至、惡在其爲太平乎哉、足寒傷心民寒傷國、呱々之子、上動天心、五穀不登、貨財不殖、水火盜賊之害、地震旱潦之變、皆天使之也、蒼々雖邈乎、吉凶應人、捷於影響、日月不違其行、陰陽不愆其度者、吉之道也、災異變常、可驚可怪者、凶之道也、苟紀綱未張、治化未洽、則雖五色之鳥翔翔其閣、一角之獸徘徊其庭、其爲不祥莫大焉、紀綱已張、治化已洽、則雖日食地震山崩川竭、又非所憂、況無之乎、漢儒爲洪範五行之學、專明災異、如日食君德之缺、地震民心之動、其說數十、皆瞭々可信、本之經、實有所據、然天人之道、幽明相函、或應或不、是其所以爲大也、漢儒乃一一比校、曰某應某、是亦滯泥不通、王安石以爲災異不足信、開人君今將之志、實爲春秋之罪人矣、故災異之變、竦動人主者、上天愛護國家之至、人主當夙夜修德以答寵靈、何必問其應不應、問其應不者、太史之守也、至於祥瑞之說、則使人君自聖、人君自聖則天下之耳目廢矣、視不以天下之目、而以一人之目、聽不以天下之耳、而以一人之耳、憂樂好惡、不以天下之情、而以一人之情、子立于殿陛之上、爲匹夫紂、豈不孤乎、是以明主必信災異、而却祥瑞、暗君必信祥瑞、而忌災異、不唯暗君、以光武之賢、頗信圖讖、人主之易惑、亦何甚焉、天下猶棋局然、故雖敗局未必無勝勢、雖勝局未必無敗勢、危亡大亂之世、必有創業一統之人、治平無事之日、必有大逆謀反之臣、以是觀之、人主危懼、日謹一日、朽索之御六馬、一絲之繫九鼎、未足況其不測之憂也、聖人之治天下、意匠慘憺、常以累卵爲心、有終身之憂、無一朝之患、堯以不得舜爲己憂、舜以不得禹皐陶爲己憂、文王視民如傷、禹思天下有溺者、由己溺之也、稷思天下有飢者、由己飢之也、伊尹思天下之民、匹夫匹婦有不被堯舜之澤者、若己推而內之溝中、周公思兼三王以施四事、有其不合者、仰而思之、夜以繼日、幸而得之、坐以待旦、蓋憂之一字者、王者之至寶、四海九州之永々不拔之業、悉皆在其中、何也者憂天下之未太平、欲其太平、猶渴者求水、饑者求食、雖欲徐々、不可得也、人君求太平、如是其急、擢才於草萊之中、徵賢於江海之濱者、自不能已、上不聾、下不暗、壅蔽決、言路開、下情上達、天下之耳目、兼聽並觀、始可共論太平之治也、太平之道二、人與

法而已、無法則不立、無人則不行、法者一立而不可易、用之能通其變者人也、先王之治、以人用法、後世之治、多不得人、故徒守法、律令科條、以維持之、吏挾簿書刀筆、以斷天下事、夫法本人之所制、久則必生弊、弊而不改、人爲法使、莫得有所爲、故人才能足包法之外、然後能用法、若以法爲主、庸々之倫、危坐守之、一旦有變、五色無主、不至敗亡者、亦幸矣、是以土地墝域之不廣、非朝廷之害也、金銀貨財之不殖、非國家之憂也、所患唯乏人耳、古今天下同天下也、豈古之多人、而今之乏人乎哉、其必有使之者也、夫人才不育則不成、不用則不見、學校敎化之道廢、所以育之者闕焉、郡國選舉之法廢、所以用之者熄焉、此二者乏人之由、天下大患、未有甚焉者、雖然十步之內、必有芳草、四海之廣、豈無俊才、故雖學校荒廢、育才之道、不復修、其天才超衆、自能學問、以成其才也、往々有之、有之而不用、則與無之同、樸楠橡樟之朽空谷、明珠大貝之委棄海濱、莫之採、識者惜焉、今有蹂蹈三尺文錦於泥塗之中者、人必痛心、遽取而洗之者、常情爲爾、文人在草萊之中、賢者之處衡茅之下、蹂蹈之類也、人主不遽取而洗之、又下土焉、可謂察於小、而昧於大矣、緜々之葛在於曠野、良工得之、以爲絺紵、良工不得、枯死於野、斲節長歎、夫何有終極乎哉、君子之所學者古也、所用者今也、若用之則非相將不可、不用則嚴穴、巖穴雖僻、蒿萊雖陋、君子居之、發其所能、以爲文章、藏之名山、託於不朽、孔子若王、春秋不作、子雲若相、太玄不成、是豈有所損乎哉、自天下而言之、枯死之類也、相將之權、降爲家物、文武百僚皆世官、雖有命世之才、非搢紳貴族、不得登庸、搢紳貴族以父祖之蔭爲大官、不問其所學何如、春秋譏世卿、何者卿才不世有、況相將之才乎、工之子爲工、守高曾之規矩、天下豈可以高曾之規矩治乎哉、故以譜族取人、經無明文、雖於親々之道也厚、亦三代所無、蓋用人在擇才德而官之、才德之人、或在上、或在下、若例以譜族取人乎、四凶終不可去、傅說終不可舉、且欲備百僚之名、而不問才德之實、則莫如鑄金刻木爲人、而列於朝也、其容儼然、不爭不怒、且莫食祿之費矣、夫由匹夫、而登三公、解布衣而被文采、大丈夫之志願存矣、今三公匹夫、一定不可易、布衣文采、一服不可解、是摧折天下丈夫之志、

摧如死灰不復然、天下日趨于衰弊、滔々不返、如江河百折東下、其勢不可回也、誰能障之以掌乎、不知者謂、天子一姓、公卿世官、是可耳、太易之道、一君而二民、禮夫得再娶、婦不得再嫁、是故皇統綿々、永絶窺覦者、君道也、賢才更用、俊彥並進者、臣道也、臣擬君、欲其綿々、一何倨焉、聖人大寶曰位、何以守位、曰人、故王者之所以長久、不與麟鳳之祥、得人則治、失人則亂、國脈之所以壽、不與麟鳳之詳、得人則治、失人則亂、用賢才則盛、用譜族則衰、況親々、賢々、尊貴、其義一轍、並行不悖、皆所以用人之道乎哉、故官人以譜族、不以才德、厚於親々尊貴、而薄於賢々、夫唯賢々之道廢、國無賢才、被褐懷璧者、亦且晦迹於山林、以待後世聖人、君子視天下之盛衰、猶越人視秦人之肥瘠、始不相與也、治道學術、離爲二途者、始乎不能用人矣、自是而後衆疾並興、風俗蕭瑟、國勢不振、彷彿周季、誰敢謂不然、子思曰、聖人之官人、猶大匠之用木也、取其所長、棄其所短、人非聖人、孰能無瑕、惟能用其瑜、而不問其瑕、天下無棄人、是用人之道也、然不知人則不能用、故知人爲急、黃帝龍顏、顓頊戴午、帝嚳駢齒、堯眉八采、舜目重瞳、禹耳三漏、湯臂再肘、文王四乳、武王望陽、周公背僂、皐陶馬口、孔子反羽云者、相家小術、（非君子知人之方也、君子之知人於學、不以面貌、不以口辨、）不以年齒、不以譜族、觀其蠶業、才能可知、觀其踐履、德行可知、人焉廋哉、故治天下之道、用人爲先、用人之道、知人爲先、疑之勿任、任之勿疑、古人之言、豈不信乎、天下譬如一人、兵革譬如疾病、天下之經兵革亦多、每一兵革、天下之氣衰、王者改正朔、易服色、制禮作樂、所以扶天下之氣而盛之也、譬如人每一疾病元氣衰缺、補養調攝、漸復常也、昔者唐虞之化、至夏桀初衰、湯聖人也、故補養調攝至矣、故又盛矣、至紂再衰、武王周公聖人也、補養調攝至矣、故又盛矣、至戰國三衰、秦始皇非聖人、非聖人而創業天下者、始于始皇、不知所以補養調攝之、天下始不及古、秦而下、聖人之道不傳古今、於是乎鴻溝、今無兵革、則便以爲大平、是大不可、太平者、以禮樂之化言之、禮樂如時雨之化、人各得其所、鳥獸魚鼈咸若、草木條達、五日一風、風不鳴條、十日一雨、雨不搖塊、然後太平可得而言矣、天下之患在詳於近計、略於遠圖、近計者、其區畫在纔數年之間、

其事瞭然可行於目下、其利可舉足而待也、是刀筆吏之所務、非國體之所存矣、遠圖者、常慮數百年之久、制於未形、禁於未然、其狀如有之不爲益、無之不爲缺、而知若汲々恐不及矣、是大小之辨也、先立其大者、小者不能逃、故能識治道大體者、心能用人、錢穀簿書之繁、皆得良吏而任之、豈親小事耶、後世吏治、日極精工、彫刻天下、法律之書、可謂備矣、其長吏術者、非無數百年之慮、高祖之智、在良平之下、而其區處計畫、邈出乎良平之上、創業之主、率皆如此、其長策遠算、卓立於天下人情知見之所不及、名宰相之於天下亦然、吏治雖非先王之道、豈無遠圖乎哉、儒者傳先王之道、言必唐虞、其論治道、必根據經術、可謂昭々焉、而其大要本於人君修身、身修而舉而措之天下、緣飾以繫矩之說、仁政之論、是皆以德化民之言耳、非治道之體、以創業英雄之略、視之、其以爲腐儒陳言、莫之用者非誣矣宜也、故吏術雖小、能用之者有遠圖、先王之道雖大、陋儒用之、未免爲近計、宋人有御馬者、馬不進、拔劒頸而棄之於溝中、又駕一馬、馬又不進、又頸而棄之於溝、若是者三、以法威馬至矣、然非王良之法也、如何則無術也、使

今之儒者治天下乎、何以異諸、然是陋儒之末失也、非先王之道爲然、一妻一妾、雖不能養、三畝之園、雖不能芸、試之牛刀、必效所能、子曰、君子可大受、不可小知也、夫金石絲竹之聲、不奏乎聾者之側、山龍華蟲之文、不陳瞽者之前、故法律之世、天下爲法驅、欲東則東、欲西則西、莫不用命者、雖高世之才、屈首就中人之列、無所用其才矣、先王之道、不絕如綫、處士傳之、亦何衰矣、創業之主、名宰相、雖遠圖、用其智術、與吏術同、故其遠圖、或中或否、智有深淺、術有巧拙也、以先王比之、則其爲近計下策、固自若也、漢唐宋明雖盛、無復三代之風者、可知智術之不可恃、而先王之不可及也、先王之治、後天而奉天時、待風氣之開、其爲政、待人情之安、其用人、待才德之成、待才成而使之、待學成而用之、發乎持滿、溢乎既盈、古之道也、後世文治、不能待、爲政不問人情之安不安、用人不問才德之成不成、不待教而刑、不待學而仕、童子備官、弱冠爲相、未太平而稱祥瑞、是不能待之弊也、三十而娶、二十而嫁、古之制也、後世之人、率皆菲薄、婚約或在嬰孩、情竇早啓、情志早暢、嫁娶早成、三年之喪、亦古之制也、

後世短喪、至於易月以日也、蚤婚短喪、皆失禮之大者、而原之人情、始乎不能待焉、人情不忠則禮樂不文、先王之不可及者、果在此耶、兵家有機會、古之善用兵者、善待機會之臻、動而應之、擅脫兎之奇、若機會未至、百端計較、以求其得、雖十黃帝莫能爲焉、今夫腐儒者、熱則置之、待其冷而後啜之、不然必傷其舌、項籍屢勝而終大敗、高祖屢敗而終大勝、是待與不能待之辨也、士之爲學、有小有大、古之制也、如十五入大學、十三舞勺、成童舞象、二十舞大夏、皆待年數之滿、春夏秋冬、有業有學、各待其時、三代之教爲然、後世之學、結髮治性天之說、少壯厭藝業之煩、其病百出、原之人情、始乎不能待焉、甚矣哉、待之難也、故助長躁等、君子所戒、躁進小成、志士莫取、十年之謀種樹、是將待十年之後而用之、若年年用之、則無完木矣、後世人主、志不遠大、其用人、惟取充今日之用、以爲足矣、故天下之民、皆急於用、巫不致思於清淨、而專事禳禳、醫不潛心於素靈、而先務湯藥、爲君子者、視倣其陋、至於不務禮樂而講經濟、不讀墳籍而先力行、是皆不能待之過也、不待問而教也、至講說其弊極矣、不待聘而仕

也、至科舉其弊極矣、此二者衰世之事也、於是近計行、遠圖廢、因循佚樂、泄々殊甚、故求治渴賢、欲其急、而不求言、而責太平之效、欲其待也、後世不求太平、不渴賢、不求言、而責太平之效於今日、是可謂兩失之矣、君子思不出其位、政事得失吾不得而知焉、然太平之道、天下所共願也、太平必可致、唐虞必可則、三代必可復、名器綱常可必正、是豈賞罰法令之所能乎哉、又豈奇謀秘計、一朝一夕之所能乎哉、先王太平天下之道、教化爲大、古學校之制、彬々可觀焉、天下爲教化驅、猶風雨寒暑之入萬物、蕩々不知在和氣之中、君臣之義、父子之親、淪於骨髓、天下沛然、知大義之所在、不刑一人、而王者之政、可行於天下、教化不興、學問不明、君臣父子之道、昧於天下、廼奉政故也、夫表正者景自直、其必勉勵聖學、一以堯舜爲師、謹按庭帷帳之間、以培養治化之本、朝廷大典、遵由舊章、用人求言、殊出宸斷、斥小康之近計、念大同之遠圖、乾剛離明、霄旰匪懈、則先王在天之靈、以至海隅蒼生、神人以和、世登雍熙、是雖迂闊乎、默禱以待黃河之清者、豈啻乎哉、不然則蓬累而行、

學曠野之葛、嗚呼、執不欲太平哉乎、

太平策卷之二

水斯立著

古學校

先王之道、莫大於敎化、敎化之器、莫大於學校、學校譬如洪鑪、所以鎔鑄人才也、金得鎔鑄以成其器、人得鎔鑄以成其德、人無貴賤皆入洪鑪、詩書禮樂以陶鑄焉、大者大成、小者小成、莫不各充其量、各達其材也、天地爲鑪、萬物爲銅、陰陽爲火、造化爲工、其言雖荒唐、古之道也、廼以學校爲鑪、人材爲銅、禮樂爲火、敎化爲工、亦復爾爾、子雲曰、仲尼鑄顏淵、仲尼所鑄、洙泗三千、何啻顏淵、譬如粹曰之精米也、化粟爲米、精米爲白、相摩而成其白、何必粒々白之乎、顏淵雖賢、曰中之一粒、仲尼之粹何擇、況古學校之盛哉、風俗之樞機、太平之命脈、一在學校、辟雍泮宮、雖非聽政之堂乎、治道根本、賴以立矣、其實所以養天下之老、慈天下之幼也、子曰、老者安之、朋友信之、少者懷之、故養老乞言之禮、學校之本也、虞有上下、夏有東西、商有左右、周有大小、四代之制雖異乎、有大小之別者、未嘗不同也、所

養國老庶老、所奉大人童子、是其辨也、古者甚重冠禮、故冠者爲成人、以入大學、未冠者爲童子、以入小學、童子之學、必以小藝、聖人之學必以大藝、小大之序、君子之由、譬如登高、必自卑、譬如陟遠、必自近、譬猶練絲、染之藍則青、染之丹則赤、其質弼素、則其染弼文、青赤一成、眞色無異、以是觀天下、堂上而耳、上古至淳、天地之練絲哉、黃帝堯舜垂衣裳、以文治天下、青赤之染絲哉、文明之道盛、而至淳醨矣、太朴散矣、故太古之俗、不可用於文明之世、猶嬰兒之戲、不可用於成人之年、三墳雖大道乎、仲尼刪之不用、鴻荒神代、其事久遠、以練絲之俗、假嬰兒之言、自堯以後、視之則喃々不字、豈足揚于王庭乎哉、惟夫喃々不字、混沌之譜、是所以爲三千禮樂之元也、孩提之童、取筆書紙、倉頡未見之字生、發聲爲歌、伶倫未聞之律出、點畫不定、節拍不協、天機自動、天籟自鳴、是其爲練絲之絲也、八歲入小學、敎之歌舞、習之書字、其敎忠厚質朴、以培其根、養天然之眞、不假彫刻、不事文飾、及十五入大學、詩書禮樂以陶鑄焉、明德至善、其敎文華、孔子曰學之染人、甚於丹青、是之謂也、四十成德、織五采爲文錦、出仕服政、所以衣文錦而晝行也、七十致仕、歸老鄉里、爲小學師、或受養於大學、是所以反練絲乎、童子之時、龍門未鑿、皓首之後、呂梁既塞、練絲之學、不亦宜乎、一竅開而萬竅並開、一關通而萬關俱通、其唯大學青赤之間乎、先王之敎、有小大之學者、敎法之精、孰得間然、後世不得其意、徒泥其名、曰小學事也、大學理也、是妄說之大者也、道器一體、事理無間、故廢器與事、則道理無所寓、豈有敎事敎理、前後隔數年哉、夫敎學者虛名也、道德者空稱也、其實必資藝業、藝業有小而易者、童子學之、有大而難者、成人學之、初未嘗一日離藝業、子曰君子無終食之間違仁、造次必於是、顚沛必於是、子思曰道也者、不可須臾離也、可離非道也、樂記曰禮樂不可斯須去身、以斯三言者併而觀之、仁與道與禮樂、其辭雖異乎、所指適同、子之武城、聞弦歌之聲、夫子莞爾而笑、曰割雞焉用牛刀、子游對曰、昔者偃也、聞諸夫子曰君子學道則愛人、小人學道則易使也、孔氏注云、道謂禮樂、子曰志於道、據於德、依於仁、游於藝、又曰人能弘道、非道弘人、子貢曰文武之道、未墜於地、在人、賢者識其大者、不賢者識

其小者、莫大有文武之道焉、夫子焉不學、而亦何常師之有、斯數者皆以禮樂爲道、分而言之、道德仁者一定不可易矣、農民鄙俚質朴、彷彿乎太古之民、士治廉隅修禮節、比民爲文、自公卿搢紳而視之、士亦鄙俚質朴、天子玉文、反乎淳素、是而下文者處上、質者處下、猶古焉、小人之業、耕作釣漁、樵牧交易、百工奴僕、其事皆可數、皆所以奉上、而質素爲體、君子之業者、詩書禮樂而已、詩者歌詠諷誦、聲音節奏、書者簡冊文學、圖籍譜牒、禮者器數制度、威儀品節、樂者金石絲竹、干戚舞蹈、四者皆古聖人所作、至道寓焉、天下不可一日無者、聖人因以爲教化之具、學之者手々相傳、目々相示、至善之美、中和之妙、不言而喻、得之乎身、不亦善乎、四者之教、皆所以臨下、而文華爲體、不當古學校之教如此、雖孔門亦然、子曰、興於詩、立於禮、成於樂、又曰、詩書之不講、禮樂之不習、是丘之過也、子所雅（按疑衍下「所雅」二字）、詩書執禮、皆雅言也、子思曰夫子之教、必始於詩書、而終禮樂、雜說與焉、衛將軍文子曰、夫子之教人、先之以詩書、終之以禮樂、萇弘曰、堯舜文武之道、或弛而墜、禮樂崩喪、亦正其統紀而已矣、夫子聞之曰、吾豈敢哉、亦好禮樂者也、世家曰、修詩書禮樂、弟

子彌衆、是所以孔門全沿古學校之教、不襍它術之證也、述而不作、信而好古者信矣、大學之書、成於孔門、古學校之遺典、孔氏之遺書、惟此而耳、詩書禮樂、士子所通習、晝夜肄業、大學孔門、慣以爲常、故其書、惟論列所造之淺深、所得之先後、不及藝業、猶孫吳之書、論列用兵之情、不及陳營行伍兵革器械之制也、此數者皆兵家之常、戰國所習、故其書所論、只止其情、後世遂譯以爲大學之道不在藝業、而古書之論藝業者、不勝其多、悉拂去之、以係之小學、先王詩書禮樂之教、皆降屬未冠之童子、明德至善、正心誠意之類、係之大學、然此四者皆無形、師不可以教、弟子不可以學、不過爲點坐之別稱而耳、格物窮到事物、其說可謂盡矣、然藝業已係之小學、大學無事物、故以讀書議論處置類充之、讀書者四教之一也、詩禮樂拂而去之、以屬童子、獨留書係之大學、是不堪捧服、議論處置、古無之、孔子七十、不爲少、孔門三千、不爲寡、其平素問答、不過幾二十篇、不以議論可知也、古學校專設博士、四十初仕、其間無官責、無家事、無賓客、無往來、況雜事乎、故雖有處事之智、無所用、不以處置、亦可知也、漢唐雖建學

校、置生員、存古名、沿舊制、至教學之法者、亦唯讀書、捨之莫爲學、而頗忌其少、漠以專門立家、以多其類、元嘉之制、有儒學、有玄學、有史學、有文學、以充古四學之名、至唐有四庫之名焉、後世經生之學、拂四學而去之、獨留經係之大學、乃大學之道、日益削矣、經皆深奧、不可易解、是以講說之、欲早冷人也、凡性命之微、道義之蘊、孔子之所罕言、子貢之所雖聞、聰颺之口舌、人傾耳而信、操觚而錄夫道者、不可言、可語者影響耳、況不擇其人、不問其才、一以己說告之、學者之淺深、所受有限、豈可槩而告之哉、孔門不貴言、若言則必資其才、中其病問仁則一、而顏淵仲弓司馬牛其告不同、問孝則一、而孟武伯子夏子游其告又不同、是以人各得其所入、今講席知愚共集、告之皆一、縱令令其言沛然懸河、義窮明白、於學者猶爲無益、況不如此者乎、經筵進講雖崇學之盛事乎、無補聖學也明矣、況群講乎、惟乙夜觀覽、俯留神爽、徒徒賢儒以備顧問、是倍講說之功、不當什陌、天下所化自不能已也、學問之道、飛耳長目、古之遺言、後世乃有貴耳而賤目者、豈不異乎、中論曰、通乎郡藝之情質者、可與論道、識郡

蕘之華飾者、可與講事、事者、有司之職也、道者、君子之業也、先王之賤藝者、蓋賤有司也、君子兼之則貴也、故子曰、志於道、據於德、依於仁、游於藝、藝者心之使也、仁之聲也、義之象也、其道則君子專之、其事則有司共之、此藝之大體也、諸儒之論藝、未有如是言者也、禮之有有司、樂之有伶工、賤役也、然君子必就而學焉、何如者專攻其事以爲職者也、仲尼問禮於老聃、老聃者有司也、學琴於師襄、學樂於萇弘、師襄萇弘者、伶工也、有司伶工、雖至卑賤聖人師之、雖聖人師之、其卑賤固自若、所謂德成而上、藝成而下、何必揖讓登降以無禮、鏗鏘鼓舞、以爲樂乎哉、子曰、禮云禮云、玉帛云乎哉、樂云樂云、鐘鼓云乎哉、雖然是於藝業之中、殊揭其道而言之、未嘗離藝業矣、徒治藝業、專通一職者、有司之守、治藝業而通大道者、君子之事、兩者皆由藝業、瞽宗學禮、泮學干戈、太師學詩、典書者詔之、所以百工之有事於學校也、大學之師、三老五更、通三才五行之道者也、雖詔於天子無北面、書者神農師悉老、黃帝師大真、帝顓頊師綠圖、帝嚳師赤松子、帝堯師尹壽、帝舜師務成跗、禹師西王國、湯師伊尹、文王師

鉉時子斯、武王師太公、雖所傳不一、疑信相半、師道之久、可槩見已、記曰、三王四代唯其師、師嚴然後道尊、朝廷則尊君、家則尊父、鄉黨則尊老、學則尊師、古之制也、師必以長老之人、不長則不能上人、不老則不能熟業、長者師之道也、入學子弟以齒相序、長者處上、幼者處下、古學校孔門、一遵是法、夫年高則人儕之、年少則人狎之、是常情也、故雖有十奇甘茂之才、少年妙齡、不足以師之、況其下者乎、是以古之師皆高年老人、安坐受養於弟子而不辭、又執夏楚、以爵其不從者、尊嚴不可仰視、而師道立矣、師道立、而藝業進矣、學問成矣、是所以束修之誨夷待之叩也、禮天子父事三老、兄事五更、是太學之師也、其餘大學及鄉校、皆有師、亦以三老稱之、漢時新城三老董公、請爲義帝發喪、壺關三老、令狐茂上書、救戾太子皆鄉三老之遺也、後漢明帝以李躬爲三老、桓榮爲五更、安帝以李充爲三老、靈帝以袁逢爲三老、魏高貴鄉公以王祥爲三老、鄭小同爲五更、後魏孝文帝以尉元爲三老、游明根爲五更、後周武帝以于謹爲三老、其餘歷代、皆無三代之尊、三老五更也、天子親祖、割牲執醬而饋、執爵而酳、三公設几、九

卿正履、祝噫在前、祝噫在後、不啻三代如此、高貴鄉公時、三老祥南面几杖、以師道自居、天子北面乞言、周武帝時、幸大學養三老謹、三老入門、皇帝迎拜門屏之間、有司設三老席於中楹南向、太師晉國公護升階設几於席、三老升席、南面憑几而坐、大司寇楚國公寧升階正扆、皇帝升立於斧扆之前西面、有司進饌、皇帝跪設醬豆、親自祖割、三老食訖、皇帝又親跪、授爵以酳、有司徹訖、皇帝北面、立訪道、三老起坐於席後、皇帝曰、猥當天下重任、自惟不才、不知政治之要、公其誨之、三老答曰、不受繩則正、后從諫則聖、皇帝再拜受之、三老答拜、禮成而出、是尊師之大典、敎化之源也、故雖九五之尊、鞠躬俯伏、北面再拜、不敢視其面者、只三老、其次爲五更、天子尊師如此、是以天下之人、皆尊師勉學、天子不尊師、則天下之人皆不學、不學則禽獸、人倫不清、風化不扇、職是之由、後世儒者、皆以爲大學之道天子之事、明々德於天下云、新民云、民之父母云、盡係之天子、是使天子自聖、天子自聖、而師道廢矣、以堯舜之聖、每事必咨訪於四岳群牧、好問則裕、自用則小、故聖人之道、常在三老五更、天子就問、北面

受敎、是所以爲得人君之體也、雖人君以問爲職、可也、人君以聖人之道爲己職、則是以師自居、孟子所謂、好臣所敎之敎之類已、先王大知、以人治人、尊三老、所以敎天下之敬師也、而不與焉、至治道者人君之職也、後儒不知大學之道者、天子所師、以天子治道混說之、甚者至以治道爲聖人之道、是皆可謂杜撰之尤者也、蓋學術政治、猶絲與帛也、織絲爲帛、用學術爲政治、雖前後一物、其分逈別、大學之道、猶五色之絲、天子用之、以治天下、三公用之、以正其位、百官用之、以共其職、皆細繹其所學、施之用、猶織五采之絲、爲綺、爲羅、爲綾也、先王之治、譬錦綺也、古學校之敎、譬五采之絲也、小學譬未染之絲也、後世欲天下之太平、不本之學校敎化之道、是猶織錦綺不貯五色之絲也、契爲司徒以來、聖人之敎必以五敎、四代之學皆所以明人倫者可知已、雖然敎之有術、學之有序、詩書禮樂、正心誠意、習之學校所以明人倫也、若以人倫明人倫乎、孝慈之行、當於私家、夫婦之別、當於閨閤、事君之義、當於朝廷、先王之則、不於三者之行、而於學校、不於五倫、而於四敎、是文與行之別也、學者池水皆黑、千紙爲

草、勒金石、銘碑碣、則著其所能矣、非學也、學劍者、飾木爲刀、命處相擊、操兵及傷四肢、則著其所能矣、非學也、講詩書、習禮樂、學也、事父事君、和夫婦兄弟、則著其所能矣、非學也、學之爲義、未至而豫習之辭也、至其用之則行也、故種樹者、十年而用之、以爲材也、百年而用之、以爲棟梁也、學以積之、行以發之、若夫行有餘力、則以學文、其說雖如相反、其實互相發、何如者有人于斯、曰、吾學未成、才未達、未可以事父母、待學成才達、事父母、豈善乎哉、然行餘學文、文餘施行、正如斜趨、有主父而言者、有主行而言者、所以聖賢立言之異也、孔子曰、觀夫大學、而知爲王之易々、王者之化、扇斯民也、未嘗不由學校之器也、聖人之道、假器以傳、器廢則道亦廢、學校不興、則大學之道何以爲乎、方今數學無制、學者肄業於私家、各出新意、造爲異端、處士橫議、五分七裂、聖人之道、爲諸儒割據、春秋大一統之義、六合同條、四海共貫、以尊王、學問之尊孔子、亦復如此、今下明旨、一以孔子爲宗、以詩書禮樂爲教、若有庠序之設、直以三代爲法、不擬漢唐之陋、則猶坐峻嶺之上、而飛鳥皆視其背也、自古王者能尊孔子、則天下太平、不尊孔子、則紀綱廢壞、世之治亂興廢、未嘗不由尊孔子何如、聞之、孔子布衣、其尊無對、宜祀之祖宗百神之上、親執籩豆、奔走階下、以祈蒼生無疆之福也、培養國家昌泰之運者、有它術乎哉、

太平策卷之三

水斯立著

制器

聖人之道器爲大矣、制器唯聖人能之、易曰以制器者尚其象、周禮曰、百工之事、皆聖人作之、聖人之制器、必法象於天地、以合三才五行之數、造化之秘、鬼神之妙、盡寓諸尺寸毫釐之間、天子三公諸侯卿大夫士、降殺以二、以嚴貴賤之等級矣、所以貫幽明立紀綱者、莫如器焉、廼雖簠簋籩豆罍尊之小、皆綱常所係、名分所存、故繁縟小物也、孔子惜之、又曰、器與名不可以假人、器之於天下豈不重乎、鴻荒之時、屯蒙草昧、草本榛々、鹿豕狉々、人民與鳥獸雜居、未有君臣上下、以力相制、人無羽毛、以防寒暑也、無爪牙、以爭食也、故獸蹄鳥跡、縱橫于中國、猛獸害人、名之曰獮、有聖人者出、制宮室以代巢窟、制衣服以代羽毛、制舟車以濟不通、制網罟以取水物、制農桑之器、以利天下、鑄泉布、以通民用、制弓矢干戈甲冑、以威天下、以代爪牙、於是人報器以御萬物、猛獸不能害人、龍蛇入海、虎豹歸山、人始得平土而居之、若器之不制乎、人々空手、與猛獸相搏、人々裸體、不避風雨、人之類滅已久矣、是以器之於人、關係至重、有器則存、無器則亡、聖人因設禮樂之教、禮樂雖大、其實皆器也、俎豆玉帛鐘鼓管絃、君子用之、以爲禮樂、其實皆器也、記曰、禮器、是故大備、大備者盛德也、樂亦然耳、玉在山則物也、人採之製爲瓌琥則器也、製器者百工之事、用器者君子之道、其原共出於聖人、其流貴賤殊業、不可相假、小人製器、君子用器、古今由而不改、然有司之於禮、伶工之於樂、唯能守俯仰升降之數、記鏗鏘鼓舞之節而已、君子賤之、以爲百工製造、有司守記、皆類而已、君子之學禮樂也、其道在明明德、在新民、在止於至善、不嘗習器與事而已、子曰、君子不器、又曰、籩豆之事則有司存、可以見其意、然君子之學、未嘗一日離器矣、子夏曰、百工居肆、以成其事、君子學以致其道、其所爭、唯在致道成事之異、德上藝下之別、而以平生所業視之、則未嘗一日殊其事矣、子曰、俎豆之事、嘗聞之矣、軍旅之事、未之學也、又曰、優々大哉、禮儀三百、威儀三千、又曰、經禮三百則易矣、威儀三千則難矣、又曰、誦詩三百、不足以一

獻、一獻之禮不足以大饗、大饗之禮不足以大旅、大旅具矣、不足以饗帝、毋輕議禮、凡是類、夫子禮樂之雅言、其所以問老聃學其弘者、是已、子曰、人而不仁如禮何、人而不仁如樂何、又曰、禮云禮云、玉帛云乎哉、樂云樂云、鐘鼓云乎哉、是類君子之道、非有司伶工之所能與也、所以魯太師之承敎、賓年賈之請問、師乙之自賤者、是已、禮樂之道、與器相爲體、未嘗相離矣、而其分者君子任道、小人任器、豈容疑乎、後世諸儒、以理說禮樂、以器爲末、其異端於聖人、若使生乎三代之時、則峻刑重誅、何辭以免、若乃有司伶工之傳、徒器是守、其道則昧矣、是其職也、士君子之於禮樂、下學而上達、若不上達、則與有司何辨、後儒竟務上達、而廢下學、是謬之大者也、故善學者、必於器與事、大學之敎、以格物爲先、不其然乎、後儒豈不信聖人乎、獲罪於孔門、豈其所好、然甘犯之者、十病爲害、一偏見、二空言、三過高、四誇大、五躐等、六厭煩、七好奇、八好勝、九踏襲、十聰明、十害爲母、百孔千瘡、不遑枚舉、苟論其詳、更僕何罄、請得舉其大略、詩書禮樂、孔子所傳、先王之敎、天下後世、因之不能改、雖少有損益、其爲用也未嘗有異矣、若使孔子之敎、廢而不用於後世乎、何其在爲聖人也、詩書禮樂廢而不修於今乎、何其在爲萬世之敎也、故今之詩書禮樂、皆先王孔子之敎也、豈二本耶、推尋典籍、以爲聖人之遺、四敎之中、獨主書、歌舞器數、豈非聖人之遺耶、而棄之、問之則曰經孔子所傳、聖人所作、禮豈非孔子所傳耶、樂豈非聖人所作耶、若以禮樂非古乎、書亦非古矣、三代之書、皆古文蝌蚪、今之書生豈能讀耶、古文變爲楷、不失其爲書、三百變爲律、豈失其爲詩耶、先王之禮樂、變爲今之禮樂、豈失其爲禮樂耶、雖然、書有親出孔子手指者、如易大傳是也、樂有猗蘭臨河類、豈不出孔子之手指耶、況趨庭之詩禮乎、然獨推書爲聖人之敎、以爲詩禮樂非古者、後儒之偏見也、鬼神無形、聖人制宗廟、以萃其氣、設社稷、以寓其神、斯尺二寸之木、名之曰主、以寓祖考之靈、天之寥廓、星辰之遠、聖人制璣衡旁羅、以爲其象、道德仁義之無形、甚於鬼神與天、口不可言、目不可視、聖人制禮樂之敎、禮樂皆器、以寓至道、故敎學之方、以器傳道、鼓瑟吹笙、執圭將幣、升車束矢、皆所以知止能得之術也、所謂終日不食、終夜不寐、以思、

無益、不如學也、學之爲義、擬其師之謂、逈左則左、右則右、宮則宮、商則商、惟擬其師、不問其它、檀弓記孔子倘右、二三子皆倘右、古之所謂學者如此、爲師者以身敎人、學者以身學之、後世師弟子、徒係名位、敎學以言、不以身、禮樂之說、嘵々指掌、而授之器、則無一所能者、後儒之空言也、禮樂所以文人倫也、無文則人倫不和、如父子之親君臣之義、皆天常所存、文之以禮樂、而後始得盡其道、叔孫通制禮儀、而高祖始知皇帝之尊也、可以見已、若夫徑行無文、夷狄之道也、君子不貴焉、雖然禮樂之事至繁、人倫之道至簡、後儒專主人倫之道、而署禮樂之事、而禮樂不可無、又立心之敬和爲說、是形而上者耳、夫下學而上達、仲尼言之、後儒廢下學而務上達、是老佛類耳、君子不貴焉、夫器與事有司共之、小人與之、可謂卑矣、至道德性命者、唯君子知之、然道德性命、全具於器事之間、無上下之辨、故卑攻器事、不言而喻、不亦至深遠哉、後儒不察、掃器事而爲末、攻道德性命之說、以爲本、是後儒之過高也、萬古綱常、極天罔墜、後儒賴以爲重、謂聖人之道在茲、中庸之書曰、天命之謂性、率性之謂道、脩道之謂敎、聖人之所以有功於天下後世者、敎而已、至於道者開闢以來、未嘗增減、五品人倫、不待聖人而存矣、儒者援五倫、爲其私有、是何倨焉、今之儒者、專事典籍、是亦有司之一、焉足以聖人之道爲其私有乎哉、況先王之敎、以器爲體、以事爲用、終身學之、不易到其極者、今皆恬然莫之顧、獨推綱常之大以爲道、是後儒之誇大也、君子之道、辟如行遠必自邇、辟如登高必自卑、自小學而入大學、下學而上達、皆循々有序、宋人之助長、害學也深矣、故欲一跳而造其極者妄人已、不修禮樂而求中和、不習藝業而欲至善、是鶉鳥之欺孺子也、鶉鳥之性善近人、飛不峻也不速也、踉々然、似若將可獲也、卒至不可獲、是孺子之所以踦膝跛足、而不以爲弊也、道德之美、貴於鶉鳥、學者之求得之、急於孺子、心知口言如將得之、然竟終於不得、孔子以後、逐鶉鳥者、蓋亦衆矣哉、逸材高足、馳騁盡思、而能得者何眇、是徒知逐鶉鳥、不知設網羅也、詩書禮樂、譬如網羅、鶉鳥不可以一目獲、故多其目也、廼鶉鳥無所逃矣、廢網羅而求鶉鳥者、後儒繳等也、夫易簡者乾坤之德也、非學問之道、老子曰、爲學日益、爲道日損、斯言至矣、周公之多

材多蠹、孔子之多聞多見、皆學之事也、若夫多乎哉、不多也、爲多學而識之者與、曰然、非與、曰非也、吾一以貫之、言其德也、後儒喜易簡之說、好一貫之論、博學審問、茫然若忘者、後儒之厭煩也、譽人、不增其美、則聞者不快其意、毀人、不益其惡、則聽者不愜於心、增之益之、又重增之、以至失實、厭常喜變、棄故取新、人情爲爾、先王之敎、在天下也、亦已故矣、漢有經學、晋有清談、宋有議論、明有心學、此四者先王之所無、聖門之所不言、皆新法類而耳、後儒有厭其新者、又自抗顏、以爲古學、以爲古文辭者、亦先王之所無、聖門之所不言、雖故亦新而耳、其實學豈有古今之異耶、以古今論學者、皆不知學者也、刘著薪而亡著膏、所得雖多、魯之婦人、猶泣之、何則貴其故也、先王孔子之敎、其猶著膏乎、後世讀家、誇著薪之多、求之先王孔子、則未有能合者、甚矣哉、後儒之好新奇也、良醫服百病之方、故能治百人之疾、大才懷百家之言、故能口百族之亂、美色不同面、皆佳於目、悲音不共聲、皆快於耳、酒醴異氣、飲之皆醉、百穀異味、食之皆飽、故饒々之學、各習其師、呱々之子、各慕其母、何必同、欲使天下之人、咸皆再拜必從己說、甚矣哉、後儒之好勝也、譬者之行、前者步、則後者又趨、矮人之觀、處前者譽、則處後者贊、處前者毀、則處後者笑、何則己無所見、專師前人、後世之學亦猶是乎、先儒之所是、從而尊之、先儒之所非、從而黜之、吠影吠聲、拔茅茹焉、甚者章句之徒、推尊其師、其師之所是、從而尊之、其師之所非、從而黜之、豈有識見之素定耶、黨枯竹、諡朽骨、其何固陋之甚焉、學之擬師、以器與藝業、當仁不讓於師、皆自明也、故至於道、則父不可以傳子、師不可以傳弟子、是以君子自得爲大矣、後儒擬其師以道、師非聖人、焉能知道、故其敎法學術、出乎好尚之偏、非復聖人之舊、不知者、竟從人生活、如坐大霧中、是後儒之踏襲也、凡是類瞭々無疑、蓋非天下之學、而自聖、是聰明之生也、諺曰、不入虎穴、焉得虎子、已前十害、皆吾所嘗、懲瑟殊甚、古之言、稱廢祭者、不曰廢祭、曰簠簋不飾、稱淫亂者、不曰淫亂、曰惟湎不修、稱夫婦不和者、不曰夫婦不和、曰琴瑟小乖、稱欲危王位者、不曰危王位、曰問鼎輕重、皆以器言之、周禮、大喪、則陳重器、以華國也、顧命陳寶、錄於尚書、如九錫五瑞之制、冕旒衣帶之等、車仗鹵簿之儀、弓矢斧鉞之典、皆朝廷紀綱之所立、執不以器、舜陶河濱、河濱器皆不苦窳、以是視之、聖德之及物、器爲先、禹聲尚文王之聲、以追蠡、孟子雖非之乎、古之觀德、以器也、可知、孔子譏管仲之器小、又以樹反坫爲失禮、魯僖四代之服器官、太史公喜得觀琴車書、皆可見古者重器之意、不啻古而已、今搢紳重衣裳、武弁重弓矢、巫祝重幣帛、僧尼重經像、要之其尊崇信奉、莫不在器、童子持白及、孟賁避路、醜婦擁錦繵、子都寓目、甚矣器之大也、詩書禮樂、古之四敎、書有戡籍、禮樂有器、詩獨無所有、歌之爲樂、錄之爲書、發心著聲、是之曰詩、比諸禮樂與書、則可謂小也、然風花雪月、鳥獸草木、天然之物、盡屬詩、而書禮樂不與矣、書禮樂皆以人爲之器、鼎彝鐘鑪、鎔鬼神百獸之形、笙簧、象鳳凰之聲、文字、擬鳥跡蚪蟲、衣裳、繡繢、日月星辰、山龍華蟲、繪宗彝藻火粉米黼黻錦綺之紋、織花鳥珠玉、器之盡雲氣、皆聖人之道、以器爲天、故器雖人爲乎、必以天物爲飾、至于詩者、直以天籟和天物、所以首四敎者、以其去天不遠也、戴籍雖人爲乎、字猶近於象、目可視、口可讀、而手不可取者、唯字爲然、筆墨之於字、猶薪之於火也、火麗薪而然、字假筆墨而見、比諸禮樂之器、稍近自然、所以先禮樂、以其去天不遠也、天下之器、上自冠冕衣服符璽鋭劍舟車弓矢祭祀喪葬之器、下至刼轡術勒漁獵農桑械繫斧鉞斗量權衡之具、皆禮器也、禮器之繁、滿于天下、亦唯以形爲用、目能視之、未嘗有耳聽之聲、大禮之行、唯佩履鏘々而已、其餘器雖陳設交錯乎、寂々無聲、於幽默之道也、猶爲近矣、故禮之次詩書、以其去天不遠也、至於樂者、有歌、有舞、有八音、其器干戚羽旄、琴瑟笙竽、其文可觀、其美可聽、入人也最深、化民也最速也、故曰、生民之道、樂爲大矣、又曰、樂觀其深、蓋人爲之工、聖智之精、至於樂而極矣、不可以尚已、故樂之後詩書禮、以其去天之遠也、去天遠者、文明益彰、聖人之敎、樂最文、禮次之、書次之、詩次之、燕居於一室之內、可以賦詩、不待設器張燭、至於書、則有几案筆硯筐箱之類、無之則書不可讀、至於禮、則拜起進退、用器多品、無之則禮不可講、至於樂者、不止拜起、加以舞蹈、不止陳設、加以發聲、無之則樂不可習、故聖人之敎、樂爲脊矣、典樂之敎胄子、樂正之崇四術、

可以見已、黃老之學、以自然爲宗、貴忠厚而賤文薄、太古之淳朴、是其所慕、掃詩書禮樂而去之、其言曰、五色使人目盲、五音使人耳聾、文華使人心昧、吾不敢與之爭、知詩書禮樂之教、莫如老子、何者、視以爲文而惡之、後儒之於先王教、尊而信之、然掃文與器去之、彷彿老子、老子之所惡者、眞聖人之教也、後儒之所尊者、非眞聖人之教也、況老子爲周藏室史、圖籍禮制、是其職掌、爲賢有司也、豈容疑乎、其惡文者、知文之至也、棄器者、知器之至也、仲尼之所謂狂耶、非耶、後世口耳之徒、黜黃老、問其所道、以天地自然爲宗、以質朴爲教、以無爲爲德、以淡爲末、是皆黃老緒餘、聖人之所不言、而假名於聖人之教、是謬妄之至、舉世不察、如林放問禮之本、後儒附贊之、吾甚怪焉、凡雖小技、身學之則必爨其大、雖大業、不身學之則必小之、不知其大、是人情也、孔門學者學禮、旦夕修業、豈能問其本耶、林放魯人、非孔門弟子、未嘗學禮、故請問其本、一言欲以聞其本、是不學之人而耳、聖人大其問可見、孔門未嘗問禮之本也、禮有本有文、忠信禮之本也、故曰、禮自其奢也寧儉、喪自其易也寧戚、是明忠也、林放之問、出聖人之教、大之者、見其小禮也、非美林放、其爲泰山之喻、亦外之辭、若後儒之說、孔門三千、平生講習、唯其末事、不學林放、忽然問本、是亦可怪矣、禮序樂和、其說雖簡、吾不欲聞、指序和爲禮樂之本、以器數爲禮樂之末、猶指心性爲人之本、形骸四肢爲人之末、是豈可乎哉、許由雖一瓢棄焉、後之君子蓋儆之、非聖人之教也、皐朝尚器度越四外、帝王綿綿、神器是守、聖明當推及天下之器、正名分立紀綱、敦風俗、施教化、不襲它術、雖天下大器乎、不傾不覆、雖學術大業、不偏不倚、周廟欹器、虞廷王燭、於吾身親見之、若夫不然、龜玉之毀櫝中、誰任其罪、

太平策卷之四

水斯立著

君子

學者君子之事也、詩書禮樂成德達材、是其爲君子也、廼公卿大夫士、百官衆職、各因其才德所成而任之、廼爲君子愈定矣、庸々不俊之民、出小學歸農業、百工商賈各循其素、農之子爲農、工之子爲工、商之子爲商、於此乎爲小人者定矣、聖人之世、以君子治小人、以有德役不德、是先王之道也、故在上者稱爲君子、在下者名爲小人、尊卑一立、不可移易、貴賤相因不可相無、上古之時、草昧不文、然上者爲巢、下者爲營窟、隱然有君子小人之分、爲神農之言者、以並耕爲道、孟子非之、大人之事、勞心以治人、小人之事、勞力以養人、天下之通義也、詩書所載君子、所指不同、有指大子者、有指諸侯者、有指大夫群臣者、有寘指主人而稱之者、有主人指賓客而稱之者、有婦人稱夫者、有女稱男子者、有衆妾稱后妃而言之者、均之君子、而無異稱矣、其所指雖異、爲在上之義、始未嘗有異也、若夫小人細民庶人野人之類、所稱雖異、所指適同、皆指農工商賈而言之、爲在下之義、亦審矣、婦人雖尊如后妃、衆妾之所君子乎、其實小人類也、子曰、女子與小人爲難養也、可以見已、女工亦工之業也、非君子事、若夫未冠之童、是亦爲小人也、雖天子之子、方其童幼、則爲小人、未爲君子也、小學小人之學、而民業足矣、廼小子爲小人、凡民爲小人、皆以承小學之教而言之、所指適同、異而言之、君子稱人、小人稱民、亦古言爲爾、詩云、假樂君子、憲々令德、宜民宜人、受祿於天、書曰、凡厥庶民、無有淫朋、人無有比德、惟皇作極、人之爲君子、民之爲小人、可知已、夫民之爲小人、誰不知之、人之爲君子、不可易解、詩云、嗟我懷人、寘彼周行、詩云、乃如之人兮、逝不古處、詩云、彼美人兮、西方之人、詩云、展如之人兮、邦之媛也、詩云、人之無良、我以爲兄、詩云、盧令々、其人美且仁、是類非一、其所謂之人、皆指君子而言之、若曰之國人、則指民而耳、春秋稱王人齊人衛人之類、或指諸侯、或爲大夫、其爲君子、其義適同、君子小人對言者、詩云豳彼四牡、四牡騤々、君子所依、小人所腓、詩云、周道如砥、其直如矢、君子所履、小人所視、書曰、其君子

實玄黃於匪、以迎其君子、其小人簞食壺觴、以迎其小人、逸書曰、稷天子西征、君子化鶴、小人化猿、是皆以貴賤別君子小人也、逸書之言、世儒以爲不經、是以辭害志之類耳、穆王遠遊、周于西極、跋涉經歷、上下勞苦、史官潤飾之曰、君子化鶴、其形瘦也、小人化猿、其形衰也、以譏遠遊之非禮也、文章之妙、如此、是雖微文乎、讀古書之道、可槩見已、小學之敎、學爲人下、大學之敎、學爲人上、君子學爲下、而學爲上、小人學爲下而足矣、言終其爲童幼、故名之以小人、小人固非惡稱、易曰、聖人大寶曰位、故德爲聖人、則尊爲天子、富有四海之內、是其常也、有德者得爵、有才者得官、有功者得祿、是亦其常也、無德無才無功者、執役於下、爲有德才功能者使、是亦其常也、聖人不得位、初於孔子、有德不得爵、初於顏淵、是二者衰周之運、風氣之不振乎、和氣生聖人、不能養聖人者、惟在衰周乎、廼學校之敎廢、君子小人、各襲其家、不問德才功能何如、君子之子雖不肖、依然在上、小人之子雖賢、依然在下、是以人與官相離、德與位皆失其所、是以君子之號、岐爲兩途、或以位稱之、或以德稱之、君子之人、或在朝或在野、莫定其處、然後君子始有出處行藏之濱矣、是後世之不得已也、非先王之世有之、小人之名、或以其無位、或以其不德、小人或在朝或在野、亦莫定其處、夫德不德爵不爵之別、君子小人也、一而耳、後世分爲二焉、孔子時、君子小人已失其所、論語所載、君子小人、多以德不德言之、子曰、人不知而不慍、不亦君子乎、有子曰、君子務本、子曰、君子不重則不威、子曰、君子食無求飽、居無求安、子曰、君子不器、子貢問君子、子曰、先行其言而後從之、子曰、君子周而不比、小人比而不周、子曰、君子無所爭、儀封人請見曰、君子之至於斯也、吾未嘗不得見也、子曰君子去仁、惡乎成名、君子無終食之間違仁、子曰君子之於天下也、無適也無莫也、義之與比、子曰君子懷德、小人懷土、君子懷刑、小人懷惠、子曰、君子喻於義、小人喻於利、子曰、君子欲訥於言而敏於行、子謂子賤君子哉若人、魯無君子者、斯焉取斯、子謂子產有君子之道四焉、子謂子夏曰、女爲君子儒、無爲小人儒、子曰、文質彬々、然後君子、子曰、君子博學於文、約之以禮、子曰、聖人吾不得而見之矣、得見君子者、斯可矣、陳司敗揖巫馬期而進之曰、吾聞君

子不黨、君子亦黨乎、子曰、躬行君子、則吾未之有得、子曰、君子坦蕩々、小人長戚々、子曰、君子篤於親、則民興於仁、曾子言曰、君子所貴乎道者三、曾子曰、可以託六尺之孤、可以寄百里之命、臨大節而不可奪也、君子人與、君子人也、子曰、君子居之、何陋之有、子曰、論篤是與、君子者乎、色莊者乎、周有曰、如其禮樂、以待君子、司馬牛問君子、子曰、君子不憂不懼、子夏曰、君子敬而無失、與人恭而有禮、四海之內、皆兄弟也、君子何患乎無兄弟也、棘子成曰、君子質而已、奚以文爲、子貢曰、惜乎、夫子之說君子也、駟不及舌、子曰、君子成人之美、不成人之惡、小人反是、曾子曰、君子以友輔仁、子曰、君子於其所不知、蓋闕如也、故君子名之必可言、言之必可行也、君子於其言、無所苟而已矣、子曰、君子和而不同、小人同而不和、子曰、君子易事而難說也、說之不以道、不說也、及其使人也器之、小人難事而易說也、說之雖不以道、說也、及其使人也、求備焉、子曰、君子泰而不驕、小人驕而不泰、南宮适問於孔子曰、羿善射、奡盪舟、俱不得其死然、禹稷躬稼而有天下、夫子不答、南宮适出、子曰、君子哉

若人、尚德哉若人、子曰君子而不仁者有矣、夫未有小人而仁者也、子曰君子上達、小人下達、曾子曰君子不出其位、子曰君子恥其言而過其行、子曰君子道者三、我無能焉、子路問君子、子曰脩己以敬、子路愠見曰、君子亦有窮乎、子曰、君子固窮、小人窮斯濫矣、子曰、君子哉蘧伯玉、子曰、君子義以爲質、禮以行之、孫以出之、信以成之、君子哉、子曰、君子病無能焉、不病人之不己知也、子曰、君子疾沒世而名不稱焉、子曰、君子求諸己、小人求諸人、子曰、君子矜而不爭、群而不黨、子曰、君子不以言舉人、不以人廢言、子曰、君子不可小知而可大受也、小人不可大受而可小知也、子曰、君子貞而不諒、孔子曰、君子疾夫舍曰欲之、而必爲之辭、孔子曰、侍於君子、有三愆、孔子曰、君子有三戒、孔子曰、君子有三畏、孔子曰、君子有九思、陳亢曰、聞詩聞禮、又聞君子之遠其子也、子路曰、昔者由也、聞諸夫子曰、親於其身爲不善者、君子不入也、宰我問、三年之喪、期已久矣、君子三年不爲禮、禮必壞、三年不爲樂、樂必崩、子張曰、君子焉賢而容衆、嘉善而矜不能、子夏曰、小人之過也必文、子夏曰、君子信而後勞其民、子夏曰、

君子之道焉可誣也、子貢曰、君子一言以爲知、一言以爲不知、子曰、不知命、無以爲君子也、凡是類雖以德稱君子乎、比諸後儒、以爲學成德論君子者、其意迥別、何如則君子不幸在草野者、今日所遇之變、以其德視之、宜在位焉、雖無爵乎、猶有爵矣、故凡論君子、皆以上於人言之、或與民對言、若乃顯然以爵無爵言之者、子曰、先進於禮樂野人也、後進於禮樂君子也、孔子曰、君子之德風、小人之德草、草上之風必偃、子曰、小人哉樊須也、子曰、言必信、行必果、硜々然小人哉、子曰、君子謀道不謀食、耕也餒在其中矣、學也祿在其中矣、君子憂道不憂貧、子游曰、昔者偃也聞諸夫子曰、君子學道則愛人、小人學道則易使也、子路曰、君子尚勇乎、子曰、君子義以爲上、君子有勇而無義爲亂、小人有勇而無義爲盜、周公謂魯公曰、君子不施其親、不使大臣怨乎不以、故舊無大故、則不棄也、無求備於一人、子夏曰、雖小道必有可觀者焉、致遠恐泥、是以君子不爲也、子夏曰、百工居肆、以成其事、君子學以致其道、凡是類、專以尊卑言之、然錯綜以考之、則德或兼爵、爵或兼德、非必判然爲二、又有指孔子爲君子者、君子不以緇衣

飾、子貢曰、君子亦有惡乎、子路曰、君子之仕也、行其義也、子夏曰、君子有三變、公羊傳曰、君子樂道堯舜之道、董仲舒稱孔子爲大君子、是類直指聖人而言之、猶言夫子也、其實聖人與君子、其分迥別、聖人吾不得而見之矣、得見君子者斯可矣、蓋聖者孔子不居、以其至極之名也、且聖人必爲天子、聖人而非天子者、孔子一人而已矣、故謂之聖人、則贊王者之明德之辭、孔子歎鳳鳥不至、河不出圖、且後世雖有作者、虞帝不可及已、又曰、作者七人矣、又曰、若有王者、必世而後仁、子思以爲仲尼祖述堯舜、憲章文武、迺不見聖人、謂王者之不興也、古樂府有聖人出、聖人出猶言王者興也、唐時猶有衣黃者聖人、衣白者山人之語、可以見聖人必爲王者之號也、西方有聖人、文王之謂也、詩云、彼美人兮、西方之人兮、所指適同、列禦寇因而奇之、爲西極化人之類、夫至人神人化人、道家所欲言、皆指通神奇異之人、下至醫卜之徒、挾術執技、欲其術之神、故必以神人、先乎聖人、旁援孟子以爲聖人之上、更有神人、殊不知孟子之所謂不可測者、贊過化存神之妙而言之、即所語聖人也、道家以爲至人無爲、聖人有爲、有爲者

無爲之奴、是固然、雖然至人如廣成子之屬、是已、處崑崙之墟、遊無極之野、視天下如指甲之垢、是蓋遯者也、與之小郡縣、豈能使民無飢渴之憂乎、雖其迹高於聖人、王者以麋鹿待之、至人虛無者、猶然、況神人化人學狐魅而以惑人者乎、蹈水不溺、入火不焚、化人爲然、其徒信以爲妙、吾黨之妙者異諸、蹈水則溺、入火則焚、蓋水火之所以溺焚人者、化工之神存矣、天地之道亨矣、若能蹈水不溺、入火不焚、則己身雖免、奈水火何、君子之心寧不利已身、有補於天地、欣然爲之、孔席不煖、墨突不黔、禹八年于外、巫馬期戴星、其事雖異、其意適同、故不溺不焚、則不足以贊化育、水火其水火也、化人之事、苟利區々之軀、而損水火之用、缺化工之神、亦何自私之甚、水能溺人、聖人制舟以濟、制楫以度、火能焚人、聖人制鑪以扇、制甑以爨、水火不能害人也、是所謂大知者、被天下民用、化人不溺水不焚火、纔足自免耳、天下之民豈能乎哉、後世貝多之文東、其旨往々有化人類、世多有、故不論、至人神人雖奇、吾甚小焉、聖人必爲王者、以風化天下、仲尼不得而見之者、蓋先王之化也、後儒之所謂聖人異諸、若夫君子者、學

聖人之教、以上於民者也、入大學者、皆爲君子之學、大學之道、在明明德、在新民、在止於至善、是其爲君子也、人之才性不同、氣質各異、而其學一在詩書禮樂、所謂在教無類者然、其所成各循其性、各因其材、不必同、大者大成、小者小成、方者成矩、圓者成規、均之君子人也、先王建官職、以待君子之異材、官々職掌不同、人々材能各殊、擇其人應其官、不一其用、皆所以爲君子也、君子於其所不知、蓋闕如也、以是視之、君子豈無所不知乎、有所不知、則有所不能、先王用其所知所能而官之、其所不知不能不必責矣、豈啻君子而已哉、雖聖人亦有所不知、有所不知則有所不能、其唯聖人有不知、而夫婦之愚與知、聖人有不能、而夫婦之愚能行、是所以道之爲大也、張衡曰、仲尼耻一物之不知、後世以爲聖人無所不知、凡古書多以禽獸草木爲物、仲尼耻一物之不知、謂識鳥獸草木之名、如辨土怪識萍實之類是也、子產博物亦復爾爾、人爲萬物之長、萬物爲人之屬、爲長不識其屬之名、則可乎、或問禘之說、子曰、不知、又問、子曰、由誨女知之乎、知之爲知之、不知爲不知、是知也、古之學可

知己、神人化人浮屠類、以無所不知物說、是亦與焚溺之辨同、聖人有所不知、道之大於是乎見、若一人盡知之、則爲知覺爲固、亦何小焉、譬登泰山覽衆山之小、豈能知衆山、各有紆縈屈曲之勢、與斷巖絕壁谿谷樹木之數乎哉、聖人之大知亦猶是乎、百家之雜、百工之瑣、聖人豈能一一知而能之乎、其極皆出乎聖人、聖人知其極而不問、葛蒉之言、聖人擇焉、人解之以爲雖葛蒉之言、聖人必擇其善、非也、葛蒉之言賤、有聖人之所不知者故擇焉、天子雖爲天下之主、天下之民不視其面、天子亦未視天下之民、老少男女形狀風俗何如、聖人大知爲天下之主、有所不知、有所不能、下亦有不知聖人者、夫百姓日用而不知者、道之大也、不知不識順帝之則、化之深也、故欲以知盡天下者、非聖人之意也、夷狄以不治治之、欲治之如中國則亂、鬼神以不可知知之、欲知之如人則惑、不可知不可能、聖人不求必知必能、所以爲知也、況君子乎、學者君子之事也、學而不思則罔、思而不學則殆、學習其事、思味其道、兩者不可偏廢、思之思之、又重思之、思之不得、神其通之、思亦大矣、雖然以思無益、不如學也、君子之於學、亦何急焉、後儒謬以爲君子儼然在上、豈親蠶業、殊不知古君子之學、專在詩書禮樂、而周旋升降、詠歌舞蹈、斯其所業也、詩云、君子至止、鸞聲鏘々、又云、念彼君子、溫其如玉、君子之容舒遲、其情和平、其言從容不迫、後儒求爲聖人、其志美矣、然求之君子之德、克肖者何眇、夫不似君子而求爲聖人、一何倨焉、詹何坐、弟子侍、有牛鳴於門外、弟子曰、是黑牛也、而白蹄、詹何曰、是黑牛也、而白其蹄、使人視之、果黑牛、而以布裹其蹄、漢以後諸儒之言君子也、黑牛也、而白蹄、吾惜其末、證以洙泗之言、將以白其蹄、中論曰、古之君子、貴爵祿歟、曰然、諸子之齊、稱爵祿非貴也、資材非富也、何謂乎、曰彼遭世之亂、見小人富貴、而有是言、非古也、古之制爵祿也、爵以居有德、祿以養有功、功大者祿厚、德遠者爵尊、功小者其祿薄、德近者其爵卑、是故觀其爵、則別其人之德也、見其祿則知其人之功也、不待問之、古之君子貴爵祿者、蓋以此也、天爵人爵之論、起于衰世、非先王之道如此、天之君子、人之小人、人之君子、天之小人、是叔季之道也、先王之世、以貧賤爲耻、後世以富貴爲耻、孔子浮雲之喻、曾子秦楚之論、先王所

無也、位登將相、祿有百萬、財累巨萬、壽保百歲、雖兼此四者而有之、苟不德乎、未免爲小人、然草野之間、非無君子、況身履聖人之位、行聖人之禮、奏聖人之樂、而無聖人之德、則縱自輕、奈蒼生何、

太平策卷之五

水斯立著

文

堯舜孔子之道至文、其爲教華藻繁縟、可施於廟堂登殼之間、而不可用於山林草野之中、詩歌修辭、最富采縟、圖書殺青、最貯菁華、禮樂之器、飾以珠玉、彫以山龍、刻以犀象、覆以錦繡、望之有粲爛之色、聽之有鏗鏘之聲、天下之文盡聚、繁華之極莫以尚焉、堯有文思之德、舜有重華之名、孔子稱之曰、煥乎其有文章、子貢曰、夫子之文章、二帝孔子、相去數千載、文章之道未嘗不同也、堯之所以受天下者、爲文祖、或曰、堯之始祖、世莫能定其爲誰也、以吾視之文祖者、黃帝廟也、黃帝始制器、宮室衣裳興矣、伏犧之佃漁、炎帝之耕作交易、皆民衆之源、至於禮樂文明之事、則自黃帝始矣、易稱黃帝堯舜垂衣裳而天下治、蓋取諸乾坤、是黃帝之爲文祖也、書曰、予欲觀古人之象、日月星辰、山龍華蟲作會、宗彝藻火粉米黼黻絺繡、以五采施彰于五色作服、古人亦黃帝之謂也、何者黃帝以前無衣服、西陵氏之蠶也、衣

服始制、衣服制而人道立矣、西陵氏者黃帝妃也、伶倫造律、容成造曆、大橈作甲子、倉頡作文字、儀作車、貨狄作舟、此六人者、黃帝臣也、雖爲天造歌、陰康造舞、先乎黃帝、迺律呂未制、何以定聲、衣裳未制、何以飾體、是民間樵歌牧笛之祖、而非君子歌舞之道也、故六樂之目、以雲門爲首、雲門象雲氣出入、黃帝樂也、吾瑟能使鬼神上下、合軒轅氏之律呂、客立齊門者、猶能言之、昔者黃帝合鬼神西大山之上、駕象輿、六玄龍、畢方並轄、蚩尤居前、風伯進掃、雨師灑道、虎狼在前、鬼神在後、蟲蛇伏地、白雲覆上、大合鬼神、鼎湖烏號之事、頗怪、是唯淳龐未全變、與天相通、至帝顓頊、命重黎、分民神、絕地天通、至堯舜氏、人文大彰、推黃帝爲文祖、明其始也、子雲曰、荒鴻之世、聖人惡之、又曰、法始乎伏羲、而成乎堯、匪伏匪堯、禮義啁々、八卦儡皮、先乎黃帝、是豈不可爲文祖乎哉、然非堯之祖、宮室衣裳未制、人道猶未文也、伏羲鵋鳴、黃帝昧爽、堯舜日出、故曰、帝堯其仁如天、其智如神、望之如雲、就之如日、嘗曰、光被四表、格于上下、又曰、重華協于帝、濬哲文明、天下明德皆自堯舜始、故孔子敘書、始乎堯舜、貴文也、禹之文命、湯之日隮、皆堯舜之道也、文王受命、八百啓基、周公制作禮樂、三代之法大備、可謂堯舜之日中、子曰、唐虞之際、於斯爲盛、又曰、周監於二代、郁郁乎文哉、吾從周、子畏於匡、曰文王既沒、文不在茲乎、天之將喪斯文也、後死者不得與於斯文也、天之未喪斯文也、匡人其如予何、春秋春王正月、王謂文王也、仲尼祖述堯舜、憲章文武、傳周公之詩嘗禮樂、其教有四、文居其首、行忠信次之、洙泗三千、斐然成章、可謂高眷、至戰國時、文之流廢矣、孟子言必稱堯舜、人以爲汪遠、秦始皇亡滅先王之詩書禮樂、斯文湮晦、雖迺湮晦乎、天下不可一日無文、漢以後文物之盛、日加一日、衣冠服飾之美、禮樂器數之繁、過乎三代、然不知聖人之道在茲、故爲湮晦、固自若也、濂洛諸子、發明道學、續千載之傳、朱子繼興、集諸儒之大成、聖人之道、可謂昭々矣、然求之孔子之詩書禮樂、則彈九嶷子之小而耳、亦何不文之甚焉、文王既沒、文不在茲乎、不曰道而曰文、以爲謙辭、文之爲謙、吾未之聞、堯舜以來、所傳唯文、若必以道乎、周公之制誼、不曰道王、而曰文王、是貶其祖考、而以爲謙也、亦何倨焉、錦

繡綺羅、人文之最精者、聖人之所重也、孟軻乃不願人之文繡、孟軻雖賢、生於戰國、其言不似聖人、吾頗惜焉、夫珠玉爲天成之寶、錦繡爲人工之文、古之聖人珠玉以飾冠、以貴天成也、錦繡以裁衣、以重人工也、故禮樂之器、主觀美、觀不美、則不足以風化天下也、子都之姣、能動人心、以其美也、禮樂亦然、有子曰、禮之用和爲貴、先王之道斯爲美、子謂韶盡美矣、又盡善矣、謂武盡美矣、未盡善也、武之未盡善、唯孔子知之、天下之所共知、唯美而耳、子曰、君子成人之美、不成人之惡、小人反之、又曰、遠而光者、飾也、飾喜飾怒、於傳有之、書飾之道、聖人所稱、美麗粧飾、君子之所常也、君子比德於玉、衣錦尚絅、惡其文之著也、聖人之重文也、如此、若不以文乎、君子比德於石、衣布尚絅、亦可耳、鞶以盛酒、扇以招風、是其本也、然以黃金飾鞶、覆雲錦、緩金錢、以金碧繪扇、要珠玉、垂朱孫、非便盛酒招風之用也、鑑刀以銛於用爲貴、故金鞶書扇不便於用、君子用之、是猶糠粃之微事已、衣裳之生也、爲蓋形陋身也、然而染五采、飾文章者、以益肌膚血氣之情也乎、高冠大屨、方領長裾、不便於起居、而君子用之、是貴文之道也、枕席之事、夫婦之本也、聖人飾之以制婚禮、築埋之事、父子之本也、聖人飾之以制喪禮、禮之本非自天降、非自地出、人情而已、人情者、匹夫匹婦之所同也、所謂忠也、聖人粧飾人情、以爲禮樂、聖人之教、莫不文、若不文乎、男女相奔以野合、亦可謂婚、投親骸於水火、亦可謂葬、奈不文何、夫道不可見、非人々之所得知、聖人因立教文之、文者可見、非人之所得知、廼文則中禮、不文則失禮、雖不學、一視而辨、豈不明乎、聖人之知、可謂至矣、然天子無飾、祭天無壇、至敬無文、父黨無容、是唯文極返本、示不忘初也、夏尚忠、商尚質、周尚文、說者謂夏商之世、猶忠質、至周始文、是殊不然、夏后氏之璜、商之六蟲瑚璉、已極其文、贊禹曰、致美於黻冕、夏商承堯舜之後、人文豈不盛乎、尚忠尚質、示不忘本也、所以救其偏也、至周禮樂大備、故不復患偏、直尚文、周末文始衰、天下質勝、賢德之人、多不得志、珠玉錦繡、盡爲王侯貴人奢侈之具、墨翟始以儉爲道、以矯其弊、雖然猶錦衣吹笙、秦而下儒者愈益質勝、不御綺羅、不事粧飾、漢時儒者、議以爲當尚忠之世、文帝儉、雖然未央前殿、彫文五

采、畫華榱、璧璫軒檻、皆飾以黃金、猶爲得王者之體矣、武帝好儒、禁纂組之害女紅、唐玄宗亦好儒、焚珠玉錦繡於殿前、二君惡儒者之說、貴人之性能信、故信其質素之道、而禁焚之、其後武帝惑方士、玄宗惑貴妃、奢侈紛華、無所不到、比諸前所禁且焚之不啻萬倍、夫奢儉俱非美德、常必相因、奢者必儉、儉者必奢、其勢不可以已也、欲去錦繡華麗之物、其心深惑之故也、猶釋氏之輕死、實生於畏死之心也、身至卿相、爲布衣行、史載稱之、是雖如難能、其實出矯揉、所爲卿相見動、未嘗異挾位驕人者也、卿相則卿相、布衣則布衣、何所避嫌、尚儉素、甘淡泊、黃老之徒爲然、晉人率皆高曠清爽、不治事務、清淨相高、簡素相誇、先王之世、必誅之民、而儒者從附和之、質勝之風、君子惡之、先王之道、以文爲常、唯居喪、主哀素之心、徹琴瑟、去衾褥、不近華麗、以變常也、若好質素、不尚文飾、是以喪爲常、禮爲人子者、冠衣不飾素、尚文也、以哀素爲常、是欲父母之過死、在子則爲不孝、在弟者爲不弟、在國家則爲不詳、今有曰詩不假修飾、任其醜朴、但風韻正、天眞全、即名上等者、是不知詩之甚、夫辭不修飾、則風韻不正、天眞不全、豈有二乎哉、不修其辭、而求全其眞、求無花之菓者何限、是皆不思之過也、人心惠而目多采、人心忍而目多白、多采者文之道也、大人虎變、其文炳也、君之豹變、其文蔚也、文之爲義、物相雜之謂也、以水濟水、誰能食之、琴瑟一聲誰能聽之、故獻酬俯仰、一進一退、律呂清濁、一高一下、錯雜以成禮樂、推之驗天文地圖之秘、經緯貴賤、雜成星象、山川原濕、雜成方輿、風雨霜露、雲雷虹霓、生于兩間者、亦皆雜以成文、鳥獸之羽毛、草木之花實、亦皆雜以成文、況於人乎、五品猶五采之絲、天下之人、互相纏結不可解、是以有三綱之名焉、不雜則不文、物皆然、聖人之教爲甚、有司之於禮、伶工之於樂、豈不美哉、然君子賤之、以其專一職、心滯一隅、不雜不文也、信都之官、合四教、而以爲大學、德成而上、先之以格物者、貴雜文也、子曰、博學於文、顏淵曰、博我以文、曾子曰、以文會友、是皆謂詩書禮樂之業也、漢儒謬解文、爲文字典籍之謂、詩禮樂不與焉、論語最貴文、屢見於經、儒者皆謬解、沿漢儒之舊、司馬光繩冕其非云、博我以文、博學於文、此二文謂六藝之文、匪文字之謂、

其實秦以前凡言文者、皆如此、豈特二文而已乎哉、漢儒稱六經爲六藝、惟太史公所稱、躬通六藝、指禮樂射御書數而言之、與周禮同、小學指爾雅急就章類而言之、謂小子之所學、止於書字、三代至今皆然、六藝之文、係之小學、未經見、二十而冠、始學禮、舞大夏、禮樂不爲小學也審矣、詩云、芄蘭之葉、童子佩韘、識童子之射、射之不爲小學也、亦審矣、至于御者、上車御六馬、最非童子之事、書數二技、雖精微乎、書字知數、童子所能、小學之教、亦唯書字、識聲與形、布算識乘與除、至於其精微、則大學之道、而小學不與焉、歌舞之易者、亦兼習焉、爲大學々樂之其矣、不聰明俊秀者、不教歌舞、只教書算、歸農歸商、知書算而足矣、禮樂射御、非下民之業也、禮不下庶人、樂亦然耳、惟百工之徒、其事與藝業相接、如伶工專取管者、與君子周旋乎學校之間、是其所以異農商也、雖然百工之事皆專攻、因以爲生、君子忘天下、發乎聲聲、荷蕢者聞而知之、甚矣哉、文之不可以捨也、夫子之鼓琴瑟、其音清微以和、淪人至道、親出手指、猶爲近眞、至於磬、則擊之以桴、與人相離、然人心識見乎其聲、凡鐘鼓笙、怒而擊之則皆爲文官、一旦有事、又皆爲武官、文武分官、始乎隋矣、樂有文武舞、文舞持雉羽、武舞持干戈、文武之德皆所取之器、其實皆文也、古者農兵不判、後世武人之事擊刺者、即古之農也、非君子矣、文人即古學士之選、是其爲君子也、然後世文人、專修文辭、彷彿乎古史官焉、非詩書禮樂者也、亦異乎古之君子矣、古之時、人皆被禮樂之化以成德、其直餘發爲文辭、不待修而采縟足、史官所錄、下至里巷歌謠之文辭、皆莫不美、古語諺童謠類、後之文人窮筆墨之力、莫能及之、甚矣哉禮樂之化、如此之大也、德彌盛者、文彌縟、中彌理者文彌章、猶醇者之面發赤也、文於外者、必誠乎中、亦何疑、後儒惡飾外之虛文、是固然、然是自虛字之可惡、而文字之不可惡也、名之以虛文、猶名之以俗學、俗可惡、而學不可惡也、後儒惡其虛、併廢其文、非忘而何、子擊磬於衛、有荷蕢而過孔子之門者、曰有心哉、擊磬乎、聖人未嘗一日忘天下、發乎磬聲、荷蕢者聞而知之、甚矣哉、文之不可以捨也、夫子之鼓琴瑟、其音清微以和、淪人至道、親出手指、猶爲近眞、至於磬、則擊之以桴、與人相離、然人心識見乎其聲、凡鐘鼓笙、怒而擊之則

武、悲而擊之則哀、喜而擊之則樂、不啻聖人如此人皆然、雖念慮之密心術之徹、不可窺其際者、聖人授之以禮樂之器、其心盡見、無所遁形、聖人教之、以救其偏、歸乎中和、又以器也、琴禁也、禁人邪志、笛滌也、蕩滌邪穢、皆古之遺言也、後世譙儒、口娓娓乎說大學之教、有可大疑者、心之正不正、意之誠不誠、知之致不致、自知之乎、師知之乎、自知己心之正不正、是亦難矣、若自知之、則不待就師而學也、雖不入學校可也、入學校必受師之教、乃師知之也、師知弟子之意誠不誠、視其面而察其意、亦難矣、師非聖人、焉能察識如神、一一不誤乎哉、若能昭然知其意之不誠、其心之不正、亦莫如之何、大學師徒、危坐相守、以待天下之平、亦何益也、故正心誠意、皆爲虛設之辭也、其實坐忘也、而格物以處事物、驗當否、是其通辭、殊不知學校專爲學設、初無外事之來、以格物一年之間、不過幾二三、是何闊焉、而讀書以爲學者之業、是又通辭、三代之時、有何書可讀、尙書藏于史官、三易秘于太卜、論語大學種々之書未作、讀書爲大學之業、未經見焉、夫不出橫難、不得從說、不發苦諳、不聞甘對、吾且得從說甘對、大學之所習、冠昏喪祭、射御朝聘、飮酒相見、養老釋采投壺、絲竹管絃、歌詩舞樂、律呂算數類、其業繁多、學者皆孜々其事、不敢逸豫、師執夏楚、笞惰慢者、此數藝業、其事雖殊、皆至道所寓、至善所在、學者之資質心意、皆見乎其業、師視其業、而知心之正不正、意之誠不誠、教誨之方又以其業、執玉高、其心驕、使卑之、執玉卑、其心憂、使高之、不高不卑、其心正矣、張絃急、其氣怒、使緩之、張絃緩、其氣緩、其氣慢、使急之、不急不緩、其氣和矣、禮樂之教、驅人於中和之域、皆是類也、子路之賢、剛暴之氣未消、北鄙殺伐之聲、見乎詠瑟、聖人曰、何爲於吾之門、古之教學皆如此、子夏子張除喪而見、予之琴、不亦然乎、子曰、興於詩、立於禮、成於樂、斯言明大學之道也、大學始教、雝雅肆三、謂鹿鳴四牡皇皇者華、是三者宴會所用之樂歌、入學之始先教之、先乎習吹習舞、重人聲也、子與人歌而善、則必使反之、然後和之、詩三百五篇、孔子皆絃歌之、求合雅頌之音即是也、然必先宴會之詩、重養老也、詩禮樂之教、皆與人共者也、子曰、可與共學、曾子曰、堂々乎張也、難與並爲仁矣、故君子之學貴與人共也、大舜與

人爲善、亦是已、孟子之告齊宣王曰、獨樂樂、與人樂樂孰樂、曰不若與人、曰與少樂樂、與衆樂樂、孰樂、曰不若與衆、大學始教、以宴會之詩、示與衆共之意也、至於讀書、則飛耳長目、止乎一人、而不可與人共者也、亦唯時或觀覽以便學問云爾、詩書樂雖先王之四術乎、與立成之教、未嘗及書、可以見已、後之儒家者流、杜門謝客、埋首於書冊、宴會之樂歌廢矣、鄉飮酒之禮廢矣、學爲大冬之孤松、疾風之勁草、而廢春風桃李之美、苦硬爲賢、草野爲高、以不飾爲務本實、孔子專尙文、居四教之首、是失風之自、謂之子桑伯子之流則可、謂之聖人之徒不可、子曰衣敝縕袍、與衣狐貉者立、而不恥者、其由也與、又曰士志於道、而恥惡衣惡食者、未足與議也、或者援以證聖人不尙文飾、是大不可、敝縕袍、惡衣惡食、今日所遇之分、舜之耕稼陶漁、雖小人之事、不害乎其聖也、顏淵糟糠不厭、雖陋巷之徵、不害乎其仁也、單襘至膝、滑索欲絕、何其害乎爲文乎哉、故以所遇而言之、或在廟堂、或在草野、蓋亦莫入而不自得焉、以君子之道言之、可施諸廟堂、而不可用於山野、君子之在山野者道隱於下、豈爲行道乎、爲儒多在草野、慣以成風、雖進講於王公大人之前、例以草野之情、欲其徵去繁華、以爲布衣行、豈能入乎哉、聖人之道至文、天下之人情、莫不貴文、僧尼落飾、人情惡之、喪具素質、人情忌之、文其不行乎哉、大賓儼然、爲文華之宗、一人文則四海文、絃歌之俗可待、一人不文、則四海不文、夷狄之風何免、伏願以堯舜爲師、變敝大平、以孔子爲法、采辨風化、以示永久、終垂無窮、

太平策卷之六

水斯立著

忠

天地已有太古、人已有嬰兒、忠者太古之道也、嬰兒之心也、夫天地之始爲太素、清氣未升、濁氣未沈、游神未靈、五色未分、中有其物、冥々而性存、謂之混沌、混沌爲太始、太始者元胎之萌、而在太素之先、太極在太始之先、道在太極之先、先而又先、以至於無先、始而又始、以至於無始、無先而又無先、以至於無先而又無先、以至於無無先、無始而又無始、以至於無無始、至微之微、微不可言、至妙之妙、妙不可傳、道之元也、道生一、一生二、二生三、三生萬物、太素降爲太古、太古之時、鴻荒草昧、曆紀未制、不知幾數千萬歲、人民鳥獸、羣居聚處、臥者居々、坐者于々、生者無號、死者無謚、黃金粟於山、珠玉捐於淵、巖居穴處、衣皮毛、飲泉液、吮露英、盧無窫廓、與天地通靈也、與鬼神通情也、至淳太朴、莫以尚矣、風氣之開、太朴漸散、有巢氏之時、人民機智、而物始爲敵、爪牙角毒、槩不足以勝禽獸、於是構木爲巢、教民居之、以避其害、未有稼穡、食草木之實、未有火化、飲禽獸之血、而茹其毛、衣其羽皮、燧人氏之時、觀星辰、而察五行、知空有火、鑽木則明、於是鑽木取火、教民以烹飪、乃別五木、四時改火、由是火化興矣、伏羲氏之時、有河圖之瑞、始制八卦、以明吉凶之塗、始制琴瑟、以寫中和之音、以龍紀官、官位尊卑之源立矣、女媧笙簧、葛天廣樂、陰康制舞、神農爲市、農圃醫卜興矣、至有熊氏之時、風氣益開、民與天相離、有衣裳宮室律曆文字、文字之始制也、天爲雨粟、鬼爲伐哭、龍乃潛藏、太朴之散、至淳之醨益甚、然猶太古之世、堯有天下、飯於土簋、啜於土瓶、其南至交趾、北至幽都、東西至日所出入、莫不賓伏、堯釋天下、舜受之、作爲食器、斲木而裁之、鎔銅鐵、修其及、漆黑之、以爲器、諸侯侈、國之不服者十有三、舜釋天下、而禹受之、作爲祭器、漆其外、而朱畫其內、縮帛爲茵褥、觴勺有彩、爲飾彌侈、而國之不服者三十有二、夏后氏以沒、殷周受之、作爲大器、而建九倣、食器彫琢、觴勺刻鏤、四壁四帷、茵席彫文、此彌侈矣、國之不服者五十有二、世彌文渝、而俗益澆醨、詐僞機巧、日益繁多、

老子曰、樸散則爲器、又曰、聖人不死則大盜不止、剖斗折衡、而民不爭、又曰、禮者忠信之薄、亂之首也、老子法太古、太古法嬰兒、嬰兒法天、天法鴟卵、鴟卵至無知、無知則神合于自然、迺禮樂熾烟、使人華靡、棄自然而亡之、使人壽促、使人心勞、使天下多事、至人惡之、反樸還素、黜爾聰明、庶幾可遊于無懷氏之庭也、太古雖邈乎、人己有嬰兒、嬰兒之情態與太古同、渾沌未鑿、素質未彫、泣則呱々、笑則許々、適其自然、赤子之心遠天不遠、猶鴟卵之無知也、大人不喪其赤子之心、忠之謂也、赤子之心、純一無僞、眞實無妄、誠之本也、誠者天之道、誠之人之道、天人之道、一誠以貫、五常之本、百行之源、其孰能加之哉、誠則聖人矣、然誠非自外來者、與生俱生、情實自然、古之所謂忠者是也、赤子者聖人之無知者、而聖人者赤子之有知者也、人各全其天、還其本、則聖人豈可外求乎哉、子曰、仁遠乎哉、我欲仁則斯仁至矣、孟子曰、反身而誠、樂莫大焉、可以見已、古小學之敎、培養根本、立愛敬之實、成忠厚之質、可謂至矣、記曰、甘受和、白受采、忠信之人、可以學禮、苟無忠信之人、則禮不虛行、甚矣哉忠之大也、春秋傳曰、齊師伐我、公將戰、曹劌請見、其鄉人曰、肉食者謀之、又何間焉、劌曰、肉食者鄙、未能遠謀、乃人見、問、何以戰、公曰、衣食所安、弗敢專也、必以分人、對曰、小惠、未徧、民弗從也、公曰、犧牲玉帛、弗敢加也、必以信、對曰、小信、未孚、神弗福也、公曰、小大之獄、雖不能察、必以情、對曰、忠之屬也、可以一戰、古之重忠也如此、朱公叔私謚議曰、夫萬類莫貴乎人、百行莫美乎忠、故夏后氏正以人統、敎以忠德、然則忠也者人德之至也、而猶有三焉、孔子曰、進思盡忠、又曰、臣事君以忠、奉上之忠也、曰爲人謀而不忠乎、又曰、忠焉能勿誨乎、謀誨之忠也、左傳、小大之獄必以情、忠之屬也、又曰、上思利人曰忠、撫下之忠也、三者人之則、而忠行乎其中、國語、忠者文之實也、然則文者忠之彰也、忠以爲實、文以彰之、事通義合、兩名一致、忠經曰、天之所覆、地之所載、人之所履、莫大乎忠、天下盡忠、淳化也、君子盡忠則盡其心、小人盡忠則盡其力、以是觀之、古之所謂忠者、皆指人之情實而言之、古人重忠厚、故知情實之不可以已、後人非薄、不知情實之爲貴、外智銷眞、外習奪情、

竟謬解忠字、以爲事君之道、援論語臣事君以忠爲證、是識其一不識其二、通其半不通其半、孤行一句、以證其說、豈足據乎、上句有之、君使臣以禮、禮豈專屬君乎哉、忠之不屬臣、亦猶是也、父曰慈、子曰孝、是不可移易、至於忠則不然、故君使臣以禮、禮爲君道、論語又曰、事君盡禮、人以爲諂也、禮爲臣道、臣事君以忠、忠爲臣道、論語又曰、居之無倦、行之以忠、忠爲君道、是可見禮與忠、君臣之所共道也、禮者文章可觀者也、忠者其實也、水之寒也、火之熱也、金石之堅剛也、此數物未嘗有言、而人莫不知其然者、忠著乎其體也、推赤心置人腹中、人主之忠也、軍糧未爨、將不言飢、軍井未汲、將不言渴、雨不張蓋、暑不設幕、與士卒同勞苦、是大將之忠也、犬馬戀主、惓々不已、寧武子之愚、屈原之怨、是人臣之忠也、屈原離騷、滿腹是怨、其忠厚至情、愛君太深、惟其忠矣、是以怨也、後漢尚節義、出乎俗尚、力以死節相高、後世忠義之士、史冊所稱、率皆名高死節之徒而耳、求之忠厚之意、則未必有之、故雖大節軒天地、至誠貫日月、謂之節義之士則可、謂之忠則未也、孝經緯曰、求忠臣者必於孝子之門、緯書作於哀平之間、後漢節義之風未興、所謂忠臣者忠厚之臣也、尚書曰、克忠克孝、孝經曰、以孝事君則忠、以孝事長則順、是二者專以事君而言之、忠誠朴實之意、而未嘗有節義之意而耳、大學曰、爲人君則止於仁、爲人臣則止於敬、仁者君德也、敬者臣道也、雖然孔門之學、以仁爲宗、仁豈專屬君乎哉、商紂道敬不足行、以至滅亡、敬豈專屬臣乎哉、故以忠語臣道者、猶以敬語臣道也、忠豈專屬臣乎哉、後儒之語忠、猶孝慈之類、謬之大者也、孝子之道、清淨無爲、合于自然、可謂忠矣、是太古之遺也、至末世貝錦日長、布帛日廢、非君子之意、草木秋死、松栢獨在、水浮萬物、玉石留止、忠之屬也、夫人以眇々之身、能贊天地之化育者、唯誠而耳、苟不誠乎不能動物、豈能貫幽明而一之乎、故祭祀之道、專在誠敬、苟誠敬未盡、則簠簋雖飾、粢盛雖潔、鬼神不饗、苟孝慈未至、則雖日用三牲之養、猶爲不孝、君子貴實、不貴華、貴情、不貴文、率皆然、禮之得中、樂之得和、是其至善也、苟未得中和、則雖衣冠翔翔、管絃喤喤、只有司之賤務、而非君子之所重也、大學之道、在明明德、在新民、在止於至善、不問禮樂藝業何如、貴實

也、禮樂事也、事之所在、至道寓矣、君子學其道、而忘其事、百工技藝之徒、習其事而忘其道、其道無聲無臭、君子默而識之、其事則學而不厭、誨人不倦、是上下之辨也、嬰兒雖無知乎、其心純一、與天不相遠、及其有知、文飾百出、加以巧詐、失其本眞、與天相離、滔々不返、仕官之貪榮、市人之貪利、少壯之貪色、老衰之貪生、文詞澆漓殊甚、大古之世、豈有之乎、葛天未襲之民、豈其然乎、後世人情、朝堯而慕桀、外夷而內跖、台爲兄弟、離爲胡越、父子不可保其親、君臣不足恃其義、夫婦或爲怨讐、師弟子或爲路人、反覆波瀾、殆與太行爭嶮、莫不由文勝之弊也、故盡廢文飾、惟存質朴、慕太古之俗、返嬰兒之眞、然後爲己之學、可得而入也、不然乎蒸衣剃面、學爲宦者妾婦、豈學問之道乎哉、子曰、先進於禮樂、野人也、後進於禮樂、君子也、如用之、則吾從先進、先進者質素、近乎野人、後進者華美、是其爲君子也、然聖人從先進、重質也、不御綺羅、布帛是尚、君子之常也、布帛雖賤、百姓常用之、錦綺雖貴、爲物奇麗、鬼神之易給、而犬馬之難圖、豈非以常者難、而變者易耶、孟子曰、堂高數仞、榱題數尺、食前方丈、侍妾數百人、吾得志不爲也、有志之士、雖富貴、不事華靡、不事繁文、土階茅茨之訓、峻宇雕墻之戒、豈不昭々乎、學問之道、專務本實、痛絕浮華、子曰、巧言令色、鮮矣仁、又曰、剛毅木訥、近仁矣、綺靡之長、聖人憂之、文辭之盛、鬼神惡之、聖人之教、以仁爲宗、以誠爲本、其言者忠也、曾子曰、夫子之道、忠恕而已矣、恕者忠之用也、忠者猶未染之絲、染之蒼則爲蒼、染之黃則爲黃、君子尚其不染、而卑其染、子曰、涅而不緇、非謂不染乎、子曰、人之生也直、罔之生也、幸而免矣、豈須染之乎、染之者皆風俗氣習之變也、不染者其眞也、四教之中、忠爲重、無忠則其本不立、枝葉豈能特達乎哉、古語曰、市民玩、山民樸、深山大谷之中、其人必素樸老實、地氣使然、廼都多新樣、鄙多古風、子曰、十室之邑、必有忠信、十室之邑猶後世所謂三家村、蕭條貧寒、目不覩華麗、故其人忠信、若乃四通五達、輻輳之衢、豈能有忠信之人耶、春秋時、齊稱最繁華、臨菑之民、二十一萬、無不吹竽鼓瑟、彈琴擊筑、鬬鷄走狗、六博蹋鞠者、臨菑之塗、車轂擊、人肩摩、連衽成帷、舉袂成幕、揮汗成雨、家殷人足、志高氣揚、魯最弱

小、存周公之遺法、子曰、齊一變至於魯、魯一變至於道、俗彌繁華、則違道彌遠、可以見已、自古賢德之士、多在蒿萊、以其無紛華之習、磨勵以成其志者何限、曾曰、野無遺賢、先王之求賢於野可知也、生於憂患、死於安樂、於傳有之、人不濱飢渴、則性情不定、不堪困苦、則道德不固、貴介公子、生於錦褥之上、長於婦人之手、所見聞、莫不繁華、其喪志莫立、往々皆然、非文之害乎、殷高宗之爲太子、下在民間、親見稼穡、疾苦所在、自能知之、其成中興之治者、職是之由、廼華靡之蠹人心、聲色爲甚、物之入人、莫深於聲、蔓衍流蕩之聲作、民情日倍輕薄、姦巧詐僞、無所不至、古樂平淡不美、惟其不美不妖、是以能使人心歸於雅正、後世凡百制度、皆繁於古、虛文粧飾最多、求之本實、未有能存者也、三代已遠、漢之儒者、雖不聞道、而猶能守禮、故在朝廷則危言、在鄉黨則危行、後世學者不守禮、晉人放曠、崔顥十五之詩、爲李邕見斥、比々皆然、漢之人物、比諸後世、皆忠厚不可及、然三代人物不可及、亦甚於漢、雖然、視遠物者、見其形、不見其容、聽遠聲者、聞其疾、不聞其徐、千歲邈矣、其時與事、不可一一知也、其人物皆美、亦唯經有褒增之文、史有空加之言、在其世而觀之、豈皆美乎哉、世俗之情、賤所見貴所聞、尊古卑今、猶貴鶩賤鶏、鶴遠而雞近也、見當今之文游也、非之則謂、上世朴質、下世文游也、又猶家人子弟不謹、則謂他家子弟謹良矣、其實古今人不甚相遠、今之所有、古亦有之、今之所難、古亦難之、陰康之時、民氣鬱滯、故作舞以宣導之、夫陰康之民、至質朴、而民氣樽遏、脈理滯着、非歌舞佚樂、則不能宣導、和其關節、與後世何異、尚書詩三百、雖古乎、其所載時政得失、人情向背、以至里巷鄙細之事、皆與今不大異焉、今夫人至百歲、臨且死時、所見諸物、與年十歲時所見、無以異矣、六畜長短、五穀大小、昆蟲草木、金石珠玉、蜎蜚蠕動、跂行喙息、無有異者也、今之於古、亦復然耳、上瞻天文、下察人心、太古與今、未見其異也、山野窮僻之民、今猶太古矣、惟都邑佳麗之地、風氣以扇、然山野至多、都邑至少、都邑之於天下、特萬分之一而耳、衣冠貴族之天下之民、亦不特萬分之一而耳、廼謂太朴未散、至淳未醨、亦可耳、先王之世、天下之人、莫不入小學者也、小學之敎以忠、養質朴敦厚之性、

擇其可以爲君子者、進入大學、比諸出小學而歸民者之衆、亦萬分之一而耳、雖大學之敎以文、以天下視之、猶大鼎之一臠、天下之廣、人民之衆、豈能一一文之乎哉、若夫婦人雖后妃之尊、猶爲小人、以蠶繰紡績爲工、百工類也、婦人稱夫爲君子、以其小人也、夫人自稱曰小童、豈不信乎、子曰、唯女子與小人、爲難養也、近之則不孫、遠之則怨、女子小人固相類、其道也忠、衣服曰信、飲食曰忠、以飯食忠養之、人之忠必見於飲食、王孫不忘漂母、光武不忘嘘沱河麥飯、可以見已、婦主中饋、酒食是謀、其道以忠、不亦宜乎、其唯以忠爲道、故曰、忠臣不事二君、貞女不見二夫、忠者不二之謂、農商百工、孜々其業、不攻異端、譬者善聽、譬者善視、各一其志、小人之道也、凡人心不能兩用、不專一則不能精、意不並銳、事不兩隆、盛於彼者、必衰於此、長於左者必短於右、喜夜臥者不能蚤起也、是其常矣、視如離婁、聽如師曠、御如王良、射如夷羿、書如史籀、計如隸首、走追馳馬、力折門鍵、若求衆之者、天下無一人矣、故百工技藝之不二其事、古之道也、若夫君子多乎哉、不多也、雖君子亦不多其事、周公之多材多藝、孔子之多聞多見、雖繁多乎、以一貫之、實視之則未嘗不一也矣、蓋言純白、二豎不生、聖學之要、莫如一焉、豈不然乎、故一則治、多則惑、簡則理、繁則亂、墨翟之悲絲、楊朱之泣岐、皆愛多之亂眞也、子曰、主忠信、是以忠兼信、忠重信輕、又曰、言忠信、是以忠信兼忠、信重忠輕、蓋忠者心之誠也、信者言之誠也、聖人之敎、必合內外、是以有忠信之敎、若夫忠恕違道不遠、忠主於內、推己及物、恕也、仁則不須推矣、忠信忠恕、其義雖別、其實一忠、聖人之敎、至忠、貽敎小學、忠之始也、大學誠意、忠之中也、老反質朴、忠之終也、夫不誠則無物、不忠則無人、人類不至滅絕、人道不至荒廢者、惟在忠以維持之而耳、靜爲虛戶、虛爲道門、泊爲神本、寂爲和根、嗇爲氣根、徵爲事工、山林之下、修褧之徒、竊帝王之寶、以淑其身、亦足以久視、王者以天下爲鼎爐、鍊蒼生爲丹、以薰神靈之統者、豈一朝一夕之所能致乎哉、其必遠聲色、去浮華、以古風變今俗、尚質素抑繁文、不忘嬰兒之心、以際太古之域、乃淳風之興、如雲如雨、和氣所蒸、爰生聖人、爰產四靈、禮樂之化、滾々其來、詩云、予懷明德、不大聲與色、子曰、聲色之於

化民末也、蓋捨彼錦取是布、

太平策卷之七

水斯立著

通古今

太古之道、一變爲卦畫、再變爲文字、是二者文明之器、而聖人作之、聖人不自言其心、孰能知之、唯卦畫知來、文字知往、是其尤赫著可見者也、天下後世資以爲用、其爲教也相衡、卦畫以象推之、文字以義解之、以義解者、君子能之、以象推者、雖民亦然、凡民間所信、禍福、吉凶、星氣、祿命、符瑞、災異、夢寐、朕兆、時日、方位、拘忌、禁厭、妖孼、靈怪、因果、報應、天堂、地獄類、非有其形、皆象而耳、圖畫之工、圖雷之狀、棨々如連鼓之形、又圖一人、若力士之容、謂之雷公、使之左手引連鼓、右手推椎、若擊之狀、其意以爲、雷聲隆々者、連鼓相扣擊、其魄然若敵裂者、椎所擊之聲也、其殺人也、引連鼓、相椎並擊之矣、及圖鬼神星宿五嶽眞形、皆識其狀以別之、是豈果有其形乎哉、皆以象摸寫、上古久遠、世屬鴻荒、其工怒觸不周、女蝸鍊五色石以補天、猶足以立四極、黃帝白日登天、振古所傳、斯類非一、

苟能通象則何所疑怪、後儒謬以爲實有其形、實有其事、是以斥爲妖妄不經、爭其不然、荀子非相而下、儒者力排幽冥恍惚之說、盡辨其非、欲天下之事、瞭々乎目下、殊不知天地之道、莫大於象、喜怒休戚之見于面、妍醜媿惡之著于態、災祥瑞變見乎雲氣星象、吉凶禍福動于卜筮蓍龜、非謂其方圓之形、青黃之色、宮商之聲、唯彷彿有其象而耳、已謂之象、則非有其實、故民間所信雜占、天堂地獄類、皆虛造之言、亦以盡人情之變、其能久而不廢者何、有其象也、夫好異喜怪、人情有之、耳目所聞見、慣以爲常、稱述不可聞見、不可測識者、以慈人也、亦人情爲爾、神仙詭異、翟曇汗漫、累數十萬言、亦唯未免人情之所喜矣、是以信者衆焉、亦何足深辨、今夫三歲孩兒至無知、不能通文字及義何如、至畫圖、則狗知其狗、馬知其馬、隨見隨解、不待求其義也、可謂象之入人速於義矣、太易之道、圖象爲大、先天四圖、雖無辭乎、其妙不可窮盡矣、是唯包犧仰觀俯察、近取諸身、遠取諸物、以通神明之德、以類萬物之情、法象之道、於是乎祖矣、乃若網罟之取諸離、耒耨之取諸益、交易之取諸噬嗑、衣裳之取諸乾坤、舟楫之取諸渙、牛馬之取諸隨、門柝之取諸豫、臼杵之取諸小過、弧矢之取諸睽、宮室之取諸大壯、棺槨之取諸大過、書契之取諸夬、禮樂之道、盡法象於天地、可謂象之於天下大於義矣、文之字雖以義解、亦有不可以義解者、日月山川是也、六書之首象形、原風之自、義亦出於象焉、龜文鳥跡、奎星圖曲、蝌蚪之徵、文字由以興矣、奎壁明而圖書繁、劉向晝觀書傳、夜觀星宿、太乙下視、由是視之、日月衆星天之象也、卦畫文字、人之象也、卦畫貴象而義存、文字貴義而象存、豈不同乎、雖然、象者顯未成之前、義者定已成之後、天王即位、其占大吉、立太子、其占大吉、賢人登庸、其占大吉、是象之不可以辨、簡策之所載、則曰元年某月某日、天王即位、某月某日、立子某爲太子、某月日舉某爲相、一視昭々、是其所以異也、故卦畫文字、雖皆文明之器、要之卦畫猶屬于幽、文字專屬于明、道家者流、鍊丹火候、及役使鬼神之術、下至符章禁劾、皆藉用卦畫、以其不可讀不可解、隱々然有幽冥之象爾、青衣神人、華山道士、其事頗怪、非誣矣、歐陽修以河圖洛書爲怪妄、拘儒有倣其陋、誣先天之圖、爲仙家所作者、是不達之過也、夫民間所信、專在于象、而世之儼然

稱君子者、斥而詘之、是其智不及蚩々庸々之民耶、不然則必有故、世之君子、專習典籍、典籍之富、如山如川、充棟汗牛、浩々莫知其津涯、終身不可窮覩、難讀者十之七、易讀者十之三、故君子學厭敎倦、竟盡所之、覽覩止十之三、皆顯文露書而耳、是以其知之有日月、地之有崐崙、位之有王、德之有聖人、書之有經、其至尊也、尊以卑爲本、故衆星之宗日月、丘垤之宗崐崙、臣民之宗天子、諸子百家之宗聖人之經、出於自然、孰敢疑之、故天下之言莫粹於經、天下之辭、莫美於經、天下之義、莫精於經、天下之學、莫難於經術、經術之盛、漢宋爲甚、漢之經術、皆專門互相傳授、名物訓詁、曲盡精徹、註疏之文、豈不富乎哉、宋之經術亦多端、迨程朱氏興、倡明道理、鴻儒巨碩、溢于四海、先四子而六經、天下由之、迺古注疏之學、於是乎廢矣、是古今經術之變也、明儒或尚古義黜程朱、程朱之徒、亦黜古義、於是諸儒紛擾、互有異同、各是其所信、至有古學宋學之名、是皆可憂之甚、夫經者聖人之辭也、治經者君子之業也、君子無所爭、豈有古宋之辨乎哉、楊子雲有言、曰衆言淆亂、折乎聖、苟以聖人爲斷、誰敢爭之、聖人不自言其心、孰能知之、尺有所

子百家、其說不一、猶橘柚梨栗異味、而各可于口、無可廢者、諺有之曰、美色不同面、諸子百家、各有所長、何必同、故通諸子百家之書、然後聞見博矣、聞見已博、患不約當讀經、經至難讀、終身之業也、天之有日月、地之有崐崙、位之有王、德之有聖人、書之有經、其至尊也、尊以卑爲本、故衆星之宗日月、丘垤之宗崐崙、臣民之宗天子、諸子百家之宗聖人之經、出於自然、孰敢疑之、故天下之言莫粹於經、天下之辭、莫美於經、天下之義、莫精於經、天下之學、莫難於經術、經術之盛、漢宋爲甚、漢之經術、皆專門互相傳授、名物訓詁、曲盡精徹、註疏之文、豈不富乎哉、宋之經術亦多端、迨程朱氏興、倡明道理、鴻儒巨碩、溢于四海、先四子而六經、天下由之、迺古注疏之學、於是乎廢矣、是古今經術之變也、明儒或尚古義黜程朱、程朱之徒、亦黜古義、於是諸儒紛擾、互有異同、各是其所信、至有古學宋學之名、是皆可憂之甚、夫經者聖人之辭也、治經者君子之業也、君子無所爭、豈有古宋之辨乎哉、楊子雲有言、曰衆言淆亂、折乎聖、苟以聖人爲斷、誰敢爭之、聖人不自言其心、孰能知之、尺有所

短、寸有所長、孰能取一捨百、故漢之經術、長乎辭事、宋之經術、長乎道義、皆聖人之遺也、諸儒之說、左右枝梧、各有所長、吾取其長略其短、以吾視之、天下無棄物、古今無棄人、何必爭其古與宋乎哉、難者以爲雜、墨子哭於練絲、楊朱哭於岐路、天下之事、完於本而裂於末、十剖百判、孰能一之、千反萬畔、孰能合之、孔子以後、經術爲諸儒割據、孰敢知其孰是孰非、而不譏乎哉、然舜之大知、隱惡而揚善、取其長略其短、君子之道也、豈謂之雜、況學琴瑟者、先操雜弄、不操雜弄、則手指不熟、音調不暢、雅頌之韻不發、故醇出乎雜、約生乎博、荀卿青藍之喻、不其然乎、亦何病雜、經者經也、猶經持緯、衆義之書也、諸儒之說、雖繁多乎、吾猶苦其少焉、是以先史學、次之以諸子百家、經術居後、何如者多聞多見、識見不滯、心志不局、然後治經、經亦易々、是遵博約之敎也、今之經生、碌々小人、不通古今、不達文章、不習文明之器、抱不逮之資、治嘵世之言、不庶侮聖言乎哉、竇太后問老子、轅固生答曰、家人言耳、以明諸子百家之爲聖人之奴僕、王公之富、以待御僕妾之多、與千乘萬騎之盛、問聖人之富、則將數諸子百家之繁

以對、然奴僕必奉主令、若不奉主令、則主鞭笞之、不少假借、仲舒之黜百家、程朱之排老佛者、行鞭笞之法也、不知者以爲敵而攻之、夫仁者無敵、王者無外、道不隅立、敎不孤行、聖人之所以爲大也、仇視百家、獨推聖人、猶盡逐奴僕、子立主人、爲主者、亦且徒貴虛算、寥々失明、爲天下畸、亦猶徹去儀衛、單騎徵行、非聖人之意也、子夏曰、雖小道必有可觀者焉、致遠恐泥、是以君子不爲也、君子不爲耳、豈禁人爲之耶、故雖誕如神仙、黠如浮屠、佹（攷作佹）如覡術、局如技藝、各有其書、其書皆可讀、吾一以奴僕視之、役使之、豈仇視以生一秦耶、故世儒黜諸子百家、獨推聖人者、不知聖人之尊、靡與儔故也、聖人大知、莫不貫穿萬物　是以諸子百家之奧、聖人於易明之、曰一致而百慮、人情之變盡于斯焉、亦何大也、迺諸子百家、魚貫雁列、其書五車、古之遺言、往々存焉、如在寶山、左右採拾、西門豹急、佩韋以自緩、董安于緩、帶弦以自促、莫往而非吾師、天下常有無用之用、萬國來朝、而中國益尊、萬物率伏、而人類益蘩、諸子百家雖無所用、環拱森列、聖人之經益大、芟而去之非人情、況不可芟去耶、諸子如老、莊、列、

申、韓、荀、楊、呂覽、淮南、千古少比、最可珍襲有諫臣、有孝子、有貴人、有大人、有賢人、是皆人
實愛之不暇、百家如兵家、陰陽家、名家、法家、五物之可觀者也、降至仙人、方士、浮屠、巫醫、百工、
行家、律家、曆家、天文家、堪輿家、算家、占家、技術之徒、有異行可稱者、亦一代人物之美、下之庸
醫家、巫祝家、皆切世用、天下之不可無者、其書亦々飯袋耳、讀史者先大體、次制度、次人物、兼該通
皆可讀、豈得廢之耶、然諸子百家、各有家言、家言習、則合古今而一之者、豈難乎哉、古今人不相遠、
者、一家所獨、求天下之所共者、唯史而耳、故讀書今之所有、古亦有之、謂之萬古一日、亦可耳、爲古
之道、莫先於史學、文章之器、莫雄於史才、史哉史人不可企及、古道不可復行者、不通古之過也、君子
哉、天下之大務存焉、讀史之法、以識大體爲先、君之所學者古也、所用者今也、苟不可用於今、則萬卷
德明暗、綱常張弛、成敗治亂之機、是大體所在、大體雖富、無補平治之道、是以經生雖鑿々乎、其言迂遠、
已明、當究制度、禮樂器數、服色官名、律曆刑法、不可用於當世、天下予其治經、奈其治事、迺几案以
天文地理、水利算數、漕運鹽鐵、城郭隄防、田賦兵爲城郭、筆硯以爲甲兵、逢掖先生、高視闊步、是非
革、茶政、馬政類、歷代沿革、損益不同、不通之、當世、爲天下畸、一何小焉、是亦不通古之過也、通
則不足知其世、不知其世、則焉知其人、故制度已明、古則知今、今之天下即古之天下、豈有二乎哉、子曰、
當觀人物、創業之君、一等、守成之君、一等、中才斯民也、三代之所以直道而行也、今日之民、不爲鬼
之君、一等、暗弱之君、一等、亡國之君、一等、古爲魅爲虎豹、有靦面目、猶唐虞焉、喜怒哀樂、愛生
今帝王不出五等、佐命之臣、一等、遭遇之臣、一等、惡死、就利避害、今之人情、猶唐虞焉、田畯紅女、
備員之臣、一等、庸劣之臣、一等、姦曲之臣、一等、相共詠歌、言其情、三代與今如合符節、古今始未有
古今宰相不出五等、五君五臣、人物之大紀也、有英異也、古今之所以異者、風化之盛衰、人才之多寡而
雄、有大將、有良將、有猛將、有謀士、有辯士、有已、豈有他故乎哉、古所傳、夔一足、非一足行、夔
文人、有才士、有儒者、有隱者、有節士、有俠客、能和樂、平天下、若夔一足矣、丁氏家穿井、得一人、

非得一人於井中、宋丁氏無井、當一人溉汲於外、及不復見、詩無吟法、禮樂變革、（中足句讀看此例）不可山是、唯書載以
自穿井喜而告之、吾穿得一人、三家渡河、子夏曰、文字、竹帛所傳、經數千歲、未嘗澌滅矣、詩有經、
己亥耳、此類甚多、書豈易讀耶、孟子曰、盡信書不禮有記、樂有錄、經與記錄、詩禮樂之書而耳、秦以
如無書也、又曰、不以文害辭、不以辭害意、是讀書前者古也、秦始變古制、廢井田而阡陌、廢封建而爲
之良法也、馮阜陶稷契有何書可讀、楚左史倚相所讀、郡縣、廢琴瑟而爲箏、廢古文而爲隸、廢先王之禮、
亦唯三墳五典八索九丘、捨之莫爲學、至孔子刪墳典而爲法律、而書生誦法孔子、援古以詆、今於是焚典
丘索、而尚書易職方作焉、非孔子所作、逃古也、然籍百家語、坑儒士、先王之詩書禮樂皆亡、而秦亦亡、
以世家考之、孔子年六十八、乃叙書傳禮記、刪詩正漢高祖不讀書、而天下不可一日無詩書禮樂、大風之
樂、序易彖繫象說卦文言、皆出暮年手指、壯年時、歌、鴻鵠之詠、出乎自然、陸賈奏新語、每篇稱善、
孔門諸弟子、有何書可讀、亦唯帝舉以來、三千八百叔孫制禮、聲氏作樂、一變先王之教、猶沿商名、迨
及百二十國寶書、捨之莫爲學、故孔門之所讀、唯史孝武除挾書律、謁者陳農求遺書、河間獻王好儒、斷
而耳、大學雖教學之大典、侖吾雖洙泗之徽言、成於篇殘簡、往々出焉、灰燼之餘、屋壁之間、採掇成書、
孔門、非孔門所讀、況其下者乎、世之經術之士、自（侖吾自下同）如獲至寶、於是大尚典籍、天子建學、大師專門、以
以爲從孔子之教、殊不知孔門所讀之書、非大學侖吾、明經、詩書禮樂一新于漢、唯書有先秦者存焉、以爲
己之所學、與孔門諸子、始不相類也、孔門之教、爲先王之道在書、出孔子手指者、命曰經、變詩三百爲
詩書禮樂、而詩禮樂之教、用於今、風化天下者也、詩經、變尚書爲書經、易爲易經、春秋爲春秋經、然
唯書爲傳古之具、所以知往也、子曰、興於詩、立於古詩經之目猶闕、竟以爲禮經樂經古有之、亡於秦火、
禮、成於樂、大學造士之始終、三言者盡之、子路曰、於是六經之名興矣、是唯死人無口、亡國無驗、誣以
有民人焉、有社稷焉、何必讀書、然後爲學、雖辭之火于秦、孰能爭之、自是諸儒、皆承其謬、爲孔子作
所激、不得其平乎、亦復爾爾、去聖久遠、先王之教六經、百代由之、孔門諸子、如書生、曰曾子受孝經、

曰漆彫開受尚書、是皆妄說、漢承大亂之後、簡縑不完、人秘其學、互相傳授、聖人之道、散爲家業、章而習之、白紛如也、比之孔門之學、薰陶禮樂、煥文章、不規々于章句之間者、豈可同日而語哉、世之信六經者、不信孔門而信漢儒、不信侖吾而信莊子經解、不知類之大者也、中庸曰、凡治天下國家、有九經、孟子曰、君子反經而已、古之用經字、其例如此、漢儒專泥經傳之訓、六經九經十三經、非古也審矣、大抵六經之名、興於漢、而廢於漢、漢以後、侖以五經、有禮而無樂、禮有三禮、周官儀禮、經之可、小戴禮記之列于五經、又謬也、程朱氏興、先四子而後六經、六經者何、五經也、凡諸儒文人、稱六經六經、口將酸焉、皆襲漢儒之舊號、其實則五經也、黜禮記曰之四經、亦後世事已、聖人之書、謂之經、則十三經之列孟子、又謬也、莊子所謂十二經、果何經耶、以是視之、經術之不古、亦可知矣、伏羲之琴五絃、黃帝之瑟五十絃、絃少者彈法繁、絃多者彈法簡、古文少字、而衆義條達、後世之文多字、而一意順下、是匹錦背面、相去不遠、古之時、竹簡漆書、甚費人力、蝌蚪大篆、不可立成、故雜大事、戴以數字、後世紙墨之器作、行草之書盛、故雜細必錄、累數十百言、苟能通之、古今文雖殊、兩得其槩、經術文章、立古今之異者、皆識見未遠、襟懷未洞、未入達人大觀之域焉、其源由不熟青史故也、文字知往、卦盡知來、聖人所製、文明之器、知往之學、莫過於史籍、讀書萬卷、五行俱下、包維古今、通貫華夷、夫然後驅逐諸子百家於千載之上、千載之下、收軍還旆、讀聖人之辭、登泰山而小天下也、豈不快乎、向所謂民間所信、禍福吉凶、皆嬰兒之戲、聚沙爲飯、結草爲家、合土爲人、其象宛然、何必爭其有無、是非鬼神、變怪不可見、不可聞者、不可測識者、任其存其沒、不必問、不必辨、是君子之學所以大也、萬機之暇、覽觀史籍、以堯舜爲師、以桀紂爲戒、一言一行、盡以前代爲鑑、一步一趨、盡以後世爲耻、常以扶植綱常、建立皇極、爲心、海內諸家、皆充百家之品、使各修其業、不責其備、泛訪下問、以神聖知、日暨之後、誦聖人之書、以立天下之大本、是已、

太平策卷之八

水斯立著

習

天下之最大而不可變者、習哉習哉、自嬰孩至老死、耳目所聞見、不可勝數、慣以爲常、所不聞見、則驚以爲異、治世百年、人習逸樂、亂世百年、人習艱難、所習者身安之、故在治平無事之日、思干戈爭亂之時、履腸涉血、櫛風沐雨、不可一日相聚爲生也、然天下一亂、郡國瓜分、盜賊蜂起、人皆以戎馬爲常、生於矢石之間、長於旌旗之下、爭先甘死、習與性成、古將士武勇百倍於今、豈皆賁育乎、習使然、治平之世、文物蕃盛、在大亂之世思之、亦不勝其煩節矣、漢初宴會、諸將拔劍擊柱、朱虛侯以軍法行酒、可以見已、然太平已久、人生於襁褓之下、長於衣裳之間、人習文華以爲常、今風俗華麗、百倍於古、豈皆孟嘗季倫、亦習使然、風俗儉素則國富、風俗靡華則國貧、貧富亦大、能移人性、千金之子、坐不垂堂、貧人之子、豈然乎哉、習富則人心亦富、習貧則人心亦貧、習之移人、亦何甚也、習中國則安中國、不能去中國而居夷狄、習夷狄則安夷狄、不能去夷狄而居中國、漢胡相罵、非漢勇而胡怯、非胡仁而漢暴、其習異也、漢人習禮儀、胡人習騎戰、不能相假借、漢尊天子、不尊單于、胡尊單于、不尊天子、不能相交易、蜀人習乎山、不能使舟、越人習於水、不能御車、壁立萬仞、不測之險、蜀中童子能上下之、越人不信、風波霧毒不測之危、閩越幼兒、能往來之、蜀人不信、豈蜀人知於山、而愚於水、越人賢於水、而不肖於山乎哉、亦唯所習能之、所不習不能、何知其優劣、廟堂山林之相高、榆墨弓馬之相輕、亦猶是乎、心主先入、體安所習、古人所稱、居移氣、養移體、於傳有之、天下之事、惟習以移之、先王之世、風化所扇、民不覩異物、自朝廷至閭巷、所見莫不掛讓、所聞莫不絃歌、肺腸骨髓、捲爲仁義、堯舜之時、比屋可封、成康之際、囹圄空虛、豈皆賢人君子乎、習移之也、後世治化不完、衆疾並興、人生於洪澇之中、耳目所見聞、率皆不正之事、使心志疑惑迷亂、莫所不至、故千里寥々、英材絕轡、酒甕飯袋、項背相望、豈皆不肖、亦習移之也、豪傑之士、雖無文王猶興、是不移於習、盜跖雖與堯同居、不悛其惡、是亦不移於習也、若夫

中人之性、可善可惡、皆習以移之、子曰、性相近、習相遠也、又曰、唯上知與下愚、不移也、上知下愚、吾未見之、天下之人率皆中人、無大優劣、其美惡邪正、莫不由習也、廼衆楚之咻、雖欲勿移、不可得也、先王深知其然、立敎學之法、以使天下之人習乎正也、素成胎敎之道、書之玉版、藏之金櫃、置之宗廟、以爲後世戒、靑史氏之記曰、古者胎敎之道、王后有身之七月、而就別宮、太師持銅而御戶左、太宰持斗而御戶右、太卜持蓍龜而御堂下、諸官皆以其職、御於門內、此三月者、王后所求聲音、非禮樂則太師撫樂而稱不習、所求滋味、非正味則太宰荷斗而不敢煎調、而曰不敢以侍王太子、太子生而泣、太師吹銅曰、聲中某律、太宰曰、滋味上某、太卜曰、命曰某、然后爲王大子懸弧之禮義、東方之弧以梧、梧者東方之草、春木也、其牲以雞、雞東方之牲也、南方之弧以柳、柳者南方之草、夏木也、其牲以狗、狗者南方之牲也、中央之弧以桑、桑者中央之草也、其牲以牛、牛者中央之牲也、西方之弧以棘、棘者西方之草、秋木也、其牲以羊、羊者西方之牲也、北方之弧以棗、棗者北方之草、冬木也、其牲以彘、彘者北方之牲也、五弧五分矢、東方射東方、南方射南方、中央射中央、西方射西方、北方射北方、皆三射、其四弧具、其餘各二分矢、懸諸國四通門之左、中央之弧、亦具、餘二分矢、懸諸社稷門之左、然後卜王大子名、上毋取於天、下毋取於地、中毋取於名山通谷、毋悖於鄉俗、是故君子名難知而易諱也、此所以養息之道也、廼能食能言、施之以敎、內則所言、備矣、世多有、故不論、及其長也、容貌威儀之間、君子習之、古之容經曰、志有四興、朝廷之志、淵然清以嚴、祭祀之志、愉然思以和、軍旅之志、怫然慍然精以厲、喪紀之志、潹然漼然憂以慘、四志實中、四色發外、維如志、色之經也、容有四起、朝廷之容、師々然翼々然整以敬、祭祀之容、遂々然粥々然敬以婉、軍旅之容渴然滿然固以猛、喪紀之容惔然憮然若不還、容之經也、視有四則、朝廷之視、端冰平衡、祭祀之視、視如有將、軍旅之視、固植虎張、喪紀之視、不泝垂綱、視之經也、言有四術、言敬以固、朝廷之言也、言文有序、祭祀之言也、屏風折聲、軍旅之言也、言若不足、喪紀之言也、言之經也、固願正視、平肩正背、臂如抱鼓、足間二寸、端面攝纓、端股整足、體不搖肘、曰

經立、因以微磬、曰共立、因以磬折、曰肅立、因以垂佩、曰卑立、立容也、坐以經立之容、肘不差而足不跌、視平衡、曰經坐、微俯視尊者之膝、曰共坐、仰首視不出尊常之內、曰肅坐、廢首佰肘、曰卑坐、坐容也、行以微磬之容、臂不搖掉、肩不下上、身似不則、從然而任、行容也、趨以微磬之容、翼然翼然、肩狀若泝、足如射箭、趨容也、旋以微磬之容、其始動也、穆如驚倏、其固復也、旋如瀏絲、辟旋之容也、跪以微磬之容、揄右而下、進左而起、手有抑揚、各尊其紀、跪容也、拜以磬折之容、吉事上左、凶事上右、隨前以舉、項衡以下、寧速無遲、背項之狀如屋之攲、拜容也、拜而未起、伏容也、坐乘以經坐之容、手撫式視五旅、欲無顧、顧不過轂、小禮動、中禮式、大禮下、坐車之容也、立乘以經立之容、右持綏、而左臂詘、存劍之緯、欲無顧、顧不過轂、小禮據、中禮式、大禮下、立車之容也、介者不拜、兵車不式、不顧不言、反抑式、以應武容也、兵車之容也、若夫立而跋、坐而蹐、怠懈懈志、驕傲趨視、數顧容色不比、動靜不以度、安咳唾疾言、嗟氣不順、皆禁也、是修身之道也、自天子以至於庶人、壹是皆以修身爲本、夫子所謂九思、曾子所謂三重、以至玉藻所謂九容、皆所以修身之目也、天子穆穆、諸侯皇皇、大夫濟濟、士翔翔、庶人蹌蹌、皆修身之容也、修身雖一乎、貴賤之容不同者、移乎習也、不移則不足謂之習矣、魯君之宋、呼於垤澤之門、守者曰、此非吾君也、何其聲之似我君也、大抵其位均、則容貌居止、聲氣性情率相類、貴人自有貴人之風、賤者自有賤者之風、不得相學、士農工商與生俱成、不可相假借、習之於人、不亦深乎、故士之子歸民、非不肖則不可、農工商賈之子、入大學、非賢則不可、上於十人者、必有十人之知、上於百人者、必有百人之知、大學之士、皆有上人之責、學上人之道、所執之業、止於詩書禮樂、學而時習、優游涵泳、剛氣不怒、柔氣不懾、磨稜合縫、養中和之德、止於至善、亦唯習以移之也、孔子曰、幼成如天性、習慣如自然、記曰、習與智長、化與心成、師傅之嚴、敎法之密、自幼聞見、習以爲常、蓬生麻中、不扶自直、白沙入泥、不染自黑、習之所染、如此其甚、如灑掃應對之敎、不曾給學校朝夕之用、所以習威儀言語之節也、雖天子之子、執箒以事長者、挫其驕傲之心、低首屈腰、能下天下之人、是修身之道也、自天子以至於庶人、壹是皆以修身爲

灑掃之事、雖微關欬也至重、凡古書中、載尊賢狀、多擁帚趨迎者、灑掃所以尊賢敬老也、易稱、天道虧盈而益謙、地道變盈而流謙、鬼神害盈而福謙、人道惡盈而好謙、頤一謙而四益、故低心下氣、學者之先務也、人之情、執事者其心下、尸居者其心高、自然之執也、先王深知其然、小學之灑掃應對、禮算歌舞、大學之詩書禮樂、皆所以下心也、心下則氣和、氣和則體順、亦自然之勢也、後世或有空手高論、以心性爲學者、其心不下、常在眉睫之間、老釋陸王之屬、竟不能窺大道者、其局量偏識、坐不由藝業也、如曲禮後儒以爲小子之事、吾不之信、夫禮有經禮、有曲禮、猶樂有大曲有小曲、大小經曲相須、而後禮樂備矣、皆大學之道也、內則曰、二十而冠、始學禮、禮非小子之所能與矣、小子之所謹、唯謹步趨、謂之幼儀少儀、誠可耳、至於曲禮者、禮之小者也、非小子之謂也、凡如天王即位、立太子、立皇后、改元、定謚、禘郊大祫、釋奠雩祭、祈年巡狩、朝覲會同、冠婚射御、飲酒、相見、葬禮之類、爲經禮之目、登降出入進退拜跪之數、以至於筵席器皿、器爵杖屨之節、盡係之曲禮、三百三千、維其然矣、子思以爲聖人之道、可見非小子之所能與矣、後儒以禮樂係之小學者、以爲三代兒童至顯敏乎、古今人不相遠、今之所難、古亦難之、童子豈皆項橐乎哉、若使童子智如成人乎、小學之教足而耳、大學爲贅旒矣、然易稱童蒙、左氏載童心、童子豈異於今乎哉、歷代所稱、童子顯敏者、何限、目爲神童、爲翰墨家美譚、雖如可愛乎、是亦不祥、夫先王之智不可及已、立法之意、不可測矣、廼使人八歲入小學、不問其顯敏何如、三代之盛、無神童矣、生數月、識字、數歲誦書、七歲賦詩、八歲屬文、十歲講經、吾曾能之、神則神矣、非先王之教也、先王之教、嬰孩欲其嬰孩、童幼欲其童幼、成人欲其成人、故有小大之學、不使躐等、嬰孩童幼屬文講經、學禮樂之事、及成人、唯有死耳、故童子之顯敏、非美事矣、先生蒙以養正、童子之教、惟在誠篤、禁其文之發、文發爲不祥、文雖不發、其質之美惡、才之高下、固瞭瞭、擇其俊秀、升之大學、亦何詳焉、如列女傳所載、形容端正、才過人矣、亦非古言也、才之過人、豈先王之所貴乎、先王之道、貴與人共、過人者不祥、況戶行貽教、豈生過人之子耶、劉向生乎後世、貽教之道、廣於天下、故言能貽教者、生子才過人矣、

非先王之意也、且貽教者、婦人懷姙之時、禮當如此、生子之賢、其應也、非其所期、堯有丹朱、舜有商均、可而醫瞜有舜者、貽教之說、窮矣、天地之道、或應或不、是其所以爲大也、君子之貽教也、禮存、不問生子之才何如、惟其不問、是以生子之賢、多應者矣、若期以生子之賢、有待而貽教、則不應者亦多、何必堯舜、鄒陽曰、臣聞忠無不報、信不見疑、常以爲然、徒虛語耳、貽教之說、若以其驗乎、亦是類也、肥豕必烹、甘泉必竭、直木必伐、才之過人、其事不祥、是老子之說也、吾不之信、槌鍾擊磬、所以發其聲也、煑鬱燒薰、所以揚其芬也、賢者之窮厄戮辱、此槌擊之意也、其死亡陷溺、此燒煑之類也、肥豕不烹、則不成爲八珍之味、甘泉不竭、則不成爲療竭之藥、直木不伐、則不成爲棟梁之材、志士仁人殺身以成仁、不殺身則不成爲仁、老子以爲不利其身、退爲全身之計、不爲善首、不爲惡魁、不敢爲天下先、一何巧焉、吾不取神童、斥才過人者異諸、先王之化、博大悠遠、騙天下於至善、若擇神童及過人之才、而化之、則治化狹焉、大道局焉、亦焉能與天地同其大、善用兵者、使三軍皆勇、其術良也、若使勇士獨勇、三軍退怯、則豈制敵乎哉、先王禮樂之化、中人以上、皆可以爲君子、其教大也、若傑出之才、命世之資、纔能爲君子也、君子之類滅已久矣、若夫千載一聖、猶旦暮也、五百年一賢、猶比肩也、聖賢之難得、與君子異焉、聖人固不待言、世言賢人君子、賢人與君子何擇、君子之多如彼、賢人之少如此者何、是亦可知已、夫子稱顏淵、曰賢哉回也、宰我稱夫子、曰賢於堯舜、易稱、可久則賢人之德、可大則賢人之業、其立言、與聖人相類、非君子之類、然連稱賢人君子者、君子之謂也、明德者聖人之德、而君子明之、民者天下之農工商賈、而君子新之、君子之所止、至善而已矣、先王之意、以爲善者天下之常也、人之性也、教化唯使之至而耳、其唯至善、所以太平也、後世不識其意、以爲天下與人、率皆不善、先王教而善之、不孝者化爲孝、不弟者化爲弟、是妄之大者也、先王之教、譬如以高下制水、以燥濕制火、是以易化、孝者化爲至孝、弟者化爲至弟、不問其不孝不弟者何如、甚則有鄉之八刑、八刑之目、所以表示糾萬民、不必有是事也、一人弒其父、匹夫殺其兄、王者明德之缺也、非下之罪矣、先王之世決無之、戶戶孝順、家家仁慈、

先王之澤也、細民興焉、君子扱乎其中、學於大學、非至善而何求、曰善曰誠、一道已矣、但善者藝業之所呂、而後辨中和與不中和乎哉、伯樂學相馬、顧玩所見、無非馬者、宋之庖丁學解牛、三年不見生牛、二者用精之至、移乎習也、天下之易、不習則不見其易、天下之難、習則不見其難、習善則善、習不善則不善、所習不同、所成亦殊、是以君子謹所習也、唯百異業、百氏異習、是其所習、非所其不習、紛紛乎其擾也、盍援先王孔子爲斷、講詩書習禮樂、孔子以是從先王之教、學者以是從孔子之教、豈能知其是非乎哉、爭其是非者、昉以己意爲學、以己意爲學、則人鵕之以爲非、人之所是、則吾又非之、若能不用己意、一從先生孔子之教、則豈與人爭哉、人非之、則非先王孔子、是與孔子爭者也、吾則不爭、朝堂之上、冠冕相望、不得不嚴、房闥之間、珠翠相屬、不得不荒、習乎嚴則愛敬、習乎荒則愛荒、使大君習乎禮樂中和之道乎、海之內海之外、大化雨濡、關之東關之西、王風雲興、不然則綱常禮樂、難爲二物、將至搞人憐王、

樂、與心相應、豈必右執規、左執矩、前六律、後六

太平策卷之九

水斯立著

四時五行

春夏秋冬、謂之四時、水火木金土、謂之五行、四時五行、相爲經緯、天地之道、如此而已、聖人先天而天不違、後天而奉天時、莫不由四時五行、以爲之制也、三皇之世、莫有文字、唯由五行、帝王之興、皆以五行相叙、伏羲木德、炎帝火德、黃帝土德、少昊金德、顓頊水德、帝嚳木德、帝堯火德、帝舜土德、夏以金德乖四百餘年、商以水德乖六百餘年、周以木德乖八百餘年、得其道也數不能逃、秦以火德二世而亡、漢以土德不滿五百、失其道也數不能逃、孔子曰、堯臨民以二、舜臨民以五、二者火也、五者土也、夫帝王代興、循環無端、猶五行相生、終而復始也、迺禪讓得天下者猶相生也、放伐得天下者猶相克也、是以人言之、若以天視之、則禪讓出于自然、放伐亦出于自然、未見其異也、故自伏羲以下、皆以相生相叙、非有他義、秦人不知、以爲周尚赤、爲火德之王、滅周而王、猶水克火也、遂定爲水德、命河曰德水、以十月爲歲首、是不通五德之運、周木德、色尚赤、赤者火色也、火者木之子也、商水德、色尚白、白者金色也、金者水之母也、夏金德、色尚玄、玄者水色也、水者金之子也、或以其子、或以其母、何必以其德之色乎哉、夏尚忠、商尚質、周尚文、以是推所尚之色、玄者忠之色也、白者質之色也、赤者文之色也、故所尚之色、別有義存、不必火德尚赤、水德尚玄、秦人以爲水德、色尚黑、名民以黔首、黔亦黑也、是可謂妄作已、德有吉有凶、凶亦德也、道有善有不善、不善亦道也、秦雖不德、始皇雖無道、其爲火德也、無疑、詩書爲烟、咸陽焦土、火德之證也、五行皆能養人、而失其行則皆害人、金傷人、木殿人、土壓人、水溺人、火燒人、秦之德燒人之火也、非養人之火、是以威烈如彼赫々、迺以其水德、以嚴火禁、棄灰於路刑之、以天視之、是其爲火德也、漢亦自以爲火德、色尚赤、是因高祖赤帝子、而所殺蛇、白帝子也、白帝子項籍當之、高祖滅籍、而得天下、以爲火克金也、漢兵皆持赤幟、至有炎漢之稱、又推堯爲祖、合符於火德也、是皆妄作已、文帝時、賈誼始議、漢土德、當改正朔易服色、色尚黃、居有間、黃龍見于成

紀、是土德之證也、漢之大儒莫過賈誼、有伊傅周召之才、知漢土德、是其高識、雖然誼之意、以爲秦水德、漢代秦而王、推五德之運、漢應土德、土克水之義也、可謂明於知漢、而昧於知秦矣、尙黃亦妄作已、後來竟致黃巾之禍也、以吾視之、秦當尙青、漢當尙白、是推以三代之禮、秦應火德、色尙青、青者木之色也、木者火之母也、漢應土德、色尙白、白者金之色也、金者土之子也、若母子相易、秦當尙黃、漢當尙赤、漢無尙黃之義而耳、迺高祖爲赤帝之子、赤帝火也、火之子者土、高祖土德之證也、直以爲赤帝應火德、可謂謬已、孔子論列五帝德、以下至鄒衍推五德之運、以爲帝王之德、爲一代制度之統、天下大事、莫過之者、以五行名家者、亦知帝德之重故也、後世諸儒、率昧於帝德、莫之察也、亦何略焉、詩書禮樂出于古聖人之制、故法五行之道也、詩者木之道也、書者金之道也、禮者火之道也、樂者水之道也、藝文志曰、樂仁、詩義、禮禮、書智、春秋信、白虎通曰、樂仁、書義、禮禮、易智、詩信、是兩說雖異、皆以五常爲言、且以爲猶五行之更用事也、是必有所傳、但漢儒泥五經之說、所配或當或不、未免附會、夫禮禮無異名者、內外之符、迺仁義禮智配詩書禮樂、非有布置也、詩者人心生生之妙、融々洩々不可已、活發圓轉不可窮、又有從容溫柔之意、仁之敎也、書者人心精明之發、昭々歷々不可差、細密方正不可混、又有辨白裁製之意、義之敎也、禮者人心中正之禮、井々堂々不可紊、詳誦委曲不可略、又有收斂修飾之意、禮之敎也、樂者人心和樂之用、蕩々平々不可倚、流動通貫不可塞、又有深潛融徹之意、智之敎也、以五行言之、詩所以觀民風也、上以風化下、下以風刺上、風爲木、書法奎星圜曲而作、星爲金、文章千載不朽、禮有赫著宣明之象、樂有浸灌滋潤義、禮勝則離、樂勝則流、樂動於外、有坎離之象、竽鐘於宮、聲聞于外、水明之象、陳俎豆於堂上、堂下不視、簨外不見、水喑之象、離麗也、叩德麗黍稷、恭敬麗弊、坎陷也、和順陷琴瑟、喜陷舞踏、玉藻有之、升車則有光、非火而何、樂記有之、樂行而倫清、又曰、樂觀其深、非水而何、總而言之、詩有邪正、近乎曲直、書體多變、近乎從革、禮易潛竊、近乎炎上、樂易淫蕩、近乎潤下、是其較著者也、觸類而長、細推物理、毫分縷折莫不吻合、故詩書禮樂爲木金火水、而土特

無所配、只其無所配、是以無所不配、一四之合爲五、二三之合、亦爲五、五未離一二三四也、春木德、夏火德、秋金德、冬水德、播五行於四時、土特無所配、寄旺四時、亦類耳、雖然帝王之德、五行相叙、不有寄旺、詩書禮樂之行也、土德寄王、何以不同、聖人之道、易爲大、詩書禮樂皆自易出、卜筮之事、大卜掌之、衆象之辭、蓍史記之、易道即性命道德、詩書禮樂之源也、是可以配土德也、凡先王之制事、必法四時、如春服青、夏服赤、秋服白、冬服玄、夏季服黃、飲食之節、器皿之度、律呂之聲、堂室之設、凡百制度皆隨四時、如呂氏春秋小戴禮所記月令、可以見已、苟政令上不合天時、則災異乃來、帝嚳以前尙矣、堯命羲仲殷春、羲叔正夏、和仲殷秋、和叔正冬、舜詢于四岳、闢四門、明四目、達四聰、至周制度大備、乃設六官、天地春夏秋冬、春官掌禮樂、夏官掌兵、秋官掌刑、冬官掌工、唐虞之制、禮樂分爲二官、周制、禮樂合爲一官、唐虞之制、兵刑合爲一官、周制、兵刑分爲二官、分合雖異、其義適同、統之以四時、漢時猶春行寬大之令、夏布封賞之恩、至殊冬理獄、趙堯舉春、李舜舉夏、兒湯舉秋、貢禹舉冬、亦三代之遺也、春祠、夏禴、秋嘗、冬烝者、祭之有四時也、春狩、夏苗、秋獮、冬閱者、獵之有四時也、夫火者民生常用之物、而有四時改火之制、春取榆柳之火、夏取棗杏之火、夏季取桑柘之火、秋取柞楢之火、冬取槐檀之火、改火之制、先王重之、何如者五行水最多、土次之、金次之、木次之、火最少、不啻多少之殊、水土金木、天地自然之物、而開闢以來、已有之、上古鴻荒之世、未有火化、是無火也、後世塞食禁火、存上古之遺法、俗以爲起於介推者、妄也、天地之間、火氣未發、有燧人氏者出、仰觀天象、日月星辰、皆含火光、俯察地理、草木金石、皆藏火精、於是鑽木擊石、以求火、火始生矣、乃別五木、而四時改火、貴火也、夫金木可制以爲器、水土可以器貯、至火則不可制以爲器、不可以器貯、火弇而不親、不其然乎、水流不息、江海百谷、土積不崩、山陵高阜、木生于山、金生于水、雖聖人不作、固自若也、至火則待聖人而生、待薪而傳、聖人不作則無火、無薪則火滅、五行之靈火爲甚、先王重之、改火之禮、守燧人之遺法、豈不深乎、下至農工、又皆因四時爲業、春耕、夏耘、秋穫、冬藏、農之四時也、春波角、夏

治筋、秋合三材、冬定體、工之四時也、古之攝生之言、四氣調神、春三月謂之發陳、夏三月謂之蕃秀、秋三月謂之容平、冬三月謂之閉藏、修養之法、皆應時氣、逆之者疾、加之春秋之法、無事則書首月、以具四時、易之禰四德、曰乾元亨利貞、以此數者、併而視之、可見古聖人甚重四時、凡百制度、亦皆以四時爲節也、而是豈聖人率合附會、欲與天時相比乎哉、人之於天、猶魚之於水也、魚之前後左右皆水也、其腹中亦水也、人之前後左右皆天也、其心亦天也、故天霽而人心舒、天陰而人心慘、天寒而人心急、天暖人心緩、日出而群動作、日入而群動息、身體骨節、性情疾病、與天相應、向背萬變、不能免東西南北、動靜多端、不能免行往坐臥、天人之道、一以貫之、是以先王至日閉關、順天之道、於是爲極、廼詩書禮樂之教、專因四時爲之節、王制曰、樂正崇四術、立四教、順先王詩書禮樂以造士、春秋教以禮樂、冬夏教以詩書、樂記曰天地之道、寒暑不時則疾、風雨不節則饑、教者民之寒暑也、教不時則傷世、事者民之風雨也、事不節則無功、學記曰、大學之教也、時教必有正業、退息必有居學、不學操縵、不能安弦、不學博依不能安詩、不學雜服不能安禮、不興其藝不能樂學、故君子之於學也（下之故君子句恐衍文）藏焉脩焉、息焉遊焉、蓋春夏者陽、詩樂者聲、聲屬陽也、秋冬者陰、書禮者形、形屬陰也、是以春之所以爲教者樂也、夏之所以爲教者詩也、秋之所以爲教者禮也、冬之所以爲教者書也、所謂四時之正業是也、文王世子曰、春誦、夏弦、太師詔之、瞽宗秋學禮、執禮者詔之、冬讀書典、書者詔之、禮在瞽宗、書在上痒、是其證也、誦者樂歌也、先王之於樂貴歌、以人聲爲主、八音次之、故曰之誦、則樂之謂也、弦與絃同、謂琴瑟也、詩必與琴瑟相須、而行者也、詩三百皆爲琴操、故曰之弦、則詩之謂也、禮與書、則直曰之禮書、亦何瞭焉、夫溫暖和煦、則鐘鼓之聲大振、笙簧之調大和、人之血脉通貫、四體輕便、俯仰屈伸、不勞其力、春之所以宜於樂也、相見於雝、則明而且遠、舜彈五絃之琴、以歌南風之詩、周南召南爲風之首、夏之所以宜於詩也、肅殺嚴凝之氣至、肌腐充實、筋骸檢束、佩玉鏘々、衣裳翔々、秋之所以宜於禮也、北風栗烈、血氣凝閉、摵生者、猶冬月忌按摩、凡周旋歌舞、牽動四體者、皆非所宜、學校之制、要之廣屋大厦、寬

曠之地、塞冷殊甚、故牖戸不開、低首几案、覽觀誦讀、是其所宜、東方朔上書曰、三冬文史足用、董遇曰、冬者歲之餘、可以讀書、冬之所以宜於書也、於是古之教學、皆以三月爲限、子在齊聞韶、學之三月、不知肉味、子曰、學而時習之、時謂四時、又曰、四時行焉、百物生焉、天何言哉、是其明效大驗、指不暇屈、廼詩書禮樂、以序肄習、如環無端、經之緯之、參之伍之、十五至三十九、中間二十有五年、四教之學、各二十五、以合百數、百成數也、故四十成德、優而仕、以成人才也、然四教之業、以五行相生相叙、樂水也、業於春、春木德、水生木之義也、詩木也、業於夏、夏火德、木生火之義也、禮火也、業於秋、秋金德、火生土、土生金之義也、書金也、業於冬、冬水德、金生水之義也、亦猶帝王五德之運矣、先王立法之精帝、於此乎見焉、文王世子又曰、春夏學干戈、秋冬學羽籥、皆於東序、干戈者武舞也、羽籥者文舞也、四時皆學舞、何必春之教樂而已、序之爲義、射也者、四時皆學射、何必秋之教禮而已、子所雅言、詩書執禮、皆雅言也、何必夏之詩、冬之書乎哉、王制所謂春秋教以禮樂、冬夏教以詩書、亦唯大略言之、不必拘泥、後儒之識終于比而已、是不通五行者也、春木王、夏火王、秋金王、冬水王、不可移易者天地之常也、若以不必拘泥、則春可金王、夏可水王、四時錯亂、五行失序而後已、先王之教、亦猶是乎、春誦、夏弦、秋禮、冬書、先王法天立制、不可移易、雖然、禮樂不可斯須離身也、詩書亦爾、君子日修業、必於斯四者、是以有正業居學之名、樂之於春爲正業、詩書禮爲居學、詩之於夏爲正業、禮樂書爲居學、禮之於秋爲正業、詩樂書爲居學、書之於冬爲正業、詩禮樂爲居學、正業常處其一、居學常處其三、正業者學之於師、居學者習之朋友、古之道也、學而時習之是之謂也、故詩書禮樂分配四時者、指正業而言之、通四時者、指居學而言之、其義各殷、五行分配四時、是以天之盛德言之、盛德在木、盛德在火、可以見已、然木盛之春、土未嘗滅、火盛之夏、金未嘗營、一時具五行可知已、以方位言之、東方爲木、西方之山豈無木乎、西方爲金、東方之島豈無金乎、南方爲火、北方之國豈無火乎、北方爲水、南方之海豈無水乎、五行滿天下、糞所不有、然其方位定開闢之時、而不可移易、蒼龍七宿、東方之星也、朱鳥七宿、南方之

星也、白虎七宿、西方之星也、玄武七宿、北方之星也、雖天常運轉、方位不定乎、先王以五行定之、分野之制、聖人之大知存焉、如相生相克、古聖人所定、可謂通天地之性情、今三軍持木杖、匹夫持利刃、仲力角氣、匹夫必死、金性勝木、而木勝金負者、木多而金少也、積金如山、燃一炭火、以燔爍之、金必不消、非失五行之道、金多而火少也、甲乙之所恐者庚金耳、丙丁之所恐者壬水耳、五行相制、陰陽相勝、四時相推、四方相克、水生木者東北之門、萬物之所出也、火克金者西南之門、萬物之所入也、出其門、入其門、二門開闔、萬物生死、造化之秘鑰存矣、神仙得之以壽身、聖人得之以壽天下、苟不達於斯、則豈足共議先王敎法之妙乎哉、帝王五德之運、雖主一德、猶一時之具五行也、伏羲雖木德、爰制網罟、非無火德、神農雖火德、爰制稼穡、非無土德、雖然主一德以爲王、猶四時之盛德、四敎之正業、一德不立、則五德皆廢、夫五聲之有宮亦然、以宮爲宮、商角徵羽從而以和、以商爲宮、商角徵羽還相爲宮、宮不立、則五聲皆廢、帝王之主一德、立之宮而已、四時之正業、亦猶立之宮也、而玄之又玄有深焉者、孔門之宗仁也、仁者仁之仁也、義者仁之義也、禮者仁之禮也、智者仁之智也、信者仁之信也、五常皆仁、五行皆木、四時皆春、五聲皆宮、漢儒以爲木神爲仁、金神爲義、火神爲禮、水神爲智、土神爲信、是先王之遺言哉、雖然聖人不語神、神字不如德字之美、木德仁、金德義、火德禮、水德智、土德信、萬善之綱盡于斯焉、苟能通五德之蘊乎、於天下猶庖丁之於牛焉、詩書禮樂之敎、不至深遠乎哉、皇朝質素、無帝王五德之說、宮絃未定、禮樂二柄、職是之由、若有賈生之賢、豈默々所知、夫繼天而王者、此爲木德、皇朝繼天一姓、是其爲木德也、色尚紫、雖如勗唐制、合母子之色、數尚三八、御名製仁、木德之證也、所恐庚金耳、苟能尚文學、明明德、丙以御庚、則太祖天壤之訓信矣、

太平策卷之十

永嘉 立 著

素王

古者聖人之作春秋也、筆則筆、削則削、九月而書成、游夏不能贊一辭、立法之精、措之密、不可窺測、孔子曰、吾志在春秋、又曰、知我者其唯春秋乎、罪我者其唯春秋乎、夫以生民未有之聖、其志特在春秋、所以知聖罪聖者、亦在春秋、是豈可以淺心得乎哉、夫詩書禮樂之敎出乎先王、天下所通行、春秋不過一魯國之史而耳、是何小焉、蓋三代禮樂、至周大備、周之禮樂、皆出乎周公之制作矣、魯者周公之國也、春秋者周公之遺法也、子曰、甚矣吾衰也、久矣吾不復夢見周公、迺孔子所慕、專在周公、何如者魯者父母之國也、周公魯之太廟也、天下禮樂之宗也、是以魯史策書、雖非天下之大典、與晉乘楚檮杌爲儕、以周公制作之大視之、殆與天下相關、非外諸侯之類、雖然春秋固爲諸侯之史、是所以素其位而行、不願其外、後儒不知、以爲春秋帝魯、是大不可、春秋之法、正名爲大、君臣之義、父子之親、以至禮樂制度之統、凡係名分者、雖尺寸蓋簣、聖人謹焉、魯侯爵、爲諸侯之國、是周之禮也、然今黜周帝魯、紀綱不立、名分失所、何暇執二百四十二年、南面之權黜陟天下、而不謬哉、故帝魯之說、可謂妄已、後儒又以爲平王東遷、王綱解紐、孔子作春秋、以寓王法、是又妄矣、春秋始隱、不始平王、隱之元年者平王之四十九年也、以平王東遷、則何必待在位半百之後、託始乎哉、後儒自病其說之窒、又從而爲之辭、以爲平王四十九年秋七月賜惠公仲子之賵、夫以天王之尊、下賵諸侯之妾、於是三綱淪、九法斁、人望絕矣、於此乎託始、是亦可謂妄已、歸賵之事、在七月、經之託始、在正月、若以歸賵爲託始之義、則春秋始乎隱元年秋七月、亦可耳、哀十四年以春而終、不必以冬、隱元年盡以春秋而始、不必以春、迺歸賵以前、有儀父之盟、有鄭伯克段、是皆不與託始之義、到秋七月、始見託始之義、其說左支右吾、不足取已、始隱之義、或以爲貴讓也、下至馬遷之書、自謂繼春秋、世家首太伯、列傳伯夷、貴讓也、夫讓固美德、雖然人之行何必讓、堯讓舜、舜讓禹、禹傳子、讓者固聖也、傳者亦聖也、隱公輕千乘之國、固有讓德、可謂賢已、

然以貴賢託始、則伯禽之賢、過於隱公遠矣、雖始乎伯禽可也、推而上之、周公之聖、過於伯禽遠矣、雖始乎周公可也、迺不始乎周公伯禽、始乎隱公、非以其賢也、況隱有讓國之心、而不果其行、罹纂弒之禍、何足以爲讓哉、故始隱者、別有義存矣、陳成子弒簡公、孔子沐浴而朝、告於哀公曰、陳恒弒其君、請討之、公曰、告夫三子、孔子曰、以吾從大夫之後、不敢不告也、君曰、告夫三子者、之三子告、不可、孔子曰、以吾從大夫之後、不敢不告也、孔子曰、祿之去公室五世矣、逮於大夫四世矣、故夫三桓之子孫微矣、三家者以雍徹、子曰、相維辟公、天子穆々、奚取於三家之堂、孔子所惡、莫如三桓、三桓鼎立、陵犯公室、公室不絕如帶、孔子墮三都、收其甲兵、以謀弱三桓、孟氏不肯墮成、圍之不克、當斯時、魯國臣子之大務、莫急於弱三桓、三桓不弱、則公室不張、自然之勢也、春秋之作、所以抑三桓也、孟子以爲、孔子成春秋、而亂臣賊子懼是也、三桓皆出乎桓公、桓弒隱而自立、王法之所必誅也、王法不誅、桓成爲君、遂致三桓之禍、首惡在桓、故春秋桓不書王、明無王法、隱不書即位、所以病桓也、始乎隱、以病桓公、病桓以病三桓、是聖人之心也、魯公雖桓之子孫、繼世爲君、則周公伯禽之統也、非桓之有、桓之有、止於三桓、知我者公室、罪我者三桓、是公私義利之所由分也、事止魯之君臣、而天下大義、一以貫之、尊王室、即尊公室之義也、黜五霸、即抑三桓之義也是以雖一國之私史、一經筆削、爲天下王法之大典、孟子以爲、春秋天子之事、是也、故原筆削之微意、則本爲抑三桓而作、推筆削之大法、則所以尊王室也、兩者並行不相悖、後儒只知尊王之大義、以爲百王不易之大經大法、盡在斯書、豈爲魯而作、是可謂昧於筆削之素意、志在春秋者、於此乎湮晦不傳、夫孔子者、魯之臣子也、周之陪臣也、魯侯爵而稱公、臣子之辭、內魯外諸國、臣子之道、故春秋爲魯而作、非爲周而作、雖然魯亦周之臣子、周者天下之共主也、尊公室與尊王室、聖人之心始無二端、爲魯即以爲周、亦何擇焉、顏淵問爲邦、子曰、行夏之時、乘殷之輅、服周之冕、樂則韶舞、放鄭聲、遠佞人、鄭聲淫、佞人殆、是治天下之道也、顏淵之問爲邦、聖人之告以治天下、何如國天下一道也、爲魯而作、以尊周室、豈不一道乎、自化天下而言之、則樂之力多、禮之功

少、自治天下而言之、則禮之力多、樂之功少、孝經曰、移風易俗、莫善於樂、是化天下之道也、若夫答顏淵之問、言治天下之道也、故夏之時、殷之輅、周之冕、皆禮之大統、酌三代之宜、執其中者也、樂則韶舞、是用虞樂也、放鄭聲、遠佞人、是法外意也、夏之時、建寅爲正、爲人統、殷之輅質、周之冕文、皆聖人之所制、孔子集大成、立之中制、所謂祖述堯舜、憲章文武、上則天時、下因水土者、而春秋用之、春秋以中爲準、抑揚褒貶、擒縱予奪、皆所以裁過不及而歸於中也、一字之褒、榮於華衮、一字之貶、威於斧鉞、撥亂世反之正、可以見已、蓋史官以直爲職、不避忌諱、不亂（風字疑剩）罪戾、直書其事、無所褒貶、君子一讀、褒貶自見、是史之體也、未修以前、魯之春秋、亦唯直書事實、無褒貶之文、左丘明躬覩未修春秋、故詳於事、如禮也非禮也之類、以寓褒貶、稱君子曰者、假辭於有德、丘明之意也、春秋之經至簡、左氏之書、或先經明張本、或後經終事、迺無左氏、則經有不可通者、其它如不書非公命也之類、是聖人筆削之迹、待左氏而後見、春秋必與左氏相須而行者也、猶儀禮與禮記相須而行、夫經者聖人之所作也、傳者賢人之所述也、注者儒者之所撰也、注之又注、後儒之陋也、春秋經爲目錄、左氏爲春秋、是乃足耳、史者左氏之職也、非孔子之所事、子曰、質勝文則野、文勝質則史、文質彬々、然後君子、史豈君子之道乎哉、故筆削魯史、出乎聖人之心、自出機杼、不拘史策之舊文、不必守史官之法、後世以史視春秋、以爲聖人之經、能盡魯事、魯大國也、大國必多事、而經或有只書首月而無事者、若夫有事而錄、一年之事、或二三、或四五、多不過十、魯之事豈止於此哉、大事則書之策、小事則簡牘、史官傳守、載錄不遺、雖史筆有工拙乎、記事之道、未嘗廢也、戰國時、秦趙澠池之會、各命書其事、又淳于髡謂齊王曰、御史在前、以是視之、則史官至戰國而不廢、況孔子之時乎、春秋雖其事則齊桓晉文、其文則史、其義之所取、初與史異、史者巨細必錄、春秋雖大事、或錄或不錄、錄有義、不錄亦有義、史者直書其事、春秋之法、所見異辭、所聞異端、所傳聞異辭、隱而晦之、有義存焉、探而誅之、有義存焉、片言隻字、皆所以正三綱、明五倫、扶植王法也、迺子游子夏以文學名科、不能贊一辭、非精義入神者、孰能與於斯乎、子曰、易屬辭、

春秋屬商、子夏雖不能贊辭、受春秋之義、以傳于後世、公穀皆出乎其門、但口相傳授、不著乎竹帛、故能免秦火之厄、至漢時、胡毋生董仲舒輩、始載以竹帛、公穀左氏互有異同、要之公羊經最正、何者公羊五世齊人、其辭雅馴、口吻所傳、庶幾乎不謬聖人也、如邾婁字、詩書論語之外、文章之妙、莫過於檀弓、檀弓、曰邾婁復之以矢、蓋白戰於升陘始也、又曰、邾婁考公之喪、徐君使容居來予、迺邾婁比邾、文章爲雅馴、當時稱邾婁爲邾、史策之文因其舊名、非邾婁則不可、猶今摩津稱津、紀伊稱紀、陸奥稱奥載筆所錄、必具二字、乃爲雅馴、不知者謂、文簡字少者近古、夫鳧脛雖短、續之則憂、鶴脛雖長、斷之則悲、文章之道、有長、有短、有方、有圓、各順其雅、何必簡、故邾婁曰之邾、雖簡、不如邾婁之雅馴、況檀弓之書、實與春秋相關、檀弓有之、仲遂卒于垂、壬午猶繹、萬入去籥、仲尼曰、非禮也、卿卒不繹、可以見已、邾婁雖微文乎、是以知公羊之正哉、近年文墨之徒、稱京爲西都、稱江戶爲東都、是倣二京三都之號、欲其措辭之典耳、始非有深意也、然文章之道、貴不苟、一字若苟、則不足以傳後世、豈可細而略之哉、

都之爲字、非邦畿則不可用、南都者、先王舊迹、且在千里之內、猶是可耳、至東都者、大荒之濱、戎貊寥々、不聞有黃屋紫蓋之人、都之義何在哉、若夫通邑大都、稱之都會、則有之、是國都已、單以都稱之、東西相抗、是何不祥之甚、今神京、桓武定鼎、列聖肹宇、百世儼然、而服土之中、以西目之、是東人之辭也、無乃齊東野語之比乎、春秋大一統之義、天無二日、地無二王、豈有東西都乎、故吳楚僭王、仲尼不與、都之一字、雖微文乎、大義所係、雖文人粧飾、豈得取弓矢斧鉞之府、隣之北辰紫微之列、且仲連不帝秦、何代無之、男兒寧塡溝壑耳、膝不可屈、有以洛陽長安稱京者、夫我王凡百制度、多擬漢唐、故都號亦與漢唐相比類、然洛陽者嵩高之下、土地之中、其比固宜、長安者西周豐鎬之地、以我與圖比之、則猶太宰府耳、迺與洛雜稱、可謂妄已、稱呼不正、則名實紛亂、雖有知者、不能推究、如厩戶嘗相、擧世聖之、固不當、二人有靈、應汗顏忸怩之不暇、然諸儒之辨之者、亦或出乎矯揉、不免譏議、虧損其實、吾曾謂厩戶有周公之才、無周公之德、嘗相有屈原之介、無屈原之忠、要之二人、皆吾所賢也、春秋之法、功

過不相掩、故所好未必無不善也、所惡未必無善也、用達人大觀、豈得有適莫乎哉、平重盛有申生之行、無申生之智、楠正成有孔明之謀、無孔明之學、俗儒妄以比類、可謂昧於知人矣、故曰、爲人君父、不知春秋之義者、必蒙首惡之名、爲人臣子、不知春秋之義者、必陷簒弒之罪、豈非學者之急乎、王安石黜春秋而不用、蒼生始無噍類、清板無春秋、夷狄禽獸於中國、以是視之、三綱五常、維持統紀、不至廢壞散亡者、猶春秋之力爲大、春秋之止獲麟、以待後世聖人於無窮、豈曾乎哉、麟者聖人之瑞也、王者之詳也、聖人必爲天子、古聖人時、麟鳳龜龍悉臻、迺聖人不王、始乎孔子、麟出魯國者、孔子之瑞也、其爲鉏商所獲者、不王之應也、孔子感麟而作春秋、文終於所感、文中子曰、春秋以天道終乎、故止于獲麟、元經以人事終乎、故止于陳亡、可謂明已、文成致麟、古無是說、始乎緯書、緯書之言、率皆荒唐不經、欲神聖人也、殊不知神非聖人之所好也、後儒以爲河出圖、洛出書、而八卦畫、簫韶作、春秋成、而鳳麟至、事應雖異、其理一也、是大不可、圖書出而八卦興、鳳凰鳴而六律製、麟麒出而春秋作、是後天者也、夫

八卦六律春秋皆聖人之器也、制器未有先天者也、用器必先天、卜筮而吉凶應、簫韶奏而鳳凰來、春秋成而亂臣賊子懼、是先天者也、先天而天不違、後天而奉天時、聖人之道、豈易言乎哉、仲尼素王、丘明素臣、其說舊矣、後儒不取用、余嘗稽之典籍、素王之名、不始於孔子、伊尹見湯、言素王及九主之事、素王蓋上古之帝王也、世淳俗素、故謂之素王、孔子之爲素王、其義迥異、無諸侯之祿、而有諸侯之富、謂之素王、夫王而封、無帝王之位、而有帝王之德、謂之素王、夫王而王者、一世之王也、不王而王者、萬世之王也、故萬世王祀夫子者、夫子之所固有也、雖文宣之諡可笑、其王祀之者固當、周子曰、道德高厚、敎化無窮、實與天地參、而與四時同、其唯孔子乎、又曰、宜哉、萬世王祀夫子、報德報功之無盡焉、歷代定制、王祀夫子、可謂盛典已、至明改議、以爲尊夫子者以其德、不以其位、雖加以衮冕之服、夫子之德增其隆、雖以魯大夫之禮、夫子之德不損其隆、且子路使門人爲臣、仲尼以欺天責之、況王位加夫子、夫子有靈則不必安矣、不如師尊其德、不以名位、遂黜王號、尊夫子爲至聖先師、更張前代之失、是雖如得禮、由不知聖人、

大抵聖人皆古帝王也、非王者則不稱聖人、古書之稱聖人者、必王者也、聖人不王、始乎孔子、雖迺不王、詩書禮樂折衷於夫子、筆削春秋、以明王法、是其爲素王也、故不王祀、則不能答其爲聖人也、素王之說可謂的已、中庸有之、曰仲尼祖述堯舜、憲章文武、上律天時、下襲水土、又曰、聲名洋溢乎中國、施及蠻貊、舟車所至、人力所通、天之所覆、地之所載、日月所照、霜露所隊、凡有血氣者、莫不尊親、故曰配天、是皆素王之證也、王充以爲、孔子素王之業、在於春秋、桓君山素丞相之跡、存於新論、素丞相有之、況素臣乎、夫臣而臣者、一世之臣也、不臣而臣者、萬世之臣也、方今橫目含齒之倫、靡被聖人之敎、無一人出藩籬之外者、迺謂之仲尼之素臣、亦可而耳、何啻一丘明而已哉、然自丘明而言之、則丘明素臣、豈知其它、人々皆然、素王素臣之說、深知聖人者、必能信之、不知聖人、則不王祀亦可、不素臣亦可、只在知聖人何如而已、雖然唯聖識聖、古人所傳、苟不聖人豈能知聖人乎哉、是大不然、唯聖識聖、並世而言之、如程孔傾蓋之類、非自後世知古聖人之謂也春秋之成、夫子得百二十國寶書而修之、春秋之錄、以尺二寸之簡、每簡三十字、始乎隱終乎桓（桓字諱作桓字）、爲公十二、其所法象何美焉、聖人之敎、不過詩書禮樂、詩書禮（禮字下疑佚樂字）即四時也、四時爲天之四選、春秋之名兼四時、加之春秋敎以禮樂、禮樂之敎、中和爲極、春秋之權度、莫不中和、是禮樂之極也、其唯以中和爲準、故君子之道、本諸身、徵諸庶民、考諸三王而不繆、建諸天地而不悖、質諸鬼神而無疑、百世以俟聖人而不惑、四代禮樂至周大備、得文質之中、寬猛之宜、聖人曰我欲載之空言、不如見之於行事之深切著明也、中和之道、聖人見之行事、事實而道虛、以實載虛、誰測其奧、故處大事、決大疑、當大任、解大患、非通春秋則不可、王者無意於三代之治則已、若有意於三代之治、則舍春秋何以乎哉、春秋一萬八千、可謂富矣、王之一字、是其眼目、大經大法皆賴以立矣、君臣父子夫婦長幼朋友皆王也、禮樂刑政紀綱法度、亦皆王也、王者之道如何、曰不敢以天下爲私、

太平策卷之十一

水斯立著

河圖

河圖洛書者、天地之賾、陰陽之精、王者之符命、文明之祥瑞、河圖之數、自一至十、洛書之數、自一至九、天下之奇、至九而極矣、天下之偶、至十而極矣、十與九則天地之大成也、河圖之位、北方一六爲水、南方二七爲火、東方三八爲木、西方四九爲金、中央五十爲土、左旋相生、以法五德之運、洛書乃右轉相克、以法昭穆之序、河圖之序、河圖將來告帝期、河圖持龜、告帝謀、河圖將來告帝書、河圖將來告帝圖、河圖將浮龍銜玉、雖緯書之言疑信相半乎、亦必古之遺也、持龜銜玉、是以爲圖書並出、古書往々雜稱河洛、以爲王者之瑞、近乎並出於伏羲時、孔安國迺謂、河圖予羲、洛書錫禹、易範之源判然、錫禹之說、可謂妄已、何如則洛書者、王者之祥瑞也、禹雖賢聖、治水之時、爲堯之臣、非王者也、夫非王者、而天授之、以王者之瑞、是可怪焉、然則非錫禹而錫堯、易大傳曰、河出圖、洛出書、聖人則之、古之所謂聖人、必王者也、乃言聖人則之、豈禹乎哉、雖禹後來受舜之禪、方其治水也、猶爲人臣、周之將興、鸞鳳鳴于岐山、洛書豈爲夏將興之兆耶、雖然岐山周之邑也、洛豈禹之邑乎哉、禹貢之書、不載神龜出洛之文、不出於治水之時、可知已、後儒援洪範之文、天乃錫禹洪範九疇、以爲神龜錫禹之證、夫洪範者天下之大法也、九疇猶治天下國家有九經、天錫猶天錫王勇智、豈龜之謂乎哉、故武王尊以舜倫爲問、箕子專以舜倫爲對、即位之初、請問大禹治天下之道、箕子以禹乃嗣興爲言、嗣興爲王者也、如大戴禮所記、武王問黃帝顓頊之道於太公、亦類耳、蓋即位之初、博訪先王之道、以爲師法、至卜筮之事、則九疇之目、有七稽疑擇建立卜筮人、乃命卜筮云云者、以是視之、卜筮之道雖大、於洪範爲九分之一、今直以洪範爲卜、是洪範雖大、於卜筮爲二分之一、豈不顚倒至甚乎哉、甚者以爲、卜始乎禹、是妄之大者也、舜將遜位、讓於禹、禹曰、枚卜功臣、惟吉之從、帝曰、禹、官占惟先蔽志、昆命于元龜、朕志先定、詢謀僉同、鬼神其依、龜筮協從、卜不習吉、豈始乎禹乎哉、軒轅氏之卜兆、先乎堯舜、卜非始乎堯舜矣、卜筮之道、皆出乎羲皇、大事以卜、

小事以筮、凡古聖人之制、必先分其大小、如大事書卜、小事筮有書、與禮樂當有經、小事簡牘、大事從長、小事特達之類、可以見已、古稱筮短龜長、長短猶大小之義也、如文王重卦、亦妄說、八卦爲小成、六十四卦爲大成、非出於兩人、然古時淳朴、只稱八卦、貴簡也、猶十二律謂之六律、六十甲子、謂之六甲、古言爲然、太史公而下、儒者多泥八卦之文、重卦之說興矣、可謂謬已、古人甚重卜、而夫子贊易、極著蓍卦之德、蓍重而龜書不傳、是亦妄說、夫子贊易、必以卜筮、兼言之、未嘗著蓍而抑龜、龜書列乎藝文志、非滅于孔子時、大抵卜筮之道、古無文字、惟有其象、曰雨、曰霽、曰蒙、曰驛、曰克、卜兆之變、不過五、曰貞、曰悔、占卦之法、不過二、太古以來、互相傳授、以目不以口舌、而敎之曰、是雨也、是霽也、是蒙驛克也、是貞與悔也、目擊親見、識其吉凶、故周以前無卜筮之書、至文王始繫彖辭、周公始繫象辭、亦唯魯國傳守、藏于大廟、左傳所載、占卦多無辭者、可以見已、至卜法、則無辭可繫、如大橫庚々、亦出古卜官所傳家言、非聖人之制、要之蓍龜卜筮、孔子兼言之、經文亦有十朋之龜、舍爾靈龜之語、易以道卜筮、是亦古言易以卜筮之書不焚、雖秦猶然、迺以易爲筮書、謂卜當別有書、與禮樂當有經、小學當有書、適同其陋、故卜筮皆易、但卜無辭而筮有辭、如詩六篇無辭、是笙譜、古人口傳、非辭闕矣、後人有補亡者、其陋可醜已、先王之敎、禮樂卜筮射御之類、皆以人傳之、後儒迺求以書盡之、夫天下之事、固多載籍不錄者、風俗人情技藝言語、豈能一一載乎哉、縱載錄亦豈能眞盡其實乎哉、是天下活物、而載籍器也、器之不能盡活物、觀渾儀之測天、可知已、然則載籍所錄、亦多天下無之者、載籍有聖人、而天下無之、載籍有鳳凰麒麟、河圖洛書器車、而天下無之、文人學士所以朝夕操翰著之篇、儒者先生所以日夜聚徒而告之、其實皆天下所無也、惟人與禮樂、天下常有之、求載籍中所有之人與禮樂、則皆莫有、惟禽獸草木、天下所有、與載籍所錄、未嘗有異、是已、莊釋之書所載、有太古以來、天下所無者、以是視之、則載籍富、而天下狹焉、故天下自天下、禮樂自禮樂、詩自詩、書自書、卜筮自卜筮、後儒皆書生、以書爲準、求以書盡天下、卜無書則謂卜不傳、不可復考、夫灼龜視兆、德性深厚者、必能辨之、可定某爲雨某爲霽、何必聖人、卜筮

本爲民用、其事至卑淺、匹夫匹婦可辨其吉凶、其唯匹夫匹婦所通用、聖人之所不能盡者、寓乎其中、豈二之乎哉、古有房中之書、今無之、世儒豈以爲房中無書、不可復考乎、男女之道、愚夫愚婦與焉、不待讀房中之書、故所待乎讀書者、古今治亂之迹、制度沿革之統、聖人之遺言與博物爾、如射御、如卜筮、如律呂、以形與目與耳學之、求之紙上之文則差矣、卜筮有書、則非古審矣、雄玄光虛、以辭爲主、豈能法先王乎哉、唯唐李華謂、龜卜之法當廢、蓋聖人以麟鳳龜龍、爲四靈、而獨於龜刳之炙之、何其慘也、摘巢毀卵、則鳳不留、刳胎剔孕、則麟不逝、聖王禁之、何其仁于麟鳳、而不仁于龜也、書曰魚鱉鳥獸咸若、龜卜之法盛行、則自天子以至于庶人、皆用之、一歲殺龜、何啻數百萬、是龜亦咸若、而龜獨不咸若邪、雖然先王龜卜之法、必決大疑、定大事、質鬼神之道至重、龜性有知而靈、故假靈物以通神、物不靈則不足以通神、如覩兎畫卦、殺雞卜戰、雖理則一、君子不用、以其物之不靈也、人固貴於龜、固靈於龜、而人之所不能知者、假龜以問、何如者偏氣者易通神故也、律呂乘鳳凰之聲、人固貴於鳳、固靈於鳳、而人聲所不協、質諸鳳凰之聲、何如者、純氣者爲近天、聖人之相、龍鳳之姿、亦貴其靈異也、故龜雖不及聖人之知、聖人之所不知、則龜能知之、是所以爲靈也、夫麟鳳和氣所生、世所不見、龍雖常在、能幽能章、能大幾小、變化不測、可謂靈已、至於龜者、不若麟鳳之希覩、不若龍之變化無常、廼不過介然一蟲而已、如其靈不足稱、然聖人列之四靈、以其知也、不灼則其知不見、故龜卜之法行、而龜之靈益顯、以爲不仁於龜、亦不異乎、如曳尾於泥中、以利言之者也、志士仁人、殺身成仁、靈龜見灼、以成其知、亦類耳、何必以苟生爲樂乎哉、況灼龜之事、順五行之性、本天地之心、先王之精意存矣、龜介蟲之長也、介蟲之長者、金精之聚也、先王灼卜、火克金之義也、龜見灼而墨兆、墨兆者水氣也、金生水之義也、如宗廟之祭割牛羊、亦類耳、牛羊毛蟲之大者、毛蟲之大、木精之聚也、先王割牲、金克木之義也、牛羊見割而血淋漓、淋漓者、火色也、木生火之義也、伏羲木德、如黃帝土德、所畏者木氣也、故鑄首山之銅爲鼎、鍊昆吾之鐵以爲刀、鑑、始乎黃帝、鐘、始乎黃帝、弓

矢舟車、始乎黃帝、可以見已、龜北方玄武、處於水位、龍東方蒼龍、處於木位、其實龜爲金、龍爲水、各處其子之位、以序推之、虎當處南、鳥當處西、而虎西鳥南、七九易所、亦洛書之數也、世稱、伏羲始造網罟、獲龜以授黃安、安坐龜背、已平矣、此蟲畏日月之光、二千歲、即一出頭、安坐此龜、已見五出頭矣、行即負龜以趨、人謂黃安萬歲矣、是雖不可必信乎、畏日月之光、亦金精之證也、古者龜玉金銀皆爲貨財、天下通用、元龜距冉長尺二寸、直二千一百六十、爲大貝十朋、公龜九寸、直五百、爲壯貝十朋、侯龜七寸以上、直三百、爲么貝十朋、子龜五寸以上、直百、爲小貝十朋、是爲龜寶四品、大貝四寸八分以上、二枚爲一朋、直二百一十六、壯貝三寸六分以上、二枚爲一朋、直五十、么貝二寸四分以上、二枚爲一朋、直十、不盈寸二分、漏度不得爲朋、率枚直錢三、是爲貝貨五品、龜不盈五寸、貝不盈六分、皆不得爲寶貨、元龜爲蔡、非四民所得居有者、入太卜受直、金銀錢布、皆以貨稱之、龜獨以寶稱之、漢去古未遠、加以王莽好古、復三代之禮、制度鑿々堪據、脩龜之

風、猶盛哉、夏殷之制、欲卜筮則取蓍龜、已則棄去之、以爲龜久則不靈、蓍久則不神、至周、卜官常寶藏蓍龜、以爲器、蓍、天子九尺、公侯七尺、卿大夫五尺、士三尺、龜、天子尺二寸、公侯九寸、卿大夫七寸、士五寸、以定禮制、藏文仲居蔡、山節藻稅、是爲僭禮、雍徹八佾之類而耳、雖酒大夫之僭禮乎、可見古人重龜之風、夫子亦有龜玉棨中之言、要之龜貴於珠玉、龜策傳、有北斗龜、南辰龜、五星龜、八風龜、二十八宿龜、日月龜、九州龜、玉龜、種々之名蓋古寶龜之目而耳、先王寶之、且與三幣通行、是亦金精之證哉、天用莫如龍、地用莫如馬、人之用莫如龜、是亦古之遺言也、故卜筮之事、太卜總領之、明卜能兼筮、唐六典、引古占卜法云、內卦爲貞、朝卜用之、外卦爲悔、夕卜用之、是筮亦謂之卜、蓍一根百莖、上有雲氣、下有神龜、是亦和氣所生、與鱗鳳及朱草屈軼同類、自非聖人在上、則豈能得之乎哉、以蒿易之、亦三代之制也、何如者、聖人不常有、蓍不常生、卜筮不可不日用、故擇其近似者代之、亦聖人之意也、先天諸圖、相傳隱道家、蓋大卜傳守、寶秘甚謹、及周衰、禮樂散亂、官失其守、衒士挾卜筮、

以餬口四方、賣卜日者之徒至多、如鬼谷先生司馬季主、可以見已、諸圖亦爲術士之有、其徒傳守、以神其術、秦始皇好神仙、漢武帝又好神仙、燕齊迂怪之士、附益其事、漢初諸儒率皆祖黃老之學、如淮南王之賢、有鴻家上仙之名、如劉向之博學、猶曰黃金可成、當此時、卜祝微賤、不與人齒、以神仙進者勤至大官、故諸圖亦皆爲仙家見奪、儒者只奉易經、以義明辭、卜筮盡爲術士見奪、卦圖皆爲仙家見盜、易亦嘗已、其實則渾矣、道家者流、本出於黃帝老子、其道以清淨無爲爲宗、以虛明應物爲用、以慈儉不爭爲行、合何思何慮之義、仁者靜壽之說、如此而已、自秦漢以來、祖以方士之言、乃有飛仙變化之術、黃庭大洞之法、太上天眞木公金母之號、延康赤明龍漢開皇之紀、天皇太一紫微北極之祀、下至於丹藥奇技、符籙小數、皆歸於道家、卦爻變爲符章、諸圖變爲丹法、晉尚玄學、靡然成風、王弼之徒、以老莊之意解易、晉人多以老易並稱、老子專明道德、易十翼多說性命、其書固相類、況老子之文、與繫辭傳、相出入上下乎、故以書視易、稱之老易、亦可而耳、唐之註疏家、皆王弼之奴、晉以後數百年、只有關郎而已、降迨五代、

華山有眞人、傳先天諸圖、發明易道、其言曰、易無文字、蒿古之秘、啓於宋、大極圖與矣、先天圖、大極圖、流傳天下、宋而下、道德性命荒矣、二圖之行、發乾坤之秘、漏天地之藏、不祥莫甚焉、若有豪傑之人、必盡收之、以鍛於天祿石渠之上、非詔勅不得輒披覽、流落民間者、亦必待其人而傳、絕口不語、則上有以答皇天不顯之靈、下有以固邦家不拔之基、太易之道、益神益靈、幽贊天日之統、豈可知其所臻極乎哉、夫藏腑見則人必死、先天太極二圖、不豈天地之藏腑乎、歐陽修而下、儒者有黜河圖洛書爲怪妄者、有疑先天諸圖、爲仙家所製者、雖是陋說、吾有取焉、何如者先王之道、以人治人、斐遲問仁、子曰、愛人、問知、子曰知人、詩書禮樂、皆以人傳之、人者明也、鬼神者幽也、河圖洛書、先天圖象、皆彷彿乎鬼神、非禮樂(一本作粲字)爛者比、子貢之高識、猶言夫子之文章、可得而聞也、夫子之言性與天道、不可得而聞也、故黜圖書圖象、爲怪妄者、在學者宜矣、比諸世儒開口、說道德性命之理、玩弄圖象、誦說鬼神者、加一等矣、歐陽修之論可謂正矣、子曰、鳳鳥不至、河不出圖、吾已矣、夫以鳳鳥河圖爲言、以爲王者明

德之瑞也、數之毫忽、理之隱微、措而不言、只其不言、故其妙不可勝窮、所謂知者不言、言者不知、是已、雖然、孔子晚好易、韋編三絕、鐵撻三折、漆書三滅、繫辭極言性命、言其所不言、聖人自有兩端、中人以上可以語上、中人以下不可以語上者、可知已、豈得信其半而疑其半乎哉、歐陽修而下、世儒之疑圖書者、於是乎陋矣、聖人之教、不過詩書禮樂、而其源皆出於易、易者詩書禮樂之大宗也、聖人之極也、試以河圖言之、一六爲樂、二七爲禮、三八爲詩、四九爲書、詩書禮樂爲一河圖矣、人在河圖之中、五至善之位也、天地一河圖、河圖未嘗大、物々一河圖、河圖未嘗小、小者入無間、大者包無窮、莫非河圖之妙、河圖者何、河者孟河也、龍馬之爲形也、馬身而龍鱗、故謂之龍馬、高八尺五寸、類駱有翼、蹈水不沒背有旋毛、五十五點、名之曰圖、洛書者何、洛者洛水也、綠質丹書、五老捧之、浮洛而下、龜背之紋、四十五畫、名之曰書、八卦律曆法河圖、井田八陣明堂九州法洛書、天地之生實、豈有加于此乎哉、二圖所在、鬼神呵護、不祥妖邪之氣、望而避之、二圖所在、雷電晦暝、風雨崖裂、方圓卦圖、法天法地、大極圖、明易之大原、是數者皆帝王之寶也、私家藏之、其事不祥、王者苟能覽圖象、以思古聖人法天之精意、與先王光被之明德、所以施之風化政事之間、滾々其來、負圖而出、何必龍馬、

太平策卷之十二

水斯立著

夫婦

三綱五典始於夫婦、有夫婦而後有父子、有父子而後有君臣、人倫之本、風化之首、王道之紀綱、太平之樞機、盡在夫婦矣、易首乾坤、詩首關雎、禮重大婚、樂主合和、尚書錄釐降、春秋謹妻妾之分、聖人之道、以夫婦爲先、閨門之內、屋漏之下、雖隱微乎、四海九州之表儀在茲焉、表正則景自直、表邪則景自曲、故閨閤不治、帷帳不修、以致天下之太平、上世以來未之有也、夏之興也以塗山、其亡也以妹喜、殷之興也以扶都、其亡也以妲己、周之興也以太任、其亡也以褒姒、三代興廢、未嘗不由婦人也、蓋嘗推其所以然、朝廷之上、堂階之間、百官在前、執法在後、史在左右、冠帶儼然、南面垂拱、當斯時、雖中才庸主、猶得勉彊於頃刻之間、弗敢放肆也、至於朝散禮畢、輦還後宮、寶貨聚目、絲管塞耳、簾幃帷帳、蔓衍相屬、紅粉皓齒、充滿其間、飲食嗜好、應聲而至、莫不畢給、四顧無指笏之臣、呼咄之聲、寥々莫聞、當斯時、雖明君英主、不得從欲抒情、不取須臾之逸樂也、故白日朝堂、莫不堯舜之君、暮夜帷閤、莫不桀紂之君、如齊桓公賢君也、葵丘之會、與諸侯約、莫以妾爲妻、可謂正矣、不能止內嬖六人之寵也、何如者朝堂之上、可以禮律身、而房閤之間、不可以義制欲、豈曾君乎哉、公卿大夫皆然、立朝風節、論政正議、朝堂之上、指爲名臣、至退朝脫袍、酣臥于衽席之中、鐵石心腸、化爲腐朽、驍勇之將、英雄之帥、牽聯於房閤之愛、而失時機、取荒敗者、相望于冊、降至士庶、失守缺行、必在房閤、匹夫匹婦之爲諒也、至自經於溝瀆也、其弊至此而極矣、自天子以至庶人、修身之要、正家之初、舍夫婦而何以哉、二南皆房中之樂也、夫婦之道也、先生以爲正家之具、用之鄉人、用之邦國、以風化天下、天下之家正、則天下治、匹夫匹婦、被堯舜之澤、伊尹之志是已、太古之時、人如麋鹿、男女雜處、未有定偶、伏羲始制婚禮、嫁娶之道立矣、於是男以女爲室、女以男爲家、匹配一定、不相混褻、夫婦有別是也、太古之時、人識其母、不識其父、至嫁娶之禮立、人始得識其父、父子有親是也、太古之時、氏族不分、聳卑無別、至父子之親

立、民始分姓氏種類、以奉天子、君臣有義是也、伏羲木德、故爲風姓、是氏族之始也、伏羲以前、生民已久矣、有聖人長之、雖然嫁娶未制、夫婦未定、三綱未立、五典未張、是以謂之鴻荒之世、孔子不言、孔子之所稱、始乎伏羲、稽之易可知已、夫好色者、人之同情也、若充好色之情、則盡天下之女、而奉一男、盡天下之男、而奉一女、未足飽其貪求之欲也、以力相制、爭亂吞噬、與禽獸相類、聖人有憂之、制爲婚禮、定之配偶、甲與乙偶、丙與丁偶、若亂其偶、刑罰從之、於是人情始定、各安其所、然聖人慮相遇於道路之間、擇美者專定配偶、於是以儷皮爲禮、夫儷皮爲禮、父母必知之、兄弟必見之、鄉黨必聞之、卒然野合之褻、於是乎除矣、禮之爲教、所以文人情、多其華飾、即所以防情、而使不得恣也、如婚禮論其實、則不過男女之交而已、聖人以禮文之、禮不可立就、人情於是乎制矣、聖人之知、豈不大乎哉、伏羲之時、人民淳朴、壽度百歲、聖人立之制、男五十而娶、女三十而嫁、及三代時、先王爲之中制、男三十而娶、女二十而嫁、以合上古五十之數、蓋人三十則血氣充盛、筋骨方壯、可以施化、可以有子、年未三十、則血氣未定、筋骨未壯、不可以施化、不可以有子、是天地之數也、後世之制、男十六以上、女十四以上、許成婚、以合三十之數、人民澆薄、嗜慾蚤生、血氣蚤溢、故嫁娶至蚤、甚者至未離襁褓之中、而相約嫁娶、是皆天下之大不祥、教化湮撓、人民夭折、職是之由、王吉所上疏、方見于今、豈不哀乎、飲食男女、人之大欲存焉、人非木石、孰能無情、聖人深知其然、故自幼聚之於學校、臨以嚴師、規以朋友、勵以蓺業、不使與婦人雜處、迺男女不同席、不共食、教之於孩童、孩猶未如情、只以爲男女決不可狎、習以爲常、及其知情也、方在學校、學校無婦人、歸省其母之外、未嘗覩婦人、人之情慾出于目、目數覩之、其心便動、夫不覩已久、則忘其美好、猶中國無象、畫圖象之、百端盡巧、竟在眞象之下、顏淵請問爲仁之目、子曰、非禮勿視、非禮勿聽、非禮勿言、非禮勿動、蓋不視聽非禮、則忘其非禮、是所以復禮也、若四勿以心言之、則莊禪之陋也、聖人曰放鄭聲、鄭聲淫、鄭衛之地、濱于大河、地不厚深、人亦浮淺、淫逸荒亂、習以爲性、其聲樂蔓衍流蕩、使人失守恣情、莫知歸也、聲入人深於色、故俗樂之行、風俗日

靡、人才日衰、人壽日促、其害匪細、如我邦與、四面環海、島嶼不闕、多舟少車、迺土地不厚、風俗不重、人稟心房之精、從婉孌之習、尙纖麗、先巧佞、淫蕩之風、與鄭衛相類、至倭伶妓樂、種々之音、豈在桑間濮上之下耶、玉膚柔軟、吹氣勝蘭、以脂粉相高、薄俗滔々、長逝不返、自非剛介之士、豈能獨立、學魯男子耶、孔子曰 君子有三戒、少之時血氣未定、戒之在色、以是驗之天地、堯之洪水瀦々可見、太古如人之嬰兒、至堯之時、天地始有情、洪水泛濫、是天地之血氣未定、豈足怪乎、然謂洪水儆予、即所以爲聖人也、好色者天下之同情也、正則爲三綱五常之本、使人心纏結不可解、莫貴焉、邪則爲荒淫流蕩之最、使國家滅亡不可救、莫甚焉、釋氏恐其荒淫、忌其欲志、併棄其出於天者、三綱五常皆廢、相率陷不孝之罪、是猶畏火災而禁火、畏洪水而禁水、畏噎而禁食也、如飲酒合歡、先王之道也、飲食宴樂、於易有之、先王因制酒禮、以節人情、釋氏掃而去之、絕口不飲、亦畏酗酣而耳、夫色之有淫奔、酒之有酗酣、皆過其節也、苟過節則雖食穀、亦必傷於食、盡廢穀諸、苟得節、則金石之毒、可以爲藥、故得節之爲貴、得節者中之謂也、禮之體也、人情可左可右、可上可下、可長可短、可緩可急、可過可不及、聖人制禮、以爲之中禮、一定而不可易、人情以定矣、人少則慕父母、知好色則慕少艾、慕少艾者人情也、聖人不禁、不三十則不娶者禮也、聖人制之、聖人之所立唯禮、禮以節人情、豈能得使天下之人情、從吾所好乎哉、以妾爲妻、亦人情也、出勢不可已、聖人以爲非禮、惡亂名也、夫死再嫁、亦人情也、出勢不可已、聖人以爲非禮、惡失志也、凡天下所行、人之所有、莫不人情、非禮、惡失志也、後世以法束之、禮與法何擇、雖然先王以禮制之、必原其至、合於人情、人情之所宜、制以爲王之禮、未嘗有所作爲也、如以妾爲妻、原情而言之、妻尊者也、己之配偶也、妾者卑者也、己之使令也、其人之貴賤自殊、苟以賤者爲己之配偶、是己亦爲賤者、欲貴者人之情也、今無故而貶己之位、與使令婢妾相抗、是非人情也、如夫死再嫁、原情而言之、夫婦之愛至篤、死生成誓、雖父子君臣、未足比其情之切也、然所天忽然而沒、爲未亡人者、當淚々相屬、守墓不去、今粉面飾首、新其衣裳、謂它人夫、亦非人情也、故禮所制、雖如與人情相反、深探其本、則人情之所

安也、至於後世所定之法、實多與人情相反者、只以法令驅迫之、不問人情之安不安何如、先王之治不可及者、其在斯乎、孔子曰好德如好色、又曰如好好色、子夏曰賢々易色、蓋好色者人之誠意、非自外來者、故語爲仁深切之旨、必以好色言之、白虎通曰、父所以不自教子何、爲恐瀆也、又授之道、當極說陰陽夫婦變化之事、不可父子相教也、是必有所俾、如繫辭所稱、夫乾其靜也專、其動也直、是以大生焉、夫坤其靜也翕、其動也闢、是以廣生焉、是豈可言於父子之間乎哉、中庸曰、君子之道、造端於夫婦、夫元者四德之長、仁者萬善之宗、其字皆循二人、二人者夫婦也、天地之道、必皆有對、獨陽不生、獨陰不成、二情相戀、二氣相求、日月往來、一寒一暑、明則有禮樂、幽則有鬼神、要之皆夫婦之道也、聖上苟能推好色之心、公於天下、則關雎麟趾之化、亶及遐方、心長輸短、戰兢莫指、枉蒙不棄、蒼生之福、

寬延四年辛未春　西岡幸寫之

太平策終

武藤嚴男同校
井田幸男同校
古城貞吉重校

樂泮集序

今公襲封之初首建學校命臣秋儀典學政以教國子弟數歲之間教化大行公雅好詩而臣儀尤長於斯是以一時仕進君子莫不善言其志而鄉黨閭閻之民亦往々有興於詩者焉不幸臣儀中道即世使臣薇懋承乏後事臣懋質野學固最拙辭藻幸有二三文臣與臣儀俱事者尚在爰職以得守故規仍舊貫而溫柔敦厚之教亦未嘗廢也今玆丁酉臣懋奉命謹選臣儀以來所得國中之詩得詩一千三十首作者二百九人弁以公詩十八首凡十卷名曰樂泮集取諸魯頌思樂泮水之義也臣懋又謹爲之序曰嗚呼詩之爲政教也大矣哉昔者周時王畿之外廣建諸侯如京師然其生殺誅賞發斂寬猛之政亦得自專其國中矣周之先王懼政教之不齊而風俗之或異然而天下之廣列國之多不能徧觀而悉知焉乃命大師徧采列國之詩陳而觀之辨邪正明得失以行黜陟之政是以當時列國之君亦能反躬修德愼風之自此鵲巢鸤鳩之所以嫵美於周南也及周之東遷也政教號令既不行於天下而其黍離之詩亦降爲國風則尚何暇及觀列國之詩而行黜陟之典哉自此以降國異政家殊俗而先王之風日以削朘至乎桑間濮上之音作其變極矣孔子雖大聖不得其位以行其政故獨得就故籍而刪之以修詩之教於是一時之人君雖不見黜陟而萬世之學者因知所勸懲矣自漢魏以來詩人之衆篇什之盛反倍於上世矣其體裁氣格雖與古詩或異而其所以暢情志寓比興者則莫不同矣雖然

上之人既不能采之以行黜陟之典下之人亦未有删之以修勸懲之教是以挑卓感甄之人多免時王之討而子夜大堤之音殆亂雅樂之籍則詩之爲物也不過爲競華鬬靡之具尚何望其爲政教哉方今我
大和封建之設如周時之制昇平之運如周時之盛則列國諸侯之風其必有如召南之美者矣雖然臣聞之居芝蘭之室者不聞其香處鮑魚之肆者不聞其臭化之也臣固肥人也其化於國久矣庸詎知此集之爲正爲變爲雅頌邪謹此輯錄以竢異日大師之采與君子之删安永丁酉二月朔肥後府學祭酒臣藪慤謹序

附言

一我先君　玄旨公之於和歌。上續千載將絕之緒。下垂萬世無窮之統。此乃天下衆人之所知。而無待微臣私言之爲徵也。夫和歌漢詩。異體同工。則我藩風雅之典。實胚胎于此。其後　妙解公受學於惺窩先生、雖以開國多事。未遑翰墨。然斯文漸盛。而朝野之間。頗有鳴于詩者焉及至　靈雲公敦好文學。兼善詩賦。及一時羣臣盛爲賡和。而文風大振矣。今此編限　今公之世。而論及　先世者。以示當時之構猱。蓋亦由　先烈之作蕃云。

一先世之詩既別錄成卷。故此編限以　今公之世。

一臣慤謹論　靈雲公之詩。寬裕豈弟。可謂有人君之度。而得詩人之旨矣。時則有如熊維之温雅。中長德之和淡。墨昭猷之俊發。水斯立之敏捷。先臣之道健。皆一時之選也。錄在別卷。茲存評語。

一此編名樂泮。而徧及野人僧道之作者。以一國風化實由泮宮始也

一此編徧集一國之詩。然往往有韞匱而藏之者。有散稿而不留者。故有有詩名而不收詩者。有富吟哦而寡收之者。姑待續編。

一本國人而今在他邦者收之。以其陶鑄由於我也。本他邦人而來學於我者收之。亦以其陶鑄於我也然其來學非經三年者不收。以陶鑄之不久也。

藪慤識

樂泮集卷之一

肥後府學祭酒藪慤選

臣藪慤謹選

戀嘯閣公閑名詩十八首

夏日訪某山人

空山人跡稀。夏木掩荆扉。丘壑瓶朱影。煙霞隔翠微。白雲堪供臥。青蔬欲裁衣。寂寞揚雄宅。年年問字歸。

三日銀臺莊宴集

負郭銀臺墅。臨風似詠歸。樽開三日宴。花映暮春衣。觴泛清流轉。翠廻幽壑微。桃林相值處。偏與世人違。

答謝山形侯見贈

東莊還卜築。暫此避風塵。翰墨迎雲動。林泉入夏新。和歌誰共唱。同病好相親。原抱連城色。休投按劍人。

夏晚竹飲得通字

六月幽篁下。深林一徑通。綠尊開落日。氷簟坐清風。揮麈玄談劇。脫巾狂態同。山陽青眼侶。相見晚涼中。

山房秋事

蕭瑟山房外。誰知獨往心。丹楓隣四壁。白日冷中林。避世裁青蔬。逃虛倚碧岑。爲耽秋興好。不管二毛侵。

秋日送別

一別河梁上。蕭疎楊柳低。征裝朝露冷。古驛暮雲迷。天外追鴻影。秋風送馬蹄。鄉關何處是。落日紫陽西。

表海樓避暑限七陽

滄溟東海傍。奇峰欄外起。炎熱座來忘。投轄留嘉客。開尊入醉鄉。雷聲急送雨。歌曲偏生凉。鄭下堪揮麈。平臺且聚觴。清狂誇醉態。豪飲壓詩場。星聚迎諸彦。風雄憶大王。南窓俱寄傲。誰得似羲皇。

贈高子式

萱洲草閣隔塵寰。濁酒登臨日日閑。辟荔鎖門常寂寞。江河遶檻更潺湲。白雲不斷停高臥。明月長懸照醉顏。試問淮南招隱處。叢生桂樹有誰攀。

答謝山形侯見贈此送別

秋子羽遊芙蓉賦此送別

芙蓉萬仞倚天開。行矣遠遊方壯哉。夜未五更先見日。峰連北斗俯聽雷。揮毫何讓凌雲氣。着屐還同濟勝才。聞說君元詩楚調。山頭白雪入歌回。

夏日新晴少林精舍集得長字

花臺雨歇夕陽長。夏日新晴敞幻鄉。天畔雙飛迎淨界。世中群俗滌清凉。碧雲將動休公筆。黛色遙來支遁房。莫道上頭昏黑遍。傳燈遍照白毫光。

寄題戶部林先生夕佳樓

夕佳樓上對千門。却弄烟霞日欲昏。吟罷玉堂開錦字。
漉來春酒滿清樽。丹墀近接風雲色。金掌長承雨露恩。
此處采眞何限意。朝回沈醉不知喧。

呈林祭酒

巒葱佳氣鳳城齊。金馬門前駐碧蹄。博物張華推海內。
高名伯起似關西。下帷園樹黃鸝囀。授簡春風白雪迷。
當日校書天祿閣。于今猶見照青藜。

哭高子式

樓居仙去月明空。百尺寥寥秋色中。叔夜山河餘舊跡。
柴桑楊柳起悲風。乾坤搖落騷人賦。霜露摧殘桂樹叢。
天上不知何處住。人間長阻廣寒宮。

暮春少林精舍集得風字

少林高鎖古禪宮。春暮登臨似剡東。染翰彩雲來淨界。
開窻花雨下鑪空。千尋嶽色懸寒影。咫尺潮音入海風。
何問當年買山隱。翠微深處對支公。

酬大川尊者見訪

江邊雨雪北風斜。飛錫寒空逐落花。莫道夜來幽興盡。
門前留得白牛車。

春夜宴桃李園

春筵張燭武陵西。不管餘酣臙月低。桃李滿園紛似錦。
蹈來花下更成蹊。

秋夜登潮音閣得東字

潮音高閣海門東。萬頃蒼蒼月色中。得出人間塵累境。
諸天今夜坐清風。

褰裳亭集

扶桑日出彩雲開。百尺樓臺更海隈。不是當年秦漢客。
褰裳直欲問蓬萊。

宇土侯興文字子華。號育城。又號月翁。公族。推恩封宇土。位下一中務少輔。今老、詩二十四首。

山寺避暑

欲避人間熱。尋幽入梵宮。飛流懸絕壁。高竹起清風。
磐礴孤雲外。蟬鳴萬木中。論玄猶未去。坐覺世塵空。

初夏鑑水亭子式至賦贈

小苑飛花後。相看到夕陰。石苔經雨綠。林翠映池深。
吹浪金魚出。勸杯黃鳥吟。聊將滌上趣。欲會故人心。

暮春遊玉川

玉川晴望迥。春暮水悠悠。蛙斷青山出。汀清素練流。
蹴花飛燕去。隨浪狎鷗浮。此處逢漁者。尋源欲泛舟。

夏日山居

長夏空山裏。幽居萬木深。北窻清吹起。西嶺夕陽沈。
瀑水鳴寒玉。松濤落素琴。誰知弘景宅。常愛白雲心。

鑑水亭雨集寄懷大川上人

池亭懸雨色。水樹鬱蕭森。彦會迎玄度。清談少道林。
雲連香界暗。秋入碧山深。遙望諸天外。剡東何處尋。

暮秋約同中川侯。遊少林精舍。值雨不果。有詩見寄。和答。

遙望嵩山路。蒼蒼雨色深。層雲連法界。落葉滿祇林。
不見青蓮相。翻聞白雪吟。重期新霽日。禪寂與君尋。

春日大川上人過訪鑑水亭。得天字

杖錫乘春至。相迎落日天。玄談堪盡興。詩意不離禪。
林外鶯聲囀。池邊柳色懸。衣珠君自在。可以鑑清泉。

初秋凌霄閣迎秋子羽飲晡後過雨生涼

嚴山隣閣出。芝海繞欄開。樹杪層雲起。潮聲過雨來。
銜杯秋暑退。裁賦晚涼催。因對蘭堂客。清風入快哉。

桂源山莊興

桂源二三月。閒客不妨遊。花發烟霞暖。鳥啼丘壑幽。
放情憐永日。濟勝漱清流。乘興何唯雪。前江有小舟。

首夏山庵與友人對酌

會有尋幽客。同樽慰寂寥。古松懸薜荔。新竹破芭蕉。
山溜常聽雨。海風時送潮。誰知軒冕外。與汝得逍遙。

夏日山亭避暑

卜居移僻遠。獨喜富山泉。溪得觀魚樂。庭同拜石癡。
讀書消暑日。高枕保餘年。此外無他事。時時夢昔賢。

九日龍口邸宴集得秋字

重陽朝散客。相駐五驩騶。朱紱兼烏帽。青雲倚綺樓。
鼓琴傳大雅。懷璧會諸侯。霜葉當簷下。寒花傍酒幽。
張燈連薄夜。裁賦對殘秋。餘醉偏堪漱。門前一水流。

白河侯過訪有詩和答

冠蓋相迎小閣前。登臨握手望長天。雲峰幷秀芙蓉色。
江雨新晴楊柳煙。坐上青樽憐客滿。歌中白雪任人傳。
使君明日東方去。早晚風流同此筵。侯歸藩在近故云

送僧法振再赴南都東大寺

一乘南指碧山隈。海驛春雲萬里開。衣裏珠探龍頷得。
天涯錫逐鶴群回。曇花欲落黃金地。貝葉新翻白馬蠻。
上界重來清淨處。何應趺坐着塵埃。

初冬倍肥後侯。遊龍山泰勝禪寺。觀楓。得蠻字

龍山名剎倚崔嵬。滿苑丹楓映梵臺。長者停車金布地。
道人張席錦成堆。有時偏怪天花散。向夕還疑塞雨來。
爲是虎溪陪語笑。猶窺色相重遲回。

暮秋病間遊桂源小庵

桂樹叢生幽壑邊。行吟曳杖破山煙。溪通流水常堪漱。
巷對閑雲獨欲眠。落葉庭中風自掃。飛霜嶺上月高懸。
休疑此地頻來往。泉石膏肓一病仙。

題淵明歸田圖

屋外南山秀。窻前一水流。何妨終歲醉。種秫在西疇。

和高子式畫鶯韻

一鳥破春煙。飛上垂楊柳。未聞睍睆聲。應待携酒友。

煌恩館（宮川侯園中二十勝之一）

野館開一尊。景多易成醉。漸覺煙霞中。引人着勝地。

修竹堂（同前）

修竹百餘丈。新綠映晴雲。客皆子猷侶。何可無此君。

夜猿啼

巫峽秋深木葉稀。孤猿啼處白雲飛。山風吹落三聲恨。
一夜行人淚滿衣。

訪隱者不遇

山中一路到茅廬。落木空階罷掃除。採藥幽人何處去。
牀頭猶藉讀殘書。

九日送高子式赴鎌倉草堂

淵明遙向草堂回。籬菊相迎花正開。定是山中逢酒熟。
可能秋色負衔杯。

月夜登金龍山得雲字

金龍吐月映江濱。影落中流嶽色分。半夜何人回棹去。
菱歌一曲隔林聞。

宇士侯立禮（字君恭。號蚶城。公族。推恩封宇士。從五位下。時六首和泉。）

早春江樓言懷

千里東風動。江樓眺望時。遊絲生水落。矯鳥繞深枝。
山遠蒼煙合。天空白日遲。鄉關音信少。何處寄相思。

花下別

新晴芳樹下。春煖帶輕煙。花氣飄衣上。鶯聲繞酒邊。
勸杯憐別意。把袂問歸年。今日君分手。何時共此筵。

宴城北莊

春天新霽日。遊向碧山阿。夾路林泉淨。啼花野鳥過。
門前芳草秀。屋外白雲多。如此幽莊裏。開樽好醉歌。

秋夜思鄉

木葉蕭蕭下。悲秋獨倚樓。思鄉千里夢。落月入窻愁。

聞雁

鄉園萬里遠相思。城外寒林葉落時。獨坐高齋煙雨裡。
數聲鴻雁過天涯。

野望

噴野風寒行客稀。浮雲流水望依依。千郎日暮炊煙合。
唯有牛羊向舍歸。

忠英（字子和。一字內膳。號蛇舖。公族。府學總教。今沒。詩二首。）

遊西溪

西溪風景好。轉使客愁寬。落葉飄斜日。歸禽沒遠巒。
嘲盃霜氣薄。枕石水聲寒。所値皆奇絕。何須促轡鞍。

遊瑞巖寺呈敎禪師

松門塵事絕。蕭寺晝沈沈。山色窻前近。泉聲竹裏深。
境閑雲共懶。詩就鳥同吟。趺坐石床上。焚香問道心。

興彭（字子路。一字華人。公弟。詩三首）

尋梅

前村一路夕陽斜。流水澄烟處士家。不辨千林深雪裡。
踈香忽動是梅花。

和隆上人見贈韻

紅塵不到梵王堂。竹外青山繞坐開。況許蓮花池上酌。
玄談偏惜夕陽催。

臨流精舍集

祇林春樹夕陽開。花下東風吹面來。爲是嶺公能愛客。
還敎陶令醉中回。

孝應（字君中。一字酉吉。號蘭庭。宇土侯弟。詩二首。）

早春遊目臺得嬌字

腰間一酒瓢。携去倚岩嶢。嶺雪含霞色。松濤接海潮。
春風花樹動。夕日野煙遙。遊目高臺上。啼鶯勸醉嬌。

夏日山亭避暑

一亭丘壑裡。避暑此徘徊。幽逕新人過。深林野鳥來。
雲峰當檻聳。海色入窻開。自有清風起。披襟入快哉。

山寺避暑

避暑禪樓地。風流會我曹。門當山色靜。寺出樹梢高。
許酒開青甕。題詩弄彩毫。勝遊乘興處。世事醉中逃。

擬長安月夜與友人話故山

秦城秋色滿長安。萬里雲山望不窮。酌酒樓頭迎朗月。
開窻座上對涼風。江湖寒影生愁裡。丘壑清光在夢中。
話盡十年鄉國事。歸心一與故人同。

從軍行

征客長城猶未還。朔風吹雪滿檢關。夜半更驚烽火急。
三軍鼓角動千山。

暮秋遊山寺

寂寞禪關興有餘。詩成自覺世情疎。楓林相映斜陽外。
淨界風光畵不如。

樂泮集卷之一 終

樂泮集卷之二

肥後府學祭酒藪慤選

長岡營之本姓松非。賜今姓。字公度。一字主水。世爲國老。詩三首。

春日遊濱松亭

別園花滿樹。聊此得幽期。忽聽林間鳥。閑題竹裏詩。
樽開春色靜。坐久夕陽移。潦倒山公興。何知倒接䍦。

泛松江

短棹孤舟久泝洄。葭汀鷗渚意悠哉。前山暮色含初月。
無限清光波上來。

客舍別諸子

蕭條客舍酒盃閑。歲抄相逢惜別顏。明發千山風雪起。
不知何路向鄉關。

長岡是福本姓来田。賜今姓。字君錫。一字助右衛門。號方洛。世爲國老。今沒。詩一首。

閒家弟子隱遊神江。因賦贈。

春滿江南杜若洲。憐君載酒放輕舟。冠童三五詠歸興。
恰似舞雩曾點遊。

有吉立喜字君柏。一字四郎右衛門。世爲國老。詩九首。

遊山寺

落暉入古寺。山壑暮雲多。曲徑經氷雪。禪房帶薜蘿。
梵音知淨理。人世變風波。寂寂香臺外。但看麋鹿過。

登蘇山

蘇嶺倚遼空。迢迢不可窮。白雲秋樹外。青靄夕陽中。
百頃龍湫古。層梯仙路通。我來凌絕頂。被髮嘯長風。

又

蘇嶺巇嵓倚夕陽。登臨滿目樹蒼蒼。山中欲服煙霞氣。
澗底幽尋藥草香。鴛鴦自飛丹洞口。鼎爐猶在碧墳傍。
天風忽送孫登嘯。萬壑千巒引響長。

幽居

鳥聲深樹中。獨坐夕陽紅。寂寂風塵外。溪頭一徑通。

題山房

終身林壑裡。巖戶鎖藤蘿。幽意無人識。白雲獨自多。

題僧歸山圖

山中懸一路。翻錫夕嵐寒。乞食歸何處。精舍在雲端。

偶成

好酌闍陵酒。千觴未用辭。醉來花下臥。不復問歸期。

游仙

三山縹渺出雲煙。玉闕銀臺夕照前。園裏蟠桃花盡發。
頻遣青鳥會群仙。

寄道士

萬壑千峰鎖紫雲。白松花落晝紛紛。華陽道士人不識。
去來唯有鶴羣群。

堀完字君綱。一字平太左衛門。國老。一詩六首。

寄懷井君祥

海上秋將盡。風霜滿客舟。青樽千里別。明月兩回圓。
梅發浪華地。詩懸水部賢。携來夜珠在。投樹欲相傳。

豊州田伯德。見贈盆栽小松。因賦謝此。

盈尺蒼松樹。飛來似忽生。鶴栖期蓋偃。龍臥待鱗成。
愛此後凋色。憐君遠寄情。微風吹解帶。早已有餘清。

和答外弟薮士厚寄韻

故園西望路悠悠。況復東關久滯留。流水朱絃思萬里。
槭背白雁隔三秋。蘇山雲向愁邊結。紫海珠從握裏投。
最是謝家芳艸夢。幾回春色感同遊。

早春送米大夫歸鄉

送別江城淑氣開。西藩萬里路悠哉。輕裘日暖歸鄉色。
緩帶春生濟世才。立馬函關山月落。揚帆筑海雪濤來。
故園到日花應好。嘉樹相迎待樹回。

淵大夫臥遊亭

新亭延眺擬岑樓。退食知君此解憂。東閣清風林外灑。
西山爽氣席邊浮。登龍客到樽常滿。繡虎才高筆不休。
爲是羣峰如畫裡。勝情何減少文遊。

玉山先生進階。榮歸在近。因賦賀之。

儒臣彩筆日翩翩。忽見飛騰在目前。雨露非關逢狗監。
風雲原自辨龍泉。青樽置醴稱殊禮。朱邸談經侍盛筵。
到日故園花更好。知君盡錦似當年。

淵冷鮮夏姓三淵。字公明。一字伊初助。國老。詩二首。

遊盈上人寒玉齋。時上人設茶

寒玉齋邊白水流。一時諸彦此同遊。松濤竹籟茶將熟。
三椀清風凌十州。

初見坂徵卿賦贈

風塵車馬唱言難。傾蓋今朝初罄歡。從是青山流水調。
時時閣裏向君彈。

米著複姓来田。字子陵。一字波門。參政。有四時園集四卷。行于世。今編詩四十二首。

詠懷

達者喪是非。愚者多愛惜。愛惜我所嗤。富貴亦何益。
邈彼去日影。迭如駒過隙。玄鳥一已歸。蟋蟀便居壁。
紅顏豈再新。及時當娛樂。迂哉秦代主。神仙設相索。
渺渺徐福帆。悠悠任潮汐。潮汐去復來。之子無形迹。
不如飲美酒。以當長生藥。

鎌倉覽古

相中尋遺跡。跡荒何所見。陰雲起鶴陵、慘澹海南面。
覇主臺榭空田疇。日暮寒卿臥黃牛。于今猛軍何處在。
七里灘前水自流。

花樹歌。示藤子豐

花樹歌。歌之未了若夕何。夕花色非朝花色。休辭花
前酒如河。河水流春不暫住。餘暉沈沈藏山霧。今夕相
逢不賞春。明朝誰家醉花樹。花樹歌兮勸酒巵。與君
行樂當及時。縱是年年花長好。春去春來鬢作絲。

小弓

縱非三射具。短小愛工奇。自謂宜衰腕。兼憐似薄眉。
負薪雖有疾。穿柳竟無疲。但願從君子。相爭上酒巵。

市原訪佐氏。佐氏去歲罹災。

聞說燎原火。無端過四鄰。西南知噗酒。老少不傷人。
晏坐甚如舊。回看庶已新。自今家醞色。更貯幾多春。

過北山館。將浴溫泉。館後開逕。別搆浴室。

云是原氏爲余設。賦謝。

戶外千巖拆。花間一逕新。可憐今雨色。還勝去年春。
移石通仙液。分池浴我身。丘山休敷鑿。恐駭郡中人。

賦得水滴雁

嘴邊蘆葉露。滴滴作書時。南北忘雲路。春秋傍視池。
終無弋者慕。獨有詩翁知。長此堪投宿。游冥不必期。

秋日聞南郭先生澁谷別業新成。扁曰白眞。

因賦寄題。

澁谷居應好。其中我舊知。峯巒兼石勢。辟荔掛松枝。
爽籟秋聞早。孤雲暮去遲。丘園何所貴。醉後有新詩。

會心亭

天籟雙林夕。徘徊返照餘。使吾能喪我。聽鳥且觀魚。
杳霧鐘聲濕。清池鏡影虛。誰知會心處。近在此禪居。

金川別故人

駐馬金川驛。蕭條落月殘。同袍千里別。斗酒一宵歡。
山色催風雪。滄聲入曉寒。離情與歸思。去住欲裁難。

春日過積氏別莊

稍覺遠風塵。喇盃暫弄春。松泉元不乏。魚鳥亦相親。
園伴看花侶。山逢採藥人。何當避跡去。來卜此東鄰。

香涉川

晴日携佳興。來求野水春。香涉經雨茂。杜若傍流新。
淺渚開樽酒。前灘試釣綸。漁翁閑偶坐。應是子陵倫。

又

桃林移午影。麥隴鎖春塵。水遶村前轉。烟含野色微。
消沙疑暴練。彩石憶支機。行欲尋源去。呼舟立釣磯。

又

十里乘寒浪。扁舟下夕陽。烟迷津樹色。風送岸花香。
至處逢山起。歸程愛水長。斯遊能幾度。停棹意蒼茫。

遊北里翁山園。數日忘歸

磴道蒼苔合。巖阿薜荔懸。小堂臨澗水。深戶鎖山烟。
壁古枯蝸跡。燈殘繡佛前。知君春醉興。往往愛逃禪。

又

夢裡春禽語。醒來曙日移。泉聲催盥漱。霞色照漣漪。
幽樹多成綠。殘花盡謝枝。相看驚借問。起臥幾經時。

訪佐氏隱居

山田開百畝。中結白雲廬。秋稼收將盡。霜林染未疎。
移床依水石。把酒弄樵漁。夕潮餘酣去。鳴泉玉不如。

經北澗悲黃花村。同諸子酌

澗水連西山。峯巒自北來。悲風聞嘯虎。飛瀑送鳴雷。
露葵芝交秀。秋寒卉瓦摧。釣簑青壁下。樵斧白雲隈。
俗異疑秦隔。蹊頹似蜀開。傍巖危棧掛。觸岸亂流回。
應接無餘暇。登臨乏賦才。誰非耽猥狡。不復憚崔嵬。
此道雖難矣。斯丘實樂哉。充餐饒野蔬。隨意上山杯。

九月十三夜北山望月。寄懷古公昧從公在江都。

夙昔期秋月。頻年共酒盃。忽遊東海水。恐戀北山萊。
三五看將近。盈虛更幾回。離居驚甲子。帳望上崔嵬。
漢逐孤輪轉。江浮匹練來。微雲纔點綴。雙雁互悲哀。
我躭遊嚴曲。夫君在邸臺。新知雖樂只。舊興可忘哉。
賓客曳裾集。輝光授簡開。不論希逸賦。自有馬卿才。

掛鼈

朱繩翠篘一根輕。可愛新芽日夜生。高傍湘簾搖月影。
遙離楚畹掛秋晴。葉間露灑彈琴下。花際風飄滿室清。
但爲從來多秀色。憐君亦自國香名。

早秋訪澗大夫。時臥遊亭新成。得删韻。

秋來尋興試躋攀。爲愛風凉晚未還。酒滿清歡思北海。
亭新高臥勝東山。石泉驚見神工似。歲月應緣吏事閑。
況值衆峰當戶牖。更疑身在畫圖間。

蚌珠應美仲瑞乞

明月團圓出海涯。夜來寒色掌中移。忽疑澗客盈盈淚。
更憶江妃解佩姿。一櫃光輝難自掩。連城聲價待人知。
即今縱少先容者。會見前程照乘時。

海樓避暑。晚際値雷雨

高樓東望八州遙。忽見炎雲擁晚潮。一雨怒雷隨烈烘。
九天垂翼撃扶搖。與來賦海才誰老。病後觀濤氣尚驕。
半夜留連窺日出。斯遊不必假秦橋。

三月一日同僧君山及諸子。集辛文學亭。得停字。

同隨錫杖入幽亭。寂寞春園草色青。詠罷一觴俾濁酒。醉來奇字問玄經。桃林催節花先發。竹塢臨風客未醒。應爲惠休多麗句。碧雲終夕傍窓停。

入京奉謁右府久我公。賜酒饌

朱樓畫閣映朝陽。如市門前紫陌長。鳳翼九天誰易附。仙雞五彩更相將。香醪和得仙盤露。羞膳分來禁苑芳。豈意青雲開宴處。還敎我輩此徊翔。

植杖山偶興

林壑晴光逐望新。重遊何須問前津。青山有待浮橋上。黃鶴如呼繞水濱。桃李猶餘三日色。松花更買一觴春。醉來靈液爭相浴。攝笑蘭亭祓禊人。

遊清音館

靈液涓涓館舍傍。同遊乘暇此相將。滌身何減曠山浴。高枕眞爲華胥鄉。認得鳴流猶怪雨。望來閑月正如霜。夜猿縱破幽窓夢。不似愁人易斷腸。

書山水

一片前峰月。朦朧照水濱。唯餘橋上雪。不見騎驢人。

月夜山行

山月乘清夜。徘徊澗水濱。林間閒獨笑。知是讀書人。

南歸

稚子依膝問。山中遊何久。好花春幾多。官今折來否。

清音館

蒼翠含山閣。上有雙仙鶴。清唳隨松風。時自雲間落。

友人莊

蕪葉秋風雙字。繩牀夕月殘書。雲深笑語聲遠。園古往還跡疎。

送山叔悉歸毛州

白雲山上白雲開。獨向家山萬里回。縱是白雲無限好。可能持贈故人來。

暮春答辛翼之見寄

問我園中春若何。夜來風雨落花多。墻東幸有千竿竹。遲爾他時嘯詠過。

北山偶興八首節三首

試上峰頭夕日暗。西來秋色入看分。無邊衆木皆黃葉。何處名山不白雲。

又

浮槎口上月明低。兩岸蒼蒼水樹齊。搖落秋風聲不斷。東山北嶺夜猿啼。

又

靈液涓涓急峽間。塵襟滌盡向前山。掃雲漸涉巖阿去。龍尾龍頭次第攀。

佐氏宅同諸子酌

晝靜村園雨色深。共開春酒醉花林。蛙鳴鶯語君聞否。總勝城中皷吹音。

暮春諸友西歸。念及逢秋。悵然賦寄。

花前三月醉相酬。荏苒年光入夢流。此日東西人萬里。天涯望斷白雲秋。

春夜宴桃李園

桃花李花開滿枝。花下月下勸金巵。可憐桃李芳園夜。能向春風醉幾時。

北山道中

阿蘇山上雨新晴。日見烟霞五彩生。鳥道人家花不斷。春風二百里行程。

山館示賓林道士

忽見山陰道士過。問余佳興近如何。右軍老去書逾拙。無意黃庭換白鵝。

秋儀(復姓秋山。字子羽。一字儀右衛門。號玉山。府學祭酒。今沒。有玉山詩集六卷。遺稿十一卷。行于世。今編詩四十四首。)

君子行

旨酒崇神禹。象箸嘆箕賢。曾子逃勝母。伯夷遠盜泉。蟻穴實壞堤。鴻毛或沈船。垂堂戒瓢尨。豉悪忌急絃。蔓蔓將尋斧。涓涓易成淵。焰焰可撲滅。炎炎欲燎原。所以古君子。戰兢防未然。

山人勸酒

山人勸酒。酒人愛山。愛山掛酒。身心自閒。心如流水。身似雲還。還雲杳渺。流水潺湲。絲鳥戲樹。青露怡顏。天之寵我。置我其間。我歌我舞。樂若循環。清風自至。明月可攀。有酒有酒。勿令闕斑。

僧鶴谿見過

平生張子宅。蓬蒿二三尺。來往惟明月。曾無來往客。今夕蓬蒿上。初見雙履迹。欣然同拍手。明月向人白。

晚歸

川上看欲暝。餘紅在屐齒。嬋娟初弦月。艷艷媚暮寒。岸遠行人小。村幽獨樹團。喚舟沙際立。秋水正漫漫。

觀十六羅漢圖引

君不見大阿羅漢骨相奇。展圖煙霧飛出帷。忽視嶽嶽梁間語。巉巖欲摧赤脚踦。一尊賓龍盛佛牙。光如明月夜燁燁。深目一尊喝懶龍。俄頃風雨生鱗甲。侍者俛搔一尊痒。快心益背達眉睫。兩尊持咒焚妙香。金

色梵篋爛貝葉。獅子象虎吼跳梁。夜叉羅刹來服帖。十有六尊森王立、翠氛撲壁峰巒疊、乃欲西去朝法王。騰身海雲無舟楫。鐵鉢金策瑠璃瓶。群神扶持翔若蝶。五天蒼茫風濤驕。靈鷲之山呼可接。秋生蝗不盈七尺。健雉與之爭雄雌。天際盈盈無熱池。余亦褰裳欲徑涉。揮筆長風拂長髭。目送飛鳥彈銀錏。

鴻門高

鴻門高。高且雄。天曆數。指顧中。謀臣不語目屢動。劒舞雙雙鬪白虹。屠兒一入四坐傾。卮酒彘肩腥風生。君不見俎上之肉飛生翼。却望天際成五色。

老將行

十五已充羽林兵。十八便歌出塞行。天子賜我琢骨地。天子遣我絕厥城。三十腰間金印黃。錦袍赫奕照路傍。今日牖下身瀕死。紫髯赤髭盡成霜。憶昔出師蕭關道。金天秋隼聲寒狎。丈八蛇矛六鈞弓。邊兵百萬淨如掃。朝取一營暮一壘。旗鼓森嚴肅千里。于闐花驄三尋躍。氷海枯鮫三尺是。爰喪其馬飛狐北。晚暮蒼茫求不得。前軍失利牢氷折。掘盡沙鼠飲馬血。單于乘虛復來即。陳雲一圍晝如墨。戍樓大雪連堞高。士卒墮指命如毛。將軍一呼長風起。奇兵突出若波濤。亂箭飛矢紛於雨。單于如鳥忽遁逃。既危復安蓋有神。皆道將軍勇且仁。帳下椎牛供壯士。河上投醪飲萬人。提書還奏慰章宮。宮前花木生春風。公卿舉觴賀天子。殊恩自詒麟閣功。爾來昇平五十年。北邊寂寞絕塵烟。秖今天子盛好文。白面書生致青雲。七十餘創無人問。七十餘戰有誰聞。有時聚米談舊事。旁人指目笑紛紛。已矣哉眼前葡萄唯爛醉。身後蓋棺何足云。

鍾馗擊鬼圖

深山之阿夕出雲。凄風苦雨鬼成群。小鬼跳梁大鬼笑。高明之家來去紛。終南高士面如丹。青袍烏靴裁其冠。十圍腰間三尺劒。小鬼大鬼肝膽寒。君不見白日掷摭鬼如林。不獨女蘿薜荔陰。

河豚行戲示岡士駟

前有三尺魚。後有一坏土。達士由來帝懸解。視死甜於西施乳。寒冬十月雪作花。虎班豚魚味方美。醉將西施葬人腹。笑殺魚腹埋屈子。君不見吳王白日正酣歌。越來之溪爲血水。又不見吳王三尺魚腸劒。血濺一縷人立死。

臥游亭爲岡士駟賦

五岳如攢指。百年如急流。欲往從之吾老矣。誰寫秀

色落牀頭。峭壁懸崖層層碧。芙蓉朶朶紫煙浮。金鷄夜號跳海日。下窺飛泉澗壑幽。玉井蓮花行可采。狂風吹盡藕如舟。寒松尚鬱秦時雨。匹練遙曳吳門秋。冷笑當年呼萬歲。漢家天子不少留。少文本自向平隸。空說夙志難相酬。我踏五岳朝華岑。天門咫尺颺神游。百怪眩耀非世有。鴉飛龍兮驂青虬。陽我瓊漿甜如蜜。聊撫長劒息椒丘。俛見鵬背青濛濛。不辨赤縣與神州。黃河一帶供濯足。蒼梧之野白雲愁。巨靈鼠負忽蹉跼。釣天鏘鏗鳴未休。此時峰峰爲君響。振衣空翠紛不收。

客中奉寄屏山水先生

關西夫子在。悵望夕陽中。家隔千山外。人如萬里逢。詩書游魯國。禮樂問周風。自愧支離甚。何曾比易東。

新歲作

詩書聊卒歲。杯酒復迎年。芳樹千家雨。垂楊萬井烟。園唯藏白澤。甕豈著青錢。日日醒還醉。飄飄地上僊。

初夏山行

山中朱景靜。雨後綠溪陰。新樹雲猶濕。前峰路更深。時時聞伐木。處處變鳴禽。幽愁長松下。清風滌煩襟。

太宰府謁菅公祠

悠悠八百歲。陳迹徒悲傷。都府樓何處。觀音寺已荒。魂猶吟澤畔。人似貶湘潯。唯有梅花色。春風憶帝鄉。

宿熱海旅館。觀野火燒山。炎烟漲天。壯不可言。明日將發。賦此紀之。

野燒入翠微。薄夜有風威。萬丈金蛇繞。千峰火樹圍。長烟生月暈。落點亂星輝。游子如烏鵲。何枝更可依。

春日陪宴樂山公子鑑湖堂

良宴乘春色。名園公子前。游絲不到地。芳艸總如烟。戲蝶隨飛盖。啼鶯近侍筵。無緣將薄劣。彊欲鬪奇篇。

秋日表海樓陪宴。遲大川和尙不至。分得先韻。

飛樓架海天。精舍隔風煙。留客湍桃酒。懷人貝葉編。席迎朱紱色。杯渡碧雲邊。相望不相見。秋波一渺然。

癸未暮春。君侯視學。親聽謁生說經。童子背誦于尊明閣上。因謹賦奉獻。

日暖和鶯囀。經筵侍泮宮。菁莪多雨露。芳艸偃春風。濟濟青衿子。嗈嗈黃髮翁。琴聲將鳥語。總在杏花中。

妙解精舍席上。和匡卿韻

柄鳥歸林靜。禪房看暮雲。一爇香積飯。不立貝多文。寒色生紅葉。山光凝紫氛。無端鐘磬發。但恨易斜曛。

旅館夜雨

西風吹驟雨。病客思悠悠。天地孤燈夜。江湖獨雁秋。

青山成遠夢。白髮爲多愁。不寐聞更漏。沈沈曉未休。

播州曾根偃松。云是菅公左遷時所手栽。實八百年物也。癸酉春適觀之。因賦

菅相祠堂古。孤松久已貞。蟠根餘手澤。偃蓋感精誠。
地屬印南郡。年傳昌泰名。後凋憐黛色。還愛慕風聲。
鶴影棲仍密。龍鱗老更生。液堪仙鼎鍊。材使帝家成。
應等甘棠思。何論嘉樹榮。悠悠八百歲。不朽托文明。

晨起望東山晴雪

當戶東峰秀。開窗晴雪鮮。初寒高鳥外。曙色遠鐘邊。
出樹人家點。如絲樵路懸。餘清歸縹帙。明露落茶烟。
梁苑應裁賦。剡溪欲放船。梅花何處發。昨夜夢相牽。

秋日戀嘯閣陪宴。同樂山公子服子遷賦

飛閣陪游九月天。蕭條秋色滿江邊。黃芳仍老迎朱紱。
綠酒初寒照綺筵。戀嘯一時名士在。雄風萬里大王前。
可知高會關星象。文采何曾讓昔賢。

觀獵

十里黃雲欲雪天。遙聞白額嘯風烟。楚王豹舄衝寒出。
漢將雕弓如月懸。酒力乘來窮遠近。鼓聲猶震動山川。
蒼鷹直上五千仞。撩亂芳毛墜馬前。

詠陵隼鏡

鑄鏤銀雲鏡裏清。三餘事業待君成。奪將蝦目五行下。
讀破蠅頭萬卷輕。映雪孫窓同灼爍。看花韓苑已分明。
還疑太乙青藜照。天祿當年劉更生。

秋日過飲碧梧亭

碧梧亭子一登臨。霜落空庭易夕陰。回望千峰紅樹合。
留連十里白雪深。醉來無復遂心在。病起何論華髮侵。
我有瑤琴君試聽。今朝聊作鳳凰吟。

詠春月

江上餘霞一鏡懸。流光瀲灩夜如烟。娟娟幾度梨花外。
溶溶初臨楊柳邊。姿見素娥憑酒醉。粧疑玉兎搗丹眠。
瓊筵弄影飛觴處。淚倒芳園李謫仙。

初冬遊妙解精舍得微字

登臨香閣戲餘暉。寒色蕭條霜氣微。高麗門前紅葉下。
祇園山上白雲飛。一官誤奏千秋技。半偈緣持萬事非。
極目長江流不盡。時看歸鳥度林霏。

松濱亭觀鹽丁煮潮作

丁夫日汲潮煎。爲壽鹽池似壽田。新見漁沙凝素處。
還疑伏火鍊丹煙。虎形原識周廷禮。魚利兼饒齊國年。
一自鄒生吹律罷。飛霜六月下青天。

春日妙解精舍陪宴得先韻

謝公詩似遠公禪。此日登廬思渺然。僧院春風花作雨。
鷰時物色柳如烟。數椽家在青山外。一路人行芳艸邊。
向晚何須愁黑月。衣珠猶自照諸天。

望芙蓉峰

帝掬崐崙雪。置之扶桑東。突兀五千仞。芙蓉插碧空。

詠史

昨日割一縣。今日割一城。割到壯士膽。蕭蕭易水鳴。

度大利坂是日霧。五步不辨牛馬

崎嶇十餘里。咫尺迷雲霧。身在空山中。不見空山樹。

小景

夜雨前溪漲。欲渡向何處。不知水淺深。試放黃牛去。

山中作

裊裊山中雲。英英繞茅舍。童子采松花。飯客南窓下。

閒行

偶然過橋去。一逕入竹林。散步日將夕。人語起栖禽。

琴橋

愛此琴橋名。苔蘚斷紋成。上有高山色。下有流水聲。

感春

月自舊時月。春非舊時春。落花逐流水。嘆息舊時身。

隴頭流水歌

欲馬隴頭水。水寒馬嘶悲。壯士忽一聽。秋色上鬢眉。

出塞

日暮三軍渴。茫茫水草絕。壯士剌白馬。含吠飲青血。
米大夫爲余寫眞。因戲題其上
片言不朽盛事。五尺無能短身。桃李春風美酒。芙蓉
秋水佳人。

文姬歸漢圖

月白天南鼓角鳴。文姬掩淚出邊城。秋風吹落哀鴻夜。
總是胡雛戀母聲。

新羅三郎吹笙足柄山圖

漢室將軍賦遠征。虬鬚颯爽夜吹笙。鐵衣忽見秋風起。
月白關山草木鳴。

薩埵崖上酒樓同數士厚飲

薩埵崖上臨高臺。雪浪雲濤勢壯哉。不見芙蓉天際色。
何知東海有蓬萊。

遊仙曲

步虛聲散藥珠宮。飛去飛來碧海東。新得鶴雛猶未相。
雲中爲逐浮丘公。

樂泮集卷之二終

樂洋集卷之三

肥後府學祭酒菱慤選

堀大簡字廉卿。一字丹右衛門。堀完子。番頭。詩六首

送山叔瑟

一作他鄉客。年年嘆索居。飯牛頻扣角。彈鋏竟無魚。楚璧人多妬。齊竽計轉疎。憐君從此去。失意幾時舒。

愛山亭集

張宴高樓上。青樽意轉親。千山連黛障。積翠撲烏巾。嘉樹看添色。幽禽自喚人。不嫌來往屢。重此醉芳春。

聞砧思鄉

鄉夢秋風夜。誰家砧杵鳴。歸心將片月。同滿浪華城。

春夜藪草二先生枉過。賦此爲謝

幽亭秉燭結交歡。一曲瑤琴爲汝彈。醉後休論同調少。氷壺傾盡片心寒。

志賀愷古

溯邊弔古一相尋。白鳳宮前白日沈。只有山櫻自開落。空敎客淚滿衣襟。

立秋前一日送人

河梁分手恨忽忽。客路偏憐烟霧中。明日關山君試聽。不知何樹不秋風。

松井庸之字信卿。一字亘。長岡藩之弟。今沒。詩一首。

江上泛舟

春風吹蕩木蘭舟。濯足滄浪萬里流。一曲醉歌塵想斷。還疑乘鶴到蓬洲。

井政賀穆姓井口。字君祥。一字莊左衛門。奉行。今沒。詩十一首。

歲杪。同米大夫及諸子。遊蓮光精舍。

欲尋方外侶。晚度虎溪橋。晴雪迎劒舄。鐘磬滌煩囂。中有蓮花社。遠公常寂寥。抱琴臨流水。許酒醉良宵。簪笏知何物。暫此得憩息。妙理淨心耳。清譚入毫墨。梅開白玉姿。松偃青雲翼。色相三十二。物豈不分得。同病十五年。乃是舊相識。我性雖踈放。師詩多記臆。今歲看云暮。一倍惜昏黑。

泝江夜泊

遙夜蓬窓外。風煙自渺茫。聽潮知夢短。對月覺愁長。鴻雁飛何處。鱸魚憶故鄉。天涯人不見。枕上拂徵緗。

歲晚金川別故人

鶴橋寒月落。風雪又傷神。函谷迎歸馬。金川別故人。客心爭短景。鄉路近芳春。驛使如相遇。梅花寄所親。

春日客中作

客衣春稍暖。三月雨晴時。近遠花如繡。高低柳掛絲。孤身稀舊識。羣雁有歸期。落日關山外。無由見所思。

岐蘇道中

西去江都向信州。岐蘇萬壑好冥搜。盡生雲霧峯重疊。峽闕風雷水逆流。危棧懸空疲馬苦。荒城落日怪禽愁。行行已訝乾坤別。六月衣寒似暮秋。

諦堂師將還松江見過。因賦贈別。

遍參嘗得出人竇。雲水彌天指掌間。千里翻經關外地。十年留錫海邊山。多時笏室難容膝。此日書窓偶解顏。深識高僧心不染。明朝霜雪送君還。

江都邸舍除夜

武昌城畔遠遊身。回首同鄉更幾人。此夜青燈皆守歲。明朝白髮也逢春。河山萬里賒堪斷。梅柳千門望欲新。留滯已過三百日。羞將吏事老風塵。

贈僧君山

佛前連翹枝。月下影參差。來年著花日。是我欲歸時。

渡花水橋

一過花水橋。橋下花映水。試臨流水看。烟花使人醉。

俠客

直醉金陵市。不知白日殘。腰間三尺劒。俠骨向誰寒。

古城

荒城日落蓬牧豎。白雲秋樹弔千古。嘆息英雄骨已灰。空餘殺氣作風雨。

藪安字士蕃。一字市太郎。奉行。詩一首。

偶作

草堂無一事。靜坐見天心。掃地移鳥几。嗽風抱素琴。鳴鳩栖綠樹。飛蝶入花林。君子又何願。乾乾意自深。

蘇山留別諸子

落落三十歲。未有管鮑知。偶茲二三子。把臂語幽期。蘇山千餘仞。中有三秀芝。採之欲永年。忽復就塵羈。倉皇已告別。相留舉酒巵。欲飲忽不飲。請聽醉別辭。傅說版築下。寧知王者師。膠鬲魚鹽中。功名日月垂。而予何爲者。栖栖在路岐。詩酒非我志。聊以寄所思。天下滔滔者。孰辨烏雄雌。

春日同諸子遊發星山

一二同遊子。來探勝地春。入門悟幻境。問道接閑人。優鉢花相映。香龍鳥自馴。雙峰懸佛日。驚見放光新。

和高子友飲藪士厚亭韻

幽亭春欲滿。携手此徘徊。樽綠留人坐。山青入戶來。

門前長者轍。林下諸賢才。相顧饒餘興。幽吟未忍回。

出郭

風塵城市遠。眺望郭門遐。柜柳兩三樹。江村八九家。鷺鷥曝落日。稚子戲圓沙。處處聽漁唱。葦間短棹斜。

從軍行

大漠非風起。蕭蕭萬馬鳴。金笳秋徹塞。烽火夜臨城。轉戰三河北。猶徵六郡兵。何時麟閣上。振旅勒功名。

三日雨飲友人亭

芳晨烟雨暗。觴詠却兇欄。爲醉桃花酒。偏成祓禊看。鶯歌迎客媚。樹色入簾寒。何用投車轄。留連與未闌。

春眠

春眠南窓中。鳥聲亦寂寞。不識東風來。庭花無數落。

看調馬

千金賓馬錦鞍韉。永埒調來垂柳邊。直見三蕁蹄若電。斑斑汗血濺連錢。

病懷

滿路煙花踏作泥。昨遊何處暮雲迷。蕭蕭風雨千山晚。綠樹陰深布穀啼。

卿雲復姓草野。字士龍。一字雪平。號湄溪。府學助教。詩七首。

古劍行

相劍猶相龍。誰能辨雌雄。縱令補履何爲用。干將莫邪鉛刀同。我無風胡精鑑別。邂逅野人趁虛中。昔日鏽衣僅兩錢。今日發硎值千金。昔日應繞美人指。今日還照壯士心。莫言昆吾殊不遇。天生神物何銷沈。

拂拭自字青龍種。鮫室生色人失聲。玉繩天低星錯落。白帝秋高雲嶺嶸。池光引來橫廣席。一水冷然快風鳴。伊昔鴻荒之世簸川之上。老公老婆夜號呼。帝子一揮妖蛇斷。膝前紅膾落如鱠。河沈岸拆竟塵邈。幾歲都門混下屠。血腥斗酒褐寬博。憐爾當途思古人。有客東自至。倚爾要路津。比爾海上芙蓉色。一峯秀出無慝眞。願託淳樸如青砥者。鼻頭颯爽永衛身。

雪夜遲友人不至

空谷足音絕。懷人雪滿巡。孤燈三畝宅。一榻萬山低。禽語宿林靜。檟聲轉水西。迴舟何處是。遙夜使人迷。

歲杪贈山叔瑟避喧讀書槍岡

相思歲已暮。寄語鹿河濱。槍野羈離客。毛州忼慨人。五行寸陰奪。千古比肩親。讀書樂如此。栖栖莫問津。

秋日送人之東奥

九月西風向奥州。白河關外易驚秋。金華初日遙生色。羽黑殘雲慘結愁。忽聽牧人飛鐵笛。相看賈客雜旃裘。

蝦夷靺鞨總王土。試讀壺碑問昔遊。

秋風引

沙岸天風至。枯桑已辭枝。秋聲生獨處。猶似別離時。

題梅牛圖

牧篷寒山外。歸來自識家。孤村落暉路。梅吐兩三花。

夜猿啼

天高月小翠微間。客自清愁楚地顏。半夜猿聲啼不盡。秋風吹落幾重山。

池匡卿複姓池邊。以字行。一字平太郎。號蜘蛛。府學助導。詩三十八首。

花前獨酌

灼灼園中樹。枝枝膩春暉。嚶嚶花間鳥。流轉還翻飛。移床携酒榼。風花拂我衣。獨酌雖諒樂。嘆息良朋稀。踪跡冥且沈。轉覺與世違。

擬古

幽幷騎射兒。生平擅馳逐。氈帶何翩翩。腰佩雙鞬服。駿馬疾如鳥。飛鞚向平陸。嚴冬雁門北。逐禽茇舍宿。朔風千里至。積雪沒牛目。醜虜寇邊郡。將軍憂翻覆。願擒大單于。寫績南山竹。

壽永琴引

匣裏何人蓄古琴。斷紋蛇腹重南金。髣髴猶餘壽永字。洋洋似聞大雅音。劇落當年龍鳳象。對此不禁懷古心。旋絃廻軫彈一曲。倏忽坐我湘水陰。中庭月白清風度。離鴈別鶴遙瑤岑。伯牙未死子期嘆。高山流水爲正襟。此器由來廟堂貴。胡爲久得塵埃侵。憶昔芬華平相國。朝臣趨陪承顏色。紛紛聲樂競新奇。酒池肉林無終極。黃金爲屋玉爲梁。貂蟬盈坐頌其德。一自相國歸九京。子孫封土如裂幅。戰鼓雷騖震山川。倉皇遁逃大海邊。此器何人能奉持。不與戰骨沒重淵。嘆息天下洶洶日。一器長傳七百年。

送古公欵之京

將我盈樽酒。留君萬里游。盈樽酒易罄。萬里游難留。吾黨公欵氣如虹。翩然掉頭獨長風。洛陽佳麗心所慕。一朝辭我逐飄蓬。維昔神聖創帝業。相攸洛澗種椅桐。鼛鼓弗勝宏麗就。黃金爲柱玉爲宮。白虎司天臨右地。蒼龍挾日據正東。朱雀玄武皆羅列。逈控邊徼地勢雄。四達九街紅塵起。千門萬戶佳氣通。鬬雞朝趨桃花底。飛鷹暮歸楊柳中。十里總設錦步障。如意共碎珊瑚紅。不啻寶玉眩人目。文章自古出鉅公。黃備未死營相在。月露風雲奪天工。知君再接都人士。切璀大業傳無窮。君不見麟鳳由來稱世瑞。何況丈夫抱